
エトワール・フィランテ～星降りの夜の導かれし出逢い～

コメント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エトワール・フィランテゝ星降りの夜の導かれし出逢いゝ

【Nコード】

N6153N

【作者名】

コメット

【あらすじ】

仲間はみんな進化をしていくのに、自分だけ進化が出来ない事を悩むイーブイのアルム。そんな彼は、綺麗に星が瞬くある夜に、一筋の流れ星が落ちたのを見て駆け付けた。そこにはアルムが見た事もないポケモンの姿があり、そんな二匹の出逢いによって、星全体を巻き込む事となる運命の歯車は、ゆっくりと動き出すのだった。

プロローグ 始まりの夜

ここはたくさんさんのポケモン達が仲良く楽しく共生している惑星「アストル」。その中の小さな村、レインボービレッジでの運命の出会いとともに、この惑星^{せかい}を揺るがす物語は始まる――。

辺りが夜の装いを見せ始め、木々や草花の鮮やかな色が漆黒の闇に染まっていく頃。集落から少し離れた広場で、真っ暗な夜空に散りばめられた光り輝く宝石のような無数の星を眺めている一人のポケモンがいた。

茶色くてピンと立った長い耳があり、首元にはフサフサの白い毛。体と比較しても大きな筆の先のような尻尾を持つそのポケモンはイーブイ。

「はぁ……僕だけか……」

そのイーブイは悲しげな表情を浮かべ、大きく溜め息を吐きながら呟いた。そんな背後から忍び寄る一つの影があった。闇に同化していてイーブイは一切気付かないようである。

「なあアルム。またお前こんな所にいたのか？」

その影は足を伸ばしてイーブイの肩に乗せて話し掛けた。振り返

るとそこにいたのは、全身が黒い毛に覆われていてその身体のあちこちには黄色い輪の模様があり、イーブイよりも細長い耳に紅い瞳のポケモン、ブラッキーである。

「あつ、ルーン兄さん！」

アルムと呼ばれたイーブイは声を上げて飛び上がり、逃げようとするが、ブラッキーのルーンはそんなアルムの頭を押さえる。

「なーに逃げようとしてんだよ。それに気にする事なんてないぞ？別に今は進化出来なくなっただけな。焦る必要はないんだから。さ、家に帰るぞ」

「うん……」

元氣なく耳を垂らしながらアルムは返事をした。そしてルーンに促されるままに家に帰るべく森の方へと歩き出す。

そう、彼がここで悩んでいたのには“進化”が大きく関わっていた。

このレインボービレッジはイーブイが多く住んでいる村。アルムの家族はもちろん、友達にもイーブイやその進化系が多い。

そんな彼の周りの同年代の友達は今々と進化をしていったのに、自分だけが中々進化出来ないでいた。それが悩みだったのである。

まず進化するには、専用の道具を見つけ、ある特定の場所に行く事が必要なのだが、それには外の世界に出て旅をしなければならぬ。しかし、アルムは外の世界への恐怖からその一歩を踏み出せず

にいたのである。

恐怖と言っても他の人^{ポケモン}に会うのが怖いのではない。寧ろ色んな人^{ポケモン}と交流を持ちたいと思っている。

ただ自分に自信がないのだ。進化前である事に加え、持ち技が少ない事もあり、外に出て戦いになった時に立ち向かえるかどうか不安に思っているのである。

「よし、着いたな。ただいま」

どれだけの時間歩いたかは分からないが、二人は小さなログハウスのような家の前までに辿り着いた。木製の軽い扉をゆっくり開けると、中には美味しそうな香りが漂っており、夕食の支度が出来ているテーブルの周りに三人が座っていた。部屋の中は至って質素となっており、必要な家具以外はあまり置かれていない。

「遅いじゃないか、アルム。心配したんだぞ？」

優しい声で最初に話し掛けてきたのは、黄色い体色をしており、首の周りや腰の毛が鋭く尖っているポケモン、サンダースである。アルムとルーンの姿を確認すると、安心したようにほっと一息吐く。

「まあまあ。少しくらい元気があった方がアルムは良いくらいじゃないですか。ねえ、あなた」

サンダースと同様に微笑みながらそう言ったのは、額には紅い珠があり、二又に分かれた尻尾を持つ毛並みの非常に美しいポケモン、イーファイである。自らの念力サイコパワーで料理の盛られた皿を運びながら、横目で帰宅した二人の方を優しい眼差しで見つめている。

「本当よね。いつもおとなしいアルムには、もうちょっと活発になってもらった方が良いわよね」

少し悪戯っぽくアルムに向かって言い放ったのは、尻尾が魚のようになっており、耳は魚の鰭のような形状となっている全身が水色のポケモン、シャワーズである。先の二人とは別の笑みを浮かべながらゆっくりと歩み寄ってくる。

「うん、遅くなってごめんなさい」

「何を謝ってるのよ。あんたはどんどん外に出ていかないよ」

「リアス、外に出過ぎてるお前が言えた事か？」

謝るアルムの頭を尻尾で叩くシャワーズ――リアスにぴしゃりと冷静にツツコミを入れるルーン。表には出さないリアスも含め、アルムが戻ってくるのを心配して待っている辺りからも、絵に描いたように仲の良い家族と言える。

そうしてアルム達が帰って家族五人が全員揃った所で、ようやく夕食を食べ始めた。ルーンはアルムが出ていった事を話さないようにしつつ、その後も終始、今日一日あった事などを話し合いながら楽しい食事を続けた。

いつもと変わらない光景。これが今日を境にしばらく見れない事

になるとは、この時アルムは思いも寄らなかった――。

ブログの始まりの夜（後書き）

また突拍子もなく始めます。ただしこちらはかなり不定期になると
思います。ただ書いてみたいと言う欲望が高まったから始めただけ
なので（笑）

第一話 運命の遭遇（であい）く彗星からの訪問者く

夕食を食べ終えた後、アルムはまた外へと出て行く。いつもならこのまま家の中で寝るまで過ごすのだが、今日は何故か外に出て夜風に当たりたい気分だったのだ。

外は先程よりも闇に染まっており、家の明かりの届く所以外はほとんど暗闇だった。だからこそ、夜空に浮かぶ瞬く星々は一層綺麗にアルムの目に映った。

しかも今日は特別な日らしく、技ではない、自然の流星群が降り注いでいた。次から次へと落ちていく星と光の筋を見つめながら、再びアルムは物思いに耽^{ふけ}っていた。

「進化……しなくてもいいって言われても、どうせ誰も僕の気持ちなんて分らないんだ……」

大きく溜め息を漏らすアルム。周りの皆が思う以上にアルムは深刻に悩んでいたのである。

別に強くなって戦いたいとかいう訳ではない。ただ、自分だけ進化前という事で仲間外れにされるのが怖いのだ。

もちろん友達がそんな態度を見せているのではない。アルムが一人で劣等感を抱いているに過ぎないのだが、その事にルーンを除き、周りの皆が気付いていないのも事実。故に、一人で抱え込んでしまっているのである。

「凄^{すごい}い綺麗な流れ星……。僕の心もあれで綺麗に掃除してくれない

かなあ……なんてね。あれは流れ星であって箒星じゃないもんね」

独り言を呟きながら夜空を見上げるアルム。無数の光が点滅して
いるのを見ながらうつとりとした表情になる。

そんな滅多に味わう事のない時間を楽しんでいる中、今までうつ
とりしていたアルムが急に飛び上がった。

「なっ……何あれ!？」

アルムは自分の目を疑った。さっき冗談で言ったつもりの箒星（
彗星）が視界に入ったのである。

とてつもなく巨大で、まるで艶やかな髪のように棚引く尾が美し
い。他の流れ星や空に浮かぶ星と比べても、その明るさの違いは歴
然である。そんな事を考えながら見つめていると、その彗星から一
筋の光が放たれ、流れ星のように落ちていくのが見えた。

その光はただ真っ直ぐと下に落ちていくのではなく、こちらに向
かって進んできていた。時間が経つにつれ光は徐々に大きく、眩し
くなっていき、遂にはレインボービレッジの端の方に落ちたのが目
視で確認出来た。

落下の際に全く音も衝撃波も来なかったのは不思議だったものの、
興味本位でアルムは落ちた場所に向かう。それはもちろん、流れ星
はほとんどが地上に落ちる前に燃え尽きてしまう物であるという事
を知っている上での行動である。

「こ、これは……」

流れ星、もとい隕石と思われる物が落ちた現場に駆け付けたアルムは驚きの声を漏らす。

落下地点にあったのは隕石やそれにより出来たクレーターではなく、一つのぼんやりと淡い光を放つ繭だった。これで音や衝撃波が無かったのも頷ける。

そして村の端の方である為、ほとんど頼りに出来る明かりが無いこの場所まで来れたのも、光る繭のおかげとも言えよう。

「あれは何だろう？ 見た事無い……」

頭に疑問符を浮かべながら、今まで見た事も無い物にアルムは恐る恐る近付く。何か危険な物であった時の為に、警戒も怠らないようにしながら。

そして後ほんの数メートルの距離に迫った時、突如アルムの接近を察知したかのように強く光り出した。その眩しさにアルムも思わず目を瞑る。

光が止んだ時、そこにいたのは繭ではなく、歴としたポケモンだった。星型の頭から短冊のようなものが垂れ下がっており、お腹の部分には閉じた目のようなもの、背中には羽衣があるポケモンである。頭と羽衣は黄色く、短冊のようなものは青緑色となっている。

「ふわあゝ。ここはどこ？」

閉じていた目をゆっくりと開けて両手で擦りながら、そのポケモンは眠そうな声を上げた。アルムはとりあえず何もせずじっと観察する。

「うん？ 君は誰？」

「えっ？ ぼ、僕はアルム。それじゃ……君は？」

ようやくアルムの存在に気付いたのか、そのポケモンは凝視しながら問い掛けた。話し掛けられた事に驚きながらも、アルムも一応質問に応じ、自分も聞き返した。それに対し、そのポケモンはややあって口を開いた。

「ボク？ ボクはジラーチって言うんだ」

第二話　ひとまずの帰宅くお腹を空かせたジラーチく

「ジラーチ……？」

聞き覚えの無い名前にアルムは首を傾げる。今までアルムは他のポケモンについても勉強し、人並みに知識はあるつもりだったし、実際にあった。しかし、そんな彼でも知らないポケモンであったのだ。そこで、“伝説のポケモン”と“幻のポケモン”の二つが頭に浮かぶ。

「じゃあ、君は何故ここに？」

「何でって？　うーん、分からない。それよりお腹空いたー」

子供みたいに空腹を訴えてくるポケモン――ジラーチに、アルムは困ったような表情になる。

どう見ても狂暴そうなポケモンには見えないが、怪しいのも事実。あのポケモンが何であれ、ここはそつとこの場から立ち去ろう。そう思って後ろを振り向いた時だった。

「あー、行かないでー！　ボクも連れてってー！」

ジラーチが突然喚き始めたのだ。このまま放っておく訳にもいかないが、知らないポケモンだからどうしていいか分からない。あれこれと悩んだ末、一つの決心をする。

「じゃあ、僕の家においでよ。何か食べさせてあげるから」

「わーい！ アルムの家に行くー！」

無邪気に笑うジラーチを見て不安も何処かに行ってしまったように、ジラーチを自分の家まで案内する事にする。この時、遙か上空から二人の姿を見つめていた存在に二人とも気付くはずも無かった。

元来た道を辿って——とは言え、辺りが暗かった為正確かどうかは分からないが——二人はアルムの家に着した。辺りは出掛けた時よりも一層暗闇の様を呈していた。

小一時間しか外に出ていなかったものの、まるで久しぶりに帰ってくるみたいに何故か嬉しかった。想像も付かないような体験をしたから、時間の感覚が長く感じたのだろうとアルムは思う事にした。

そしていざ我が家の扉を開けようとした時、その動作を一旦止めて考え込む。

果たしてジラーチを家の中に入れて良いのだろうか。これまでの行動を見る限り別段怪しい事は無いし、何も問題を起こしたりしないだろうというのは分かった。

でも、家族の反応を考えていなかった。突然見た事もないポケモンを連れて来たらどう思うだろうか。なるべく問題を避けたいと思ったアルムは万が一の事を考えて、ジラーチを自分の部屋の外側の窓の前まで連れて来た。

「いい？　僕がこの窓を開けるまではここで待っててね？」

「うん、分かった！」

ジラーチの返事を聞くと、後ろを何度も振り返りながらゆっくり一歩ずつ扉の前まで行き、最後にもう一度確認し終わると、開けて中に入っていた。

夕食を終えてしばらく経っていた事もあってか、皆それぞれの時間を自分の部屋で有意義に過ごしているようだった。それはアルムにとっては好都合で、帰ってきた事に他の皆に気付かれる事なく、自分の部屋へと入る事が出来た。

「ジラーチ？　いる？」

「アルムー！」

窓を開けた瞬間、ジラーチは元気良く飛び込んできてアルムに抱き着いた。

「わっ、離れてよ！　もうびっくりしたんだから……」

「えへへ……アルム、お腹空いたーっ」

「分かったよ。今取ってくるから待っててね。でも絶対にこの部屋から出ないでね」

ずっとニコニコ笑っているジラーチをその場に残して、アルムは台所へと向かった。ちゃんとジラーチにこの部屋から出ないように

と釘を打ってから。

台所に着いたアルムがオレンの実とモモンの実を何とか2個ずつ抱えて振り向いた時だった。そこにはいつの間にか父親のサンダースがおり、驚きのあまり飛び上がったアルムは木の実を落としてしまふ。

「アルム、どうしたんだ？　いつもはあんまり食べないお前が珍しいな」

「いや……今日は少しお腹が空いて。それよりお父さん。ジラーチってポケモン知ってる？」

とりあえず木の実を持って行く理由を適当に答えて話題を変えながら、その上でジラーチの事について聞いてみる。

「ジラーチ？　んー、名前は聞いた事があるんだが……。長老のシユエットさんなら知ってるかもな。でも、何でお前がジラーチの事を？」

「えっ？　いや、ただ気になっただけだよ。それじゃこれ貰ってくね！」

悟られないように急いで木の実を拾うと、アルムはそそくさと部屋の中に逃げ込みように入っていた。

「あっ……アルムお帰り」

中ではジラーチが笑顔で手を振りながらアルムを出迎えた。それを見たアルムも笑顔で以って応じる。

「はい、木の実持って来たよ」

「ありがとう！ いただきますーす」

大口を開けて美味しそうにジラーチは木の実を食べ始めた。一口食べる度に「美味しーい」や「甘ーい」などと反応をしながら食べるのを見る内に、アルムはジラーチが一体何者なのかなんてどうでもいいなどと思うようになっていた。

それ程までに無邪気で、何か悪事を仕出かすようなポケモンには見えなかったからである。

それでも、ジラーチは言うなれば迷子のようなもの。調べない訳にはいけないという事で、明日長老の所に行く事を決心する。そこまでは良かったのだが、一つ困った事があった。

「ねえジラーチ。君の家はどこ？ それと今日はどうするの？」

「んー、ボクの家はあそこ」

ジラーチが答えながら窓を開けて指で指し示した場所。それはもちろんあの彗星だった。彗星は今もまだ美しく光を放ち続けている。いや、寧ろ先程よりも眩い光まばゆいを放っているようだ。

「でも、アルムの家に居たい！」

「帰らなくてもいいの？ 別に僕は構わないけど……」

ジラーチの明るい返答にアルムはそう小声で返した。しかし決してアルムは嫌な思いで小声で言ったのではない。寧ろ嬉しかったのだ。

まだ一緒にいて色んな事を知りたいし、もっと仲良くなりたい。そう思っていたアルムにとってその答えは何よりも望んでいた物だったのである。

一方でアルムの承諾を得たジラーチは、喜びを全身で表現するかにように凄いスピードで空中を飛び回り始めた。

アルムもジラーチを弟を見るような暖かい目で見ながらジラーチの分も寢床の用意を済ませ、今日は早めに寝る事にする。その様子を見てジラーチもおとなしく地面に降りてきて横になった。

柔らかいふかふかの若草のベッドの上でアルムは思い切り体を伸ばし、今日の事を回顧し始めた。

まだ暗くなり始めの頃、進化について悩んでいたらルーン兄さんに見つかったんだっけ……。暗くなって外を出て星空を眺めていたら、彗星から何かが落ちてくるのを見て、その場所に行ってみたらジラーチがいて――

そんな事を考えている内に、アルムは深い眠りへと落ちていくのであった。横目ですやすやと寝息を立てているジラーチを見ながら。

凄い体験をしたものの、至って落ち着いた心で――。

第三話 長老の家へ／シュエットさんってどんな人？

窓の隙間から差し込む暖かく柔らかな朝日。そよ風に静かに揺れ、木々の葉っぱが擦れ合う音。まるでコーラスのような小鳥の清らかな囀りさえずり。そんな朝の到来を告げる自然の目覚まし時計で目を覚ましたアルムは、大きく伸びをしながら横に目を遣る。

そこには、昨日出逢ったジラーチがすやすやと寝息を立てながら、体を丸めて静かに眠っていた。背中にある羽衣は、体を包むようになっている。その可愛い様子にくすくす小さく笑いながら、起こさないように静かに扉を開けて、アルムは部屋を出ていく。

「おっ、おはよう。アルム」

「あっ……お、おはよう。ルーン兄さん」

顔を洗う為に洗面所へ向かう途中でルーンとすれ違い、挨拶をかわす。普段と変わらないいつもの光景なのだが、正体の分からないポケモンを自分の部屋に泊まらせているという緊張感からか、アルムは少し顔を強張らせていた。他の皆には隠しているからというものもあるのだろう。

「ん？ どうしたアルム。何か変だぞ？」

「えっ？ べ、別にそんな事無いよ。それじゃ顔洗ってきまーす」

アルムの面倒を良く見てきたルーンには、アルムの異変がいち早く分かった。対するアルムも、気付かれまいと必死に平静を装いながら、その場から逃げるように洗面所へと向かうのだった。

顔を洗い終えて戻っていくと、皆が既に食卓を囲んで座っていた。食卓の上にはラムの実が練り込まれたパンやモモンの実のスープ、パンに付けるブリーの実のジャムなどが並べられている。アルムは自分の定位置には座らずに、母親であるエーフィの近くに行って話し掛ける。

「ねえ、お母さん。自分の部屋で食べてもいいかな？」

部屋にいるジラーチの為に、皆にはばれないように食べ物を持っていってあげないといけない。そうになると、自分の部屋に食事を持っていくのが一番怪しまれない方法だと考えたからである。

「ええ。もちろんいいけど、何処か具合でも悪いの？」

「ううん。別にそんなじゃないよ。ただ、偶には外を見ながら食べるのもいいかなって思ったから。それじゃ貰ってくね」

近くにあったバスケットにいつも食べるより多めのパンとジャム、そして深めの皿に入れてもらったスープを入れると、零さないようにそっと運んで自分の部屋へと入っていった。

窓を開けている為に涼しい風が吹き抜ける部屋の中では、いつの間にかジラーチが起きており、窓の外をじっと眺めていた。

扉を開けた音で気付いたのか、ジラーチはアルムの方を振り向い

た。その際に一瞬だけ寂しそうな顔を覗かせるも、すぐに明るい笑顔に戻った。

「あ、アルム。おはようー」

「おはよう、ジラーチ。さあ、朝食を食べよっか」

「うん！ 食べる！」

朝早くに起きたばかりだと言うのに、ジラーチは元気に声を張り上げて近付いてくる。さっき見せた顔が嘘のようで、アルムもあまり気にしない事にした。杞憂をするよりかは、今は食事を楽しもうと決め込んだからでもあった。

朝食を食べ終わると、アルムは何やら色々と部屋の中を歩き回って身支度を始める。身支度と言っても、そんなに大層な物ではなく、毛並みを整えたり、オレンジ色のバンダナを首に巻いたりするだけではあったが。

そして粗方準備を整えると、アルムは一旦部屋を出ていった。それからしばらくして戻ってきた時には、それぞれ種類の違う色とりどりの木の実が入ったバスケットを持っていた。

「今からちょっと出掛けてくるから、しばらくこの部屋で待っててね。この木の実は好きに食べていいから」

「うん、分かった!」

まだまだ分からない事だらけで一抔の不安はあるものの、アルムはジラーチを残して部屋を出ていく事にする。そうして扉に向かうと背を向けた時、昨日からの自分の言動を思い返すと、思わず苦笑を浮かべてしまった。まるでジラーチの兄か、はたまた親みたいだ。そして、いつも自分は皆にこんな思いをさせてと改めて考えたからでもあった。

家を出てからアルムは長老の家に向かうべく、森の中をひたすら歩いていった。森と言うには狭いものの、高い木々が鬱蒼と生い茂っている森である為に日陰が多くて涼しく、比較的静かであるので、アルムはこの森が好きだった。何か悩みがあったりして一人でいた時は、自分の部屋にいたりはずにこの森に来たものだった。

そしてこの森に佇む小さな軒の小屋には、長老であるシュエツトが住んでいる。アルムも何度も訪ねた事があるので場所や道順は良く分かっており、迷う事などではなく案外短時間で着いた。

高い木々が立ち並ぶ中にぽつんと建っている小屋は、周りの花畑の手入れが行き届いている為か、周りの風景に上手く溶け込んでいる。見た目はアルムの家とほとんど変わらないが、強いて違いを挙げると、屋根や壁から苔がたくさん生えている所である。恐らくこの森の気候のせいであろう。

そんな小屋のドアにある梘ふくろうの飾りの付いたドアノッカーをコツコ

ツと叩くと、忙^{せわ}しなく床を駆ける音が聞こえてきた。その音が徐々に大きくなって突然止んだかと思うと、木製の小さなドアがゆっくりと開いた。

そのドアの前で立っていたのは、四角い感じの耳に全身オレンジ色のふさふさな毛、その体にはいくつか黒いラインが入っている犬のようなポケモン、ガーディだった。

「おっ、アルムじゃん。どうした？ シュエットさんに用があるのか？」

「あ、ヴァローこそどうしたの？ 長老の家にいるなんて」

来た理由を問い掛けられた事に対し、一瞬戸惑いつつもアルムも同じ態度で返す。呼び捨てにしたりタメ口だったり、二人の口振りからして仲が良いようである。

このガーディのヴァローは、レインボービレッジの子供の中では結構実力が高いと評判のポケモンであり、アルムはそんなヴァローとは昔からの仲良しだった。ある意味正反対な二人であったが、だからこそ互いの事を知る度に仲良くなり、今に至るのである。

「まあちよつと手伝いをな。シュエットさんなら奥の蔵書室で本を整理してるぜ。ついて来いよ」

ヴァローに促されるがままにアルムは落ち着いた雰囲気漂う小屋の中に入り、奥へと進んでいく。アルムの家よりも家具らしき物が少なく、更に質素な感じの小屋の中で、一際目立つドアがアルムの目に入った。立て札には、“古代書もある為注意！”などと書かれている。

立て札を見て気が引けはしたものの、恐る恐るながら中に入ると、空気は外よりもひんやりしていた。壁には本棚がたくさんあり、棚という棚には本がきちんと収めされている。そして、一つだけまだ散らかっている棚を整理している一人のポケモンがそこにはいた。

「こんにちは、シュエットさん。アルムです」

「おお。良く来たの」

アルムの挨拶に対し柔和な笑顔を見せたこのポケモンは、腹部には逆三角形の模様が六つ並んでいる梟のようなポケモン、ヨルノズクである。

「それで、何の用で来たのかな？」

「はい、ジラーチというポケモンについて知りたくて」

「ジラーチとな！？ ふーむ……」

ジラーチの名前に、一瞬ながら驚きの表情を見せるシュエット。直ぐさま冷静な態度に戻って片翼を顎の所に持つて行く。そこからしばらく考え込んだ後、まだ整理されていない本棚を物色し始めた。

「おお！ あったあった！」

やや唖れた声を上げると、シュエットは一冊の分厚い本を抱えてきて、中央の机の上に置いた――というより、その時響いた重々しい音を聞く限りでは落としたと言うのが正しいかもしれない。

シュエットはそのまま徐におもむろページを捲っていく。そしてあるページを開いた所で捲るのを止めてアルムを手招きする。近寄ってシュエットが指差すページを覗くと、そこには“ジラーチ”という名前と、細かい文字で何かが記されている。しかし、アルムにはそれが読めない。

「これは古い図鑑でな。あらゆるポケモンの情報が古代文字で書き込まれておる。お主達には読めぬだろうから私が読もう。どれどれ……。“どんな願い事でも叶える力を使う。そしてそれ以外にも十二の力を司っているポケモン”とな。まあ幻のポケモンじゃから、あくまで言い伝えでしかないがの」

「そうなんですか。わざわざありがとうございます。でも、それ以外には何か書いてないんですか？」

期待通り少しは情報が得られたものの、やはりこれだけではジラーチを知ったとは言えない。シュエットが隠しているはずなど無いとは思っていたが、アルムは念のため聞き返す。しかし、シュエットは「こんな小さな村じゃからの」と言って、苦笑いを浮かべるだけだった。

「そうですか……」

返答を受けて、アルムは残念そうに俯いて耳を垂らした。その顕著な反応に、シュエットは訝しげな表情をしながら顔を近づける。

「のう、アルム。お主は何故そこまで残念そうな顔をしておるのじや？ まるで未知のものに出逢って戸惑っておるみたいな……」

鋭い洞察力で心の中を見透かすようなシュエットの発言に、アル

ムは僅かに飛び上がって思わず身を竦ませる。

「えっ……べ、別に何でもありませんよ。ただ……噂で聞いたので興味が湧いただけです。それじゃ、ありがとうございました。この辺で失礼します！」

あたふたしながら、アルムは何とかごまかそうとする。しかし、態度にすぐ表れてしまう為か、後半は逃げるようにしてシュエットの家を出ていくのだった。

第三話 長老の家へシユエットさんってどんな人？（後書き）

タイトルはふざけてますが気にしないで下さい（笑）

それでは新しく出て来たキャラの名前の由来について説明をします。キャラの名前をそのまま種族名（例えばイーブイ）のままで書く方もいるでしょうし、そちらの方が分かりやすくて良いと言う方もいるでしょう。現にヴァローとか覚えられないかもしれませんね（笑）

でもじゃあその世界にはそのポケモン以外に同じ種族のポケモンはいないのかってなりますよね？ それに、名前があった方が愛着を持ちやすい気がします。ちゃんと新しい重要なキャラが出る度、名前の由来は説明していくので、出来れば覚えて下さいね。

とまあ長く偉そうな講釈ですいません（汗）

それでは名前の由来を。

ヴァローはスラヴ神話における太陽神であり、火の精霊である“スヴァローグ”の真ん中四文字を取りました。火に関連する格好良い名前ってなかなか見つからなくて……。

次はシユエットです。これはフランス語【Chouette】（シユエット）で、日本語に訳すと梟になります。最初はオウルも考えたのですが、シユエットの方が格好良い気がしたのでこっちにしました（笑）

因みにルーンはフランス語で“月”を意味し、リアスは英語で水瓶座を意味する“アクエリアス”の終わり三文字を使いました。

まだまだオリジナルで模索しているので、アドバイスなど頂けたら
飛び上がって喜びます（笑）

第四話 ジラーチの外出く儂く美しいノヴァの輝きく

情報も収集し終えた所で、アルムは家まで逃げ帰るように戻ってきた。別に誰かに追われている訳ではないのに、何故かここまで全力で走ってきた為、大分息が上がっていた。

ドアの前で一旦息を整えた後、中に入り部屋に戻ったアルムは言葉葉を失った。部屋で待っているはずのジラーチの姿が無かったのだ。

とりあえずは家の中を隅から隅まで、それこそ草の根を分けて捜したが、何処にも見当たらなかった。と言うと外にいったのは間違いない。アルムは急いで外に飛び出していった。

「はあ、もう何処にいるんだろうな……」

あれからかれこれ一時間程村の中を歩き回ってみたが、見つからなかった。

村の皆に外見や特徴を説明して見ていないか聞いてはみたものの、こちらもしっぱり駄目だった。あの彗星にでも帰ったのかと落ち込んで下を向いて歩いていると、突然誰かにぶつかってしまった。

「あたた……ごめんなさい」

謝りながら顔を上げると、そこには優しくアルムに微笑みかけて

いるルーンの姿があった。

「どうしたんだアルム。何か嫌な事でもあったのか？」

「う、うん。実はね……」

アルムは正直に経緯を話す事にした。昨日の夜、村の外れに隕石らしき物が落ちた事。そこにいたのは、幻のポケモンだと言われるジラーチで家に連れて帰った事。そして、家にいるはずなのにいつの間にかいなくなっていた事を。

「ごめんなさい、黙ってて」

全てを聞き終えたルーンは、前足でアルムの頭をそつと撫でて口を開いた。

「何だ、そんな事か。それなら早くオレに言えればいいのに。確かに幻のポケモンってのには驚いたが、別に何かしようなんて思うはずないだろ？」

この言葉を聞いた瞬間、アルムは全てが杞憂だったと思い始めると同時に、何故早く言わなかったんだろうと少し後悔した。でもこれでようやく隠す必要もなくなったと思うと安心するが、ジラーチがいなくなった事を思い出した。

もしもう帰っちゃってたら——そう思うと、寂しさが込み上げてくる。

「心配するな。多分この辺にいるはずだ。お前の事そんなに気に入ってたんなら、そう簡単に離れるはずがないだろ」

「そうなのかな？　でももし何処かで迷ってたら……。それに他の皆はジラーチの事どう思うかな？」

アルムの心情を察して掛けてくれたルーンの言葉を聞いて少しは希望が持てたが、別に問題があるのではないかと考え口に出すアルム。それを聞いてルーンは再び前足でアルムの頭を軽く叩いた。

「大丈夫。オレがちゃんと見つかるまで捜してやるし、例え皆が反対しても、オレはアルムの味方だから安心しな」

ルーンの嘘偽りの無い優しい言葉に、アルムは全ての不安が取り払われ、ほっと一安心した。そして満面の笑みを浮かべながら、アルムはルーンに抱き着いた。

「ありがとう、ルーン兄さん。大好き！」

「全く……。いつまで経っても甘えん坊なのは変わらないな……」

突然とは言え、慣れた感じで受け止めるルーン。その顔はとても嬉しそうである。

「えへへ……。だって、ルーン兄さんはいつも暖かくて優しいんだもん」

ルーンの胸に顔を埋めながら甘えるような声で話すアルム。まるで昨日のジラーチのようである。

そんな兄弟の微笑ましいやり取りをした後、ルーンの提案により、アルムがジラーチと最初に出逢った場所に行く事にする。アルムも

すっかりその場所を捜すのを忘れていたのである。

そして数十分掛かって辿り着いた時、ルーンの予想通り、ジラーチは自分が昨日降り立った場所に座り込んでじっと空を見つめていた。

「ジラーチ！　こんな所にいた！」

「あつ、アルムだー。どうしたの？　それと、その人だーれ？」

アルムの心配を余所に、ジラーチは至ってのんびりした口調で話す。

「どうしたのじゃないよ！　もう、心配したんだから……。それと、こっちはルーン兄さんだよ」

「宜しくな、ジラーチ。アルムの兄のルーンだ」

若干呆れ気味にジラーチを叱りながらアルムはルーンを紹介する。ルーンも軽く頭を下げて挨拶をする。

ジラーチもルーンがアルムの家族だと分かると、ルーンの周りをぐるぐると軽快に飛び回って嬉しそうな表情を見せる。

「ところで、何でジラーチはここにいるの？」

「あれを見たかったから！」

勝手に出ていった事を咎めずに、出ていった理由を尋ねるアルムにジラーチは空のある一点を指してそう答えた。

二人も首を擡^{もた}げてその指し示す方向を見てみると、そこには三人の後方で燦々（さんさん）と照り輝く太陽とは別に、まだ明るい青空で光を放っている何かがあった。夜空ではなく、この青空で。

「あ……あれは何!？」

「ああ……あれは多分“ノヴァ”だ」

ただ驚くばかりのアルム。一方のルーンは何か分かっているらしく、その光り輝く物の名前らしき単語を言った。

「“ノヴァ”？」

「そう。別名新星。簡単に言うと、星が爆発してるんだ」

聞いた事の無い言葉を復唱するアルムにルーンは説明を始める。

「時には“スーパーノヴァ”って、星がその一生を終える大規模な爆発もあるんだ。確かに光り輝いてて美しいが、とても儚いもの。儚いと言っても、結構長い事続くんだけどな……」

「そうなんだ。ルーン兄さんって物知りだね」

自分の知らない事を知っているルーンに感心するアルム。一方で、説明をしている間もジラーチはずっと何かに集中しているとも物悲しいとも取れる表情でその光を眺めていた。

三人はしばらくその珍しい光景を見た後、家に戻る事にする。そうして振り返った時、ルーンは何者かの気配を感じた。

二人には気付かれないように、そしてその気配に気付かないふりをしながら歩き、不意打ちを掛けるように気配のする叢の中に飛び込んでいった。

突然のルーンの行動に戸惑う二人の前には、慌てて叢から飛び出してくる一人のポケモンがいた。

「いてて……ルーンさん、俺ですよ」

前足で頭を摩りながらそう呟いたのは、シュエットの家で会ったガーディのヴァローだった。

「ヴァロー！？ どうしてここに？」

「お前の行動が怪しかったから後を付けてみたんだよ」

「あはは……ばれてたんだ」

ここにいる理由を聞き、思わず苦笑を浮かべるアルム。別にもう隠す必要もないので、帰りがてらヴァローにもジラーチの事を話す事にする。

「へえー。彗星から落ちてきた、か……。俺にはさっぱり分からないけどな」

話を聞き終えたヴァローだが、完全には状況を理解出来ていないようである。あれこれと話をしている内に、四人はアルムの家に着いた。

その後、両親やリアスにルーン達に言ったのと同じようにジラーチについて説明した。母親のエーフィとリアスは仰天していたが、父親のサンダースは何となく感づいていたように落ち着き払っていた。

最初こそ驚いていたものの、時間が経つにつれ次第にエーフィもリアスもジラーチと打ち解けていった。リアス曰く、その無邪気さに不安など飛んでいってしまったそうなの。

結局家族も全員一致でジラーチを迎え入れる事に。それにはアルムとジラーチは抱き合って飛び上がって喜んだ。これで晴れてジラーチと一緒に楽しく過ごす事が出来ると思ったからである。

しかし、ジラーチの笑顔とは別の顔を覗かせていた。何かに興味を持ち始めているような、何処か先を見つめているような、そんな印象をアルムは受けたのだった。

第五話 決意とすれ違いゝアルムの抱える不安

家族の皆にも受け入れられ、一安心でアルムの部屋へと入っていくアルム、ジラーチ、ヴァローの三人。

まだお昼頃である事に加え、窓を閉め切ったままで出て行った為か、部屋の中は嫌な熱気が籠っていた。幸い木製の家である為そこまで酷くはないが、それでも暑い事には変わりは無かった。炎タイプであるヴァローはさほど気にならないようだが、他の二人にとっては耐え難いものであるので、急いで窓を開けた。

ジラーチを捜すので疲れたせい、窓を開け終えて中央で横になって休もうとするアルム。それを邪魔するかのよう^{じゃ}にヴァローは上に乗っかって戯れ始める。

そんな二人を意に介さないかのようにジラーチは窓の方へと飛んでいき、遠くを見遣っている。その様子を不思議に思ったアルムは上に乗ってるヴァローを振り落として、ジラーチの元へと近付いていった。

「ジラーチ、どうしたの？」

「ねーアルム。この村の外って一体どんな風になってるのー？」

心配そうに話し掛けるアルムに、ジラーチは不思議そうな顔をしてそう尋ねてきた。この返答にアルムは詰まる。

風の噂や外に行った事がある皆の話は聞いた事はあったが、実際にどうなっているか見た事が無いので、答えられないのだ。そして

何より恐れている事があった。それを表情から悟られないように、アルムは必死に心の中に隠した。

「ねー。どうなの？」

「そ……それは……」

「ここよりは広くて、楽しい事が待ってるぜ」

再度聞き返されても一向に答えないアルムに業を煮やしたのか、ヴァローが質問に答える。それを聞いたジラーチは興味を持ったらしく、窓の外に身を乗り出して再び外を眺め始めた。

その目はキラキラと輝いており、何かに興味を持った無邪気な子供のようである。彗星から来たのにまるで太陽のような存在。そう考えるとアルムは自然と笑っていた。

「なあアルム、ジラーチ。一緒にこの村の外に出てみないか？」

直後、ヴァローが突然持ち掛けてきた話に、先程までのアルムの笑顔は一瞬で何処かに吹き飛んでしまった。

「うん！　ボク、外の世界見て見たい！」

振り向き様に元気な声でジラーチはそう答えた。ジラーチの興味はもう外の世界へ向けられているようである。ヴァローもそれを聞いてニッと笑ってみせた。

そのヴァローの笑いをアルムは知っていた。大抵は上手く事が運んでいる時の笑いだと。そしてヴァローはそのままアルムの方に向

き直る。

「ジラーチは行きたいそうだが、アルムはどうなんだ？」

一番なつて欲しく無かった展開になり、アルムは戸惑い始める。

行きたくない訳ではないが、まだ心の準備が出来ていなかった。しかしこの状況では多数決では確実に負ける。それに、あんなに無邪気な笑顔のジラーチを見たら逃げるのにも抵抗があった。

ふと逃げ道を見つける為に窓の外を見つめるが、寧ろ逆効果な気がした。窓を通して吹き抜けてくる風が未だに生暖かい部屋の空気を押し流し、アルムの方へと流れてきた。それがただでさえ焦って暑く感じているアルムの体を暖める。とても気持ち悪い感覚だった。

「おーい、聞いているのか？」

「あっ……うん」

いつまでも反応がなくボーッとしてるのを見て、ヴァローはアルムの目の前で手を振って意識があるのか確認する。それでアルムも我に返った。

「でもさ、外の世界って何があるか分からないし……。それに、もし襲われたりしたらどうするの？」

「大丈夫だって。何があるか分からないから行ってみるんだろ？それに、いざとなったら俺が全力で守ってやるからよ」

ヴァローから目を逸らしながら今抱えている不安を話すアルム。

その反対に、ヴァローは自信ありげに右前足でポンと胸を軽く叩いてそう言った。

しかし、アルムには逆にその言葉が辛かった。特に終わりの方の言葉が。耐え切れなくなったアルムは逸らしてた顔をしっかりとヴァローの方に向けてキツと強く睨んだ。

「それが……その“守ってやる”ってのが嫌なんだ！ いつも弱くて守られる側の気持ちなんて考えた事無いでしょ！？ 僕は……いつも弱い立場だから……！」

目到大粒の涙を浮かべながら遂に思いの丈をぶちまけるアルム。その気迫には長い付き合いであるヴァローも思わずたじろいだ。そしてそのまま後ろを向くと、部屋の出口の方へと全力で走っていた。

ドアを勢い良く開けると、そこにはルーンが驚いた様子で立っていた。叫び声を聞いて来たらしい。

「アルム、どうしたんだ？」

ルーンの問い掛けも無視して駆け抜け、アルムはそのまま家を飛び出してしまった。

アルムはひたすら森の中を走り続けていた。宛てもなく。いや、

宛てはあった。いつも悩んだ時に来る場所であったから。

少し心が落ち着いた所でアルムは立ち止まった。辺りを見渡すとさっきの部屋の中とは違い、ひんやりした空気に包まれていた。上風に揺られてざわめく木の葉の音を聞いている内に、高ぶっていた心も徐々に落ち着きを取り戻していった。

それと同時にアルムに大きな後悔の念が襲ってきた。どうしてあんな事を言ってしまったのだろうか。

自分が不安そうにしていたから、ヴァローは安心させる為に“守ってやる”と言ってくれたのだとアルムも分かっていたのに。それが馬鹿にして言っている訳ではないのだとも分かっていたのに。

それでも、いつも弱い者として扱われていたアルムにはまたそんな扱いをされるのが嫌だったのだ。自分でも何処か矛盾は感じていた。甘えたいけど弱く見られたくない。そんな自分が良く分からなくなっていた。そう悩んで俯いている所に優しい羽音が聞こえてきた。

「こんな所でどうしたのかな？ 良かったら家においで」

羽音が止まると同時に聞こえてきた優しい声。その声の主を確認する為にそっと顔を上げると、長老のシュエットが柔和な笑顔を浮かべてじっと見つめていた。

シュエットの言葉に甘え、アルムは再び家に入れてもらった。無我夢中で走っていたからか、シュエットの家の近くまで来ていたとは気付いていなかったのだ。

朝来た時に比べれば暖かくなっていたものの、中はアルムの家よりは涼しかった。そんな家の中央の丸太の椅子の所に腰掛けていたように言うと、シュエットは奥の方へと消えてしまった。

小さく溜め息を吐きながらアルムは椅子に座る。しかし、すぐに立ち上がってうろうろし始めた。何かしてないと後悔の念に押し潰されそうな気がしたから。

そんな落ち着きの無いアルムの元にシュエットが戻ってきた時、その口には運べるようになっていた持ち手が付いたお椀が啣^{くわ}えられていた。アルムの前にそれを置くと、辺りはとても柔らかくて落ちて着く香りに包まれる。中には暖色である黄色のとりみのついたスープが湛^たえている。いつも自分を優しく包んでくれたようなその香りにアルムは覚えがあった。

「シュエットさん、これは……」

「そうじゃよ。いつもお主が悩み事があつてこの森に来た時に家に寄って食べてた物と同じ物じゃよ。さ、食べながら良いから、何があったか話してくれんかの」

驚いているアルムの言葉を続けるシュエット。そしてその翼で食べるよう促しながら優しく聞いてきた。アルムは小さく頷いて、まずはスープを一口飲んだ。口の中一杯に広がる温かさと仄かな甘さ。それと同時に心の中も暖かさで満たされていた。ふうと一息を吐

いたアルムはいつものように悩みと何が起こったかを話し始めた。もちろんジラーチの事も含め、ある一つを除いて全てを。

「ふむ、そんな事なの。じゃが、まだ話してない事があるじゃろ。全てを話してごらん？ 何でも聞くからの」

話を聞き終えた後で全てを見透かしたように問い掛けるシュエツト。それにはアルムも堪らず小さく苦笑いを浮かべる。

「シュエツトさんには隠し事は無理ですね。それがですね、僕は家族の皆のお荷物になってるんじゃないかと思うんです。皆も僕がいるのが迷惑で、旅に行かせたいんじゃないかと。皆は慌てなくても良いって言うってくれるんですけど、それがもしかしたら裏返しで……早く……出て行けて、言ってるんじゃないかと……。そう思うと怖くて……」

話すにつれ涙声になっていくアルム。ボロボロと零れ落ちる涙を止める事は出来なかった。彼は彼なりにプレッシャーを感じていたのだ。

早く進化して家族の一員として色々と役に立ちたいとも、そうしなければならぬとも思っていた。でも、慌てなくても良いと言われると、何処か皆に甘えてしまった。そうやって過ごす内に、一抹の不安を抱き始めていた。

本当は必要とされていないのかな。出て行くように言わないのは、家族だから遠慮してるからなのかな――？

そう思うと、“慌てなくても良い”という言葉が寧ろ重く押し掛かった。いつか見捨てられたりするのではないかと怖かったのだ。

「なるほどの……。お主は一人で悩みを抱えておったのじゃな。でも、あの優しいお主の家族がそんな事を思うはずはないじゃろ？それはお主が一番分かってるはずじゃと思うがの」

アルムの気持ちを汲み取った上で、長老らしい落ち着いた声で語りかけるシュエット。しかしアルムはまだ何か言いたげに口を開く。

「でも……本当はどうなのか分からないじゃないですか……」

「それはどうかの。本人に聞いてみたらどうじゃ？　ちょうどお客さんが来たようじゃしの」

そう言うシュエットは入り口の方へと向かい、ゆっくりとドアを開けた。そこにはルーンとヴァローが並んで佇んでいた。二人は何もしていないのにドアが開いた事に驚いていた。

シュエットは二人が立ち聞きしている事を知った上でアルムの思いを聞き出し、全てを聞かせて会わせるようにしたのだ。

「ル、ルーン兄さん……」

訪問者の正体を知って一歩退くアルム。それを見てルーンは急いで駆け寄っていった。

「ごめんな、アルム。お前が一人でそこまで悩んでると気付いてやれなくて……」

「僕こそごめんなさい……。ルーン兄さんがそんな事をするはずないのに……。でも……僕……」

「いいんだ、もう……」

ルーンはそう言ってアルムも優しく抱き締めた。それはアルムの心の中で渦巻いていた不安の一つを綺麗に消し去った。それと同時に、アルムは再びあのスープのような暖かさが全身を、心を暖めていくのを感じた。

「これで、問題は一つ解決したの。残るはもう一つ……」

シュエットが見つめる先にいたのはもう一人の訪問者のヴァロー。俯き加減でずっとその場に立ち尽くしている。

その様子に気付いたルーンはアルムから離れてその背中を押した。

「先程の話に戻るが、それでお主はどう考えておるのじゃ？」

シュエットは改めて問い掛けた。アルムはこの状況に戸惑いながらも、少し考えた後でゆっくりと口を開く。

「僕は……外の世界に行ってみたい。けど、僕が弱いせいでヴァロー達が傷つくのは嫌なんだ。本当はそれも言いたかったんだけど……ごめんね、ヴァロー。怒鳴ったりして……」

「まあ……俺こそ悪かった。お前の気持ちを考えもしないで。でもな、俺がお前を守る事があっても、それは弱いからじゃない。お前が大切な親友だからだぞ？　それだけは忘れないでくれよ」

「うん、ありがとうヴァロー」

二人は互いに見つめ合うと、前足を合わせて満面の笑みを見せた。その傍らではシュエットが同じく笑顔で何度も頷いていた。

「さて、これで全てが上手く行ったようじゃの。それでお主達は早速旅に出るのかいの？」

「はい！！」

いつも二人に戻り、シュエットの質問に元氣良く応えた。それを待ってましたとばかりに、シュエットは後ろ手に隠していた筒状の紙を二人に差し出す。

「これはこの世界の地図じゃ。そんじよそこらのとは違って細部まで書かれておるから、役に立つぞ。餞別だとも思っ受けて取ってくれ」

「はい。色々ありがとうございました」

深々と頭を下げて感謝の意を示すアルム。それに釣られるようにヴァローも深くお辞儀をしてシュエットの家を後にする。その後を追うようにルーンはシュエットに小さくお辞儀をして出ていった。

家の外に出た瞬間、アルムはここに来た時は感じられなかった清々しさを感じた。

この森に入った時にアルムを責めるようにざわめいていた草木も、今ではそよ風に優しく揺れて心地好い音を立てている。まるでアルムの鬱を増幅させるかのように陽射しを全く通さず、暗い雰囲気を醸し出していたこの森全体も、ところどころに木漏れ日が差し込み今のアルムの胸中のように暖かくなりつつあった。

そんな明るく暖かくなり始めた森の中をアルムとヴァローは楽しげなステップで一路アルムの家へ向かうのであった。

第五話 決意とすれ違い／アルムの抱える不安／（後書き）

そんなにここまでの話で字数がある訳じゃありませんが、一応五話まで行ってるのに、ぐずぐずしてまだ旅には出ません。

本当は「それじゃ行ってきました」って簡単に流しても良かったのですが、せつかなら少し旅立ちに葛藤を入れてみようかと。

さてさて、今後の展開をどうしましょうか。もちろんバトルはありますよ。……まあ当たり前ですか。

それでは、また次回も楽しみにして下さると嬉しいです。これ、描いてる僕自身は楽しいのですが、読んでる方は楽しいのか分からなくなってきました（汗）

第六話 始まりの一步―旅立ちを鮮やかに彩る音色―

太陽がちょうど真上まで上り、今までよりも一層強い陽射しが照り始めた頃、アルム達は再び家に戻ってきた。アルムはそのまま自分の部屋に入り、リュックを取り出して旅立ちの準備を始める。

シュエットから貰った地図を始め、旅に役立つだろうと思われる道具を片っ端から入れていった。その隣では、ジラーチがその様子をニコニコしながら見つめている。

「どうしたの？ そんなに嬉しそうに」

理由は分かっていたが、敢えて聞いてみるアルム。改めてジラーチの思いを確かめたいという考えがあるのだろう。

「だってねー、アルムが何か嬉しそうだから！」

「えっ！ 僕が？」

予想と違う事に驚きながら、ジラーチに言われて部屋の鏡を見てはっとした。自分では気付かない内に顔が笑っていたのである。

少し恥ずかしくなりながら、アルムは棚の奥から大事そうに一つの箱を取り出してきた。中身を知らずに不思議そうにしているジラーチの前でそっと箱の蓋を開けると、中に入っていたのは一つの小さな涙滴状の白い陶器製の物だった。

「それはなーに？」

「これはね、オカリナっていう楽器なんだよ。ここにある穴を押さえながら吹く物なんだけど、僕の足はそこまで器用じゃないから上手く吹けないんだ。一度吹いてみたいんだけど……」

箱から取り出してジラーチに説明するアルム。説明している間は終始残念そうに項垂れていた。

「それも持っていくの？」

「うん。これはずっと前にある人に貰った大事な物だから。“困った時にはこれを吹きなさい。必ずあなたの助けになるから”って言われたんだ。それが誰だったかは覚えてないんだけどね」

小さく舌を出して笑いながらそう言うアルム。それを聞いてジラーチは、アルムの持っているオカリナをまじまじと見つめ始めた。

「どう？ 吹いてみる？」

「うん！」

興味津々の表情をしているのを見て、アルムはオカリナを差し出した。ジラーチは受け取るとそっと目を閉じて口元に持っていく、小さく息を吸い込んだ後、吹き口にそっと息を吹き込み始めた。

吹き始めは静かな低音から入り、最初はゆったりとした調べ。窓の外でそよ風に靡いている木々のような流れ。それは曲が進むにつれ、高音を中心とした軽やかな調べに変わっていった。素朴で静かな自然の音を奏でるオカリナとしては少し異質かもしれないリズムだが、何処かジラーチらしさが表れていた。

その綺麗な音色にも驚きだが、何よりアルムが驚いていたのは、まるで以前から演奏した事があるかのように奏でている事だった。

しばらくジラーチの演奏に聴き入る内に、ジラーチの体が淡い光を纏い始める。その光は徐々に強く大きくなっていき、遂には部屋全体を包み込んだ。

「ねえ、ジラーチ！ 大丈夫！？」

大声で呼び掛けてみたが、反応は全く無かった。その内あまりの眩しさにアルムは目を瞑ってしまう。その状態が五秒程続いた時、アルムはふと体が暖かい何かに包まれるのを感じた。そんな心地好い暖かさに浸っていると、突然光が消えると同時に演奏が止んだ。

「ふう、終わり。はい！」

何事も無かったかのように一息を吐くと、笑顔でオカリナをアルムに返すジラーチ。とりあえずアルムは素直に受け取るが、すぐにジラーチの身を案じて体のあちこちを触り出す。

「ひやはは！ アルムくすぐった〜い！」

「何ともない？ 大丈夫？」

「何ともないから放して〜！」

本人が大丈夫と言う事で、一先ずジラーチから離れる。そして今度は吹いていたオカリナの方を見ると、最初は無かった星印がくつきりと付いていた。良く分からずに考え込んでいると、横からジラーチがアルムの顔を覗き込んできた。

「な、何？」

「ねえ、アルム。アルムも一回吹いてみてー？」

吹けるはずもないと分かっているのが最初は止めようと思ったが、あまりにも笑顔でジラーチが催促してくるので、結局は「分かった」と言ってアルムが折れる形で吹く事にする。

どうせ吹いても一つの音しか出せないんだから――そう思いながら蔓で出来ている輪っかを首に通してオカリナを首から掛け、優しく息を吹き込むアルム。

何も穴を押さえていない状態で出る優しい音が響く中、せめても一つだけでも高い音が出ればなあ――そう思って止めようと諦めた時、突如今まで奏でていた音とは別の音が出始めた。

ありえない出来事に耳を疑うアルム。何故なら、その出た音はさつきよりも一つ高い音だからである。まさかと思いながら一つの仮説を立てたアルムは、今度は頭の中の譜面に一小節分の流れを思い浮かべながら息を軽く吸い込み、それからもう一度吹いてみた。

すると、アルムの思い浮かべた通りに優しくなめらかなメロディーが部屋中に流れた。もちろん息を吹き込む強さによって音の強弱も変わり、吹き込むのを止めると音も出なくなった。

思い通りに行った事で舞い上がるアルムに同調するかのように、ジラーチも歓喜の声を上げながら飛び回り出した。

しばらく乾燥はしやいだ後、シュエットの家で見た図鑑に載っていた“ど

んな願い事でも叶える力を持つ”というジラーチの説明文を思い出し、感謝の意を込めて思い切り抱き着くアルム。一方ジラーチの方はと言うと、何も分かっていない様子だが、とにかく真似してアルムを抱き返した。

そんな二人の元に準備を終えたヴァローが窓から颯爽と現れた。

「これから三人で旅するんだから、そんなのはいつでも出来るだろう？ それより準備はもう出来たのか？」

「う、うん。出来たよ。後はみんなに出掛ける挨拶をしていかなないとね」

やや呆れ気味のヴァローの言葉に急いでジラーチから離れたアルムはリュックを背負い、家の外へと出ていった。

玄関から出ると、そこではアルムの家族全員が三人の準備が終わるのを待っていた。

「アルム、くれぐれも無理はしないようにな」

「あなたが無事に帰ってこれるように祈ってるから」

父親のサンダース、母親のエーフィが言葉を掛けながらアルムを抱き締める。離れ際にエーフィは木の実がたくさん入った袋を手渡した。

「ありがとう。お父さん、お母さん」

少し寂しそうにしゅんとしながらアルムは今までの事も含めてお礼を言う。

「ヴァロー君。アルムは臆病で頼りないやつだけど、宜しく頼むわね！」

「はい、分かりました」

「リアス姉さん、それはないよ」

リアスの思わぬ言葉に苦笑いを浮かべながら応じるヴァロー。そのやり取りを聞いてアルムは拗ねるように地面を突き出す。

「もう……冗談よ！ 頑張って来なさいね！ はい、これは私からのプレゼント。“ぼうぎよスカーフ”よ」

「うん、ありがとう。頑張る！」

アルムの反応を見て急いで駆け寄り、頭を小突いて励ましながら水色のスカーフを渡すリアス。それで笑顔を取り戻したアルムは元気に応えた。

「アルム、多分これから辛い事もあるかもしれないが頑張れよ。オレ達はいつでもここで待ってるからな。それじゃ、これはオレからの餞別だ。“なないろマフラー”って言って、これを身に着けてれば霰とか砂嵐の時でもダメージを受けないんだ」

前足でアルムの頭を優しく撫でながら言葉を掛け、七色のマフラーを渡すルーン。しかしアルムは嬉しそうにはしているものの、少し戸惑っているようである。

「そんな凄い物を僕に？ それに、これって貴重な物じゃ……」

そう、アルムはこのマフラーの珍しさを知っている上で、自分なんかが貰っていい物だろうかと思っているのである。その反応を見て大体の察しがついたルーンは、アルムのリュックの中へとマフラーを丁寧に畳んで入れた。

「大事な弟であるお前だから受け取って欲しいんだ。それにあればもうオレ達じゃ使えないからな」

「……ありがとう、ルーン兄さん。大事に使わせてもらうね」

全員との別れの挨拶を済ませ、改めて向き合ったアルム。これからしばらくここには戻ってこれないかもしれないと思うと、寂しさから思わず泣きそうになってしまう。しかし、せつかく明るく見送ってもらっているのにここで泣く訳にはいかないと思ってぐっと堪えた。

「それじゃあ、行ってきますす！」

出来る限りで声を張り上げて大きく前足を振って別れを惜しみながら、ヴァローとジラーチとともにその場を後にするのだった。

アルムの家からは少し離れた所にある村の境界線まで辿り着いた三人は、その手前で立ち止まっていた。そうなっている発端は、アルムが素朴な疑問を口に出した事にあった。

「今更なんだけど、ジラーチってのはあくまで種族名だね？ それとは別に僕達みたいな名前は無いの？」

「うーん……覚えてない！ アルム達が決めて！」

「「うん……えっ!!」」

予想外の回答にシンクロして驚きの声を上げる二人。最初はどうしようかと悩んでいたが、その質問を皮切りに何故か頻りにジラーチが名前を欲しいと言い出し、考え込んで立ち止まっているのである。

「名前付けてくれて言われてもな……。アルム、どうする？」

「えっと……ニックネーム的なのなら問題無いんじゃないかな？」

一応考えてはみたけど……」

アルムのその言葉を聞くと、ヴァローは少し距離を置いた所で待っているジラーチを呼びに行く。ニックネームとは言えジラーチにとっては初めて付けられる名前に変わりは無い。ヴァローはそんな大役を引き受けるのが嫌らしい。

そんなこんなでニコニコと笑っているジラーチが目の前に来て、やや緊張の面持ちのアルム。一回深呼吸して落ち着いてから口を開いた。

「それじゃあね、ニックネームみたいなものなんだけど、“ティル” ってのはどうかな？」

「うん！ それいい！」

嬉しそうに微笑みながらジラーチは明るく無邪気に叫んだ。喜んでくれたようで、アルムもほっと胸を撫で下ろすのであった。

その後、改めて決意を固めた三人は境界線の上に立った。

「ここから俺達の新しい一步を踏み出すんだな」

「うん。僕達二人にとっても、ジラーチーううん、ティルにとっても。例えどんな過去があったとしても、ここからはティルとしての新しい一步を踏み出すんだ。さあ、みんなで同時に行こうね」

「じゃあ、ボクが言うね！ いっせーの！」

ティルの掛け声とともに力強くジャンプする三人。そのまま同時に着地すると、三人は互いに見合って微笑んだ。そして三人はそこから一步、また一步と村を離れていくのであった。

この時、三人の背後から旅立ちを祝福するかのように、暖かく穏やかな春風が吹き抜けていった。姿こそ見えないものの、村の全員が、そして植物達までもが三人の旅の無事を祈り、後押しするかのように――。

第六話 始まりの一步（旅立ちを鮮やかに彩る音色）（後書き）

毎度毎度変なサブタイトルですいません（汗）

ようやく旅立ちですが、ただでは旅立たせませんでした。最初は力を入れようという事で、色々と散りばめてみました。

これから物語は動き出しますが、先に警告（↑）しておきます。一つ目は、物語が進むにつれ面白くなる可能性がありますので、覚悟して下さい。二つ目は、今のところ何もないですが、徐々にポケモンの世界観からズレていくかもしれないので、これまた読み続ける際は覚悟して下さい。つまらないと思ったら容赦なく切り捨ててもらって構いません（笑）

因みに、ジラチに付けた“テイル”というネーミングセンスの欠片もない名前ですが、由来はフランス語で流星を意味する【meteor】をフランス語読み（？）したミティオールから取りました。本当は“ル”じゃなくて“フ”ですが、細かい事は気にしないで下さい。と言うか、所々外国語の読み方が間違っている事があるかもしれませんが、「こいつまた間違えてるよ（笑）」ぐらいに思っ流して下さい。

色々拙い所もあるかと思いますが、指摘や批判、アドバイスなどあったらお願いします。

第七話 初めて見る外の世界へ図書館での出逢いへ

レインボービレッジを旅立った三人は次の目的地、一番近いリープタウンに向かって歩いていった。今だに強い陽射しが差していたが、足元をそよそよと流れる風のおかげで気候条件は悪くなかった。

ティルは羽衣で空中に浮かびながら移動している為体力を使っていないが、アルムとヴァローは普通に歩いているので、休憩を挟みながら先に進んでいく。

「ねー、まだー？」

「もうちょっとで着くよ。ティルは飛んでるんだからいいじゃないかー」

道中、大した出来事も起こらず単調な移動に飽き始めたティルに、アルムは小さく愚痴を零す事が多々ありながらも、三人は順調に歩みを速めて先を急いだ。

隣町という事もあり、さほど時間を掛けずにリープタウンに辿り着いた。村の外の世界を知らなかった三人、特にティルはこの町並みに驚いていた。

木で出来た家が所々に建っていたレインボービレッジとは違い、この街は土や煉瓦で出来た家が建ち並んでおり、一目見ただけでも

住居の数が圧倒的に多い。そして何より、自然豊かな森であるレインボービレッジとは対極的に、こちらはポケモン達が町中に溢れていて、何処か活気に満ちている。

「うわー、外の世界ってこんなに凄いんだね！」

「まあ凄いっちゃあ凄いが、別にそうでもないみたいだぞ。地図を見る限りでは確かに俺達の故郷に比べれば広いが、まだまだ他にも大きい街はあるみたいだ」

目を輝かせ胸を躍らせているティルに対し、地図を広げながらヴァローは至って冷静にそう言った。

そんな二人のやり取りの中、アルムは感じた一つの疑問を口にする。

「そういえば、この町に来た目的って何だっけ？」

「『何だっけ』じゃないだろ？ この町の図書館でジラーチという種族について調べるって言ったじゃないか」

目的を忘れたというアルムの素っ頓狂な言葉に、やれやれといった表情でヴァローは答える。流石に決まり悪いのか、アルムは顔を赤らめながら歩き出した。

三人が今通っているのがこの町の中央通りらしく、脇には様々な店が多く軒を連ねており、ティルがふらふらと見て回っていた。その中でも目を付けたようで一向に離れなかったのは、林檎が売られている店だった。

「ねーねー。これ食べたい！」

相変わらずの笑顔のままの催促に二人も負けたらしく、林檎を三人分買う事にする。二人ともここまでの移動で疲れていたのもあったか、ティルと同じく誘惑に勝てなかったのであろう。

この世界の通貨である“ポケ”での支払いを済ませると、とりあえず近くにあるベンチに腰掛けて各々林檎を食べ出す。

ヴァローは口から“ひのこ”を放って焼き林檎にして食べていた。アルムにも焼こうかと尋ねてきたが、アルムは断った。焼くのはどうかと言いつつアルムに対してヴァローは反発して議論を繰り広げる傍らでは、我関せずと言った様子でティルが黙々と林檎の美味しさを堪能していた。

一頻りの言い争いが終わった所で、三人は図書館を目指しながら町を散策していった。

初めて見る外の世界。新たに出逢うポケモン達と言う事もあり最初は色々と不安を抱えていた三人。

しかしすれ違うポケモン達に声を掛けられたり、挨拶をして返してもらいう内にいつの間にか不安は消え去っており、早くも町に馴染みつつあった。

そうして寄り道をしながら歩いていると、目的である図書館らしき建物が見えてきた。

まず第一印象は、辺りに建ち並ぶ家とは比べものにならない程大きな建物であるという事であった。次に気付いたのは、家のほとんどが煉瓦の色そのままに茶系の壁であるのに対し、図書館は目を引く程に白く塗装がされており、一発で図書館だと分かるようになっている。

入り口は木製の引き戸になっており、背が低かったり、種族上の理由で手が無かったり上手く使えないポケモンも苦勞する事無く入れるようにと考えられた構造なのだろう。建物内の部屋と廊下を繋ぐ扉も同様になされている。

入ってすぐ右手にある受付には、全身が鎧のように固い鱗で包まれている大柄の青いポケモンがいた。種族名はニドクインであり、三人が来たのを笑顔で出迎える。三人も笑顔で軽く会釈をしながら中に入っていく。

「よっしゃ、俺はちょっと進化について調べたいから、ジラーチの方宜しく頼むな」

「あ、ボクも行く」

「ちょっと、二人とも！」

アルムの制止を振り切り、二人は遠くの方に行ってしまった。半ば呆れて溜め息を吐きつつ、アルムは一人ポケモンの生態に関する

本が並べられた棚の方に向かう。

「えっと、図鑑でいいのかな？」

とりあえず分厚い本をキョロキョロと見ながら探していくアルム。しかし、背が低いアルムには上の方までは見えず、下の段をひたすら探していたが、それらしい物は見つからなかった。

「はあ、やっぱりそう簡単には見つからないか……」

今度は疲れから大きな溜め息を一つ吐いて、近くに座り込んだ。ふと休憩しながら横に目を遣ると、マンキーが表紙に大きな文字で“ポケモン図鑑”と書かれた本を読んでいるのが見えた。

「あの……もし読み終わったら、その本を貸してもらってもいいですか？」

読書を邪魔しないようにそっと近付き、小さな声でアルムはお願いしてみた。それを聞いてマンキーはようやくアルムの存在に気付いたらしく、顔を上げる。

「何だ？ それじゃ俺様にさっさと読み終われって言いたいのか！？」

「いえ……そんなつもりは無いんですけど……」

何故かキレ気味なマンキーの勘違い発言に反論したいアルムだったが、その余りの勢いに辟易してしまった。

「でも現にそういう事だろうが！ おいっ！」

「あうっ……そ、その……ごめんなさい……」

うつすら涙目になってびくびくしながら謝るアルム。こういう状況に慣れていない為か、すぐに弱気になって怯えてしまう。故に、例え自分が悪い事をしていなかろうと、反射的に謝ってしまったのである。

そんな困窮しているアルムの元に、一人のポケモンがやって来た。体が角張っているのが特徴的なポリゴンである。

「図書館で揉め事は許されていません。“サイケこうせん”」

「うぎゃああ!!」

何処か無機的な声でそれだけ言い終えると、突如両目から虹色の光線を発射した。直撃したマンキーは絶叫し終えると、その場に倒れて動かなくなった。

「あなたも同罪です。覚悟して下さい」

「えっ！ ぼ、僕は何もしてないよ！」

くるりと向きを変えてアルムの方を見ると、今度はアルムに照準を合わせるポリゴン。何とか事情を説明しようとするが、一切聞く耳持たずといった感じでポリゴンは構えている。

もう駄目だと思い、アルムは強く目を瞑った。まだかとびくびくしていると、突然暖かい何かに持ち上げられるような感覚を味わった。

それが何かを確かめる為に恐る恐る目を開けると、固い鱗に覆われた両手に抱き抱えられていた。そしてそのまま固いけど、とても暖かい胸元に抱かれた。ゆっくりと見上げると、受付にいたニドクインが優しい笑顔でアルムの事を見ている。

「レイル、もうお止め！ アタシの部屋で待機してな」

「はい、分かりました」

アルムから一旦視線を逸らしてポリゴンの方を一瞥してニドクインは強く怒鳴った。それを聞いたポリゴンは攻撃体勢を解き、おとなしくこの場から離れていく。

「こんなに怯えちゃって……。ごめんよ、レイルが酷い事を。お詫びと言っちゃなんだけど、ちょっとお茶していかないかい？」

「いえ、何かされた訳じゃないので、別にお詫びなんていいです。それより、迷惑を掛けてしまってごめんなさい……」

「あんたが謝る事なんか無いよ！ それにそんな遠慮せずに、ね」

別に嫌な訳ではないものの、お詫びと言われる程の事をされた訳ではないので、寧ろ罪悪感を感じてしまい拒否するアルム。

そんなアルムの意思など意に介さないかのように、ニドクインは

アルムを人形のように優しく抱えて受付の奥の方へとゆっくりと歩いていく。その際、物音を聞いて見に来たヴァローとティルを見つけて手招きをし、訳も分からないまま二人も後について行く。

ニドクインに案内された部屋は、ポケモンの中ではそれなりに背が高いニドクインに合わせて天井も高くなっており、小柄なアルム達にとっては縦、横、高さのどれにおいても広く感じられた。

部屋の隅に高く詰まれた本を見る限り、相当の読書家だと伺える。その本の山以外の物は綺麗に整理されており、床に散らかっている物は見受けられない。

そんな部屋の真ん中では、先程のポリゴンがじっと宙に浮いていた。その近くに座るように勧められ、三人は少しポリゴンから距離を置いて座る。

「怖がる事はないよ。もう何もしないから。そういえば自己紹介がまだだったね。アタシはクイン。この図書館の管理人さ」

「あ、僕はアルムって言います」

「俺はヴァローです」

「ボクはティルだよ」

クインの自己紹介を聞いてすかさず自分達も自己紹介をする三人。

それを見てクインも笑顔を見せる。

「さっきは本当にごめんよ、アルム。その子はレイルって言ってね、この図書館での見回りをしてもらってるんだけど、偶にさっきみたいに行き過ぎた事をしてしまうんだよ」

ふうと小さく溜め息を吐くと、クインは隣に置いてあった、一口大に切られたモモンの実が乗った皿を三人の前に差し出した。

三人はいただきますと言って、モモンの実を美味しそうに食べ始める。その間、クインはまるで自分の子供を見つめるような優しい目でその様子を見ていた。

「それで、レイルがそういう事をする理由でもあるんですか？」

いち早く食べ終えたヴァローがそう切り出した。クインは最初話す事を躊躇ってるように見えたが、意を決したようにその口を開いた。

「実はあの子には、意思や感情が無いんだよ……」

第七話 初めて見る外の世界へ図書館での出逢いへ（後書き）

ちょっと早く進み過ぎですかね？ まあ自分としてはここまで早く持っていきたかったので良いかなと……。

先に言っておきますが、ニドクインのクインという名前については何も言わないで下さい。あまり凝った名前も何なので。

こんなんでいいのでしょうかね？ 色々と分かりません。というか毎回ですが。今回は文章がいつもより酷いような……。

何かアルムがすごく頼りない主人公になってきました。テイルが強くて分かりませんが、アルムも結構無邪気な部類に入るはずなんですけど……ただの臆病なキャラになっちゃいました（笑）

レイルの名前の由来についてはまた次回。リーブタウンの由来が分かる人ってどれくらいいるんでしょうね。分かったら分かったで「何でそれ!？」 訳分からんわ!」とか思われそうですけどねへ

第八話 食事のもてなしと一泊く暖かくて、恋しくてく

クインが言い出した衝撃の真実に、まだモモンの実を食べていたアルムも動きを止めて、クインを驚きの表情で見つめる。一方のテイルはと言うと、話の内容は一切耳に入っていないようで、本の周りを楽しそうに飛び回っている。

「意思と感情が無いってどういう事ですか!？」

言葉を荒らげて先に聞いたのはヴァローだった。今まで聞いた事もない事に驚愕しているようである。

「そうだね……。何かあんた達になら話しても良いかな。あれはいつだったかねえ……」

何かを思い出すように少し上に目を遣ってクインは語り始めた。

それは約一年前の事だった。図書館の管理人であるクインはいつもと変わりなく、図書館を訪れるポケモン達と話し合ったり、時には受付から離れて本の整理を行っていた。

そしてそれは、利用者が誰もいなかった夜に突然訪れた。閉館の時間になって帰ろうとした時、奥の方から大きな物音が聞こえ、クインは急いでその場へと向かった。

物音が発生した場所、そこは幸いにも本の置かれていない、その時は何も無い展示室であった。天井にはぽっかりと大きな穴が空いており、空で瞬いている星が穴から覗ける。

その視線をふと下に遣ると、そこには見た事もないカプセル状の物体があった。落下した際の衝撃が強かったせいか、所々外装が剥がれて壊れているようである。

得体の知れない物体に訝しげな表情を浮かべながら摺り足で近づくクイン。恐る恐るその壁をコツコツと、まるで訪問先の家の玄関を叩くように静かに叩く。

しかし、一向に反応が無かった。腕組みしながら待ち続ける事五分、もういい加減待つのに飽きたクインはその右手に力を溜め始める。

時間が経つにつれて、その拳は徐々に橙色のエネルギーを纏っていく。それが最大限に達した時、拳を高く振り上げた。

「ばかぢから」!

そう叫ぶと同時に、クインはその拳で勢い良く外壁を殴り付けた。

普段から静寂が保たれている図書館の中には似合わない轟音が再び鳴り響く。固い物同士がぶつかり合った際の鈍い音が部屋中に反響する中、めりめりとまた違う音を立ててカプセル状の物体が崩壊し始めた。

そしてそれはや瓦礫と化した“元”カプセルの中から姿を現したのがポリゴンだったのだ。

「――という訳なんだよ」

クインはそう言ってレイルとの出逢いについての話を締め括った。

「という訳って言われても……クインさんがそのカプセルを破壊したとしか聞いてませんけど……」

明らかに話す内容がズレている事に素早く突っ込みを入れたのはヴァローだった。それを聞いてクインは少し恥ずかしそうに頭を掻く。

「そういやそうだったね……。それじゃ改めて。その後の事なんだけどね、急に『あなたが主ですね』とか言い出してね。アタシに付き添い出したんだ。誰なのか聞いてみても、『私は“ニンゲン”によって作られたポケモン、ポリゴンです』ってしか言わないんだ」

「“ニンゲン”？ 作られた？」

聞き覚えのない名前と何処かおかしい言葉を聞いて、首を傾げながら復唱するアルム。クインはそれにこくりと頷いて続ける。

「それでね、気になって倉庫の方に眠っていた古い図鑑を引っ張り出して見てみたんだよ。今持ってきて来るから待ってておくれ」

そう言って立ち上がると、クインは四人を残して部屋からそっと

出ていった。

しばらくして戻ってきた時、その脇には大きな分厚い本が抱えられていた。それはさっきマンキーが読んでいた物である。改めて見てみると、シュエットが所持していた物よりも二倍の厚さがあるようだった。流石は図書館だけあると言えよう。

「ほら、ここを見てごらん」

軽々と運んでいた本をそつと床に置くと、ペラペラと――とは言え分厚い為、バラバラとが正しいが――捲っていき、あるページを開いた。

クインの指差す部分を目で追っていくと、そこには確かに“ニンゲンによって作られたポケモンである”と書かれている。

「アタシもここにそれなりに長い事住んでるけど、“ニンゲン”なんて聞いた事が無いんだよ。ポケモンを作るってのは何か不快だしね……。それと、ここも見てごらん」

今度は指を下にスライドさせていくクイン。それをまた追っていくと、“プログラムされた動作しか出来ず、意思や感情を持たない”と書かれている。

「何故この本にこんな事が書かれていて、この本がいつからあるのか。管理人のアタシにも分からないけど……少なくともここに書か

れている事は真実なんだ」

言いたい事を全て言い終えると、クインは大きく溜め息を吐いた。二人も自分達の想像を越えた事に戸惑い、黙り込んでしまう。

「ああ、悪かったね。しんみりするような事言っちゃって。そういえば、あんた達は何しにここに来たんだい？」

「あの……」

気まずい空気を変えようとしたクインの質問で、この図書館に来た目的を思い出したアルムが怖ず怖ずと切り出す。

「実はこの本でジラーチについて調べようと思ったんです」

「そうかい？　ちょっと待って……」

アルムがじっと見つめる先にあるのはもちろんさっきの図鑑。クインは了解したように小さく笑うと、次々とページを捲っていく。

五十音順になっているこの本のサ行の中間地点まで来た時、クインはその手を途中で止め、慌てて前後のページを捲り出した。

「どうしたんですか？」

「ジラーチのページだけが欠落してる……。ここに引き千切った後があるから、きっと誰かが持ち出したんだ。一体誰が……」

管理人であるクインでもその犯人は分からないようで、顎に手を当てて思い当たるポケモンがいらないか考え始める。その間する事の

なくなった二人は、ただティルが本を積み木のようにして遊んでいるのを眺めるばかりだった。

「あの……無いんなら別にいいですよ。どうしても知らなきゃいけないって訳でもないですし……」

あまりにも長い間考えているので、アルムは少し申し訳なさそうにそう言った。

しかし、どうしても知らなければいけない事ではないとは言え、この町の図書館がこの世界では一番蔵書数が多いとされている。一応この図書館には劣るものの、他の町にも図書館がない訳ではない。だからと言って、今見せてもらった程の本があるかと言えば、答えはノーである。

図書館の管理人としてその事を承知しているクインは、今度は近くに置いてあった一枚の地図を二人の前で広げる。

「あんた達、レインボービレッジから来たんだろ？ 実はここから少し行った所にある町には、ちよつと変わったドールがいるんだよ。そのドールなら、無くなったページの在り処を探す事が出来るかもしれないよ」

それを聞いて一安心する二人。ジラーチの事について知るのは義務ではないものの、少なくとも二人は知りたいと思っている。となれば、答えは一つである。

「ありがとうございます。行ってみます！」

「そうかい。旅を続けるんだね。そんなあんた達に一つ頼み事があるんだけど……いいかい？」

元気に返してきた二人を見て、優しい笑顔を浮かべるクイン。しかしその笑顔が急に曇ったかと思うと、二人にそう問い掛けてきた。

二人は一瞬その変化に驚くも、了承の意味を込めて大きく頷く。

「ありがとう。その頼み事と言うのはね、レイルと一緒に連れて行って欲しいんだ。レイルの実態は良く分からないけど、図鑑を見る限りでは進化するらしいんだ。それには専用の道具が必要なんだけど、アタシはこの町を離れられないし、そもそもそれが何処にあるかも分からないんだ。それで――」

「さっき言った町の探し物を見つけられるドーブルの所で、一緒にその道具も探すように頼んで欲しいという事ですね」

途中からクインの意図に気付いたのか、ヴァローが言葉を続ける。考えを読み取った事に些か驚きながらクインは小さく首を縦に振った。

「俺は良いですよ。旅仲間が多い方が良いですし。アルムも良いよな？」

「もちろん。目的地が一緒なんだもんね」

「本当かい！？　ありがとう！」

アルムもヴァローも快く引き受ける事にする。仲間が増えるのは嬉しいし、断る理由もない。

その返事を聞いて安堵の表情を浮かべたクインは、大きく手を広げて二人に強く抱き締めた。

「く……苦しいですっ……！」

「あらら、ごめんよ。ちよつと強すぎたね」

あまりに締める力が強いので、クインの手を叩きながら必死に訴えるアルム。慌ててクインが放すと、ホッと一息を吐くと同時に“ちよつと”じゃないと内心思う二人であった。

その後すぐに旅立とうとしたが、いつの間にか外は夕暮れの橙色に染まっており、宿を見つけていなかった三人はクインの好意で家に泊めてもらう事にした。

三人が連れて来られた受付の先にある部屋はクインの家の一部であり、家と図書館が繋がっているのである。夕食をご馳走してくれるという事で、クインは張り切っている様子で一旦部屋から出ていった。

部屋に残された三人の間に暫し沈黙が流れた。クインがいなくなった事で二人とレイルとの繋ぎ役がいらないからである。

、例外は無論ティルであり、今度は本を高く積み上げて遊んでいる。因みにこれはクインの了承済みらしい。

「レイル……だよね？　僕はアルム。これから宜しくね！」

沈黙を破ったのはアルムだった。コミュニケーションを取ろうとレイルに近づいて挨拶をし、右前足を差し延べる。

「あなたが新しい主ですね。宜しく願います」

表情を一切変える事無く、抑揚の無い話し方で返すレイル。まるで機械のようである。差し延べている足にも反応を示さない。

そしてそれ以前に、レイルはアルムの目をちゃんと見ていなかった。体を観察しているとか、ただ視界に入っているとかそんな感じである。

「主なんて止めてよ。友達として仲良くしようよ！」

諦めずに明るい笑顔を振り撒いて話し掛けてみるものの、その後レイルは反応を示さなかった。

その反応にアルムはしょんぼりとしながら、頬を大きく膨らませる。内心無視された事に怒っているのだが、まだ会って間もないという事で仕方ないとも思っているのである。

そんな中でも、事情を全く知らないティルは自由奔放に飛び回って陽気に歌を歌っていた。

「アルムがあるじで あるじがアルム〜♪」

語呂が似ていて気に入ったのか、楽しそうに歌っているティルを見て、アルムは何となく羨ましいと思うのであった。

その後、旅を始めて最初の食事を、四人で食卓を囲んで楽しい雰囲気の中で始めた。

クインの手作りの料理はどれも美味しいものばかりであり、心まで暖まるものだった。一品一品クインが心を込めて作られた料理から、家で食べる時に同じような幸せを感じると同時に、早くも家が恋しいと思う自分を必死にアルムは隠すのだった。

初めての外の世界で迎える最初の夜。三人で寝れるようにとクインは広い部屋を貸してくれ、更には草のベッドを用意してくれていた。三人はそれぞれ礼を言って床に就く。

早速ヴァローとティルは寝てしまったが、少し外を見たかったアルムは起き上がって窓から外を覗いた。

いつもは寂しい時や嫌な事があった時に夜空を見上げていたが、今日は違った。そして満天の星空の中でも燦然と輝きさんぜんを放つ一等星

を見てみると、クインがパッと頭に浮かんだ。

それは、不安いっぱい旅立ったアルムを暖かく包み込んでくれたクインが、一番明るく夜空を照らしている一等星のような存在にアルムには見えたからである。

結局謎が解決するどころか、新たにレイルが仲間に加わった事により別の謎が増えたが、少なくともこの日は三人にとって、大変有意義で楽しいものとなったのであった。

第八話 食事のもてなしと一泊く暖かくて、恋しくてく（後書き）

意外とまだ色々と言られなかったりですね。その割に文字数は結構行っただすよね（笑）

何となーく地の文が多い気がしますけど、描写が上手く出来てるかと言えば……うーん、どうでしょう。タイトルが変なのはいつもの事なので気にしないで下さいね。もう一度見返した時に分かりやすいようにと思ってそうしてるので。

では名前の由来を簡単に。

レイルはフランス語で『機械』を意味する【appareil】を英語読みした【アパレイル】の後ろ三文字です。多分あって思うんですけど……。何故英語読みをするかなんてつつこまないで下さい（笑）

最後に。アニメやポケダンでは感情や意思があるように描写されていますが、本来は感情も自我も持たない設定なんです。これは一応事実ですよ！

第九話 町の散策く勘違い弟の敵討ちは兄の役目く

「う……ん。暑い……。重い……」

途中まで柔らかくて暖かかったはずの草のベッドの上。それが突然暑さと重さに襲われて、思わず目を開けるアルム。目の前にはまだぐっすりと眠っているヴァローの背中があった。いつの間にかアルムの方に転がっていたのだ。

そして今度は重さを感じる自分の体の上に目を向けると、テイルが覆いかぶさるような形で眠っていた。

これ以上は眠れないと思ったアルムはテイルをそっと床に寝かせて起き上がった。

窓の方に目を遣ると、外はまだ仄暗くて暁時らしい。特にする事もないので眠い目を擦りながら外を眺めていると、何処かからとんとんと何かを叩いてる音が聞こえてきた。

「こんな時間に何だろう……?」

ふとその音に興味を持ったアルムは、ヴァローやテイルを起こさないように草のベッドを踏まないように避けながら、部屋のドアの方へと静かに歩いていく。

まだこの家の構造をあまり知らないのと廊下が薄暗いのもあって、ウロウロと迷ってしまう。現在位置は分からないものの、とりあえず自分の耳を頼りに先に進んでいく。

あるドアの前に来た時に音が一番大きく聞こえ、そっと開けてみる。

最初に目に入ってきたのは、クインの後ろ姿だった。高い台の上で何か手作業をしているらしいが、背の低いアルムには見えなかった。しかし、辺りにはあの優しく甘い香りが充満していた為、木の実を扱っているのだらうと予想はついた。

「おや、こんなに早い時間にどうしたんだい？」

アルムに気づいたクインは振り向き様に問い掛ける。その右手にはモモンの実が、左手には木製の包丁が握られており、料理の用意をしているらしい。

「ちょっと目が覚めちゃって……」

「そうかい。それじゃ起きた序^{ついで}でに、目覚めのジュースでも飲むかい？」

そう言うと、クインは屈んでほんのり赤みがかった色のジュースの入った木の器を差し出してきた。

“目覚め”という単語に少し引っ掛かりながらも、軽く口を付けて舐めてみる。舌の上に乗せた瞬間、ピリツとした刺激が走る。

「うん……美味しいで……っ！」

次の瞬間、アルムは言葉を失うと同時に顔を顰め、舌を口の中から出す。

「か、辛いすっ!」

涙目になりながら叫ぶアルム。体をじたばたさせながら必死に辛さを堪えている。

「おや? クラブの実を入れ過ぎたかねえ……。そんなに入れたつもりはないんだけど……」

「げほっ……いえ、僕が辛い物が苦手なだけですから……」

噎^むせながら理由を説明してようやくアルムはほっと一息吐いた。

それを見たクインは先程のモモンの実を一口大に切り、アルムの口の中に入れてくれた。モモンの実を噛んで満面の笑みを見せて喜ぶアルムを見て、クインも思わず笑みを零す。

「アルム、ちょっと手伝ってくれないかい?」

「はい、手伝わせて下さい!」

「うん、いい返事だね」

その後夜が明けるまで、アルムはクインの朝食作りを楽しみながら手伝った。本当に楽しみながら、互いに笑顔を絶やす事無く。その光景はまるで本当の親子のように幸せそうだった――。

「おはよー。アルム早いね！」

「本当だ。お前そんなに早起きだったか？」

外の空気も徐々に暖かくなっていき、町のポケモン達も動き始めた頃に二人は起きてきた。「誰のせいだ」と言おうとしたアルムだったが、クインとの楽しかった時間を思い出して何も言わずに、二人を朝食の用意された部屋に案内する。

部屋では全ての準備を終えたクインが待っており、全員揃ったところで食べ始める。レイルも後から現れたが、食べる様子もなくじっとしているだけだった。

その後、図書館が休館日という事もあり、レイルも同伴でクインに町の中を案内してもらう事になった。昨日町をある程度回ったと言っても、図書館の道すがらに少し寄り道をした程度だった為、三人は楽しみでもあった。

「ほら、見てごらん。あれがこの辺で美味しいって噂になっている木の実料理の店だよ。本当はあそこにも連れて行ってあげたかったんだけどねえ……」

遠くに見える店を指差しながら物寂しそうに呟くクイン。理由が

分らないテイルが無邪気な笑顔で覗くと、クインは何事もないかのように笑ってみせた。その後も終始同じような顔を覗かせる事があったが、決して四人には見せないようにするのだった。

その後も町ならではの良い所を回ったのだが、流石は町だけあってアルム達の村とは違い、長い事歩き回っているのに、まだ全てを回りきれていないようである。

その道中、クインが少し買いたい物があるからと四人に中央広場で待っているように言った。

中央広場にはこの町のシンボルとも言える巨木が堂々と立っている。その荘厳な様子からは、長年ここで全てを見守っていたのだろうと思われる。そんな広場には他のポケモンもいないようで、とても静かだった。

そこで一息を吐いて休んでいる四人の背後から近づいてくる四つの影があった。わざと地面を強く踏み締めて足音を立てている。

ガーディという種族上、四人の中では一番耳が良いヴァローがその音に気づいて振り返る。その足音の主は、三人のマンキーとその進化系である一人のオコリザルだった。

「よお、お前らか。俺の可愛い弟を可愛がってくれたのは。礼を言わなきゃな」

怒ったような顔で――それも元からの怒っている顔にプラスアルファで――オコリザルは声を掛けてきた。

弟とは誰かと思い、マンキーの方に目を遣ると、一人だけ明らかに体毛がボサボサになっているのがいた。それが図書館で絡まれたマンキーだと気づいたアルムはすぐに目を逸らす。

「どういたしまして」

「いや、そういう意味の礼じゃねえよ！ 全く、調子狂うぜ……」

事情とオコリザルの言ってる意味が分かっていないテイルは、言葉のままに受け取ってそう言った。一方のオコリザルは、肩透かしを喰らったように呆れている。

「アニキ、そんな奴ほつといてさ……」

「ああ、そうだったな。という訳で覚悟するんだな」

一人のマンキーの一言で調子を取り戻したオコリザルは腕組みしながら威圧的に言い放つと、アルムに向かって近づいて腕を振り下ろしてきた。アルムは慌てて身を翻し、それを間一髪の所で避ける。

「攻撃してきたって事は、そっちこそ覚悟は出来てるんだな？」

牙を見せて敵意を剥き出しにするヴァロー。その“いかく”には威勢の良かった四人も一歩退いてしまう。

「威勢の良いガキだな……。だがお前に用は無い。“メガトンパンチ”！」

オコリザルは右の拳を構え、アルム目掛けて鋭くパンチを突き出

していく。

「させるか！ “かえんほうしゃ”！」

ヴァローは口から豪火を放ってアルムとオコリザルの間に炎の壁を作った。

「お前の相手は俺がしてやるよ。この豚猿！」

「生意気な奴め……。おいお前ら、残りの奴らを頼んだぞ」

「了解です」

オコリザルはヴァローの挑発に乗ったらしく、ヴァローの攻撃の誘導に従うように向かっていく。この誘導もオコリザルとの戦いに巻き込まないようにする為の考えである。

その一方で指令を受けたマンキーはそれぞれアルム、ティル、レイルに向かっていく。

「ティル、逃げて！」

「よそ見をしてる場合か？」

ティルの心配をしている内にマンキーがいつの間にか近づいてきており、手刀を作って振り下ろして“からてチョップ”を仕掛けてきた。

アルムは“でんこうせっか”の素早い身のこなしでその場から離れる。距離も置けた所で今度はレイルの方を見ると、既に気絶

しているマンキーに“サイケこうせん”を浴びせ続けていた。

「もらった！」

再び接近していたマンキーは手刀を振り下ろしてくる。咄嗟にアルムは、足元の砂をマンキー目掛けて掛けた。

「ぐっ、目が……！　よくもやりあーがっ！」

必死に手で目に入った砂を振り払おうとするマンキー。そこへアルムは“たいあたり”をして突き飛ばし、急いでレイルの元に向かう。

「レイル、もういいよ！　気絶してるじゃない！」

「主、何を言うのですか。戦いを始めたのは彼ら。そして主に危害を加えようと言うならば、それ相応の事をされても文句は言えないでしょう」

アルムの呼び掛けを聞きながらも、“サイケこうせん”の手を緩めずに自分の行動の正当性を主張するレイル。

それは違うと言いたかったアルムだったが、レイルの無機的な声は何処か怖くて何も言えなかった。変に神経を逆撫でするような事を言えば、主と言ってくる自分にも攻撃を仕掛けてくるんじゃないか。そう思ったから。

ただ、このまま攻撃を続けさせるのはいけないと思い、引き離して技を止めさせる。レイルはその行動の意味が分からないように、角張っている頭部を機械のようにかくかくと傾げる。

「私はあなたの為にやっているのです。何故攻撃を止めさせるのですか？」

「何故ってそれは……君のはやり過ぎだからだよ。それに、僕の為にとかはいいいから……」

“プログラムされている”正しい事をしているレイルは、自分が間違っているとは思っていないらしい。

アルムが今まで会った事のないようなタイプのポケモンであるレイル。その態度に衝撃を受け、動揺したアルムは、レイルの問い掛けに目を逸らして答える。

「よそ見はするなって言ってるだろ！ “クロスチョップ”！」

レイルと話している間に、先程突き飛ばしたマンキーが腕を十字にしてアルムに飛び掛かってきた。

避けられないと確信して動くのを諦めたアルムの前に、レイルが立ちはだかった。マンキーの“クロスチョップ”はそのままレイルに直撃し、アルムはレイルとともに後方に飛ばされる。

着地の際に背中を擦った以外はダメージは受けなかったアルム。それに対し、身を呈してアルムを庇ったレイルはもう動けない状態だった。

この時アルムは思った。自分が油断していたせいで、レイルを傷つけてしまったのだと。そして目の前で倒れているレイルの姿を見ると、こんな弱い自分を庇ってくれたレイルに申し訳ない気がして

ならなかった。

「ハッ……今度は二人纏めて始末してやるよ！」

そんな事を思っている間にも、マンキーは再び“クロスチョップ”の体勢で猛進してきた。アルムは攻撃に対する怯えから来る震えを振り払い、レイルの前に立った。

——レイルは僕を身を呈して守ってくれた。正直すごく怖い……。けど、今度は……僕が守る番だ！

そう決意を固めた瞬間、アルムのオカリナが淡く優しい、蒼い光を放ち始めた。そしてマンキーが眼前まで近づいた時、アルムとレイルを蒼い球状のバリアが包み込んだ。

「えっ……これは何？」

アルムも咄然とする中、バリアと真正面から激突するマンキーの“クロスチョップ”。それにバリアはびくともせず、逆にマンキーは勢いを保ったままバリアにぶつかり、遠くまで弾き飛ばされた。

衝撃が強かったのか、マンキーは仰向けに地面に激突した後動かなくなった。それを見て驚きと安堵を同時に感じながら、アルムはすぐにレイルの方を振り向く。

「レイル、大丈夫？　ごめんなさい、僕が弱いばかりに……」

頭を垂れて謝罪するアルム。旅立つ前に恐れていた事が起きてしまい、後悔の念から来る涙を目にうつすら浮かべる。

「主、声の調子がおかしいですよ？ 目からも何やら分泌物が出ますし、大丈夫ですか？」

感情を持たないレイルには悔しさも悲しみも分からない。故に、アルムの異常には気づけても、その理由が理解出来ないのである。

これでレイルには感情が無いというのを改めて思い知らされたアルムは、同じ生き物として悲しくなって顔を背けてしまうのだった。そして同時に、未だ何も分からない“ニンゲン”に対して怒りのような感情を抱くのであった。何故こんな事をするようにしたのかと

第九話 町の散策く勘違い弟の敵討ちは兄の役目く（後書き）

ぶっちゃけると、この話実は1000字程削りました。それが何かと言うと、テイルやヴァローの戦いの行方です。

本当は簡単なダイジェストにしてあったのですが、そうするとアルムやレイルの部分が非常に薄っぺらくなってしまふ為に、急遽切る部分を変えました。という訳で次の話はもうお分かりですね？

因みに少し時間が掛かったのは、どうでもよい最初の部分からどうやってバトルに繋げようか悩みに悩んだからです。悩んだ挙げ句がああ低いクオリティかと言われると、何も言い返せません（泣）

もちろん適当に書いてるつもりはないのですが、何故か描写が疎かになってしまふ部分が多々出て来るんですよね。ああ……早くうまく書けるようになりたいです。その日も来るような気がしないのですが……。

第十話 バトルと遊びゝ威勢が良いほど弱いものゝ

晴れ渡った青空の下。ポケモン達も活動を始め、活気を帯び始めた昼の町並み。そんな町の静かだった中央広場では、普段は聞こえないような衝撃音が響き渡っていた。

「“メガトンパンチ”！」

その迫力ある姿に相応しい声量で叫び、全身の力を腕に乗せてパンチを打ち出すオコリザル。対するヴァローは持ち前の脚力で駆け出し、攻撃を避ける。

もはや叩き付けると言った方が正しいかもしれない、そんなモーションから打ち出されたパンチは、空を切って地面を殴り付ける形となる。それにより地面に溝が出来た。そこからも威力の高さが窺い知れる。

「避けてばっかで猪口才ちぐちぐちな！」

「避けられるような攻撃しか出来ないのが悪いんだろ」

二度目のパンチを軽くかわし、挑発をしながら全身を軽く震わせて“ひのこ”を放つ。攻撃直後の隙のある所に放たれた橙色の小さな炎塊は、全てが的確に命中する。

オコリザルは熱がりながらバックステップをして一旦距離を取る。舌打ちをしている辺り、相当苛いらついているのであろう。

「どうした？ さっきまでの威勢はどこ行っただんだ？」

「この……ガキが舐めやがって!!」

攻撃を受けた事で“いかり”のボルテージが上がり、先程に増して怖い形相で腕を振り回してオコリザルは迫ってくる。

「……やっぱり分かりやすいな……」

口元に小さく笑みを浮かべながらヴァローは足に力を込め、思い切り駆け出して正面から堂々と向かっていく。

それに対するオコリザルは、腕をクロスさせて猪突猛進で走っていき、ヴァローを迎え撃つ。

「あんまり舐めるなよ!」

大きな叫び声を上げて“クロスチョップ”を喰らわせようとする。ヴァローは再び軽快なステップで横に跳び、攻撃をかわすモーシヨンに入った。

「かかったな!」

空振りに終わったかに思えた“クロスチョップ”。しかしそれが外れる事は無かった。いや、正確にはそれが“クロスチョップ”では無かったのだ。

ヴァローの脇を真っ直ぐ通り過ぎていくはずのオコリザルの体は、そのままかわしたヴァローの方に向き直り、強力な“クロスチョップ”をお見舞いした。

「がはっ……！」

ヴァローは強襲を受けて体を宙に打ち上げられる。攻撃が決まった事に悦に入っただ様子のオコリザルは、大きく笑ってみせる。

「……なんてな」

ふと聞こえてきた余裕の籠った声にオコリザルは振り向こうとするも、それが叶う事は無かった。

上空から降り注ぐ火炎に一瞬にして体を焼かれ、オコリザルはその場に崩れていく。それと同時に、空中に打ち上げられたヴァローが悠々と着地を決める。

「分かりやすいって言っただろ。目の動きを見れば、次に何処に行くのかすぐに分かった。それに、自分の技が上手く決まったかどうか分からないようじゃ駄目だな」

「くっ……そ……」

怒りのあまり体をわなわたと震わせながら睨みつけているオコリザルを尻目に、ヴァローはその場を後にするのだった。

二組がバトルを繰り広げているその傍らでは、二人のポケモンが睨み合っていた。正しくは見つめ合っている。ニコニコ笑っている

ジラーチのテイルと、それを複雑な表情で見るマンキー。

「ねえ、何して遊ぶの？」

マンキーの周りを飛び回りながら、この緊張感など全く感じていない様子でそう言うテイル。あまりにも無邪気な顔をしている為に、マンキーも中々攻撃し兼ねているのだ。

「別にお前に恨みがある訳じゃないけど、とりあえずアニキの命令だからやらせてもらおうぞ……」

そう言い放つや否や、“みだれひっかき”の体勢か、はたまた単に捕まえる体勢か、両手を前に突き出して飛び掛かっていく。

しかし、宙に浮いているテイルにそれをかわす事など造作もなく、体を少し右に動かすだけでひらりと避けてしまった。

「鬼ごっこするの？　じゃあボクを捕まえてみて〜！」

体を左右に揺らして楽しそうにしながら誘ってくるテイルに、何故か変にやる気を抱いたマンキーが再び飛び掛かっていく。

「鬼さん、こっちだよ〜」

今度は後ろに体一つ分下がって避け、そのままうちよろ飛び回って逃げていく。マンキーも自慢の足を活かして必死に追い掛けるも、飛べるテイルの方に歩があり、一向に捕まえられなかった。

「まだ捕まえてくれないの？」

息が切れ始め、膝に手を着いているマンキーに近付き、テイルは話し掛ける。これを好機と見たマンキーは、気づかれないように上目遣いで居場所を確認して飛び掛かる。

今度こそ距離的にも逃げられない。そう勝利を確信したマンキーだったが、その両手はテイルにしっかりと握られて宙ぶらりん状態となってしまう。

「なっ……何をする!？」

「鬼ごっこはもう飽きたから、次の遊びをするの!」

「遊びつて――」

マンキーが次の言葉を言い出す事は無かった。と言うのも、マンキーの両手を掴んだままテイルがその場で回転し出したのだ。

最初こそ緩やかだったスピードも、時間の経過とともに徐々に速まっていく。テイルは“こうそくスピン”を使える訳ではない為そこまで回転は速くならなかったものの、回転数はどんどん増えていき、マンキーもそれに伴って目が回って気持ち悪くなる。

「どう? 楽しいー?」

回転している張本人は一切目を回す様子などなく、寧ろ先程よりも楽しそうな顔をしている。つまりはこの発言も本心なのである。

「やめろっ……。この……。放せ!」

「分かった〜！」

この返事を聞いた瞬間、しまったと思ったマンキーだったが、既に遅し。それなりの回転速度があるので、それにより生み出される遠心力によってマンキーの体は遠くへ投げ飛ばされる形となった。

「ぐぎゃっ！」

投げ飛ばされる直前に微妙に角度が付いていたせいだろうか、体は半ば叩き付けられるような形で着地して、その痛みからマンキーは無様な声を上げる。

すぐにでも立ち上がってティルに仕返しをしてやろうと思ったが、平衡感覚を狂わされたせいで上手く立ち上がる事が出来ずに倒れてしまう。

「あれ？ もう遊びは終わりなの〜？ つまんないのー」

「ティルー！ 大丈夫ー？」

「あっ、アルム！」

遊び相手がいなくなつてつまらなさそうにしている所に、ちょうどバトルを終えたアルム達が駆け寄ってきた。こちらの方が時間が掛かっていたらしく、レイルも休んで体力が回復したようであった。

四人が揃った所でオコリザル軍団の方を一瞥すると、あちらも四人が集まっていた。とは言え、オコリザルは体毛がところどころ焦げており、マンキー達も立ち上がれずにふらふらしていたり頭を摩さすっていたりと、随分と出会った頃に比べると滑稽な姿と成り果てて

いたが。

元から笑顔でいるテイルを除き、それを見たヴァローは忍び笑いをしだした。さっきのレイルとの事もあってか神経を尖らせていたアルムも、ヴァローに釣られて笑ってしまう。

「なっ……笑うんじゃないねえ！　まだ負けた訳じゃないからな！」

威勢だけは良いものの、何処か足元が覚束ないオコリザル。しかし、その威勢の良さも突如何故か顔から消え失せてしまった。それと同時に、一步ずつ後退していく。

「あんたたち、また悪さでも仕出かしてるのかい？」

不意に背後から聞こえてきた声に振り向くと、木の実がたくさん入ったバスケットを片手に持っているクインが立っていた。

「いや……そんな事ないですよ。ハハハ……」

先刻までの偉そうな態度は何処へやら。作り笑いを浮かべながらオコリザル軍団は後ろに下がっていき、ある程度距離が離れた所で背を向けて一目散に逃げていってしまった。

「全く……。大丈夫だったかい？　あいつらはこの辺で悪さを働いてるんだ。とは言っても、本当に小さい事しかやらないから、そこまで悪い奴らじゃないんだけどね」

四人の無事を確認して、ふっと小さく笑いながらクインはそう言った。改めてほっと一安心するアルムとヴァローだったが、そこで一つの疑問が浮かんだ。

「何でオコリザル達は、クインさんを見た途端に血相を変えて逃げ出したんですか？」

こんな事を聞くのは失礼かもしれないとは思いつながらも、オコリザルの態度があまりにも気になった為にアルムは聞いてみる。

「あー、あれね。前に悪さしてる所をちょっと懲らしめてやったら、それ以来あんな風になったんだよ。それより、これからまた旅を続けるあんたたちに渡したい物があるんだよ」

“それより”などと言って軽く流してはいるが、アルムは寧ろそっちの方が気になってしょうがなかった。あれ程の怯えようを見る限り、ちよつとどころではないのだろうと想像していたが、とりあえずは何も言わない事にする。

そう色々と考えを巡らす間に、クインはバスケットの中からたくさんグミが入った袋を取り出した。

「本当はスカーフとかも良いかと思ったんだけどね、栄養をつけてもらいたいからこっちにしたんだよ」

「いえ、そんな……色々とお世話になっているのに、それは受け取れません」

昨日出会ってから色々良くしてもらっているのに、自分は何も恩返しをしていない。その上でグミを貰う事を憚られたアルムは受け取るのを断ろうとする。しかし、クインは静かに首を振って、強引にリュックの中に袋を押し込んだ。

「そんな事気にする必要ないよ。これはアタシの気持ちだよ。それにアタシの方こそお礼を言いたいよ。あんたたちと一緒にいてとても楽しかったんだ。まるで子供が出来たようで……」

町を歩いている時に一瞬だけ見せた寂しそうな顔を今一度見せるクイン。ゆっくりとしゃがみ込むと、アルムを優しく抱き締める。

「敬語は出来れば止めて欲しいね。それと、また気が向いた時に家に寄って、顔を見せておくれ。いつでも歓迎するから……」

「うん、分かった。ありがとう、クインさん。僕もお母さんというみたいで、凄く安心出来たよ。また絶対に会いに来るから、待ってね」

余所余所しさの無くなったアルムの言葉を聞いて、先程にも増して輝く笑顔をクインは浮かべる。

「ふふっ……嬉しいねえ。それじゃアルム、ヴァロー、ティル。頑張るんだよ。そして、レイルの事を頼んだよ」

「「はい、分かりました！ あっ……」」

敬語を止めるよう言われても、頼み事をされてはつい敬語になっ
てしまい、二人は思わず顔を見合わせる。

「ふふっ。いいんだよ、別に無理しなくても。それじゃ行っちゃい！」

「「はい、行ってきます！」」

「行つてらっしゃい」

アルムとヴァローは元気に返事をしてクインに背を向けた時、呑気な声が聞こえて横にいるはずのティルがないのに気づいた二人は、直ぐさま踵を返す。

「君（お前）も行くの！」

「まだここにいたいのに」

両腕を唧くわえて、二人はやや引き摺るような形でティルを連れていく。これにはクインも苦笑を浮かべるが、すぐに笑顔に戻り、四人の姿が見えなくなるまで手を振り続けるのであった。

第十話 バトルと遊びゝ威勢が良いほど弱いものゝ（後書き）

最初は面白いと思って読んで下さっていた方も、そろそろつまらないと思い始めたでしょう。徐々に手抜きになってきた描写に、案外浅いストーリー。もうこの十話辺りで気づいてきたのではないかなと不安になってきました（汗）

さあ、愚痴もなんなので、今話について少し。

バトルの描写が手抜きであっさりとやられているのは、大して重要な話ではないんだという言い訳をさせて頂きたいと思います。

最後に少しふざけ要素を入れてみたのは、「たかが一日でそんなに愛おしく思わないだろう。別れが適当だろう」という判断の元、崩してみようと思いきやそうしました。

それでは次はテイルについて。

テイルのあのバトルの場面。テイル繋がりという事で、リヒャルト・シュトラウス作曲の交響詩、『テイル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』を聞きながら読んで頂くと面白いかと……というのは嘘です。

何を言いたいかと言うと、実はテイルという名前はここからも来ていましたという事です。もちろん題名を見てそう思っただけで、本物のテイル・オイレンシュピーゲルは伝説の奇人なので、全く関係はありませトリックスターん。

本当は『ミテイオール』から取っているのでテイオという候補もあ

りましたが、これではある漫画のキャラと被っているので止めました。マ・セシ——“かえんほうしゃ”

最後に。諸事情により更新頻度が低下するかもしれないので、ご了承ください。

それではまた次回。

第十一話 マイペースな子猫さんとお花畑で捕まえて

リーブフタウンを後にした四人は、クインに教えてもらった町に向かって歩き続けていた。今まで町ばかりを見ていて気づかなかった外の風景を改めて目にする。

昨日とは打って変わり、今日の天候は曇天。団塊状に、そして層状に白い雲が全天を覆い尽くしている。一般に層積雲と呼ばれる物であり、その一つ一つがメリープの体毛のようにふわふわしている。

足元に広がる緑色の絨毯を吹き抜ける風も、暖かかったり涼しかったりと中途半端ではあるが、少なくとも直射日光に曝さらされながら歩くよりは良かった。つまりは、外を歩くのに適した天候である。

「今日は何か風が強いね」

全身に当たる風が気持ちいいのか、ティルは背中の羽衣を大きく広げて宙に浮かんでいる。

そんなティルとは対を成すように、レイルは無言で三人の後を付いてくるだけだった。アルムには少し不気味にさえ感じられた。

「ねえ、ヴァロー。本当に良かったのかな？」

「ん？ 何がだ？」

歩みを少し遅くしてぽつりと呟くアルム。ヴァローが聞き返して一呼吸を置いた後で、少し戸惑いながら口を開いた。

「……レイルと一緒に旅をする事。あの時は目的地が一緒だから良
いって言ったし、その言葉に嘘は無かったよ。でも、僕達まだレイ
ルの事を何にも知らないし、もし進化して僕達を襲ってきたらって
考えると……」

今抱えている——いや、抱き始めた不安をアルムは打ち明けた。

アルムもレイルが嫌いなのではなく、寧ろ気になる存在ではある
と思っている。

それでもやはり、感情が無いなどと言われると、初めての体験だ
からどう接していいのか分からないのである。

「なーんだ。そんな事か。深刻そうな顔をしてるから、何を言い出
すかと思えば……」

「そんな事って言わないでよ……。僕だって色々分からないからそ
う思っただけで……」

ヴァローなら理解してくれる。そう思っていたのに、自分が不安
に思っている事を“そんな事”と軽く流されてしまい、アルムは悄
気^{よげ}てしまう。

少し軽く言い過ぎたかと思い、アルムの肩を軽く叩きながらヴァ
ローは続ける。

「そんな事って言ったのは悪かったよ。でもさ、それはこれから旅
をしていく中で互いに分かるようになるんじゃないか？ それに、
感情が無いとは言え、記憶されない訳じゃないんだ。無駄な事があ
るはずないだろ。さっき戦っていた時、レイルがお前を庇ったって
いうのも、何かあいつの中に芽生えたからじゃないのか？」

「うん。でも、進化したら記憶が無くなっちゃうなんて事もありえなくはないでしょ？ レイルの進化が一体どんなものか分からないし……。それに、主を守るようプログラムされてるから、僕を庇ってくれたのかもしれないよ？」

アルムの反対意見を聞いて小さく溜め息を吐くヴァロー。こちらで一呼吸置いた後、見ていて気が落ち着くような、そんな柔和な顔を見せて再び話し出す。

「そんな時はそんな時だ。それに、クインさんがそう望んだんだ。絶対に良い方に傾くって。分からない事を心配したって仕方ないだろう？ 庇った件については本人に聞かないと分からないが……。とにかく、余計な心配するくらいなら、もっとレイルと仲良く付き合う方法とかを考えよう。な？」

一つ一つ自分が悩んでいた事を打ち消してくれるヴァローの言葉で、さっきまでの不安は少しずつ薄れていった。もちろん消えた訳ではないが、重く心にのしかかっていたものが無くなり、気が楽になっていくのをアルムは感じた。

「そうだね。無駄な事なんて無い。僕の方から逃げてちゃいけないよね」

「ああ。もっと前向きに考えないとな！」

明るくそう言うと、ヴァローはアルムの背中を力強く押した。もつと元気に楽しく旅をしていこうという思いを込めたものである。

一方で、一瞬驚いたアルムだったが、すぐにヴァローの意思を汲

み取り、振り返って明るく笑ってみせた。こちらは感謝の意味を込めて。

「何かアルム嬉しそうだねー。どうかしたのー？」

先に進んでいたテイルが引き返してきて、顔を覗き込みながら聞いてくる。アルムは「何でもないよ」と言って、笑顔を見せながら先を歩き出すのであった。

後ろを振り返ってもリーフタウンが見えなくなるまで歩いた頃、今まで緑一色だった足元にも変化が見られ始めた。

赤や黄、ピンクや白など、色鮮やかで丈の長い様々な花が咲き乱れている花畑が目の前には広がっている。

レインボービレッジにも花は生えていたが、ここまで多くの花は見た事がなく、アルムとヴァローはその美しい光景に魅入っていた。

「わー！ 綺麗だねー！」

テイルは目を輝かせながら、ピンクの花が広がっている花畑の中を掻き分けて飛んでいく。初めて見るからだろうか、興味津々といったようで、一つ一つ香りを嗅ぎながらゆっくりと花を観賞している。

「アルム達もはやく〜!」

大分奥まで進んだ所で止まり、手招きをするティル。やれやれといった感じでアルムとヴァローも花畑の中を駆けていく。

周りを全て花に囲まれて、アルムも幸せな気分になる。花が好きなアルムは、暖かい風に乗って流れてくる仄かに香る甘い匂いに心が踊っており、足取りも軽やかに歩いていた。そう、途中までは。

「花がいっぱいあって綺麗だなあ……。こんな綺麗なところ——あたっ!」

よそ見をしながら歩いていた為か、アルムは目の前の障害物に気づかずにぶつかってしまふ。

「いたた……。あっ、ごめんなさい!」

倒れた状態から起き上がると、そこにいたのはほぼ全身がピンク色の毛で覆われている猫のようなポケモン、エネコだった。アルムは直ぐさま頭を下げて謝る。

「うん? 別にいいでし。私がここで寝てたのが悪いんでし。それより、あなた達は誰でしか?」

「あっ……。うん。僕はアルム。こっちのガーディがヴァローで、あそこで^{はしゃ}ほいでいるジラーチがティル。そして、花畑に入らずに一人であそこにいるポリゴンはレイルって言うんだ」

ぶつかった事をさほど気にしていない様子のエネコは、アルム達の名前を尋ねる。ひとまずほっとしたアルムは、自分を除いて一人

一人種族名を言いながら紹介する。

「アルムにヴァロー、よろしくでし。私はペケ猫……じゃなくて、エネコのシャトンでし。変な名前でし……？」

「いや、名前は別に変じゃないよ。語尾の方が少し変わってるかな……？」

特徴的な喋り方で独特な空気を作り出しているエネコのシャトンに、アルムも少し戸惑い気味に返す。ヴァローの方を一瞥すると、こちらも対応に困っているようで、口を一文字にして黙っている。

「そうでしか？　　そういえば、あなた達は旅してるんでしか？」

「えっ……！　　うん……まあね。ね、ヴァロー？」

急に話題を変えられた事に驚きながらも、何とかアルムは取り直して対応する。そのまま助け舟を求めて再びヴァローの方を見るが、今度は完全に顔を逸らしていた。無視を決め込んだのだと分かり、諦めてシャトンの方に向き直ると、何故かニコニコと笑っている。

「じゃあ、私達の町にも来て欲しいでし！　　付いてくるでし！」

軽快に跳びはねながら、先が楕円形になっている尻尾を二人を誘うように動かしてシャトンはその場を離れていく。

その動きに真っ先に誘われたのはテイル。逆猫じゃらし状態でシャトンの後を追いかけていく。

「しゃーない。後を追いかけるか！」

「うん……って、さっき助けを求めたのに、喋ってくれなかったでしょ！」

「悪い。ああいうタイプはお前の方が得意かなって思ってたさ。ほら、行くぞ」

今更になって口を開いた事にアルムは頬を膨らませて怒っている事を示す。苦笑いを浮かべるヴァローは、アルムの頭を撫でて宥めながら言い訳を述べて、二人の後を追いかけて走り出した。

言い訳に飽きながらも、とりあえずヴァローの事は置いておく事にするアルム。後ろからちゃんとレイルが付いてきているのを確認しながら、マイペースなエネコ、シャトンの後を追いかけるのであった。

第十一話 マイペースな子猫さんとお花畑で捕まえて（後書き）

すぐにあれこれと悩んで、不安を抱えてしまうアルム。冷静なルーンとは違うけど、そんなアルムをしつかりと支える、頼れる親友のヴァロー。そんな二人を、この話で上手く描けてれば良いなと思います。アルムは悩みやすい性格故、こういうシーンはこれからも増えていくと思いますが……。

そして、新キャラのエネコのシャトン。フランス語で子猫という意味です。随分と変なキャラを思い付くもんですよねーと自分で思います。別に重要なキャラではないんですけど……。

因みに、語尾が「でし」になってるのは、シェイミの真似をしている訳ではありません。書き終わってから気づきました（笑）

あと、タイトルのくお花畑で捕まえてくの部分は、別に“ライ麦畑で捕まえて”を意識している訳ではありませんので。

第十二話 花の咲き乱れる村へ強引な猫さんの家へ

「にゃは、こっちでしゅ！」

「二人とも待ってよ」

軽快なリズムを刻みながら花畑を走り抜けていくシャトンを追いかけるアルム達。それほど速く走っている訳ではないものの、一向にペースが乱れないので、ひたすら追いかけるだけであった。

一方で、シャトンの尻尾に興味津々のティルは、未だに猫のように尻尾を追いかけている。飛んでいるので、疲れている様子などはないが。

「ねえ、ヴァロー。シャトンが向かっている町って何処だろう？」

「さあな。どうせ急ぐ訳でもないんだし、別に寄り道もいいんじゃないか？」

何を呑気な事をーと言いたかったが、ティルがああなってはどうしようもないのは分かっていたし、元々はこの世界を見て回るのが目的だった事を思い出し、ヴァローの意見に同意する事にした。

そんなやり取りが交わされている間に、歩いている道が徐々に変化し始めた。開けた平野からは一変、でこぼこした丘陵地帯になっている。今まで地上を覆い尽くしていた花たちも、まるで道を譲るかのように脇に避け、一本の長い曲がりくねった道を作り出している。

道の続く先に目を遣ると、多くの家が軒を連ねている集落が見えた。いや、家と言うと少しばかり語弊があるかもしれない。

一面に広がる色とりどりの花畑の上に、草や木で出来た、家にもテントにも見える建物が立ち並んでいる。リーブファウンとは違い、自然と一体となっているのがこの町の特徴のようである。しかし、町と言うには些か小さいようにも見える。

そんな町の入口らしき木製の門の前まで来た時、シャトンは立ち止まった。どうやら二人を待っていてくれているらしい。

「ここが私の住んでいる町、ブルーメビレッジでし！」

「ビレッジって……町じゃなくて村じゃない？」

澆刺はつらつとした紹介に対し、アルムは一応つつこんでみる。ふと視線を逸らしたところにあった古びた木製の看板にも、“ブルーメビレッジ 花の咲き乱れる村”と書かれている。

「んー、町は町でし。それじゃ、ついて来るでし！」

間違いだとは微塵も思っていないその発言には、さすがに何も言えなかった二人。とりあえずは黙って後を付いていく事にするのだった。

「ここです。ここが私の家なんです」

シャトンが立ち止まったのは、村の中央部辺りにある一軒の家。木製の柱で骨組みが形成されている上に、その周りにはほとんどが若草で覆われており、屋根の部分には赤い花が散りばめられている。

「ささ、どうぞ入ってでし」

「どうぞ入るよ」

訳の分からないティルの受け答えは無視する事にして、屋根から垂れ下がっている草の簾すだれを通して家の中に入ってしまった。

中は意外と広々としており、ちょっとした隙間から心地好い暖かい風が吹き抜ける。床一面に敷き詰められた草は突き刺すような刺々しさもなく、踏み締めても何ら不快感は感じなかった。

「好きなところに座って下さいでし」

尻尾で円を描いて、“その辺り”を指すようなジェスチャーをしたシャトンは、四人をその場に残して外へと出てしまった。

「座って下さいって言われてもな……」

まだ何も知らない村の他人の家に残り残される形になり、皆の意見を代弁するかのようにヴァローがぼつりと呟く。しかし、既にいる住人に文句を言っても仕方がないので、おとなしく座る事にする。

それからしばらく沈黙が流れた。特に話題もなく、ただひたすらシャトンが戻ってくるのを待つだけ。そんな手持ち無沙汰で黙ってぼーっとしていると、リーブフタウンの時とはまた違う落ち着きを感じた。

リーブフタウンでの暖かさが他のポケモンとの出逢いならば、こちらは自然の暖かさと言える。

隙間から吹いてくるそよ風に乗って流れ込んでくる、花の仄かに甘い香り。耳を澄ましてみると、静かに草花が優しく揺れており、安らぎを与えてくれる音が聞こえてきた。

そんな仄々した空気に浸っていたのもつかの間。入口の簾から一人の、シャトンではないポケモンが入ってきた。

全身の色と同じく紺色の短い右耳とはまるで異なる、赤く大きな左耳。三本の羽のような形状の赤い尻尾。両手の鉤爪と同様に鋭い眼光を持つニユーラである。

「何だお前達……人の家に勝手に上がり込んで……」

鉤爪を素早く振って警戒体勢を取るニユーラ。それにヴァローはいち早く反応して立ち上がり、低い姿勢からニユーラを凝視する。

「勝手につて……こっちだって訳が分からないんです。シャトンつて言うエネコにここまで誘われたんですけど……」

二人の間に入って、アルムは事情を説明する。この勢いのまま戦

いなんか始められては敵わないと思ったというのもあった。

「シャトンを知ってるのか……。そんな事を言って、本当は何か別の目的があるんじゃないのか？」

アルムの言葉を信じていないらしく、ニューラは未だに四人に対して鋭い鉤爪を向けている。確かにあちらからすれば、見ず知らずのポケモン達が自分の家に入り込んでいる事になるので、警戒するのも無理はない。

その返事を受けて戦いになる事を覚悟した上で、ヴァローも炎を口の中に溜め始める。

「えっと……こ、ここは話し合いで解決つてのはどうですか？」

何とか二人を鎮めようと奮闘するアルムだったが、もはや一触即発の状態で説得する事は不可能だった。

今さらながら他の二人を一瞥してみると、レイルは黙って様子を見守っているだけ。テイルに至っては、ここに来るまでで疲れたのか、すやすやと寝息を立てて眠っていた。

どちらを止めたら収まるのかと、アルムが両者を交互に見ながらオロオロしていたその時。この状況に陥れた張本人のシャトンが簾を通して戻ってきた。

「あ、お兄ちゃん。帰ってたんでしね！」

「シャトンか。お前がこいつらを招いたって本当か？」

シャトンが帰ってきた事で、互いに臨戦体勢は解かれる事になり、アルムもほっと一息吐く。一方のニューラは、爪で雑に四人を指差しながらシャトンにそう尋ねた。

「本当でし。祭に参加して欲しいって思ったんでし！」

「そっか。お前がそう決めたんなら仕方ないな。という訳でお前ら。さっきの事は許してやるよ」

上から目線の物言いですら吐き捨てるように言葉を残すと、ニューラは簾を右手で掻き分けながらすたすたと外へと出てしまった。

「……ねえ、シャトン。さっきの言葉遣いの素敵なお兄さんは？」

「うん！ シャトンのお兄ちゃん、ガートって言うんでし！」

こちらに一応非がある事は承知していながらも、流石にあの言い草には少しカチンときたようで、皮肉を込めながら正体を問うアルム。そんなアルムの思いなど知らずに、シャトンは笑顔で答えた。

そのシャトンの背後から、そっと姿を現したポケモンがいた。頭部に白い斑点模様のある巨大な赤い花びらを持つポケモン、ラフレシアである。

「シャトンてば速いんだから……。あら、お客さん？」

「うん。私が連れて来たんでし。アルムにヴァロー、テイルにレイルって名前なんでしー！」

「あ、どうも。お邪魔してます」

シャトンに先に紹介をされた事もあったか、簡単に頭を下げるアルムとヴァロー。それに呼応して、ラフレシアも軽く会釈して家の中に入ってきた。

「私はこの子の母親のラックと言います。この子が強引にここまで連れて来たんでしょう？」

「ええ、まあ……」

ラフレシアのラックの事情を把握しているような発言に、ヴァローも苦笑いをしながらそう返した。

「やっぱり……。せっかくですので、夜から始まる収穫感謝祭を楽しんでいて下さいね。今は準備中ですけど、そちらも見ますか？」

頭に比べるととても小さいその手で口元を押さえてクスリと笑いながら、ラックは優しく問い掛けてきた。

「この村をもっと見て回りたいから俺は見たいけど、アルムはどうだ？」

「そうだね。お祭りに参加させてもらえるなら、下見もしておきたいもんね」

「分かりました。それでは私に付いてきて下さい」

何処か上品さを漂わせる笑顔を浮かべた後、ラックは先導するように家から出ていき、ヴァローとシャトンも後を付いていく。

「ねえ、ティル。僕たちは祭の準備してるところ行くんだけど、ティルも行く？」

まだ眠っているティルを起こそうと、体を揺らしながらアルムはとりあえず聞いてみる。

「うーん。行きたいけどまだ眠いの」

寝心地が良いのか、頬を草の床に擦り付けながら、ゆったりとしたいかにも眠そう声で答えるティル。このまま寝かせておいてあげても別にいいのだが、一人にしておいては何を仕出かさか分からないと危惧したアルムは、何かを思い付いたように口を開く。

「それじゃ……僕は先に行くけど、それでもいい？」

「やだ。置いていかないで！ ボクも行く」

アルムが離れて先に行くと思った途端、ティルは勢い良く飛び起きて、強くしがみついた。

思惑通りにいってしめたと言わんばかりに小さく笑ってみせると、アルムはティルに抱き着かれながらレイルを連れて、ずるずると重そうに歩いて三人の後を追うのだった。

第十二話 花の咲き乱れる村へ〜強引な猫さんの家〜（後書き）

二週間ぶりの更新の割に随分とふざけた内容とタイトルですいません；

そして、一度出て来た「収穫感謝祭」で分かる方には分かりますが、本当はこの話、ハロウインを意識したものだったんです。

しかし、ダラダラと執筆する内に一週間が過ぎてしまい、時季外れとなってしまう。ともあれ、あくまでハロウインを意識しているだけなので、気にせずに続けていきたいと思います。次こそは早い更新を目指します……！

それでは、出て来た名前の由来を簡単に。

ニューラのガートですが、これはポルトガル語で「猫」という意味です。兄妹ともに訳せば猫になるという事です。

ラフレッシュのラック、これはフィリピン語で「花」を意味する“blacklak”（ブラックラック）の後ろ三文字を取ったものです。決して英語で「不足」という意味の“lack”でも、「幸運」という意味の“luck”でもありません。

次回からはおそらく祭に参加する事になりそうです。今話で「あれっ？」と疑問に思う事もあったでしょうが、それも次回明らかになると思います。……何かここまで見てるとただののんびり旅になっていますが、これで果たしていいのやらですね。

話も後書きもキリが良くないですが、今回はこの辺で。

第十三話 祭り直前の散策く神聖なるガーデンへく

シャトンの家に来るまではほとんど気づかなかったが、辺りには多くのポケモンが忙^{せわ}しなく動き回っていた。

自分の家に綺麗な装飾を施しているポケモン、何やら荷物を運び込んでいるポケモンと、皆自分の事で必死になっているようである。それでも、祭りを楽しみにしているような笑顔を浮かべて動いている。

「ラックさん、祭りって一体どんな事が行われるんですか？」

自分の故郷ではこれ程までに規模の大きな祭りが無かった為、色んな方向に目移りさせながらアルムは尋ねる。その目はティールと同じくらい、キラキラと輝いていた。

「ふふっ……それは始まってからのお楽しみですよ」

「わーい！ 楽しみ楽しみ〜！」

既にこの雰囲気が入ったのか、あちこち飛び回っているティール。出逢うポケモン全員に笑顔を振り撒いて挨拶をしながら、後ろにしっかりと付いてきている。別の意味で、他に何も興味を示さずにレイルも付いてきてはいた。

ヴァローはというと、キョロキョロと辺りの様子を見て、必死に祭りの内容を推測しようと考え込んでいた。そのヴァローを横からシャトンが覗き込んでいたが、我関せずといった感じである。

そんなバラバラな心境で付いてくる五人をラックが誘ったのは、何もなかったの広場だった。いや、一つ周りとの違いを挙げるならば、そこは花ではなく若草に覆われている。

「ここで祭りが行われるんですか？」

「祭りは村全体で行われますよ。ここでは、一番大きなイベントが行われるんです」

「大きなイベント……？」

ラックの説明を聞き、頭に疑問符を浮かべるアルム。その内容が気になるというのもあったが、それ以上に、大きいと言う割には他のところのように準備らしい事がされてなかった事が不思議に思っていたのである。

「まあ……それはすぐに分かりますよ。それでは私は一旦家に帰りますね。準備をしなければならないもので。皆さんも祭りが始まるまでには家に帰ってきて下さいね」

ラックは軽く会釈して後ろを振り向くと、家の方向へと歩いていた。

「ボクはもう少し見て回りたいな」

「うん、そうだね。まだ日が暮れるまで時間があるから、ゆっくり

見て回ろう」

ラックがいなくなった後で、テイルが最初にそう切り出した。アルムもそれに賛同し、ヴァローも同じく頷く。

「それじゃ、シャトンは――」

シャトンの意見も聞くべく、振り向いたアルム。しかし、さっきまでいたはずのシャトンの姿はそこには無かった。そう、そこ（・・）には。

「みんなー。こっちにもすごいところがあるでしょー！」

声のする方に一斉に振り向くと、草木の生い茂る森の手前辺りで、シャトンが四人を誘うかのように尻尾を振っている。

「案内してくれるようだから、シャトンに付いていくか」

「うん、テイルは早速行っちゃったみたいだね……」

シャトンの尻尾に一直線に飛んでいくテイルを見つめて苦笑を浮かべながら、アルムとヴァローも後を追いかけるのだった。

一行が進む道は先程まで歩いていた場所とは違い、足元に広がる植物たちは背が高く、若草から深緑の色を呈していた。掻き分けながら進むのは大変であったが、探険をしてるみたいで楽しくもあった。

歩き疲れもそろそろ出始めた頃に、その目的地らしきところに着いた。

村の中や周りに咲いている花とは少しばかり違う、淡いピンク色の花が咲き乱れている。流れてくる香りもただ甘いだけではなく、何か心を穏やかにしてくれるような、澄み渡らせてくれるような感じがあった。それは上手く言葉では言い表せない、特別な何かであるとアルムも直感的に思った。

その花畑の中央には、どっしりと構えるように立っている一本の大木がある。周りに細々と立っている木とは比べものにならない程太く、まるでずっと昔からそこにあるかのように、広範囲に渡ってその根を張り巡らせている。

しかし、生命力が衰えている様子は一切なく、寧ろ青々とした葉っぱを付けて生き生きとしている。それは、何処か神聖な感じさえも漂わせている。

「わあ……ここにいと、何かすごく気持ちが良いね……」

「そうだな。他のところとはまた違う安らぎを得られるような……」

アルムとヴァローは、順に率直な感想を述べる。素直に感動出来る程に美しい植物たちに、思わず見惚^{みと}れてしまうばかりであった。

「ここはどうですか？」

突然目の前に現れて、顔を覗き込んできたシャトン。二人がこの場所を気に入った事が分かり、嬉しそうにニコニコしている。

「うん、咲いてる花がとても綺麗で良いところだね。この場所に名前とかつてあるの？」

「うーん……感謝祭と関係のある花が咲いてる、何とかガーデンって言ってたような……あんまりこの町の事詳しくないから、わからないでし！」

アルムの質問に対し曖昧な答えを返したシャトンは、ここまでの案内が目的だったのか、軽くスキップしながらその場を離れていつてしまった。

「あれれ？　どうしたんだろうねー？」

「さあ……それにしても、さっきの言葉、何か少し変だったな」

首を大きく傾げて、疑問に思っている事を体全体で表現するティルを見ながら、ヴァローは静かに先程の発言を思い返して呟く。

「また村じゃなくて、町って言ってたところ？」

「それもあるけど……まあ、俺の気のせいかもしれないから別にいいさ……」

ティルは言わずもがな、アルムも別段違和感を感じなかったらしく、このまま続けても無意味だと思ったヴァローは閉口したまま大木の方へと向かって歩いていく。アルムとティルも互いに顔を見合わせて首を傾げ、その後についていく。

木の真下に来たところで、一向は立ち止まった。

上の方を見遣ると、方々に伸びる枝やその枝に付いている木の葉が、弱いながらも降り注ぐ日光から四人を守るように陰を作り出していた。

その隙間から僅かに姿を覗かせる太陽も、薄い雲に隠れているせいか、この場所をかんかんに照り付ける事はない。寧ろ、この場所全体に木漏れ日が降り注いでいるようで、神聖さをより一層醸し出している。

いつもはあまり興味を示す事のないレイルまでもが、この場に溢れている生命のエネルギーを感じているようだった。とは言え、目をあちこちに動かしている程度のものであるが。

そういえばこの村に来るまでも来てからも、歩いてばかりだ――アルムはそう思いながら、地面に横たわって休む事にする。それを真似するかのように、寄り添うにしてヴァローとティルも横になるのであった。

心地好い風が頬を撫でるのを感じながら目を閉じて時を過ごす内に、いつの間にか日が暮れ始めていた。

寒いとまでは言わないものの、暖かい日光が昼間程に届いていない事もあって気温が下がっており、少し身震いする形でアルムは起き上がる。つまるところ、ぐっすりと眠っていたのである。

「あっ……いつの間にか寝てたんだ……。ティル、ヴァロー、起き

て。そろそろ戻らないと」

一番最初に目覚めたのはアルムらしく、二人を揺すって起こそうとする。ややあって、ヴァローが先に起きた後にしばらく待ったが、ティルはすっかり熟睡しているようだった。その後何度も揺すって、ようやく起きてくれた。

まだ眠い目を擦っているティルを、迷子にならないようにしっかりと誘導しながら、四人はシャトンたちの家へと戻っていくのだった。これから待ち受けるイベントに心踊らせながら――。

第十三話 祭り直前の散策く神聖なるガーデンへく（後書き）

時間掛かった割に、まだ祭り始まらんのかい！ とかいうつつこみはご遠慮下さい。メインイベントよりも繋ぎの方が大変なのです。もちろん、次回こそは祭りが始まるので、それなりに楽しみにしてして下さい。今度は早めに書き上げるつもりです。

それ以前に、何やらぐだぐだとした鬱陶しいまでの描写が目立つ今回の話。読んでて面倒ではなかったですかね？ そうでない事を祈ります……；

さて、いきなり変な繋ぎの話に突入したために、すごく不自然になっている展開。察しの良い方は何かに気づいたのではないかと思えます。それが明かされるのは次回か、はたまたまだ先になるのか。それは読んでのお楽しみという事で。

それではまた次回お会いしましょう。

第十四話 収穫感謝祭の始まり〜三感で楽しむイベント〜

今まで空をほとんど覆い尽くしていた薄い雲も、いつの間にかほとんどが消え去っていた。落陽により赤く染まっていた村は、全体的に影が伸びていき、鮮やかなドレスから一転、漆黒のマントをその身に纏い始める。まだ宵の口と言ったところであろう。

そんな景色が急激に変わる時間帯になった頃に、アルム達はラックの家に戻ってきた。中に入ると、シャトンもちやつかりそこにいる。

「そろそろ時間ですね……。それでは、広場の方に参加しましょうか」

戻ってきて早々だが、今から始まるのならゆっくりしている訳にもいかず、アルム達はラックの後を付いていく。

昼間にも立ち寄った広場には、既に多くのポケモンが集まっていた。この祭りはこの辺でも有名らしく、祭りに参加する為に村外から訪れたポケモンの姿も見受けられる。

準備をしていた昼間とは異なり、辺りは風が吹くこともなく、静寂な空気が村全体に漂っている。ポケモン達がざわつく声も聞こえるが、それを考えても静かである。まるで、植物達も今から始まるうとしているイベントを心待ちにしているかのようである。

「それでは只今より、感謝祭の開催を宣言する！」

村が更に暗くなり始めた頃、広場中に響き渡るような大きな声を発した一人のポケモンがいた。背中に巨大な花を咲かせており、花の周りには同じく大きな葉っぱがついている。体の表面には緑色のイボがたくさんあり、四本の太い足でしっかりと地面を踏み締めている。そんなどっしりとした体格のこのポケモンの種族名は、フシギバナである。

「まずは恒例の儀式と行こう。前半は、チーム・グリロンだ」

あるチームの名が紹介されると、全員がぞろぞろと動き、広場の中央に空間^{スペース}を作り始める。

大きく円状に空間が取れたところで、その中央に向かって数人のポケモンが歩いていく。

ナイフのような両腕を持つコロトック、ストローのように細長い口とカラフルな模様の羽が特徴のアゲハント、蛍のような外見で、体色が薄紫色のイルミーゼと、同じく蛍のようで体色が赤いバルビートが四人である。これから何が始まるのかとアルム達も息を呑んで見守る中、最初に動きを見せたのはコロトックである。

その細く鋭い腕を擦り合わせ、弦楽器のような音を奏で始めた。摩擦による空気の振動によって発せられる高いこの音は、こおろぎポケモンであるコロトックの一番の特徴でもある。

冷たくなり始めた空気を伝わって繊細な高い音が響く中、イルミーゼとバルビート達が一齐に空中に飛び立った。

イルミーゼが先頭になって飛び回り、バルビート達がその後ろを

付いていく形になる。そして、ある程度の高度まで達したところまで一同はぴたっと止まった。

それと同時に、イルミーゼは右手を前に出して、コロトツクの奏でる音楽に合わせるように指揮のような動きを始めた。バルビート達は、その動きに合わせて規則的に飛び回り始める。

そのお尻の部分は、“ほたるび”によりぼんやりと淡い光を放っており、空に浮かぶ四つの光の球が何とも幻想的な空間を作り出している。

そうして他の仲間達がそれぞれ役割を始めたのを見計らって、アゲハントは最後に地上を飛び立った。

イルミーゼ達よりも高い場所まで飛び上がり、斜め下を向いて、赤・青・茶・黄の四色の鮮やかな羽を大きく広げる。

一呼吸を置いた後、一回、また一回とその羽を羽ばたかせていく。その速度が速くなるにつれて風が強くなっていき、その中に鈍く光を放つ銀色の粒子が混ざり始める。

この美しい粒子の流れ――“ぎんいろのかぜ”は、そのままバルビート達を包み込んだ。それでダメージを受けている様子は一切なく、“ほたるび”の淡い光を更に控えめにして、一層美しいものになっている。

それだけでなく、その風は微かに“あまいかおり”を含んでいた。イルミーゼが指揮の真似をしながら発しているのが、一緒に流れているのである。その“あまいかおり”で、上手くバルビート達を動かしているのであろう。

そうして、舞台で個性を上手く活かしてパフォーマンスを続ける虫ポケモン達。演技もフィナーレに入ってきたのか、コロトツクの音楽もペースが速くなっていく。

それに呼応して、バルビート達はラストスパートと言わんばかりに素早く動き出す。そして、コロトツクの音楽が止んだ時、バルビート達は一斉に空に向かって、赤色と紫色に点滅する光線――“シグナルビーム”を放った。

四本がちゃんと交わるように計算されて放たれた光線は、思惑通りに一点でぶつかり合い、二色の綺麗な光の粒となって降ってくる。

それをアゲハントが真下で待ち構え、自身が回転しながら“ふきとばし”で粒子を全方向へと飛ばす。それは数秒足らずで消えてしまったものの、薄暗い辺りをほんの少しの間明るく照らすものとなった。

これで全てを終えたらしく、アゲハント達は地上に降り立って、小さくお辞儀をした。その瞬間に、その場にいる全員が盛大な拍手を送る。もちろん、アルム達も例外ではなかった。

「すごい……これがこの村の祭りなんだ……」

「確かにすごいな。五感の内の三つで楽しめるイベント、か……」

アルムもヴァローも、今まで見たことのない光景に、ただ見入るばかりであった。いつもはあちこちと動き回るテイルでさえも、食い入るように見ていた程である。

「チーム・グリロンの諸君、ご苦勞であった。それでは後半、チー

ム・ハーブだ」

フシギバナによって、間髪入れずに次のチームが紹介される。中央に登場したのは、頭に二輪の赤い花を付けているフラワーポケモンのキレイハナ、紫色の蕾の姿つぼみをしているチェリム、右手には赤バラ、左手には青バラのあるロゼリア、そして、いつの間にかいなくなっていたラックである。

「あつ……ラックさん！」

最初に気づいたアルムがそう叫ぶと、ラックは小さく微笑みながら手を振り、所定の位置に着いた。

先までのパフォーマンスでざわめいていた観衆も、チーム・ハーブが出て来て、徐々に静かになっていった。

全員が静まり返ったところで、キレイハナが一人、明るい笑顔を振り撒きながら踊り始めた。

それが開始の合図らしく、続けてロゼリアが地面に落ちている新緑の葉っぱを一枚拾い上げる。それをそのまま口元に当てると、そとと“くさぶえ”を吹き出した。

繊細で優しい音色が響き渡り、聞いている者の心を穏やかにさせる。その音に色が付いている訳ではないのだが、この空間は柔らかな若草色に染まっているようにアルムには思えた。

そんな中、暗くなりつつあるはずの景色が、僅かながら明るくなった。上空を見上げてみると、薄い雲に隠れていた月が、いつの間にかその美しい姿を全て見せていた。雲が晴れたところを見ると、

キレイハナのあの踊りは“にほんばれ”であったのである。

ステージが明るくなるのと同時に、今までじっとしていたチェリムに変化が現れる。

今まで体を覆うように閉じていた紫色の蕾がゆつくりと開いていき、徐々に別の姿――“ポジフォルム”になっていった。五枚の桜の花びらと、額に付いている、さくらんぼを思わせる髪飾りのような二つの玉が特徴である。

先刻までの暗いイメージとは違い、ニコニコ笑いながら跳びはねて踊り始める。それに反応を見せたのは、先程まで踊っていたキレイハナ。元々の動きに回転を加えたりしながら、チェリムと息を合わせて軽快に舞い始めた。そんな二人の可愛らしいながらも迫力を感じさせるような舞に、周りのポケモンも魅了されている。

しかし、舞はそれだけでは終わらない。踊り始めてから数十秒が経った頃、突如無数の桜色の花びらが宙に舞っていった。

“はなびらのまい”によって打ち上げられたその花びら達は、二人の動きに連動するように、時にはひらひらと優雅に、時には素早く舞っている。“くさぶえ”が奏でる軽やかな曲調にも、上手く調和した舞が続く。

そんな中、ラックは一人微動だにせず、天を仰いで手を合わせている。一体何をしているのだろう、アルムがそう疑問に思った時、その答えはすぐに出た。

“にほんばれ”の状態とは言え、暗い事には変わりはない舞台。その頭上で、太陽に比べると頼りなげな光を放つ月。その月が一瞬強

い光を放ったかと思うと、辺りに淡く柔らかな光が降り注ぐ。

昼間に太陽が見せるそれとは違い、優しく暖かい光。準備で疲れていた体だけではなく、心まで包み込んで、癒してくれるようである。

曲も終盤に差し掛かると、テンポが早くなっていき、それに合わせて舞も速くなっていく。曲のフィニッシュに向けて、宙の花びらも渦巻きながら空高く舞っていった。

そして再び曲調がなだらか（カンタービレ）に戻って曲が終わると、二人同時に、それぞれポーズを決めて舞い終える。同時に、激しく渦巻いていた花びらの動きも止まり、ゆらゆらと粉雪のように静かに舞い散っていった。

「わー、すごい綺麗だったね！」

観衆が拍手喝采を送る中、二組のパフォーマンスに感動したティルは楽しさを目一杯表現するかのように飛び回っている。

「二組とも、素晴らしい演技をありがとう。それでは皆のもの、これで感謝の儀式は終わりだが、祭りは始まったばかり。存分に楽しもう！」

フシギバナの言葉を皮切りに、観衆のボルテージはさらに上昇していく。そう、まだ祭りは始まったばかりである――。

第十四話 収穫感謝祭の始まり〜三感で楽しむイベント〜（後書き）

最近更新頻度ががたがたですね……。次からはなるべく定期更新ができるように努力したいと思います。

さて、今回の話ですが……書き終えて思った事は、「何、これ」です。何とも酷い出来で、この話自体必要なのかも危ぶむくらいです（汗）

読んでもらってから言うのも何ですが、この話は無視して頂いても構いません。会話なんか皆無に近かったですし……。

次こそは楽しい話にする……。つもりです。それではまた次回お会いしましょう。

第十五話 祭りの後半へ～お菓子か悪戯か（トリックオアトリート）～

影が全てを覆い尽くしており、静かだった辺りも一変。村全体が徐々に活気づき始める。

黒一色に塗り潰されかけていた空間が、盛り上がるポケモン達の熱気で鮮やかで明るい色で装飾されていく。まさしく、祭りらしくなってきたと言えよう。

村のポケモン達はせっせと用意を始める。先程までステージとなっていた場所で、村で実った木の実や、その木の実で作ったお菓子などが振る舞われている。

そんなお祭りムード一色の中で、アルム達は何をしているかと言うと、先を歩くシャトンの後を付いていていた。

「ねえ、シャトン。どこに行くの？」

「うーん。まずはここでし」

そう言ってシャトンが徐に立ち止まったのは、一軒の家の前。シャトンの家よりはやや小さめで、全体が明るめの赤色の花で装飾されている。

家の入り口に置かれている、来訪を知らせる為の木琴のような物を、その尻尾で軽快に叩き始める。

深みのある音が速いリズムで鳴り響くのを聞き付け、中から一人のキレイハナが顔を出した。どうやら、さっきの演技で“はなびら

のまい”を舞っていたキレイハナらしい。

「お菓子ちょうだいだし。くれないといたずらするでし！」

「えっ……シャトン、何を言ってるの!？」

満面の笑みを浮かべながら突拍子もない事を言い出すシャトンに、アルムは全く訳が分からずに動揺する。

「うふふっ、ちゃんと用意してあるわよ」

一方のキレイハナはと言うと、笑顔を見せながら踵を返し、一つのバスケットを手を下げて再び姿を見せた。

そのバスケットの中には、ピンク色の楕円型の物が入っており、どこかで嗅いだことのあるとても優しく甘い香りを放っている。

「これはなーに？」

見た事がなく興味を惹かれる物を目の前に、ティルは無邪気な声でその正体を尋ねる。

「これはね、この村で昔から親しまれている、木の実を使った伝統的なお菓子なのよ。あなたたちも是非食べてみて。因みに、これはモモンの実で作ったのよ」

それが食べ物だと分かったと、ティルは真っ先に手を伸ばして掴み、大きな口をあけて噛み付いた。それにやや遅れる形で、アルム、ヴァロー、シャトンも一個ずつ貰って一斉に頬張る。

「わぁーっ！　甘くて美味しいー！」

全員の意見を代表するように、ティルが歓喜の声を上げる。アルムとヴァローは少し不思議そうな顔をしながらも、それに同意するように頷く。

「その二人には、違いが分かるようね。そうよ、これは少し焼いているの」

口には出さないで思っていた事をずばり言われ、二人は思わず顔を見合わせた。

口の中に入れた瞬間広がった、仄かに香ばしい香り。二人が感じていた、いつも食べてたモモンの実との違いはそれだったのである。

「ありがとうございます。とても美味しかったです。でも、さっきのやり取りは一体……？」

「あれも祭りの一部なの。子供達が家を訪問して回って、あの言葉を言うの。それでもしお菓子が残っていなかったら、家の主人に悪戯をしても良い事になってるのよ」

「へー。祭りの後半も、十分に楽しめるようになってるんですね」

この祭りの事を改めて教えてもらい、村のポケモンだけでなく、村外のポケモンにも親しまれているのに納得がいったアルム。前半が観て楽しむものならば、後半は自分達が動き回って楽しむといったところである。

「遊び回っても良いの！？　じゃあ行ってきまーす！」

キレイハナの説明でこの祭りの概要を理解したらしく、テイルは一人でふらふらと何処かへ飛んでいってしまった。まさしく自由気儘というのを表したような行動である。

「アルム、良いのか？ あのままほつといて……」

「どうせこの村から出る訳じゃないから、大丈夫だよ」

流石に一人にするのはまずいと心配そうにするヴァローに対し、アルムは至って冷静な態度で返す。そんな折、背後から忍び寄ってアルムの背中をそっと叩く者がいた。

「うん？ 何——」

まさかテイルがすぐに戻ってきたのでは——そう思ったアルムは、ほっと安心したような顔を見せて振り返った。しかし、見事に予想は外れ——

「わぁーっ！ お、オバケっっ！」

振り返ったその瞬間、アルムは絶叫しながら跳び上がって驚き、ヴァローの後ろに隠れた。

そこにいたのはテイルではなく、顔の部分がゴースになっている一人のラフレシアだったのである。組み合わせが悪いとか言う以前に、顔の部分だけ違ってするのは気味が悪いとしか言えない。

「あら……驚かせてしまいましたか？」

くすくすと笑いながらゴースの“お面”を取るラフレシア。声を聞けて素顔が見えたところで、そのラフレシアがラックだとうやうく分かり、アルムは一安心してヴァローの影から顔を出す。

「び、びっくりしましたよ！ ……それにしても、そのお面良く出来てますね。ラックさんが作ったんですか？」

まだびっくりして高鳴っている心臓を鎮めるべく深呼吸をして、アルムはそう尋ねる。

「いいえ。隣町のドーブルさんにいつも描いてもらっているんです」

「ど、ドーブル！？」

もしや自分達が捜しているドーブルなのではないかと思ったアルムとヴァローは、シンクロしてその名前を鸚鵡おうむ返しのように叫んだ。

「ええ。絵を描くのはもちろん、探し物を見つけるのも得意だとか……」

「そ、その隣町って何処ですか！？」

今の言葉で推測が確信に変わり、アルムはさらに質問を続ける。

「えっと……ここから少し東に向かった時にあるラデューシティです」

「そうですか……ありがとうございます」

これで次の目的地も分かり、感謝のお辞儀をするアルム。そのあ

まりの興味の示し方に、一度は理由を聞こうとするラックだったが、何か大事な理由なのだと思って口を噤んだ。

「……そういえば、シャトンとテイルくんはどちらに？」

先程の話題での話も終わり、周りの空気とは正反対に暫し黙り込む。その中で話題を見つけ、口に出すラック。その質問にアルム達一同は疑問符を浮かべる。

「え……？ シャトンならそこに――」

そう言いながらヴァローは前足で左側を指そうと振り向いたが、そこにいるはずのシャトンの姿は既に無かった。

「ちょっと目を離すと、何処へでも行ってしまいますからね」

いなくなるのを心配しているという風でもなく、小さく笑いながらアルム達に報告だけすると、ラックはその場から離れていったのであった。

「……それじゃ、シャトンを捜すか」

「うん、そうだね。シャトンと一緒に楽しみたいもんね」

ラックが去った後で、一旦は静まり返った空気の中、二人はそう提案してシャトンを捜す事にする。

とは言え、闇雲に捜したところで、このポケモンがたくさんいる状況で見つけ出すのは不可能に近い。それも分かった上でどうしようか悩み始めた時、今まで何も動きを見せなかったレイルが、自分に気づいてくれと言わんばかりにアルムの背中を小突き始める。

「うん？ レイル、どうかしたの？」

「はい。シャトンさんらしき生命反応が、村の入り口に向かったのを探知しました」

「ほ、本当に！？ それじゃ行ってみようか！」

相変わらず無機的な声でレイルは告げた。それを聞いたアルムは、懷疑心を抱く事なくレイルの言う事を信じ、ヴァロー達とともにキレイハナの家を後にした。

移動を始めて数分後。村の中心からは離れたという事で、辺りはポケモン達の気配もほとんどなく、何処か閑散としていた。祭りの方とは違い、色取り取りの草花も、全て闇という名の絵の具に塗布されている。

そんな入り口付近では、一人でぽつんと佇むピンク色の猫のようなポケモンが。暗くなっているとは言え、後ろ姿だけでもそれがシャトンという事は一目瞭然だった。

（あれはシャトンだよね……。こんなところで一体どうしたんだろ

う……)

心の中でそのような疑問を抱きながらも、シャトンに声を掛けながら近づこうとしたその時。突然黒い姿の、やや背の高いポケモンが目の前に現れて、アルムの行く手を塞いだ。それは明らかに妨害しようと思図したものである。

「すみません、どいてくれませんか……って、あなたは……！」

お願いをする意味も込めて、その顔を確認する為にふと上を見た時、その正体が分かったアルムは思わず驚いた。その黒いポケモンとは、シャトンの兄であるニューラのガート。その色の濃い紺色の体色もあつてか、暗闇にほとんど溶け込んでいて、近くに行くまで全く気づかなかったのである。

「どうしてシャトンに近づくのを邪魔しようとするんだ？」

ヴァローが一步前に出て、その理由を聞く為にやや威圧的に尋ねる。

「お前達には関係のない事だ。とにかく、今はあいつを一人にしてやってくれ」

ヴァローの質問に対するガートの返事は、それだけだった。しかし、アルム達はそれとは別に気になる事があった。

第一印象が良くなかった事もあつてか、最初の言葉は抱いていた印象と重なり、少しムツと来たのだが、後半の頼むような態度にはやはり何か違和感を感じた。

「あの……シャトンに何かあったんですか？」

「いや、それは何も言えない。ただ一人でそっとしておいてやりた
いだけだ。本当に、お前達には関係ないんだ」

思い切って聞き返してはみるものの、やはりちゃんとした答えは
返ってこなかった。しかし、そのガートの態度からも、シャトンに
何か良からぬ事が起こった事は何となく予想がついた。

それでもまだその理由は分からず、何かもやもやしたままである。
かと言って、ガートの返答が上手く得られない以上は問い詰めたと
ころでどうしようもない。

終いにはこの場の誰もが口を閉じてしまい、風が静かに吹き抜け
る音が聞こえ始める。昼のものと違って冷たい空気を運んでいる風
は、今の四人の状況を的確に表しているようであった。

そんな空気にさすがに耐え切れなくなり、とりあえず諦めて引き
返そうと後ろを振り返ると、そこには先程別れたラックの姿があっ
た。

「やはりここでしたね……。シャトンが何故ここに来たのか疑問に
思っているでしょう。ガートは恐らく教えなかったでしょうから、
代わりに私が教えて差し上げます」

一歩ずつ草を踏み締めて近づきながら、ラックはそう話し掛けて
きた。

「何を言ってるんですか。無関係なこいつらに話す事なんて――」

「シャトンが他の人^{ポケモン}を連れて来る事はあっても、こんなに長い間行動を共にした事は無かったでしょ。この方達とは、何か縁があるのかもしれない。それに、シャトンが連れて来たという時点で、関係ないなんて事はないでしょ？」

是が非でも話したくないのか、必死に止めようとするガートだったが、遂に根負けして俯きながら口を閉じた。その様子を見て、ラックは更に続ける。理由を知りたかった二人にとっては願ってもない事だったが、その続きの言葉はあまりにも耳を疑うものだった。

「それでは話しますね。実は、あの子には両親がいないんです――」

第十五話 祭りの後半へ〜お菓子か悪戯か（トリックオアトリート）〜（後書き）

何故か三週間ぶりの更新となってしまいました。早く書こう早く書くように思いながらも、中々進められなかったのです。今回は描写と呼べるものもほとんどありませんし……。

そして何より、クリスマスも近いというのに、随分と季節ハズレのハロウィーンネタとなってしまうました。どうしても無理なくドールの情報を入れたかったというのもあるので、後悔はしていますけどねw

終わりが尻切れ蜻蛉な感じが否めませんが、とりあえずは次回をお待ち下さいとしか言えませんが……。

それではまた次回にお会いしましょう。

第十六話 語られる三人の関係と賑やかな祭りの閉幕

“両親がいない”。その言葉を聞いた瞬間、二人には全く意味が分からなかった。だって、シャトンにはあなたという母親がいるではないか――と、そう思ったから。

「何か変だと思ってますね？ それでは、私は一体何なのかと……」

二人の心の中を読んだかのように、ラックは何かを言われる前にそう言うと、小さく溜め息を吐いてアルム達の方に更に歩み寄る。

「私はあの子の本当の母親ではありません。里親みたいなものなんです。シャトンは……数年前の祭りのあったちようどこの日に、村の入り口に一人ぼっちで佇んでいました」

一呼吸置いた後、何処か遠い過去を見つめるように天を仰ぎながらラックは続ける。

「私は一度あの子を家まで連れて帰って、事情を尋ねました。でも、何もわからない、と。気づいた時には両親と離れ離れになってたようです。そこで、私があの子を育てようと決心しました。時間が経つ内に両親の事を話さないようになりましたが、毎年この日になると、迎えを待つように入り口にずっと立っているんです」

「……そんな事が……。だから、生みの親ではなく、育ての親としてラックさんを“お母さん”と呼ぶんですね。それじゃ、ガートさんは……?」

必死に隠そうとしてはいるけれど、やはり全てを隠しきれずに哀

しさを滲ませるラック。そんな彼女の説明を聞き終えた後で、アルムは頭の中で話を整理すると、ガートの方を一瞥しながら、続いて浮かんだ疑問を恐る恐る口に出す。

問い掛けられたガートの方と言うと、まだ無愛想に顔を背けて無視している。まだアルム達に心を許したのではないらしい。

「ガートは話したがないようなので、代わりに私が話しますね。先の話でもわかる通り、ガートはシャトンの実の兄ではありません。そして、シャトンと同じく私の子供でもありません」

再びラックの口から告げられた真実。何となくガートのラックに対する態度からも予想はついていたが、いざそうだとわかるとアルムは何故か遣る瀬無い気持ちになった。

「……ラックさん、後は俺が話すからいいです」

一番大事な事実を話したという事で、ガートがアルム達の方に近寄ってきてそう言うのと、話し始める。まだ目を合わせないままではあるが。

「自分で言うのも何だが、俺は昔から人付き合いが苦手だった。村の奴らとの交流なんかほとんど無く、今までたった一人で生きてきた。でもそれは、シャトンに会った時から変わった。最初の内は鬱陶しくて無視していた。大抵の奴はそれで交流を持とうとはしなくなるが、シャトンは違った。いつも冷たくあしらっていたのに、会う度に寧ろ懐いてくれた。そんなシャトンに俺はいつの間にか心を開いていったのかもしれない。今では兄と慕われるくらいに仲良くなっていったんだ……。ま、話せるのはこのくらいだな」

自分の過去を全て話시켰たせいか、柄にもなく恥ずかしげに背を向けると、ガートはそのまま村の方へと戻っていく。再び闇の中に溶け込んでいくその後ろ姿はしかし、出逢った時のそれとは若干違う印象をアルムに抱かせた。

「あいつもそんな事があったんだな。人付き合いが苦手なのは今も変わらないようだけど……俺と似たような事があった訳だ……」

「うん、そうだね……」

ガートの後ろ姿を見送りながらふと呟くヴァローに、アルムは素っ気無くそう返すだけだった。

誰も、何も喋らない。周りの暗闇に自分の心まで覆い尽くされてしまいそうな、そんな複雑な空気になった時だった。入り口に佇んでいたシャトンが、こちらに気づいて駆け寄ってくる。

「みんな、どうしたんでしか？ 早く戻って祭りを楽しむでし！」

さっきまで見せていた悲しげな様子など一切見せる事なく、笑顔を浮かべながら誘導するように村の方に歩き出すシャトン。ここに留まっていたところで何かある訳ではない為、アルム達も後に付いて戻っていくのであった。

引き返している道中では、誰も話そうとはしなかった。正確に言えば、アルム、ヴァロー、レイルの三人。ラックはと言うと、普段

と変わらない様子でシャトンと話している。しかし、アルムは話を聞いて心を平静には保っていらなかった。

両親と兄弟に囲まれて育ったアルムには、シャトンの境遇が上手く理解出来なかった。本当の両親と離れ離れになって、育ての親と本物の兄ではない人と暮らす——それが良くわからないでいた。

——もし両親と引き離され、見知らぬ土地で暮らす事になったら、僕はあそこまで笑顔で居られるかな。

そう考えると、不意に心が締め付けられるような気がした。——自分なら堪えられない。いや、自分でなくても、普通は悲しみに暮れてずっと泣いているだろうと想像出来る。

でも、シャトンは違う。もちろん、悲しくない訳ではないはず。周りに心配をかけないように、逆に明るく振る舞ってるんだ。自分の悲しみで周りの他の人を悲しませないようにと必死に——。

シャトンに聞いた訳でもなければ、心の中を覗いた訳でもない。なのに、アルムには自然とシャトンの心の内が見えたような気がした。

思い込みなどではなく、本当に心の声が聞こえたようなそれは、同情を越えた“何か”によるもの。その“何か”が芽生えた瞬間、アルムのオカリナは静かに淡い光を放った。誰にも気づかれない程の、本当に小さな光を——。

暗くもややとした気持ちも晴れないままに祭りの会場に辿り着いた一行。その場は、離れた時とは明らかに違うものに変貌していた。

あちこちに目を回して倒れているポケモンや、顔に落書きをされているポケモンがいた。その中には、先程お菓子を貰ったキレイハナもいて、顔に派手な落書きをされている。

「これは……一体どうしたんですか？」

「あなた達のお友達よ。私もやられちゃったわ」

ヴァローの質問に対し、キレイハナは笑みを浮かべながらそう返す。しかし、決して嫌がっているような苦笑いではなく、寧ろ楽しんでるような笑顔である。

一方、それを聞いたアルムとヴァローは、互いに顔を見合わせて気まずそうな表情になる。その友達というのがテイルなのは間違いないからである。

「これは早く見つけないとやばいぞ」

「うんっ。手分けして――」

先程までの重苦しい空気は何処へやら。焦ってテイルを捜そうとした矢先、目の前にテイルが誰かもう一人のポケモンと手を繋いで楽しそうに飛んでいるのを見つけた。

そのテイルと手を繋いでいるポケモンは、大きな綿が頭髪のように頭から伸び、後頭部と背中を覆っており、体色が緑色をしている。

アルム達は見た事がないポケモンらしく、不思議そうな目でじっと見つめている。

「確かあの子は……エルフーンって種族名だったと思います。出身はこの辺の地域ではないらしいですよ」

アルム達のその様子から察したのか、横からラックがその正体を教える。簡単にだが素性がわかり、相槌を打ちながら頷いているアルム達に気づいたらしく、ティルはエルフーンを連れて近づいてくる。

「あっ、アルムだー！」

「……ちよつとティル。これは一体どういう事かな？」

「うんとね、エルフーンさんと仲良くなってね、一緒に遊んでたの！」

少し事態が飲み込めないものの、とりあえずはティルの仕業だとわかってるので、怒っているように尋ねるアルム。対するティルは、何も悪い事をしていないかのように振る舞う。

「遊んでたって……みんなに迷惑をかけないように遊んでよね」

「ボクはみんなに迷惑かけてないよ？ それに、お菓子くれなかったら悪戯してもいいって言ってたもん」

注意されてるのが気に入らないのか、ティルは頬を膨らませながら反論する。隣にいるエルフーンも、静かに同意というように頷いている。

「お菓子くれたって悪戯したけどね！　悪戯楽しいもん！」

静かに頷いていておとなしそうに見えたエルフーンが、突然笑顔を見せてそう口に出した。まさかの豹変ぶりに驚く一同だが、ティルだけは愛くるしい笑顔を見せている。本当にこの二人は意気投合しているようである。

「はあ……悪戯するのは良いけど、もう少し控えめにしてね。良い？」

「うん、わかった！　それじゃもっと遊んでくるね！」

本当にわかったのかどうかはわからないが、アルムが窘めると、ティルは素直に返事して再びエルフーンと一緒に祭りの中心部へと行った。

そこではコロトックとロゼリアが軽快な旋律の音楽を奏でており、二人を中心にしてポケモン達が陽気に踊っている。ティル達もそこへ混じり、跳びはねたりしながらも楽しそうに踊り始める。

「本当にわかってるのかなあ？」

「何だ？　アルム、厭いやにお兄さん面してるじゃないか。せっかくの祭りなんだから、楽しんで損はないと思うぞ。俺も少し行ってくるかな……」

ティルを些か心配して呟くアルムの隣で、何故かニヤつきながらヴァローが宥めるようにそう言い残すと、群集の方へと歩き出す。

「そうでし！　楽しむでし！　それじゃ私も踊ってくるでし」

音楽に釣られるようにシャトンも軽やかなステップを踏んで踊りながら近づいていく。ラックとクレイハナもその後を追うようにして踊りの場へと行き、アルムとレイルだけがその場に残される形となった。

「私にはわかりません。何故嫌な事をされたのに明るくしているのか。何故辛い事があっても平気な顔でいられるのか……」

二人きりになったところで、レイルが単調な声で浮かんだ疑問を告げた。前者はこの祭りの仕組み、後者はシャトンについて言うるのである。

「そっか……レイルにはわからないんだ。僕にも上手くは説明は出来ないから、その疑問には答えられないけど、一つだけ言わせて。“これ”が楽しいって事なんだよ。……ごめんね、何か上手い事言えなくて」

左の前足で楽しそうに踊っているみんなを指しながら、優しく語りかけるアルム。まだ子供なのに、その眼差しは何処か毅然としている。

「あれが“楽しい”という事ですか……。やはり私には理解出来ないようです」

「今はわからなくてもいいと僕は思うな。とにかく、一緒に踊ろうよ！」

まだ首を傾げながら考え込むレイルの背中を押すように、アルム

は踊りに誘う。主の命令と受け取ったかどうかはレイル本人しか知らない事として、とりあえず誘いを断る事なくアルムに付いていくのであった。見様見真似とは言え、見事に踊りを熟すレイルにアルム達は終始明るい笑顔を見せていた。

そうして、昨晚とは違って賑やかな夜は、その興奮が冷めることなく更けていくのであった――。

第十六話 語られる三人の関係と賑やかな祭りの閉幕（後書き）

余計なところに気力を使ってしまった、ところどころ疎かになってるのは別の話です。何が別なんだって話ですが、とりあえずぐちゃぐちゃーっと纏めてみました↑

前半に関してはあんなもので許して下さいね。どうも上手い書き方というのがいまいちわからないのです（・ω・）

後半ですが、出来れば短編の二番煎じだと言わないで下さるとありがたいです。これも良いのが思い付かなかったんです。せっかく出したBWポケモンも全く活躍することなく、台詞も一つしか言わないままいなくなりました。反省はしてません↑

リーブタウンよりもほんの少しだけ長いブルーメビレッジ編も、そろそろ終わりに近づいてきました。まだまだ話は核心に行かない……かもしれませんが、お付き合い頂けると幸いです。

それではまた次回お会いしましょう。

第十七話 祭りを終えてゝ饑別の花の香りゝ

吹き抜ける爽やかな風に靡くのは、自らの茶と白の毛。薄目を開けて目を凝らすと、辺りは薄暗いが、遠くの空から黄色く眩しい光を放つ物が見え始める。

「あれ……ここは？」

東雲しのめの明かりが徐々に強くなって辺りが照らされて良く見えるようになり、アルムはその光景に驚く。

淡いピンク色の花畑の中心に立っており、眼前には神聖な空気を醸デし出している大木が。シャトンに祭りの直前に連れて来られた場所ガイであった。

綺麗な花を踏まないように慎重に足を前に踏み出して、大木へと近づいていく。夜明けが近づいているせいか、顔を撫でる風は暖かさを帯び始める。足元から漂う香りも、前回来た時よりも一層甘く馨かぐわしいものとなっている。

さわさわと静かに揺れる木の葉。幹の樹皮に刻まれている無数の跡。その全てが何故か淡い光を纏っている。そして、前に来た時には無かった木の実が僅かに実っていた。その一つ一つが、朝の光を浴びて黄金に輝いている。

『どうでしゅか？ 綺麗でしゅか？』

不意に何処からともなく聞こえてきた声に、アルムはキョロキョロして辺りを見渡すが、声の主は見当たらない。それ以前に、辺り

には誰ひとりいない。

『これは全部、みんなの感謝の思いが届いて実ったんでしゅ』

『——と言っても、私の力もあるんですけどね』

何処か誇らしげに言う声とは別に、優しげな声が聞こえてきた。こちらもやはり、姿は見えない。

いつの間にここに來たのだろう。そして、今の声は一体何処から聞こえてきたのか——そう思った時、静かに揺れていた木の葉が、今度は突風に強く煽られる。

『ごめんなさい、何も説明もしないで。とにかく、あなたに私の声が届くようになったようで良かったです』

後で聞こえてきた方の声の主が、そう語りかけてくる。場が神聖な空気に包まれているのもあってか、声がとても澄み切って聞こえる。

「あなた達は一体——？」

『ミーは“感謝”を司る者でしゅ』

『私は……すいませんが、今は何も言えません。ですが、大事な事を伝えに來ました』

正体がわからないのは些か恐いが、こんな不思議な状況にあっても、何故かその声を信じる事が出来て安心するアルム。誰か聞き返そうとはしない事にする。

『信じてくれたようで感謝します。それですが……これからあなたの元には、さらに“導かれし出逢い”が訪れるでしょう。それはあなたにとって、後々大事な意味を齎もたらす事になります』

「あの……それって――」

『今は全ては話せません。でも、いずれわかるでしょう――』

アルムが聞き返したのを遮って謎の声がそう告げると、大木がより一層眩まばゆい光を放ち、視界が全て覆い尽くされていった――。

暖かく優しい光が止み、突然目の前が真っ暗になる。まるで、これ以上あの場所にいるのは無理だ――と、追い出すかのように。もっとあの心が落ち着く、幻想的な光景を見たかった。そう思っていたが、念じたからと言って見れるはずもない。

その事を残念に思いながら、真っ暗だった目の前がぼんやりと何が見え始め、アルムはある事に気づく。目の前が真っ暗だったのは、目が覚めたばかりで目の機能が中々働かなかった。そして、その前までは夢を見ていたのだと。

「さっきのは何だったんだろう……。夢にしてはずいぶんとリアルだったなあ……」

夢うつつと言った様子で独り言を呟くアルム。今だに現状が把握

出来ていないようである。

まだ眠くて重い瞼をゆっくりと開けると、徐々に太陽がその姿を現して、外が明るくなってきたのが微かに見える。それでも肌で感じる空気はまだひんやりと冷たく、完全に夜が明けた訳ではないらしい。

「目が覚めちゃったから、そろそろ――」

とりあえずは横になっている体を起こそうと足に力を入れるが、ここでまた別の事に気づく。足が宙ぶらりんになっていて、体を起こせないのである。さらには、自分の体が何かに締め付けられていて、身動きすらとれなくなっている。

「むにゃむにゃ……アルム捕まえた」

背後から聞こえてきた声に反応して、首だけ動かして振り向くと、目前にティルの顔が見えた。あどけない顔で眠っている。

「――と言う事は……?」

再び首を戻し、今度は締め付けている何かに目を向けると、ティルの手が見えた。抱き枕のように力強く抱いており、胴体を掴まれている為に放れられない。

「アルム、逃げちゃだめだよ」

「寝ぼけてるんだね……。寝かせておいてあげたいけど……とりあえず放してっ」

アルムを捕まえる夢でも見ているのだろうか、テイルは現実の状況に合った寝言を言いながら、さらに強く抱きしめる。対するアルムは必死に藻搔^{もが}いて脱出しようとするが、虚しく足がばたつくだけであった。

「はぁ……。寝かせておいてあげてもいいけど、もう朝なんだから起こしてもいいよね……」

さすがに暴れ疲れたのか、長く息を吐くアルム。少し悩んだ後で、ある作戦を決行する事にする。

まだ自由に動かせるふさふさの尻尾でテイルの体を優しく撫で始める。いや、撫でると言うよりかは、“くすぐる”と言った方が正しいかもしれない。

「くくっ……。あはははっ！」

今までアルムがいくら藻搔こうとも反応しなかったテイルも、これには笑い声を上げて反応を示す。それに伴って強かった締め付けも少しずつ緩んでいき、遂には完全に解放された。

「あははっ……。ふう……。あれ？ アルム、どうしたの？」

くすぐられた事でようやく目を覚ましたらしく、事情を知らないテイルは呑気に聞いてくる。

「どうしたのって……。寝てたんだから、別にいいっか」

やや呆れ気味にそう漏らすアルムだが、テイルが夢を見ていて無意識でやっていた事を思い出し、笑顔で返すだけであった。テイル

は首を傾げてますますわからない素振りを見せるが、アルムの笑顔を見て、同じく笑顔を見せる。

そんな他愛ない時間は、部屋に一緒にいたヴァローが起きた事で終わりを告げる事となる。

実は祭りが終わった後、ラックの家に泊めてもらう事になって、現在に至る。改めて見回すと、家の入り口のとほ別にある、部屋を仕切っている簾越しに、ラックやシャトン、ガートがいるのが見える。彼らも目を覚ましたようで、体を起こし始める。

「アルム、朝からどうしたんだ？」

「いや、何でもないよ」

眠そうな声で聞いてくるヴァローに、アルムは悟られないように素っ気なく返す。ヴァローも最初こそ疑うものの、ラックが朝食を食べる事を持ち掛けてきた事で、以後は忘れる事になるのだった。

昨日ラックが作っておいた祭り用のお菓子の残りを食べ終えた後で、四人は出発の準備を始める。と言っても、何か買い揃えなければならぬ物はなく、自分達の荷物を纏めるくらいであった。ティルはこの村にいたいと駄々を捏ねだしたが、せっかく目的地が決まったのにぐずぐずしてる訳にはいかないと考えるアルムとヴァローによって説得された。

準備を終えて家から出ると、アルム達は一瞬言葉を失った。昨日までの村の景色が一変していたのである。

花の咲き乱れる村と看板にも書いてあるように、ここブルーメビレッジは、一面が花で覆い尽くされているが、今はその花の数が増えていくのだ。朝露をいっぱいに含んだ可憐な花が、綺羅星のごとく咲き乱れている。

そして、変化はそれだけでは無かった。深緑の木の葉が茂っていただけの木々に、無数の木の実が生っていたのである。まるで、誰かが昨日の感謝祭に対するお礼として、更なる恵みを与えたかのよう。

「あれっ？ これってもしかして……」

「アルム、どうかしたのか？」

朝の夢を思い出して、心ここにあらずといったようにぼうつとしているアルム。ヴァローが訝しげな表情で話し掛けると、我に返って改めてシャトン達の方を振り向く。

「あっ……うん、何でもないよ。では改めまして、シャトン、ラックさん、ガートさん。どうもお世話になりました」

「行ってしまうんですね。もう少しゆっくりしていても構いませんの……」

お別れという事で、感謝の意を告げるアルムを優しく見つめるラックは、残念そうな顔を覗かせている。昨日出会ったばかりとは言え、大切なイベントと一緒に過ごしたので、やはり何か物寂しいの

であろう。

「いえ、ラデューシティに早く行きたいですから」

「そうですか。それならば仕方ないですね」

アルムは首を左右に振ってそう答える。探し物を見つけてくれるドーブルがいるとわかった以上、一刻も早く会いたいのである。

「本当にありがとうございました。一宿一飯の恩義として何も返せないのが申し訳ないですが、この辺で失礼します」

「いえいえ、こちらこそ楽しかったので、そんなもの結構ですよ。ね？ シャトン……？」

別れの挨拶として、ヴァローが丁寧に締める。一方のラックは、笑顔を保ったままシャトンの振り向くが、その様子を見て語尾が思わず上がる。口を真一文字に閉じて、何か言いたげな表情をしているのである。

「シャトン、どうかしたの？」

「あの……私、アルム達に付いていきたいでしっ！」

やや戸惑いを見せながらも、シャトンは思い切って言いたい事を言い切った。それを聞いて一同が驚いているが、中でも冷静なはずのガートが一番驚いている。

「一度外に出てみたいと思ってたんでし。それに、アルム達に付いていけば、何か知りたい事を知れるような気がしたんでし」

「……そうね。外の世界を見てくるのも良い勉強になるかもしれないし……。わかりました。気をつけて行ってらっしゃい」

いつになく真剣な表情のシャトンの思いの丈を聞き、ラックは優しく、しかし少し寂しげに頷いて、送り出そうと決意する。頭の大きな赤い花びらも、僅かながら萎れているようにも見える。

「ありがとうでし！ それじゃ行ってくるでし！」

「アルムさん達、シャトンをどうぞよろしくお願いしますね」

「はい、任せて下さい」

深々と頭を下げて見送るラックの姿は、まるで本物の母親のようにアルム達には映った。そんなラックの依頼に、責任感の一番強いヴァローが容易い事だとばかりにそう返した。返事を聞いたラックは心底ほっとしたような表情を見せるものの、ガートの方は何故か不満げである。

「それじゃ、本当にありがとうございましたっ！」

最後にもう一度頭を下げると、アルム達はラックの家を離れていく。ラックは手を振って見送るものの、ガートは腕組みをしながらそっぽを向いていたが――。

東から昇ってきた太陽は既に黄色から白色に変わっており、花がより一層その花びらを大きく開かせ始める。そんな時にちょうどアルム達は、ブルーメビレッジの入り口辺りに立っていた。

大きく息を吸い込むと、相変わらず仄かに甘い香りが漂ってくる。ずっと囲まれていたせいか、ここをまだ離れたくないと思いながら村の方を振り返ると、そこには何故かガートの姿があった。

「ガートさん、どうかしましたか？」

「……お前達だけでは心配だから、俺も付いていく」

「そうですか……って、ええっ!？」

さっき出来なかった別れの挨拶でもしに來たのだらうと思っていたアルムには、今のガートの言葉はさぞ驚きだったのであろう。少し飛び上がって声を上げた。

「何を驚く事があるんだ。俺はお前らにシャトンを任せられないと思っただけだ」

「えっと……わかりました。同伴者一名追加でよろしいですね？」

付いてくる理由を聞いて、仲間が増えるという嬉しさよりもどこか素直じゃない事に些か苛立ちを覚えたアルム。今度は本人のいる前でにっこりと笑って皮肉っぽく言ってみる。それを隣で聞いているヴァローは、思わず吹き出して含み笑いをする。

「おい、その子犬。何を笑ってるんだ？」

「いや、何でもない。妹思いのクロネコさん」

爪を立てて威嚇しながら問い掛けるガートに、ヴァローは鼻で笑いながらそう返す。その瞬間、二人の間に火花が飛び始め、顔は笑っているが目は笑っていない状態で睨み合う。

「あっ……ヴァローもガートさんも喧嘩は——」

自分にもこうなった原因があるとは言え、今から旅を共にすると言うのに喧嘩をしてはいけないと思い、アルムは止めようとするが、もう一つ問題を見つけて動きが一瞬止まる。ついさっきまで近くにいたはずのテイルとシャトンの姿が見当たらないのである。

「こっちでし、こっちでし〜!」

「あははっ! 待ってー!」

声のする方を振り向くと、ここに来た時のように、シャトンの尻尾をテイルが追う形になって、アルム達からどんどん離れていつている。

「はぁ……こういうのを前途洋々って言うのかな?」

「主、それは前途多難の間違いだと思えます」

「……冷静な訂正をありがとう」

テイルとシャトンの自由奔放な行動、ガートとヴァローの睨み合いに溜め息を吐きながら呟くと、レイルがきっぱりとそう言い切る。即座につっこみを入れたアルムは、苦笑いを浮かべるしかなか

った。

こうして新たにエネコのシャトンとニューラのガートを旅の仲間に加えたアルム達。前途多難かはたまた前途洋々か。とにかくアルムにとっては、悩み事も楽しみも両方増えたのであった。

第十七話 祭りを終えてゝ饞別の花の香りゝ（後書き）

約2週間ぶりに――正確には越えてますが――更新しました。気づけばどんどん長くなりまして、5000字を越えてしまいました。他の先生方に比べればまだ短いですが、このエトワールの方では長い方ですね。

さてさて、始まりから良くわからない展開になっていますが、ようやくのんびりしていたストーリーが進み出したと思って下さい。とは言っても、まだ先は色々あるんですが……。

今話について何か言っておきたい事もあったのですが、忘れてしまったのでとりあえずこの辺で失礼します。

第十八話 芸術の都ラデュースティームの中の大きな街

ぽかぽか陽気の昼下がり。日によって違う顔を見せる、そんな太陽にも負けない程に陽気なティールとシャトンの二人は、アルム達より先行して進んでいた。疲れなど微塵も感じていないようで、交互に立場おにを変えながら追いかけてっことをしている。

「待って待ってー！」

「待たないでしーっ！」

相変わらず、シャトンの尻尾をティールが追いかけるといった形。平和という一言で片付けてしまうのはもったいない程に、微笑ましい光景である。黄色とピンクの二色が激しく動き回っているのが、その色のイメージと合っている。

一方で、その後方。つまり、その後を追うアルム達の方は、やや殺伐としていた。さっきから対立しているヴァローとガートが、アルムを間に置くようにして離れて歩いているのである。やはり猫と犬は仲が悪いのだろう。

楽しいような気まずいような、複雑な立場にあるアルムは、ひたすら無言で歩いていった。両端の二人に、「いい加減にして」とでも言いたかったが、面倒だったのでほって置く事にする。ブルーメビレツジから続く丘は、今度は登るだけのものになっており、疲れ始めたのもあるのだろう。

まるで山を登っているようで、先は若草の生える上り坂しか見えない。とは言え、その頂上はもうすぐであった。

「アルムー！早く来てみてー！」

長い丘を登りきって頂上にいるティルが、手招きをしながら叫んでいる。アルムは呼ばれるがままに歩みを進めて登りきった。その目に映ったものに、思わず口を開けて驚いてしまう。

下り坂の先には、ようやく緑の平原が広がっている。その盆地には、平原をほとんど埋め尽くす透明な巨大ドームがあり、透けて見えるその内部には、家が建ち並んでいる。まだ遠くにいたので細かいところはわからないが、色んな種類の建物があるのが見える。

「ねーねー。早く行ってみようよ！」

「うん。行ってみよう」

早くも興味を示し始めたティルに優しく笑って見せると、アルムも先導を切って走り出した。

下に降りてきたところで、改めてそのドームと街の大きさにアルム達は哑然とする。自分達の身長とは比べものにならないくらいドームは高く、首を擡^{もた}げて見上げていると、首が痛くなる程である。

近くに来て目を凝らしてみると、一つの大きな壁なのではなく、一枚一枚の小さな壁をくっつけて出来た物のように見える。小さいと言っても、ドームの大きさから比べた場合の事ではあるが。

「あれ……？　どこから入れば良いんだろう……」

この街の入り口を探して周囲を見渡すと、一箇所検問のような所を見つけて駆け寄っていく。

小さな木製の小屋のような中に、一人のシャープな外観の背の高いポケモンの影が見える。アルム達に気づくと、中から姿を現した。頭と両肘には鋭利な刃があり、上半身の体色は緑色をしている、エルレイドという種族である。

「ラデューシティにようこそいらっしやいました。私は入り口の警備を担当しております、スパードと申します」

深々と頭を下げて、丁寧に挨拶をするエルレイドのスパード。あまりの懇ろな態度に驚きつつ、やや遅れてアルム達はお辞儀を返す。

「貴方達をこの街のお客として案内させて頂きますが……よろしいでしょうか？」

「は、はい。寧ろして頂けるのならお願いしたいですし……。でも、迷惑ではないですか？」

スパードの親切な申し出に対して、アルムは申し訳なさそうに問い返す。嬉しいには嬉しいのだが、警備を担当していると知った以上、ここを離れてもらってまで案内してもらう訳にはいかないと思っただけである。

「いえ、警備は他にもいますから大丈夫ですよ。それに、貴方達はまだこの街の事を良く知らないようですし、案内役がいた方が良い

でしょう？」

考えていた事をずばり当てられ、アルムは目を丸くする。しかし、直後に“相手の考えを敏感に察知する”というエルレイドの特徴を思い出し、素直にお願いする事にする。

了解したとばかりに優しく微笑んで見せると、スパーダは全員に固まるように言う。何故だろうと全員が疑問に思ったが、その答えはすぐにわかった。

スパーダがその細い腕を横に伸ばし、それを素早く振って交差させた。その刹那、自分達の周りの空間が歪んでいき、まるで陽炎かげろうの中にいるかのように感覚に陥る。それと同時に、瞬間的に目の前の景色が一変した。正確に、そして感覚的に言うならば、何かに上に引っ張り上げられたかと思ったら、いつの間にか地面に着地していた、という具合である。――それは、スパーダが、エスパークタイプのポケモンが得意とする“テレポート”を使用した事に依る。

足元には茶色の煉瓦が敷かれており、辺りには自分達を中心にして、放射状にずらりと大小様々な建物が立ち並んでいる。リーブフタウンとは違い、煉瓦以外で出来た家も多く見受けられる。

空には、光を反射して、ところどころが虹色に輝く泡が無数に浮かんでいる。浮き沈みを繰り返してはドームの天井にぶつかっているものの、割れる様子は一切ない。

視線を再び下に向けて辺りを見回すと、自らの体の一部を使って彫刻をしていたり、音楽を奏でていたり、絵を描いていたなど、様々なポケモンが通りに溢れている。

家の壁もよく見てみると、森や空の様子など、一続きの素敵な長い絵が描かれているものもある。街に存在するどれもがアルム達にとっては初めての光景であり、ただただ感嘆の声を上げながら見つめるばかりである。

「改めまして、芸術の都、ラデューシティへようこそ。ここはこの街の中心地です。この噴水がその目印となっているんですよ」

スパードの言葉でようやく夢見心地から現実に戻されるアルム達。スパードが指している後ろをゆっくりと振り返ると、そこには大量の澄み切った水を吹き出している立派な噴水が。その中心には、小さい物ではあるが、二足で立っているポケモンを象ったかたど白い石像がある。格好だけ見ると、俗に言う道化師のようである。

「あれはこの街の長、バリヤードのヤード様を象っています。このドームを作り上げているのも、ヤード様なんです。……と、噂をすれば、ご本人がいらっしゃったようです」

コツコツと堅い煉瓦を踏み締める音がする方に一斉に顔を向けると、石像をそのまま大きくしたような姿をしているポケモン——バリヤードが近づいてきていた。

「これはこれは客人かな？ ラデューシティへ遠路遙々ようこそ。私がこの街の長のヤードだ」

「あつ、どうも初めまして」

紳士的な態度のヤードは、そっと右手を伸ばし、握手を求める。それに対し、代表してアルムが前足を伸ばして対応する。優しく握ってきたヤードの手から、アルムはこの人の優しさまで感じた気が

した。

「あの……一つ質問してもよろしいでしょうか？」

握手を終えて少し距離を置いたところで、アルムが遠慮気味にヤードに問い掛ける。

「うん？ 何でもどうぞ」

「あの、このドームをヤードさんが作っていると聞いたのですが、もしかしてお一人でこれを……？」

「ハハハ。まさか、私にそこまでの力はないよ。もし時間があるならば、その秘密を見せてあげるけど、どうだい？」

ほんの数人の訪問者の為に、街の長がする誘いだとは思えないが、興味津々といった様子の子のテイルとシャトンを見て、好意に甘える事にする。

「はい！ 是非お願いしますっ！」

笑顔で返事をするアルム。まだまだ謎だらけのこの街の中でも、一番気になっている事を教えてもらえるという事で舞い上がっており、思わず声も少し上擦っている。

返事を聞いたヤードも、笑顔に対して笑顔で返し、「こちらへ」と言っきじすて踵を返す。

こうして、一同はぞろぞろと、まるで観光ガイドに連れられるが如く、ヤードの後を付いていく。大通りの脇で色んなポケモンが

ばらばらに奏でている旋律が織り成す音楽の中心を——オーケストラの中心を通るように——。

第十八話 芸術の都ラデュースティームの中の大きな街（後書き）

とりあえず一発目に言う事ではないのですが、特に書く事もないので単刀直入に。

クインに続く、てきとーなネームドキャラのヤード。その辺はあまり気にしないでいただけると嬉しいですw

次にエルレイドのスパードですが、これはスペイン語で剣を意味するエスパードからとりました。何故こっちはちゃんと名前を考えているのかという突っ込みは無いです↑

ともあれ、また次回お会いしましょう。

第十九話 ドームの秘密とドールとく力を与えし秘密の物体く

煉瓦で出来た家から石で出来た家まで、色んな素材から出来ている建物の町並みを横目に歩き続けるアルム達。町に来ていきなり長に会えた上、その人に案内までしてもらえするという事で、アルムとヴァローからは驚きと緊張が窺える。

その道中、さすがに町の長が歩いている為に、通りにいるポケモン達もおとなしくしているのかと思えば、寧ろ逆だった。気軽に話し掛けては、曲や彫刻など自分の作品を披露している。それに応えるヤードも、世間話を交えながらフレンドリーに接している。この辺りにも人柄が色濃く自然と表れていると言える。

話が長引く度にスパーダに諫められながらのんびりと歩いていく事数十分、ヤードがある場所で立ち止まってアルム達の方を振り向いた。

「悪かったね、時間を掛けて。ここが私の家だ」

左腕をアルム達から右側に向かって伸ばしたヤード。そのまま追うように視線を右に向けていくと、一軒の大きな家が目に入った。豪邸と呼ぶにはやや小さいが、それでも町の他の建物に比べると、十分立派で厳かなものである。

屋敷の入口には鉄柵の門があり、その先には家の大きな木製の扉が見えている。スパーダが軽く門を引き開けて先に進んでいき、大理石で出来た短い階段を上がってその前まで辿り着いたところで、今度はヤードが木製の扉を押し開ける。

ぎいっと軋む音とともに開かれた中に見えてきたのは、床に敷かれていた真紅の絨毯に、絵画や彫刻などの芸術品の数々。煌びやかな物ばかりで、アルム達は哑然として見入っている。

「さあ、遠慮なく入ってくれ。あと、ドームの秘密について知りたい者は、私に付いてきてくれ」

だだっ広い入口で立ち止まっている一行に話し掛けたヤードは、手招きをして奥の方へと歩いていく。一方で、そろそろ中に入っていくアルム達を尻目に、ティルとシャトンは多くの芸術品に目を奪われたのか、あちこち見て回っている。

「ちよつと……ティル！ シャトン！」

「大丈夫です。彼らの事は私が面倒を見ますから、貴方達は安心してヤード様の後に付いて行って下さい」

案内してくれるという事で早くヤードの後に付いていきたかったが、ティル達をほって置けない。どうするべきか悩んだ末に声をかけたアルムにスパーダがそう持ち掛けてくれ、一行は安心して後を付いていく。

両側の壁に豪華な額に収められている絵画の並んでいる、長く続く細い廊下を抜けたところに、地下に続く階段があり、静かに一步步降りていく。足元から薄暗くて不気味な感じがするが、それが寧ろ興味をそそのめるのか、ヴァローはやや足速になっている。その対照的に、暗いのが怖いのか、アルムは慎重に進んでいく。

どんどん下へと行くにつれて、必然的に空気がひんやりと冷たくなっていくのがわかる。しかし、明るさについては何故か逆で、暗くなるどころか徐々に明るくなっていった。その訳もわからないアルム達は訝しげな表情を浮かべながら降りていくしかなかった。

「そろそろ秘密がわかるよ。心の準備はいいかな？」

視界には既に階段の終わりが見えている上で、振り返りざまに問い掛けるヤード。その意味深な発言に期待半分、不安半分で一同は頷く。少なくとも、何か明るい物があるという事だけはわかっていたから、そこまで不安はない。

ここからは流石のヴァローも、深呼吸をしてゆつくりと降りていく。そして残り四段、三段となったところで、ようやくその秘密とやらの全貌が見えた。

全員の目に映っているのは、青白く淡い、神秘的な輝きを放つ角柱状の巨大な結晶。表面は滑らかで美しく、完璧とまでは言えないものの、遠くにいるアルム達の姿をほぼ映し出している程。その内部にはきめ細かい白い針状の結晶が見られ、まるで“煌めき”をそのまま中に封じ込めたようである。あまりの壮麗さに、アルムとヴァローはただ心を奪われたようにぼんやりとして立ち尽くしている。

「……物凄い力を秘めているように感じます」

「何だ、この得体の知れない物は……。こんな見た事無いぞ……」

レイル、ガートがそれぞれに感想を述べる。表情こそ驚いている様子は見られないものの、ふと漏らした言葉からも、その光景に呆

気にとられているようである。

「どうかな？　これがその秘密だ。この結晶は俗に水晶と呼ばれる物で、神聖な力を秘めているんだ。その力を少し借りて、あの“ひかりのかべ”のドームを築いているって訳なんだよ。私の力だけでは、作り出す事は出来ても、持続させる事が出来ないからね」

体はアルム達の方に向けたまま、そして顔と左手は水晶の方に向けた状態で、ヤードは淡々と説明する。

「なるほど……。でも、そもそも何故“ひかりのかべ”のドームを張ってるんですか？」

「良い質問だね。それには、二つの理由があるんだ。一つ目は、大きな災害や紛争が起きた際に、町全体を守るように。二つ目は、浸食や風化によって町の素晴らしい芸術作品の質を損なわないようにする為なんだよ。どちらも、私の先祖が昔考えたようだね」

「へーっ、二つも理由があったんですね。教えて頂き、ありがとうございます」

まだ聞き忘れていた、根本的な事を質問をするアルムに、ヤードは再び丁寧教えてくれた。改めて頷きながら、アルムは笑顔を見せて感謝の言葉を述べる。

「ところで、あの水晶をもっと近くで見てもいいですか？」

いつの間にかヴァローよりも興味津々といった感じのアルムは、どこか弾んだような口調で尋ねる。

「ああ、いいけど――」

ヤードが全てを言い切る前に、アルムは水晶に向かって駆け出した。ヤードは制止するように右手を伸ばそうとするが、時既に遅し。手を伸ばしきると、何か硬い物にぶつかったような鈍い音が響くのは同時だった。

「痛ったあ……」

「“ひかりのかべ”で守ってるって言おうとしたんだけど、遅かったようだね……」

涙目になりながら額を摩さすっているアルムの元に歩み寄りながら、苦笑いを浮かべて呟くヤード。何かを払うように素早く手を振ると、先程アルムがぶつかった辺りを難無く通り過ぎて、水晶の手前まで近寄った。それを見て、他の全員も“ひかりのかべ”があった辺りまでは恐る恐る歩き、通り過ぎたところで駆け足で近づいた。

「あの……触ってみてもいいですか？」

「どうぞ、自由に触ってくれていいよ」

また弾かれるのではないかと内心びくびくしながら、アルムはそつと左の前足を水晶に近づける。

淡い光に包まれているそれに触れた瞬間の第一印象は、“固くて冷たい”という事だった。それに続いて、心が安らぐような感じがして、静かに目を瞑った。全身にそのエネルギーが流れてくるように、ずっとこのまま触れ続けていたいと思う程である。

「アルム、どうした？　そんなに長く触れ続けて」

静寂な空気が漂う中で、突然横からヴァローの声が聞こえ、思わず足を離れた。

「いや、何かすごい心地良かったから……」

「ふーん、そっか」

聞かれたから答えたというのに、何故か怪しむような視線を向けて素っ気なく返すヴァローに、アルムはやや膨れっ面を見せる。何か言い返そうとした時にちょうどヤードが戻ろうと提案したので、黙ってその後について階段を上がっていく。

再び暗い階段を通って一階に辿り着いた時、待ちくたびれたようにテイルとシャトンが座り込んでいた。その傍らにはスパーダが平然と腕組みをして立っており、特に何事も無かったようである。

「アルム、遅ーいっ！」

「ごめんごめん。今戻ったから、もう問題ないよね？」

「うんっ。それじゃ、次はどこに行くの？」

足で優しくテイルの体を叩きながら宥めるアルム。それに対し、テイルは外の方に目を遣りながら声を上げた。そこでようやくこの

町に來た目的を思い出し、ヤードの方に向き直ろうとするが、ティルに引っ張られてそれは叶わなくなる。自由が利かなくなってしまう。アルムの代わりに、ヴァローが話し掛ける事にする。

「ヤードさん、一つお聞きしたい事があるのですが……この町に探し物を見つけるのが得意なダブルさんがいると聞いて來たんですが、ご存知ないですか？」

「ああ、知ってるよ。私も彼の絵は好きで、よく絵を見せてもらっていたよ」

ヤードは頷きながら、そう静かに答えた。その表情は何処か暗く見える。ここで返答を聞いて再び疑問が生まれ、ヴァローはもう一度問い掛けてみる。

「出来ればその場所を教えてもらいたいんですけど……それよりも、さっきのもらって“いた”ってどういう事ですか？」

ヴァローが引っ掛かった事。それは、言葉の終わりが現在型ではなく、過去型になっていた事だった。少なくともこの時点で、今は見せてもらってない事がわかった。その上でどうなってるか詳細が気になったからである。

「良く聞いてたね。実は、最近は絵を描いてないらしくてね……。スランプに陥ったらしく、そのせいか、他人と関わるのも億劫になって、なるべく関わらないようにしてるみたいなんだ」

全て言い切ると、小さく溜め息を吐くヤード。その様子からも、そのダブルの事を心配してるように見える。

「あつ、そうだ。彼の居場所を知りたいんだったね？　それでは、スパイダ君に案内してもらおうか」

「はい、畏まりました」

我に返ったようにヤードは話題を戻して、アルム達とスパイダの両方を見た上でそう切り出した。スパイダは頭を軽く下げて、了解の意を示す。

「えっ、いいんですか？」

まだテイルに抱き着かれながらも何とかスパイダの方を向き、アルムは尋ねる。スパイダは言葉を発する事なく、優しい笑顔を見せながら軽く頷いた。

「よし、これで決まりだ。また困った事や気になる事があれば、気兼ねなく立ち寄ってくれていいよ」

「はい、ありがとうございます。そしてスパイダさん、よろしくお願ひします」

この上なく親切で嬉しいヤードの言葉に、今までの感謝の気持ちも込めて、テイルにも負けないような満面の笑みを見せながら、アルムは頭を下げる。今度はスパイダの方を振り向いて、同じく頭を下げた。

その後すぐさまその場から離れ、アルム達はヤードに見送られながら再び町の方へと赴いていく。ヤードから得た情報で、心に一抹の不安を抱えながらではあるが、それでも事が順調に進んでいる事に、期待と嬉しさも胸に抱くのであった。

第十九話 ドームの秘密とドールとく力を与えし秘密の物体く（後書き）

本当はもう少し後で投下しようと思っていたのですが、さすがに二週間放置は避けたかったので、投下しました。

よくもまあこんなぐだぐだで投下したな、と言われかねない出来ですが、これが僕の限界です。ご容赦下さいね（・ω・）

今話でテイル、シャトン、レイル、ガートがいる必要があるのかと言われそうですが、これまた僕の力不足であります。全てオリジナルの展開が難しいと言い訳させて頂きます↑

随分と都合よく進んでるのも、“導かれし出逢い”のおかげとか言っ
って逃げたいと思いますw

誤字・脱字、表現の間違いなどあれば、気軽に報告して頂けると嬉しい
です。「この物語自体、ぐだぐだで面白くないわ」的な批判も
お待ちしております。覚悟の上で書いてますので。

それではまた次回お会いしましょう。

第二十話 ドーブルの邸宅へ心も体も弾むガンマ通りへ

「あの……スパードさん？ この通りが一体どうかしたのですか？」

音楽から絵画、彫刻にと様々な分野において、ポケモン達が大通りに集っている中、看板に“ガンマ通り”と書かれている大通りの手前で、一行は立ち止まっていた。ドーブルの家に向かう道すがら、せっかくだからと、スパードの計らいで観光がてら寄り道をしているらしい。

一見すると、色とりどりの煉瓦が敷き詰められているただの通り。煉瓦の色こそ目に優しいように浅緑色やクリーム色、水色などとなっているが、それ以外に目立った特徴は見られない。アルムが疑問を抱くのも無理はなかった。

「百聞は一見に如かずと言います。とりあえず、歩いてみて下さい」

柔和な笑みを見せているスパードを疑う訳にも行かず、本当に何かあるのかと半信半疑ながらも一步を踏み出す。

その小さな足がゆっくりと一枚の煉瓦を踏み締めた瞬間、少し沈むような感覚がしたと同時に、足元から一つの音色が響いてきた。優雅で暖かく、柔らかな音色。周りの雑音に紛れて消えてしまいそうな程に優しいが、しっかりと耳に響く、そんな一音だった。

「スパードさん、これはいったい……？」

「いかがですか？ ラデューシティの名物、リズムを刻む通りです」

不可思議な現象に驚嘆しているアルムの横で、スパイダは違う色の煉瓦の方に一步を踏み出す。エルレイドの特徴である細長い足で踏み付けられた地面からは、また先程とは違う、低めの音が鳴り響いた。

「色はそれぞれの音階を現しているのです。仕組みを詳しくは話せませんが、これも作品の一部なんですよ。もちろん、静かに道を歩きたいという方の為の通り道も設けられています」

簡単に説明をしながらスパイダが指している方向に目を遣ると、通りの中央と両端だけは、真っ白の煉瓦がずらりと敷き詰められている。

そこを平然と歩いている一人のニューラ―ガートの姿が見えて耳を傾けるが、確かにそちらの方からは何の音色も聞こえては来なかった。

「どうやら煉瓦の裏に何か叩くような装置があつて、さらにその下にある音を発する物体を叩く事によって奏でるのでしょう」

「なるほどな……原理は何であれ、魅力的な通りである事に変わりは無いな」

分析をしながら進んでいるレイルと、興味深そうに床を踏み締めながら歩くヴァローの二人。ポリゴンという種族上、宙に浮いている為にレイルは床を踏んではないものの、時々その足に当たる部位で床を叩いている。見知らぬ物に出会い、調査しているのである。

そのように三人が普通に歩みを進める中で、やたらと元気に動き

回って音を奏でているエネコとジラーチがいた。言わずもがな、シヤトンとティルである。ティルは地に足を着いて歩くという事が出来ないの、低空飛行しながら、その手で太鼓を叩くように煉瓦を叩いている。

軽快に跳びはねているシヤトンの後をティルが追いかけている――そんな陽気なコンビの醸し出す音律は、ばらばらのようでありながら呼吸びったりで、二人で最初から一つのリズムミカルな曲を奏しているように思える程。聞いている方まで思わず踊りだしたくなるテンポであり、まるで待ちきれなくなった音たちが煉瓦の下から溢れ出してくるようである。

「お仲間の方は、皆さん個性的で面白い方ばかりですね」

「はは……本当に個性的で、困るくらいですけどね」

スパーダの率直な感想に対し、苦笑いを浮かべながら返答するアルム。前方から聞こえてくる楽しい音楽に、自然と体が弾むように歩き出していく。ドームの中である為に、風も吹かず、暖かい陽射しが差し込むばかりか陽気の中。アルムらしく、穏やかで心地好いリズムを刻みながら――。

ガンマ通りをたっぷり満喫した後で、三人はようやくダブルの家に近いところまで来た。足元はいつの間にか煉瓦から石になっており、細い道が続いている。緩やかな傾斜の階段の先は小高い丘のようになっている、そこには木製の一軒家が建っている。

その佇まいは至って質素でありながら、どこか風情を漂わせるものとなっている。小さな花畑と緑色の小さな草原といったこじんまりした庭がある辺りも、その雰囲気を出している要因となっている。

「あれが皆さんの捜していらっしやったドーブルさんの家です。これで私の役目は終わりなので、この辺で失礼します」

「はい。ありがとうございました、スパードさん」

ここまで案内をしてくれたスパードに、お礼の言葉を述べるアルム達。それを睨^{しか}と聞いて軽く笑みを浮かべながら手を振ると、スパードは瞬時に“テレポート”でその場から消えていった。

名残惜しさを感じるのももほどにし、アルム達は駆け足で長く続く階段を上っていく。庭は丁寧に手入れが施されているようで、花の生育を疎外するような雑草は見受けられない。この町に来てからは久しぶりに見た、両脇に広がる緑を尻目に、やや古びた木の扉へと歩みを進める。

今まではレインボービレッジの顔見知りの家、もしくは家の主が同伴した状態で、他人の家を訪問した事があっても、全く見知らぬ家に訪れた事はなかったアルム。緊張の面持ちで前足で扉をノックしてみる。

こつこつと軽い音が響き、一同が静粛にして扉から少し離れ、家の主が出て来るのを待つ。しかし中々現れる様子はなく、聞こえなかったのだろうかと思い、今度は力を込めて叩いてみる。

「あれ……留守なのかな……？」

「これだけ出て来ないんなら、そうかもしれないな」

首を傾げながら呟くアルム。残念そうに耳を垂らしながらヴァロ
ーの方を見ると、こちらと同じく大きく溜め息を吐いている。ここ
まで来るのに結構歩いてきたのだから、がっかりするのも無理もな
い。

「しょうがない、また後で来てみるか……」

ヴァローの一言を聞いて全員が家に背を向け、とりあえず諦めて
引き返そうとする――。

「こんなところまで誰じゃ？」

――その時だった。扉が僅かに開き、その隙間から低音の唼しわがれた
小さな声が聞こえてきた。それに気づいたアルム達は、驚きつつ一
斉に振り返る。

隙間から顔を覗かせていたのは、ガートよりも少し背の高い一人
のポケモン。頭部がベレー帽のようになっており、大きな目の下には
茶色の隈のような模様がある。見た目が白い犬のような、このポ
ケモンの種族名はドーブルである。

「あ、あなたが、探し物を見つけるのが得意なドーブルさんですか
？」

「いかにもそうだが……。わしは今忙しいんだ。依頼をしに来たな
ら、とっとと帰ってくれ」

「あっ……ちよつと——」

ようやく出会えたと一安心して、あたふたしながらも話し掛けたアルムを一瞥だけすると、ダブルはぴしゃりと扉を閉めてしまった。

「な、何さ。まだ何も言ってないのに、追いつ返す事ないじゃないかっ……」

今はもう姿の見えない家の主人に対する不満を吐露するアルム。よほど門前払いみたいな扱いを受けた事に、愕然としているようである。

「……つたく。とんだ無駄足だったな。こんな事がある事くらい、事前に調べておくべきだったんじゃないのか？」

「……それが嫌なら、お一人で観光でもなさってたらいかがですか？　ガートお兄様？」

ガートがぼそつと漏らした不満を苦々しく思ったアルムは、ガートの方を振り向きもせず zu うんざりといった様子で返す。元々の原因がガートではないとは言え、非がある事を自覚しているガートは、反論出来ずに口を閉じる。

「ヤードさんの言ってた通り、ポケモン 気難しい人みたいだな……。一旦出直した方が良いな」

「えゝっ！　せっかくここまで来たのにまた戻るのー？」

急な展開にも悠然としているヴァロー。そして、ここから離れる

事を提案した途端に、嫌がりだしてヴァローを揺らすティル。そんな二人を見て、微笑を浮かべて心を落ち着けたアルムが町の方に向けて歩き出そうとした瞬間のこと。背後で再び、今度はその限界まで扉が開く音が聞こえた。

「お客さんですね？」

続いて声が聞こえて素早く振り返ると、そこに立っていたのは一人のドーブルだった。しかし、同じドーブルでも、先程の声とは違い、暖れていながらも暖かく優しい声である。

「はい。あの……僕はアルムって言います。あなたは……？」

「わたしはあの人の——パントの妻です。さあ、どうぞ上がってくださいなさい」

柔和な笑みを湛えながら、家の中に入るようにドーブルは手招きをする。さっきの事があった為に警戒していて、入るのを憚^{はば}っていたアルム達——だったが、ティルとシャトンが気にする事なく入って行くのを見て、その後に恐る恐る続く。

外観よりも中は広く、木や草の——自然の匂いがいっぱいに広がっている。息を一杯吸い込むと、まるでレインボービレッジの自宅に戻ったような感覚になる。

「ようこそいらっしやい……と言う前に、とりあえずこっちの部屋に来て下さいな」

ドーブルに誘導されるがままに、アルム達は大きな両開きになっている扉の前に立たされ、そのまま中に入っていくのであった——。

第二十一話 ドーブル夫妻の日常〜画家と支える妻〜（前書き）

今回は特例として、“◇”が三つあるところを境に、一人称視点に変わります。どうかご了承ください。

第二十一話 ドーブル夫妻の日常―画家と支える妻―

アルム達が案内された部屋は、大小様々な絵画で埋め尽くされている広い部屋だった。ヤードの屋敷で見たのとは違い、額には収められておらず、紙のままに壁に貼られている。その描き方も、色彩豊かに美しく描かれているものからぐしゃぐしゃに描き殴ったようなものまで色々ある。

中央には大きな長方形の木製のテーブルがあり、一見待合室のようにもリビングにも見える。しかし、ちょっと足元の方に目を遣ると、筆やキャンバスなどが乱雑しており、仕事場のようでもある。

「ここは、あの人の第二のアトリエなんです。ここにはあの人もあんまり立ち寄らないから、しばらくは気づかれないでしょう」

アルム達がキョロキョロしているのを見て、歩きやすいようにせつせと足元に散らばっている道具を整理しながら、ドーブルは改めて部屋の説明をする。

「あの……本当に上がってもよろしいんですか？」

さっきまでの苛立ちはどこへやら、恐縮した様子のアルムは小声で尋ねる。今、最初に出て来た方のドーブルに見つかったらどうしよう――と若干怯えているようにも見える。

「ええ、大丈夫ですよ。私が後で説明しておきます。せっかくいらっしやって下さったお客様なんですから……」

「そうですか……ありがとうございます」

ドーブルの親切な申し出に、あの無愛想なガートも含めて全員が頭を下げる。これで一安心と言ったところで、皆がその場に座り込むなり、絵を見るなりする。そんな中、ヴァローには聞きたい事があり、ドーブルの方に近づく。

「あのドーブル——いえ、パントさんは何かあったのですか？」

「ええ。最近は何つきり絵が描けなくなったとか言っては、落ち込んでるんです。何かが欠けているのか、何かを忘れていているのか、全くわからないと……。だから、わざわざ訪ねて下さったのに申し訳ありませんが、皆さんのご要望には応えられないかもしれませんね……」

深く溜め息を吐いて部屋の外の方に視線を遣りながら、ドーブルはどこか悲しげな表情を見せる。しかし、アルム達が心配するように見ているのに気づくと、それを押し殺すように元の落ち着いた表情に戻す。

「それでは皆さん、しばらくゆっくりして下さい」

一礼だけすると、そのままドーブルはすたすたと部屋を後にしてしまった。残されたアルム達は、迂闊に部屋を出る訳にもいかないので、とりあえず部屋の中をうろうろする事にする。

「ねー、外に出ちゃだめ？」

「だーめっ。最初に会った方のドーブルさんに見つかったら大変でしょう？」

「むーっ。つまんないの」

自由に動き回るのが好きなテイルは、閉じ込められるというのが嫌なのか、膨れっ面をしている。

「お部屋の中でも遊べる事は遊べるでし！一緒に遊ぶでし！」

ご機嫌ななめなテイルの目の前に、シャトンがにこにこと笑顔を浮かべて顔を出した。その足元で、床に落ちている筆を転がしている。

「うん！遊ば遊ばー！」

シャトンの言いたい事がわかったのか、テイルは筆を掴んで、辺りにくしゃくしゃになって落ちている手頃な紙を拾う。それからやる事はただ一つ。ひたすら描きたいままに紙に絵を描き始める。

「ねー。アルムも一緒にやろうよー」

「いや、僕は遠慮しておくよ」

遊び道具が見つかって、生き生きとした表情を見せているテイル。楽しそうに振る舞っているのを見て微笑みながら、アルムはヴァロ―と絵の鑑賞を始める。

「何か……どれも暗くて寂しい作品ばかりだね……」

「確かにな。今のパントさんの辛い感情が滲み出てるみたいだ」

壁に貼られている絵はほとんどが、寒色や暗色をメインに使った

ものばかりで、暗い印象を与える物が多い。それも、何か具体的なものを描いたものではなく、抽象的に描かれている。

「あ……でも、あれだけすごく暖かい感じがするよ」

全体を見渡す中で、アルムがある一枚の絵を見つけて指し示す。そこに描かれていたのは、背景には噴水が見える、一人のドーブルの絵。

その絵の中のドーブルは、とても幸せそうに明るい笑みを湛えており、溢れた笑顔が色となって描かれているかのように、体の周りは橙色に包まれている。噴水や青空の青色とのコントラストも美しく、ところどころに情緒漂うものである。

「あれはパントさん……じゃないよな。だとしたら、奥さんの方か……？」

「モデルはわからないけど……少なくとも、描いたパントさんの方も楽しかったはずだよ」

この場においては異質な一枚絵を見て、しみじみと思いを巡らす二人。相変わらず他には暗い絵ばかりしか目に入らないが、その一枚があるだけでその暗い雰囲気全てを和らげてくれているように映った。

そうしてそれぞれが思い思いに部屋で時間を過ごす中、今まで閉まっていたはずの扉が突如として開いた。

「お前達は確か、さっきの……」

扉を開けた主——ドーブルのパンツが啞然とした様子で口を開いた。一番恐れていた事態に、ティルとシャトンを除いた四人の表情が強張る。

「何故家に入ってる……？ ペイン！ おい、ペイン！」

アルム達に対して何か怒るのかと思いきや、部屋の外に向かって怒号混じりに叫び出すパント。それに反応して遠くの方から駆けてきたのは、先程アルム達を迎え入れてくれたドーブルであった。

出会った時は注意して見ていなかったのだからなかったが、改めて見比べてみると、筆状の尻尾の色が違っている。パントは緑色、奥さんのドーブル——ペインは橙色というように。

「あなた、何でしょうか？」

「何でしょうか、じゃない。何故こいつらが家にいるんだ？」

「ああ……それは、私が彼らに入ってもらったからですよ。大事なお客さんですし……」

顔だけをペインの方に向け、目をやや吊り上げた様子のパンツに對し、ペインは慎ましやかな感じで接する。

「わしは忙しいんだ！ 勝手に入れるんじゃない！ いいな。追いつ出すか、そうでなければ、お前一人で面倒を見ろ」

「はい、わかりました。申し訳ありません……」

遂には体もペインの方に向け、大声で息巻くパント。それを受け

て、ペインが反省したように俯いて返事をする、憤慨した様子のまま、パントは姿を消してしまった。

「あ、あの……ごめんなさい、僕たちのせい……」

気まずい空気になったところで最初に切り出したのは、耳を元氣なく垂らして、顔を俯かせているアルム。ペインが怒られた元の原因はと言えば、自分達なのだと思っているからである。

「いえいえ、気にしないで下さいな。あの人はいつも、ああやってぴりぴりしてるんです。怒られるのにも、もう慣れましたから」

心配をかけまいと、今度は微笑んで見せるペイン。深々とお辞儀をすると、彼女もアルム達の目の前から姿を消していった。

「何か……まずい事になったな……」

その場が再度、しばらく静肅な空気に包まれていた時、その空気を破ったのは、ヴァローだった。それを聞いて不安そうに頷きながら、アルムも口を開く。

「……うん。それでさ、ヴァロー。ペインさんに迷惑をかけないように、何かお手伝いするってのはどうかな？」

「それはいいかもな。ただし、パントさんには気づかれないようにしないとな」

「決まりだね。それじゃ、ティル。おとなしくしててね」

「はーい。わかったー」

伸び伸びとした声でテイルが返事をしたのを確認すると、二人は扉をそっと開けて部屋を出る。

幅の広い廊下の真ん中に立ち止まって辺りを見回し、とりあえず左側に行ってみる事にする。ペインは離れていく前に扉を閉めていった為、どこにいるのかわからないからである。

最初に目に入った部屋の中を覗き込むと、そこにはパントの姿があった。慌てて首を引っ込めながら改めてそっと覗き直すと、そこはまさしくアトリエであった。

壁際にある木製の棚には幾つも絵の具の入った瓶が並べられており、絵かきである事が一目瞭然とまで言える程。部屋の隅には、キヤンバスを支える道具である画架イーゼルがたくさん立て掛けられており、床にはくしゃくしゃになったスケッチブックの紙が、さっきいた部屋よりも散らばっている。

「ここじゃないみたいだな。まずは引き返そうか」

「見つかると怖いから、静かにね」

会話がパントに聞こえないようにひそひそ声で話しながら、そろそろ後退していく。一定の距離をとり、パントにはばれていないとわかったところで振り返り、続いてさっきの部屋から右の方に向かう。

他人の家でちょっとした探検気分にいる二人は、まだ見つかったはいないものの、忍び足で一つの部屋に入っていた。少しずつ物音が聞こえる方に進んでいくと、最初に見えたのは、床に座り込ん

でいるペインの後ろ姿。その周りには、先がボサボサになった筆が落ちている。

「あら、どうかしましたか？」

アルム達が近づいているのに気づいて振り向くペイン。その手にも、筆が握られており、その筆は一部がボサボサで、一部は綺麗になっている。筆の修復をしているのであろう。

「あの……何かお手伝いする事は無いかと思ひまして……」

「そんな、お客様なんだから結構ですよ。お気持ちだけありがたく受け取っておきます。私はちよつと買い出しに行ってくるので、どうぞゆっくりして下さい。と言つても、あの人のせいで、あまりゆっくりは出来ないかもしれませんが……」

顔を二人の方に向けて手元を見ないまま修復を終えると、近くに置いてあるバスケットを抱えて、ペインはまたもや忙^{せわ}しく姿を消してしまう。その後で静かに扉が閉まった音がしたので、町に向かったのは間違いなかった。



それからしばらくして、ペインさんが戻ってきたのは夕方近くの

事。バスケットの上には布が掛けられていて、何を買ってきたのかはわからなかった。

その間に僕たちは何をしていたかと言うと、実は何もしていなかった。ティールとシャトンが傍らで絵を描くのに夢中になっている間も、ひたすら考え事をしていたんだ。

時々、窓から外に溢れている芸術作品に目を遣ったり、もう一度絵の鑑賞をしていたりもしたけど、それ以外はぼんやりしているだけ。家に上げてもらっておいで、勝手に帰るなんて出来なかったから。

そうして、パントさんは一体どうしたんだろう——なんて悩んでいる時に、ペインさんが帰ってきたんだ。すごく疲れてみたいけど、それとはまた別に、嬉しそうにも見えた。

その後は、ペインさんが「日も傾いてきたから、今夜は泊まっていきなさい」って言うてくれたんだ。夕食もご馳走になって、今は寢床の中。寝る前に一日を振り返るのが好きだから、いろいろと思いついてたってわけ。

横を見ると、全員静かに眠ってる。今日も本当にいろいろあったから、疲れたのかもしれない。かく言う僕も眠いから、そろそろ寝ようかな——なんて思ってたら、部屋の外から物音が聞こえてきた。微かに光も漏れてきて、すごい気になるから、とりあえず藁の布団から出て見に行ってみる事にする。光のせいではなく、また別の理由で暖かい感じのする扉の向こうへと——。

第二十一話 ドーブル夫妻の日常／画家と支える妻／（後書き）

前書きにも書きました通り、今回は後半一人称視点という形を取らせて頂きました。まあ、出来は二の次という事で……（汗）

くどくど描写をしても進まない事に今さらながら気づきまして、少し展開を早めようとした結果です。それ以前に、ラデューシテイ用に考えたこの話自体が少々間違いでして……。それは後々説明したいと思います。

文章短い癖にのろのろした展開にそろそろうんざりした方もいらっしゃるかもしれませんが、このラデューシテイ編さえ終わればようやく物語の核心に少しずつ触れていくつもりではいますので、もうしばらくお付き合い下さい。

それではまた次回。なるべく早い内にお会いしましょう。

第二十二話 語られるペインの過去／二人の出会いの瞬間（おもいで）

皆を起こさないようにそっと扉を閉めて、僕は廊下に出た。空気はすっかり冷たくなっている。明るさの方はと言うと、微かに届いている光のおかげでようやく足元が見えるくらいに暗い。お化けかなんかが出ないか不安だけど、とりあえず明るい方に歩いていってみる。

その方向は左の方で、一番手前にある部屋の扉から漏れてきているみたい。あそこって確かお昼にパントさんがいた部屋じゃー？　そう思いながら、扉の隙間から中を覗いてみる。本当はパントさんがいたりしたら怖いし、ましてこんな時間に見つかったらどうしようかとも思ったけど、無駄な心配だって分かってほっとした。

「おや、こんな時間にどうしましたか？」

だって、そこにいたのはペインさんだったから。夜遅くに部屋を抜け出してここまで来たのに、全然怒っているようには見えない。寧ろ、優しく微笑みかけてくれている。

「あの……明かりが見えたので、何かなさってるのかなあと思いまして……」

「そうでしたか。起こしてしまったようでごめんなさいねえ。ちょっと準備をしてたんですよ」

本当は笑顔で怒ってるんじゃないかとも一瞬疑ったけど、それも取り越し苦労だったみたいで、ペインさんはすぐに足元のバスケットに視線を移した。僕もちょっと覗いてみると、何かいろんな種類

の色の着いた液体の入った入れ物が見えた。

それからペインさんは、赤色の液体の入った入れ物をの中から取り出すと、棚にある瓶の中に注ぎ始める。見る見る内に瓶は液体で満たされた。何かどろどろしてるし、昼はパントさんが使ってたから、あれは絵の具を補充してるみたい。でも、こんな夜遅くにどうして――

「これは、昼に補充の為に買ってきた物なんです。あの人が絵に速く取り組みやすいように、私がいつもこの時間にやってるんですよ」

――そんな事を考えてたら、僕の心を見透かしたみたいに、ペインさんは話してくれた。僕って、考えてる事が顔に出やすいのかな――なんて思ったけど、それより気になる事があって聞いてみる。

「いつもって、それはパントさんの仕事ではないんですか？」

「ええ。これは、私があの人に付いていくって決めた時から、私の仕事になってるんです」

「付いていく、ですか。あの……出来れば、パントさんとペインさんの馴れ初めなんか聞かせてもらってもいいですか？ 目が冴えちゃって……」

こんな事言ってみるけど、目が冴えてるというのは半分嘘。本当は眠くなってきたんだけど、聞ける時に聞いておきたいと思ったんだ。そうすれば、少しはパントさんがスランプになってる原因が分かるかなって。

「ふふ、何だか恥ずかしいわねえ。でも、別に面白い話じゃないん

ですよ？ 眠れないのなら、童話を読んであげますけど……」

「いえ、是非とも馴れ初めを聞きたいですっ」

こんな事言うのは子供らしくないって言われるかもしれないけど、そんなの今は気にしない。体格の差もあって、ちょっと上目遣いな感じで見つめていたら、ペインさんは優しく微笑みかけてくれた。

「分かりました。……何か孫に聞かせてるみたいだね。あれは何年前の事だったかしら……。正確には忘れてしまったけど、私がまだ若かった頃の事です。何をするでもなく、将来自分はどうしたいのか悩んで町をぶらついていたら時に出会ったのが、パントさんでした。出会った時からあの人は画家を志望していて、その日も絵を描いていました。同種族という事もあってか会話も弾んで、途中から絵のモデルになってくれないかと頼まれたんです」

ペインさんはそこで一旦切って、窓の方へと歩いていく。真っ暗になってる外の方をぼんやりと眺めてるみたいだけど、どうしたのか僕にはさっぱり分からない。

「私には……それがすごく嬉しかったのです。他人から見れば、ただ絵の題材にされたに過ぎないのでしょうが、私にとっては違いました。目標も無く、例えるならば真っ白だった私の心に、あの人は色を付けて描いてくれたのです。それから、あの人の家であるここに頻繁に手伝いに通うようになりました。それがいつの間にか生き甲斐になり、寄り添うようになったんです……」

全てを言い切ると、ペインさんは小さな溜め息を吐いてまた遠くの方を見つめる。この高台から見下ろしている方は確か――噴水の方角かな。と言う事は、あの部屋の絵が二人が出逢った時の絵だった

たんだ……。

「もうこのくらいですね。さあ、そろそろお休みなさいな」

「あつ、もう一つだけ聞きたい事があるんですけど……いいですか？」

ペインさんがこっちに近づいてきて僕の背中を押そうとするけど、まだ本当に聞きたい事が一つあるんだ。今の内に確かめたい事だから、とりあえずお願いしてみる。

「……いいですよ。何ですか？」

「えつと……ペインさんは今でもパントさんの事を愛してますか？」

これも僕なんかが軽々しく聞く事じゃないけど、パントさんのスランプを調べる為にはもっと二人についてよく知っておかないといけないって思ったからこそなんだ。

「全く……子供が聞く事じゃないですよ。でも、聞かれたからには答えないとね……。ええ、もちろん今でもあの人の事を想ってますよ」

何か少し怒ってるようにも見えるけど、恥ずかしそうにも見える表情でペインさんは答えてくれた。声もちょっと上擦ってるみたいで、以前お父さんとの出逢いを話してくれていた時のお母さんにそっくりだ。

「さあ、今度こそ寝ましようね」

さすがにこれ以上は限界みたいだね。僕も眠くなってきちゃったし……。

「それじゃ、ふわぁ……。ペインさん、おやすみなさーい」

「はい、おやすみなさい」

欠伸をかきながらペインさんに寝る挨拶をして、僕はみんなの寝てる部屋へと戻って眠りに着いたんだ――。



その翌朝、アルム達は部屋の外から聞こえてくる音で目が覚めた。眩しい朝日が差し込む窓から外を覗いてみると、時刻を知らせる為か目覚ましなのかは分からないが、町のポケモン達が和むようなゆったりとしたメロディーを奏でていた。

「アルム、おはようっ」

「うーん。ティル……おはよ……」

思いつ切り伸びをしてアルムとティルは同時にゆっくりと起き上がる。眠い目を擦りながら周りを見回すと、他の全員は既に目を覚ましていた。

何やら食欲をそえられるような香りがしてテーブルの方に目を向けると、その上には幾つもの料理が並べてあった。器や皿の数や料理の量からして、この部屋にいる全員分が用意されているようである。

「あれ、これは……？」

「ああ。ペインさんがわざわざ用意してくれたんだ。俺はお前達を起こそうとしたんだけど、ペインさんがそっとしておいて良いって言って、起こさないように静かに持って来てくれたんだぞ」

「えっ、ペインさんが？」

ヴァローの説明を横で聞きながら、アルムはテーブル上の料理をじっと見つめる。どういう風に作られているかは分からないが、しばしば母親の近くで料理の様子を観察していたアルムには、少なくともその品数や出来具合から判断して、時間を掛けて作られている事が分かった。アルムが昨晚部屋に戻ろうとした時も、ペインは絵の具の詰め替え作業を続けていた。その後でアルム達よりも早起きし、手間の掛かる料理を作っていたと考えると、大変な労働を熟した事になる。

「ペインさん、大丈夫なのかな？ 働きすぎてるように見えるけど……。それに、そもそもパントさんは何をしてるんだろう……」

「何ぼそぼそ独り言を言ってるんだ？ せっかく作ってくれた料理なんだ、早く食べようぜ」

回想と想像を巡らしてぼーっとしていたアルムは、ヴァローの言

葉でようやく意識が現実に戻り、朝食を食べる事にする。

その後、朝食を食べて終えた頃に、ペインが食器を回収する為に部屋に入って来た。部屋を出ようとする際、アルム達が何かを言い出す前に、ペインが遠慮せずに滞在してくれて良いと持ち掛けてきた。一泊させてもらったのだから十分だ——その意向をヴァローが伝えたのだが、パントに目的があって来たのなら、その目的を果たすまでいてくれて構わないと再度言ってくれたので、好意に甘える事にするのであった。

「ヴァロー、どうしようか……」

「ああ……絶対にパントさんに頼まなきゃならない訳じゃないけど、手掛かりも無しに一冊の本の一ページを見つけるなんて、ほぼ不可能だしな……」

ペインからの親切な申し出を受けた後で、二人は暫し考え込んでいた。ここまで来た目的も、最初の旅立ちの時こそ違えど、そもそもはテイルの正体を知る為。リーブタウンで凶鑑のジラーチに関するページが盗まれた事を知り、続くブルーメビレッジで探し物を見つけるのが得意なダブルの噂を聞き、そして今に至るのである。

テイルの正体を知る事は必要不可欠ではないが、せっかくここまで来たのだから、出来るなら知りたいという思いがある。しかし、パントのスランプが直るまで待っているというのも、ペインに対して迷惑をかけるようで申し訳がない。そう考えた二人は、同時にある決意をする。

「俺達でパントさんのスランプを何とか出来ないかって思ったんだけど」

「うん、僕もそれを考えてた。僕たちで出来る限りの事はしようよ。泊めてもらった恩返しの意味も込めて」

互いに見つめ合い、了解の意志を示すように頷くアルムとヴァロ。二人とも全く同じ事を考えていたのである。手取り早いと言ってしまうばそれまでだが、とにかくは確実な方法で先に進む為の決断である事も間違いない。そう確実した上で、二人は再び絵を描く事に没頭し始めたティルとシャトンを残し、一旦部屋を出た。幸いにも廊下には他に姿は見当たらない。

「さてと、これからどうするか……」

姿が見えないとは言え、いない訳ではないはず——そう考えた上で、先に小さい声で話し掛けたのはヴァローであった。

「僕は……パントさんの事をもっと知りたいから、パントさんの方に接触してみるね」

「ああ、分かった。お前が昨晚起きた後で何をしてたのかは知らないが、ペインさんの事は分かってるみたいだし、俺はペインさんの手伝いをしながらもっと深く聞いてみる事にするか……」

昨晚一人で部屋を出ていった事をヴァローに気づかれていた事に驚きつつ、軽く首を縦に一回振るアルム。パントに関わるのは緊張するのか、大きく深呼吸をして心臓の高鳴りを抑えると、右に曲がっていくヴァローに背を向けて、パントの工房へデリトリと向かうのであ

た。

第二十二話 語られるペインの過去／二人の出会いの瞬間（おもいで）／（後事

3週間ぶりの更新と言うのに、話がほとんど進展してないのはご愛嬌という事で↑

以前から考えていたこのラデューシテイの展開、なかなか進まないものを考えてしまったので、正直間違えたかなとも思ってますが、この後にテンポの良い展開を持ってくるならいいかなと思ってます。持ってた来なかったら問題ですけど↑

あと一話か二話で終わるかは分かりませんが、そろそろこのラデューシテイ編も終わりには近づいてます……たぶん。

それでは、また次回お会いしましょう。

第二十三話 人生の伴侶とは〜今までの想いを伝える為に〜

まだ午前中なせい、ひんやりと冷たくて固い木の板で出来た広い廊下。その中央を、アルムは静かに歩いている。別に忍び足にまでする必要は無いのだが、極力パントの目の前に行くまでは見つかりたくないというのがあってか、そろそろとした足取りは変わらない。それに加え、足の裏から伝わってくる冷たさがより一層緊張感を持たせているようである。

そんなゆっくりとした歩みを止めたのは、一つの扉の前だった。今までに二回訪れた、パントのアトリエの入り口。それはまるで、侵入を拒むかのように堂々とそびえ立っているようにアルムの目には映る。

「ティルの事を知るためだから……うん」

一回、また一回と深呼吸をして心を落ち着けようとするアルム。パントは別に悪いポケモンでもなければ、ただの怖いポケモンでもないとは思っているのだが、どうしても二度見た際に受けた冷たくて怖い印象が拭えずにいる。

五回ほど深呼吸を繰り返したところで、ようやく決心が付いたのか、扉の端に手を掛けてそっと引く。中には椅子に座り込む一人のドーブルー―パントの姿があり、筆と絵の具皿を持ってキャンバスと向かい合っている。

「あの……失礼します」

部屋に入った以上は声を掛けなくてはまずいと思い、アルムは小

声で入室を告げる。

「何だ……？ ん、お前は……」

声に反応して椅子ごと体を回転させ、アルムの姿を見つけるパン
ト。驚きのあまりか、目を大きく見開いており、アルムは思わず萎
縮してしまう。

「何故ここにいる……。わしは忙しいと言ったはずだ」

「それは、あの……ごめんなさい。ここに泊めて頂いたお礼を言お
うかと思って……。ありがとうございます」

アルムのこの感謝の言葉に嘘は無い。ここに来た本来の目的とは
少々違うが、それでも伝えたかった一つではあった。まだ叱られた
訳ではないものの、体をわなわなと震わせながら、頭を深々と下げ
た状態で固まる。頭を上げるのが怖いという思いからである。

「――まあ、構わんよ」

時が固着して動いていないのではないか。そんな錯覚まで覚えな
がら俯いているアルムの耳にふと聞こえてきた優しい声。それを確
認する為に恐る恐る顔を上げると、至って落ち着いた表情のパン
トが目に入った。決して笑みを浮かべているのでもなく、既にキャン
パスの方に視線を向けているが、それでもアルムには優しく映った。

「別に邪魔しに来た訳でもなさそうだからな。お前達が来てから、
あいつも何だか嬉しそうにも見える……。それと、わしは別に誰に
でも怒鳴り散らすのではないぞ」

昨夜のペインに引き続き、心を見透かされたようなパントの発言に、アルムはばつが悪そうに苦笑いする。それと同時に、今まで恐れから固まっていた心がすつと楽になっていくのを感じ、パントの元に歩み寄っていく。

「突然で失礼ですけど、絵が上手く描けないって本当ですか？ 実は僕たち、お願いしたい事があって来たんですけど……」

「ここに来た理由はもう知ってる。だが、お前が言った通り、今は描けないのだよ。最近はめっきり、な」

そこで初めてパントが見せた暗い表情。心を許したのか、その理由は定かではないが、少なくともこの二日間で抱いていたパントの怖いイメージは消え去った。だからといって、問題が解決した訳ではないのも事実。しかし、アルムにはまだ何も良い案が思い浮かんでおらず、暫し沈黙が続く。

「あのっ……絵を描くのって楽しいですか？」

やや苦し紛れにその空気を破ったのは、アルムの方だった。もちろん、即席で考えたとは言え、絵を描いた事の無いアルムにとって聞きたくない事では無かった。

「楽しい、か……。最近が生業としてしか描いていなかったから、久しくその感覚は忘れていたな。しばらく休んだ方が良いのか……」

「そ、それじゃ、もう一つのアトリエに来てくれませんか？ 今までちゃんと紹介出来なかった友達を紹介したいです。もしお邪魔じやなければですが……」

「ああ、休憩しようと思ってたから別に構わんぞ」

突然アルムが持ち掛けた提案に、パントは嫌な顔もする事なく承諾する。それに些かほっとしたアルムは、パントの後ろに付いてその場を後にして、もう一つのアトリエの方へと入っていく。

相変わらず部屋の中ではティルとシャトンが床に紙を置いて絵を描き続けており、レイルとガードは部屋の隅でその様子をただ眺めている。

「あつ、アルム！ それに、ダブルのおじいちゃんも一緒だ」

二人が入って来たのに最初に気づいたのはティル。片手には筆を、もう一方の手には紙を握ったままふふわと飛んで近寄ってくる。

「ねーねー、これ見て！ ボクが描いたんだよー！」

満面の笑みを浮かべながら、どこか誇らしげにその紙をアルム達に差し出すティル。パントが受け取ったのを確認すると、すぐにシャトンのところに戻って再び楽しそうに絵を描き始めた。

一方で、アルムとパントはティルから受け取った絵を眺める。そこには、少なくとも何かを模写しているようには見えない程に、色がぐちゃぐちゃに塗られているだけであつた。

「あはは……これは何と言うか――」

「なるほど……こういう事なのだな……」

苦笑いをしているアルムの言葉を遮るのは、他でもないパント。何か呆けたような表情で絵を手に持ったまま、テイルとシャトンに近づいていく。

「お前達、絵を描くのは——楽しいか？」

屈んだ状態のパントの口から、ふと小さな声が零れた。

「うんっ。すごく楽しい！」

「私も楽しいでしっ！」

視線を斜め上のパントに向け、テイルとシャトン是真つすぐな思いを口にした。返答を聞いたパントは、「そうか」と一言呟くと、口元を僅かに綻ばせながら、ゆっくりと立ち上がる。

「パントさん、一体……」

「いや、な。あやつらの描く絵が——」

次の言葉をパントが紡ぎ出そうとした時、突如として壁を隔てて何かが割れる音が聞こえてきた。慌ててアルムとパントは部屋を出て、音のした方に駆け出す。

音が聞こえたのは、ヴァローが向かった部屋——つまりは、ペインのいる部屋だった。辿り着いた二人の目の前には、床に座り込むペインの姿があり、その視線の先には割れた瓶の欠片と赤と青の二色の絵の具がぶちまけられている。その傍らには、ヴァローがただ

立ち尽くしていた。

「な、何だ、これは……」

「あつ、あなた……」

驚いた表情で呟いた一言でパントの存在に気づき、ペインは恐る恐る顔を上げる。

「……ペイン、後でわしの部屋に来なさい」

視線を絵の具から一瞬だけペインの方に移すと、パントはそのままそそくさと扉の方へと歩いていく。取っ手に手を掛けて開けると、聞き耳を立てていたのか、ティルとシャトンが倒れるように部屋の中になだれ込んできた。

「ティルにシャトン。どうしたの？」

「ケンカは……ケンカはダメだよっ！」

「そうでしょ！ ケンカはダメなんでし……」

先のパントの発言を聞いていたからか、今の状況を見て理解したからか、いつもは明るい顔に悲しそうな色を浮かべながら二人は必死に叫んだ。それは、子供心に感じたところがあるからなのだろう。

「……大丈夫だ。誰もケンカなんかしてないからな……」

自分の両脇にいる二人の頭に、パントはそっと手を添えて優しく撫でる。その顔は――今までに無く暖かく、優しいものとなってい

た。目立たない程度に顔に刻まれている皺しわも、怖さを増すものではなく、優しさを強調させるものとなっている。

一方で、自分には見せてくれずに、ティルとシャトンには微笑みを見せた事に心の片隅で焼き餅を焼くアルム。一瞬パントから目を逸らして絵の具の方に目を遣った時、パントのアトリエの光景を思い出し、何かを悟ったようにはっとする。

「パントさん、ペインさんは——」

「分かっておる。ペイン、必ず後で部屋に来なさい」

「……はい。分かりました」

アルムが何かを言いかけたところで、パントは再びペインの方へ背を向けて部屋を出ていってしまった。一同は、その後ろ姿を呆然と見つめるだけであった。

その後、全員で協力して床を掃除し終わると、ペインはアルム達に第二のアトリエで待っているように言った。ペインがパントの呼び付け通りにアトリエに行くのは分かっていたが、下手に干渉してもいけないと分かっていたので、おとなしく待つ事にする——

「僕たちも、そっと付いていこうか」

——はずもなく、ペインには気づかれないうちに覗く事にする。

場所は変わって、パントのアトリエ。両手を後ろに回した状態で、パントは窓から外を眺めており、その背後ではペインがやや俯き加減で立っている。

「あの……あなた――」

いつも叱られていても、やはり慣れるものではないのだろうか。怖ず怖ずと頭を上げるペイン。最初に謝罪の言葉を口に出そうとした時、パントが不意にペインの両手を握った。

「こんなに手が荒れるまで……筆の手入れをしてくれてたんだな……」

老化によるものではない、やや荒れているペインの手を自分の手の平に置きながら、パントは手と顔を交互に見つめる。

「あなた……どうしたのですか？」

「……わしは気づかなかったのだ。筆の事も、絵の具の事も。全部買い揃えているものだとばかり思っていたが、まさかお前が調合して微妙な色合いの物を作ってくれていたのだな……」

今度は、その視線を絵の具の瓶が置かれた棚の方へと遣る。その瓶に入った様々な色の絵の具を一つ一つ確認するかのように見た後、再び真っ直ぐペインを見据える。

「わしは……生活の為に絵を描く事に夢中になっていて、大事な事を忘れていた。一つは、絵を描く事を楽しむ事だ……」

パントは一旦ペインの手を離し、近くの机の上に乗っている一枚

の紙を掴んで広げる。そこには、ティルとシャトンの落書きのような絵が描かれている。

「あやつらのおかげで、忘れていた“楽しい”という感覚を思い出せたような気がする。そしてもう一つ忘れていた、もっと大切な事、それは――お前という存在の大切さだ」

「えっ……！ 私が……？」

いつもとは全く違う空気を放つパントの口から飛び出た言葉に、ペインは戸惑って驚きの声を上げる。

「いつだってお前が支えてくれていたのに、いつの間にかその事を当たり前だと思っていた。わしは本当に間抜けだ。今まで全てを自分一人でやって来たと勘違いしていた……」

思いを全て聞いて受け止めよう――そう思って黙っているペインの右手をパントはそっと握る。扉の隙間から覗いてるアルム達も含め、何をするのかと見守る中、パントはペインと目を合わせ、大きく深呼吸をして口を開く。

「ペイン、本当にここまで付いてきてくれて、ありがとう。お前がいなければ、ここまで続ける事が出来なかっただろうな……」

感謝の想いを込め、一つ一つ零れるパントの言葉。それは、決して以前から考えていたものではなく、自然と紡ぎ出されていたまさしく想いの結晶であった。

そんなパントの心からの言葉を聞いて、しばらく呆然として動かなかったペインは、ふと目から一粒の雫を零していた。

「あれ……どうしたんでしょう、涙なんて……。その言葉を何十年ぶりに聞いたからでしょうか……」

その一粒を機に、次から次へと溢れ出すのは、大粒の熱い涙。今まで溜め込んでいた想いが、塞き止める事なくその涙に乗って流れていく。

自分で好んでパントの手伝いをしていたものの、それが果たしてパントに喜ばれているのか、迷惑ではないのか——ペインはペインで悩んでいたのである。そして、その全ての行為が報われたような気がして、ほっとしたのである。

「そして、今度は見せたい物があるんだ」

まだ感謝の——“ありがとう”の想いを暖かさを残した手を繋いだまま、パントは部屋の片隅に立てかけられている一つのキャンバスの前に誘う。そのキャンバスには一枚の布が掛けられており、何が描いてあるかはまだ分からない。

「本当はもっと早く見せたかったのだが、これが完成するまでは他の絵を描かないと決めたら、余計に迷ってしまっただけ……」

苦笑を浮かべながら、パントは思い切って布を引っ張る。顕わになったキャンバスには、大きな噴水と二人のダブルが描かれていた。

「この絵ってもしかして……」

「うむ。わしとお前が初めて出逢って、モデルになってもらって描

いた絵だ。これは新しい形だがな」

パントに言われてよく見てみると、第二のアトリエに置かれていた絵とは違い、パントとペインの二人になっている上、やや老け顔になっている。

「この絵をお前に贈って、もう一つ言いたい事があったんだ」

改めてペインの方に向き直ったパントが、再度真剣な表情をして話し始める。

「……今まで迷惑をかけてきたが、これからもわしに付いてきてくれないか？　そして……二度塗りになってしまいかもしれないが、もう一度お前の未来を描かせてくれないか？　今度こそ綺麗な作品に仕上げてみせるから……」

思いの丈を言い切ると、パントは口を一文字に閉ざして返答を待つ。突然の告白に、一瞬ペインは驚いたような面持ちになるが、すぐに微笑んでみせる。

「ふふっ、あなたが洒落た事を言う時は、いつも真っ直ぐな思いを伝えてくれてましたね。もちろん、あなたと一緒にになった時から、あなたの夢は二人の夢になってましたから。こちらこそ、願います。私はいつでもあなた色に染まる覚悟は出来てますから……」

どんな答えが返ってくるのかと緊張しているパントの手を優しく握って、ペインはそっと涙を流しながら返した。

「そうか……今度は塗る色を間違えないようにするからな……」

ゆっくりとその顔を緩ませていき、笑顔を見せるパント。その目からは、ペインと同じものが流れ落ちていくのだった――

第二十四話 パントの描く未来の正体く近づくものと、遠ざかるものとく

しばらく互いの手を握りながら涙を流し続け、想いを再確認した二人。終了を告げると言わんばかりに笑みを零すと、両手を離してそれぞれ椅子に座り込んだ。

「そういえば、あやつらにもお礼を言わなくてはな……。それに、用事があつてここに来たようだからな……」

「そうですね。準備をしたら、あの坊や達のところに行きましょう」

休むのも早々に椅子から立ち上がると、二人は扉に向かって歩いてくる。流石に覗き見していた事がばれてはまずいと思ったアルム達は、息を殺しながら忍び足で部屋へと戻っていった。

そうして慌てて戻ったアルム達だったが、その後一向に二人は現れなかった。

とりあえず、無駄に待ちぼうけを喰らう事になった。

「パントさん達、来ないな……」

「うん。まあ……仲直り出来たみたいだから、僕達の方は安心だけだね」

ヴァローが大きく欠伸をする前を通りながら、先程の二人を思い出して微笑むアルム。まるで、自分の事のように嬉しそうである。

「主、一つ伺いたい事があるのですが、よろしいでしょうか？」

今までひたすら観察をしていて黙っていたレイルが、突如アルムの行く先に現れて疑問を投げ掛ける。

「うん、いいよ。それで、何？」

「はい。私は旅に同行させて頂く中で、涙は“悲しい”という感情の時に流す物だと学びました。そして、“楽しい”、“嬉しい”という感情も学びました。だからこそ分からないのです。何故あの二方は“嬉しい”はずなのに、涙を流していたのが……」

それはまさしく、感情というものを学び、覚え始めたレイルならではの質問だった。無機質な声のはずなのに、どこかそうは感じさせないような僅かな抑揚が感じられる。

「それはね、嬉し泣きとか、嬉し涙って言うものなんだよ。みんなが泣くのは、悲しいからだけじゃないんだ」

一応その答えが分かっているアルムは、まるでテイルに説明する時のように丁寧に分かりやすく話す。すると、レイルは理解したように小さく頷いて、アルムから離れていこうとする。

「あ、あのさっ、レイル……」

その後ろ姿を見た瞬間に、アルムはやや遠慮がちにレイルを呼び止めた。そのアルムの表情は、嬉しさと不安が入り混じったような色である。

「はい、何でしょうか……?」

「もしかして君は——いや、ごめん。やっぱり何でもないや」

ふと一連の会話の中で気づいた事を聞こうとするアルムだったが、ちよつと躊躇いを見せて止める事にする。別段気にする様子も無いレイルは、再び背を向けて離れていくのだった。

それから十分も経たない内に、パントとペインがキャンバスや絵の具などの絵画セットを抱えて部屋に入ってきた。

「えっと……パントさん? 何をするのですか?」

「お前達は探し物があって来たのであろう? だから、今からその作業をするんだ。お礼と言っては何だがな……」

もうパントの顔や言葉にぎすぎすした感じは無かった。まだ完全に心を開いた訳では無いが、それでも安心したアルムは明るい表情に見せる。

「それで、探して欲しい物は何だ?」

「はい、それが、リープタウンにある図鑑の一ページなんですけど……分かりますか?」

ここまで来て何だが、アルムには一抹の不安があった。それは、全くと言っていい程に手がかりの無い物を探せるのかという事だっ

た。

「大丈夫だ。何かその凶鑑に関係ある物は持ってないか？」

「あっ……そういえば！」

パントの言葉を受けて、アルムは何かを思い出したようにリュックの中を探し始める。徐に取り出したのは、一枚の葉だった。

重くて運べないという理由で、凶鑑を持ち出す事も出来なかったが、その代わりとして、クインがあ凶鑑専用の葉を渡してくれたのである。クインにはこうなる事がある程度分かっていたのである。

「うむ、十分だ。それでは行くぞ、ペイン」

「はい。分かってます」

パントは受け取った葉を右手に持つと、今度は左手でペインの右手を握った。互いに見つめ合って一度頷くと、それが合図とばかりにペインは目をそっと閉じる。

全員が固唾を吞んでじっと見つめる中、変化は突如として訪れた。ペインの周りに小さな光の粒が複数出現し、円を描くようにぐるぐると回り始めた。その光の粒は同時にパントの方にも現れ、同じように円を描いて体の周りを回る。

やがて二つの“光の円”はゆっくりと浮上していき、二人の頭上でぴたりと止まる。それらは一呼吸置いたところで横方向に動き出して交差し、それぞれ別の宿主の体を囲むように降下していき、胴の位置に来たところでそれぞれの体に溶け込んでいった。

「あなた、終わりましたよ」

「ああ。次はわしの番だな……」

ふっとペインの手を離すと、今度はその手で筆を握って目を閉じるパント。数秒の間を置いて目を開いた時には、その目は青白い光を放っていた。意識はちゃんとあるようで、すらすらとキャンバスに向かって筆を走らせ始めた。

「ペインさん。これは一体どうなってるんですか？」

「順を追って説明しますね。まずは物を探す――この要素を満たす為に、私が“スキルスワップ”を使って、別のポケモンから“ものひろい”の特性を一旦借り受けるんです。そして、それをあの人に移す訳です。もちろん、その方にはお礼をさせて頂いてますけどね。ここまで分かりますか？」

全員がさっきの光の円を思い出して、相槌を打つように何度も頷く。理解出来た事を確認して、ペインはさらに続ける。

「しかし、それだけでは、あくまで物を拾うだけです。そこで、今度は“みらいよち”を使いながら絵を描く事で、これから先の探し物の行方を追え、かつ誰にでも分かる絵として現せるのです。“スケッチ”を使える私達ならではの事なんです」

「なるほど……。でも、それじゃ探し物と関係ある物が必要な理由は……？」

「それはですね、あの人の“みらいよち”が、痕跡を辿って物を探

すのに長けている——と言うか、特化してるからなんです。それもこれも、とある巫女さんのお力のおかげなんですけど……」

アルムの質問にもちゃんと答えながら、ペインは丁寧出来る限りの説明をしてくれた。ところどころ不明瞭なところはあるもの、ある程度は理解出来たのか、一様に感嘆の声を上げる。しかし、アルムだけは納得行かない様子で訝しげな表情を浮かべる。

「あいつ、今言った巫女って言うのは——」

「よしっ、絵が完成したぞ」

幾度としてアルムの言葉を遮るのは、相変わらずパントだった。質問したい事があったが、一番の目的である絵が完成したという事で、とりあえずパントの方に視線を向ける。

並べて置かれている二枚のキャンバス。一枚には、高貴な感じが漂う高い赤い台座の上に一つの小さな箱が乗っており、その陰に水色のポケモンの影が潜んでいるという絵が描いてある。そしてもう一枚の方には、一面真っ黒に塗られたその中心にある青色と緑色で構成されている球体に輝^{ひび}が入っているという絵が描かれている。

「まずはこっちの台座の絵だな。こんな事は初めてだが……どうやら誰かが干渉して妨害をしてるとしか思えないのだ。本来なら、その持ち主と探し物が正確に描けるはずなのだが……。だが、全く関係無いという事ではなく、寧ろ普通の“みらいよち”になったのだ。恐らくこの次の町で、ここに描かれている水色のポケモンに出逢うだろう。そして、このポケモンが鍵を握っているのは間違いない」

複雑な面持ちで腕組みをしながら説明をするパント。その話に、テイルを除いた一同は、顔を強張らせながら聴き入っている。

「それでもう一つ。こっちはおまけに描いたのだが……こっちの方が重要みたいだ。まず結論から言わせてもらおうなら……今後、そのジラーチと係わり合うのは危険だ。生半可な気持ちで関わるのは命取りになるぞ……」

いきなりの深刻な展開に、今度は全員が驚きの表情を見せる。いつも冷静なガートまでが。同時に、その場の空気が一気に凍りつく。

「ど、どういう事ですか？ そんな、テイルに何かあるとは思えません！ だって、こんなに明るくて無邪気なテイルといると危険なんて……！」

真っ先に反論を言ったのはアルム。言葉の羅列としては理由が上手く説明出来ないものとなっていたが、少なくとも思いは伝わってくるようなものである。

「まあ、落ち着きなさい。これはあくまで、未だ来ない——未来なのだ。そして、これが本当にそのテイルとやらに関係しているのかも定かではない。しかし……お前達の事を考えながら描いていたら、自然とこのような物が出来上がった。これだけは事実だから、可能性として受け止めておいてくれ……」

「はい、分かりました」

不安で胸が一杯になるものの、確実ではないという事を知り、アルムはほっと胸を撫で下ろす。それは他の皆も同じらしく、背後からはいくつかの安堵の溜め息が聞こえてきた。

「さて、これからどうしますか？」

緊張の糸が解けたところで、ふとペインが別の話題を持ち掛けてきた。いつまで居てくれても構わないとパントとペインは優しく言うてくれたが、この町での目的は果たしたので、早く次の目的を果たす為に旅立つと告げて帰りの支度を始める。

「皆さんがいなくなると、何だか寂しくなりますね。外まで見送りは出来ませんが、どうぞ気をつけて。またいつでも寄っていつて下さいな」

「はい。ペインさん、いろいろとありがとうございました」

それから素早く支度を済ませた後、アルム達は家の玄関にて見送りを受けていた。

「町を出るには、最初入って来たところに戻っていくと良い。ここからだったら、西に向かったスパーダというエルレイドのところが一番近いだろう。では……道中は気をつけてな」

「はい。パントさんも、お世話になりました。お二人とも、お元気で！」

「バイバイ。またねー！」

アルムは頭を下げ、テイルは元気に大きく手を振りながら背を向けて、パントとペインの家を後にするのだった。



パント達と別れてからしばらく西に歩いたところに、見覚えのある小屋が建っていた。近づいていくにつれ、徐々にその中にいるエルレイド―スパーダの姿もはっきりと確認出来るようになる。

「なあ、お前ら……」

今の今まで、ずっと黙りこくっていたガートが不意に口を開いた。

「……俺達はここで別れる」

『えっ……どういう事です（でし）！？』

即座に驚いて反応するアルムとシャトン。シャトンが驚くという事は、ガート一人で決めたという事になる。

「でも、お兄ちゃん。私、もっとアルム達と一緒に旅がしたいです……」

「いや、駄目だ。さっきのを聞いただろ。関わるのは危険だって」

「そ、それでも付いていきたいです……」

「兄として、同伴者として言わせてもらう。駄目だ。ブルーメビレ

ツジに帰るぞ」

いつもの愛らしい笑顔は消え、シャトンは必死にガートの意見に反対しようとする。しかし、頑なに連れて帰ろうとするガートに遂には押し負けてしまい、渋々頷いて受け入れる事にする。

その様子をずっと側で見ていたアルムも、シャトンとはまだ楽しい旅を続けたいという思いがあったが、ガートの言い分も尤もである事は分かっているので、敢えて口出ししない事にする。決して旅をするのが嫌になった訳ではないのも、そして何より、シャトンを心配する気持ちは痛い程分かっていたからである。

「……っ！ 誰だ！」

そうして再び重苦しい空気になった中、突然反射的にヴァローが上空に怒号を飛ばした。そのまま威嚇行動を取って、ある一点を睨みつける。

「ヴァロー、急にどうしたの？」

「……いや、俺の勘違いだったみたいだ。誰かに監視されてるような気がしたんだ」

「気のせいじゃない？ とにかく、早くスパードさんのところに行こう！」

まだ不審な感じは否めないものの、今は何も感じなくなり、ヴァローはアルム達の後を追う事にする。

その後、スパーダと再開し、アルム達とガート達は別れるという事で、別々の場所に“テレポート”で出る事という旨を知らされた。

「ここでお別れだね。短い間だったけど、一緒に旅が出来て楽しかったよ」

「私もでし！　まるで、昔もこうやって旅をしてたみたいでし！」

「ボク達、また会えるよね？　そしたら、また一緒に旅をしようね！」

「うんっ。もちろんでしっ！」

アルムとテイルからそれぞれ別れの挨拶を受けるシャトンの目には、うっすら寂しそうな色が映っている。それでも、気を遣わせないようにと、いつも通りに笑ってみせる。

「ガートさんも……一応世話になりました」

「まあ、俺は何もしてないけどな……」

こちらで別れを告げるのは、ヴァローとガート。相変わらず仲良くなった訳ではなさそうだが、それでも悪い関係では無くなったようである。互いに握手を交わすと、ヴァローはアルム達と一緒にスパーダの元に駆けていく。

「それじゃ、またね！」

手を振りながら口に出すその言葉を最後に、アルム達は“テレポ
ート”で一瞬にしてガートとシャトンの目の前から姿を消してしま
った。シャトンは名残惜しそうにその消えた後に残った足跡を見つ
めて、スパードが戻るのをじっと待つのであった。



「さあ、次は貴方達の番です。では、参りましょう」

それから、スパードが戻ってくるのにさほど時間は掛からなかつ
た。すぐにしよげているシャトンを抱え、ガートの右手を握った状
態でスパードは、再び“テレポート”で町の外へと出た。自分の周
りの空間が振曲がるような奇妙な感覚を再び味わいながら、刹那の
移動を開始する。

一秒も経たずして空間移動で現れたのは、ラデューシテイのドー
ムの外周では一番ブルーメビレッジに近い場所であり、来る時にも
一度通った場所であった。

「それでは、貴方達もお気をつけて……」

頭を下げているスパードの見送りを受けながら、シャトンとガー
トは一路故郷へと歩みを進めていく。その足取りは、二人してどこ
か重いものに見える。

「ふむ、あれもジラーチの接触者か……。では、今の内に消すか……」

その二人の様子を監視するかのようにつめる一つの怪しい影。それは、自らの羽を器用に羽ばたかせて、ドームの上で滞空ホバリングを続けている。

そして、決意をしたように羽を大きく広げると、大きく一回羽ばたかせる。その素早い羽の動きから生み出される衝撃波は、無防備な二人に向かって真っ直ぐ飛んでいく――

第二十五話 襲撃者との激突！素早さ対決の行方は！

空気を切り裂くように高い音を立てながら、斜め下に向かっていく素早い衝撃波。それは狙い通りに進み続け、確実にシャトンとガートの体を引き裂かんとしている。

「はっ、行けっ！」

恍惚な表情をしているのが容易に想像出来る程の笑い声がドームの上から響く中、僅か数十センチまで衝撃波が近づいた時、横から飛んできた別の三日月型のエネルギー波に打ち消されてしまった。そのエネルギー波を放った主は――スパードである。

「二人とも、大丈夫ですか？」

「ああ、あんたのおかげでな」

急いで駆け寄って、二人の無事を確認するスパード。ほっと安心したのもつかの間、鋭い眼光をドームの上に向かって飛ばす。陽射しが逆光になってる位置にいたのは、六本の足があり、背中や尾には薄い羽根と鋭く尖った突起を持つ、蜻蛉とんぼのようなポケモン――メガヤンマである。

「あのポケモンが攻撃をしてきたんですね……。貴方達は早くここから逃げて下さい」

じっとメガヤンマを見据えたまま、顔を背ける事なくガート達に指示を出すスパード。対するガートも何か言い返そうとするが、ふとスパードの後ろ姿から強大な威圧感のような闘気を感じ、黙って

シャトンを連れ、その場を離れていく。

「……おめおめと目の前で獲物^{ターゲット}を逃がすと思うか？」

再び臨戦体勢に入るメガヤンマ。四枚の薄い羽根を広げながら体を少し折り曲げ、二人に向かって衝撃波を放とうと構える――

「そうはさせませんよ」

――が、背後から静かに、重い声が耳に響くように聞こえてきて、メガヤンマは素早く離脱する。いつの間にか、“テレポート”で後ろを取っていたのである。攻撃を止めたのを確認すると、スパーダはドームの上から再び地上に降りる。

「あくまで邪魔をするつもりか。ならば、貴様を倒して遂行させてもらおう……」

怪しくその複眼を光らせると、メガヤンマは体を真っ直ぐに伸ばし、瞬時に加速して突進する。先の衝撃波に負けず劣らず速いスピードで繰り出される体当たり――それはまさしく“でんこうせっか”。スパーダはその速度に臆する事なく、淡い緑色のエネルギーの衣を纏った両腕をクロスさせ、肘の刀を突き出して防御の体勢に入る。

直後、二つの技――“リーフブレード”と“でんこうせっか”がぶつかり合って走る衝撃の中、二人は押し合い続ける。やがて、スパーダが後ろに伸ばした支えの脚に力を込めて押し始め、最後にはメガヤンマの体を弾き飛ばす。

「ふん、余の初撃を受け止めるとは、大したものだな……っ！」

まだまだ余裕といった様子のメガヤンマの眼前に突如、薄紫色の三日月型の刃が現れる。先程までの緑色から薄紫色に変わっている、肘の刀に纏っているエネルギー。それを収束して放たれたその刃は、ぎりぎり回避行動を取ったメガヤンマの体を掠めて飛んでいった。

「無駄口を叩いてる暇がありますか？」

「ちっ、“サイコカッター”か。味な真似をしてくれる……」

接近するのは得策ではないと感じたメガヤンマは、一旦上空へと飛び上がる。スパードも追撃とばかりに連続で腕を振って刃を放つが、距離を取っている現状では、軽々とあしらわれてしまう。

「さあ、今度はただの羽ばたきが生む衝撃波ではない。覚悟するがいい——」

技が当たらないのに苦勞しているスパードを尻目に、メガヤンマは意気込みも強く羽根を広げると、さっきと同じように大きく羽ばたかせる。しかし、今回ののは宣言の通りに違っていた。

ただの衝撃波ではなく、スパードの“サイコカッター”のように湾曲した空色のエネルギー弾が無数に、スパード標的目掛けて襲い掛かる。

狙われている当の本人はというと、落ち着いた様子で相手の攻撃を見据えながら一度小さく息を吐き出し、肘の刀に再度サイコパワーを集中させる。そして、腕を前に突き出した状態で一歩踏み出し、素早い剣捌きで刃の群れを往^いなしていく。

腕の振りによってタイムロスが生まれて防げない分は、その腕を振った勢いを利用して身を翻しながら、見事に躲^{かわ}していく。その行

為が行われ、全ての攻撃を防ぎ、躲しきるまでに要した時間は、三秒も掛からなかった。

「ぐぬぬ……“テレポート”で逃げれば良かったものを……」

その広範囲が見える眼を活かし、“テレポート”で出現した瞬間を狙って攻撃を喰らわせるつもりだったメガヤンマ。彼にとって、この行動は予想外のようで、悔しそうに唸り声を上げる。

「あなたの“エアスラッシュ”も、なかなかの威力でしたよ。防ぐ時の衝撃のおかげで回避が難しくなり、一発貫ってしまいそうになりました」

息一つ切らす様子もなく、悠々と立っているスパイダ。まるでメガヤンマを手玉に取っているかの如く言い放つと、恐怖を感じさせるまでの笑顔を見せる。

「まさか、ここまで盾突くとは思わなかったぞ……。では、これならどうかな？」

一瞬毒気に当てられるも、すぐさま冷静に戻ったようで、メガヤンマはジグザグに飛行して攪乱しながら徐々に接近していく。些か先程よりも素早い動きに、スパイダは正確に目で追いながらタイミングを計って超能力の三日月型の刃を放つ。

「さっきの不意打ちでいい気になるなよ……」

受ける方と言うと、身軽な動きで易々と刃を避けながら近づいてくる。それと同時に、強靱な顎を擦り合わせ、歯ぎしりのような不快な音を発する。

「ぐっ……なんて“いやなおと”……」

これには、スパイダも堪らず耳を押さえる。その隙に急加速して懷に飛び込み、脚の一本を突き出して標的の体を切り裂いた。しかし、スパイダもただではやられず、すれ違い様に尾の部分を切り付ける。

「くっ……やはり手練れのようなですね。素早さに長けた強者のメガヤンマがいると聞いた事がありますが……」

受けたダメージが想像以上に大きいのか、スパイダは攻撃の当たった胸の部分を押さえながら、初めて苦悶の色を見せる。

「そうだ。余こそが、“迅速の蜻蛉”^{かげろう}の二つ名を持つメガヤンマだ」

誇らしげに言い放つその様子は、スパイダの反撃をものともしていないようである。

「では、その名の所以を見せてやろう——」

自己紹介も早々に、メガヤンマはその場から瞬時に姿を消した。“レポート”を使えるはずも無いはずなのに、その速度はまさしく瞬間移動のようだった。

「一体どこへ——っ！」

目を忙しく動かし、辺りを見渡すスパイダ。突然目を見張り、表情が険しくなる——その視線の先には、自分を取り囲むように飛び回っている無数の影があった。

「ふふっ……余の特性——“かそく”をお忘れでないかな？」

全ての影から聞こえてくるかのように響く言葉。その言葉から察する限り、影は一つを除いて、全ては残像という事になる。

「さあ、防ぎきれるかな？」

自信たっぷりの発言が開始の合図とばかりに、スパードの背後から空色の刃が迫りくる。スパードは即座に反応してこれを避けるが、直後に背中に衝撃が走った。“エアスラッシュ”はあくまで四であり、そちらに気を取られている隙に直接攻撃を加えたようである。

スパードも何とか見極めながら往なそうとしていくが、体力だけが少しずつ削られていくばかり。前から体当たりしてくるかと思えば、すぐにその背後から攻撃が来る。この繰り返しだった。

「仕方ない……。そろそろ切り換ええないといけないですね……」

肩で息をするようになりながら、スパードは静かに目を閉じた。そこから急に、彼を取り巻く空気が一変する。今まで溢れ出していた炎のような攻撃的な闘気ではなく、落ち着いた静かな——例えるならば、水のような気を放ち始める。

敵も移動を続けながら様子を見守っている中で、スパードは膝を折ってしゃがみ込んだ。すると、その姿勢を保ったままで左腕を引いて脇に添え、右腕を前に回して左腕と脇腹の隙間に通す。その様子はまるで、鞘に入った刀を持って構えているようである。

「ふん、遂には降参したか。だからと言って、容赦はせん……！」

小さい攻撃を与えてはいるものの、決定打が決まらずに苛立っていたメガヤンマは、止めの一撃を加えようと最大加速で背後から襲い掛かろうとする。

互いの距離が僅か数メートルに近づいた時、スパードは自分を傷つけんとする敵の方に瞬時に振り向き――

「ぐああっ！」

――次の瞬間には、メガヤンマが自身の進行方向とは逆の方に吹き飛ばされていた。その体が地面へと叩き付けられるのと同時に、剣士のような出で立ちのエルレイド――スパードは、振り上げた右腕をそつと下ろす。

「ぐっ……何だ、今は……。太刀筋が全く見えなかったぞ。一体何をした……？」

「“いあいぎり”ですよ。一般に“いあいぎり”とは、単に斬る技のように思われがちですが、元は自らの“居合い”に入った者を“斬り”つけるもの。それをやったまでです」

やられた側が抱く素朴な疑問に丁寧な答えながら、スパードは一歩ずつ歩み寄っていく。

「あの目にも留まらぬ振り抜きのスピード……。もしや貴様、“六^{りっ}徳の魔剣士”の異名を持つスパードか……！」

「その名前で呼ばれるのは懐かしいですね……。尤も、その名前は好きではありませんが」

先程までの高飛車な態度は消え去り、声を震わせているメガヤンマに、大きな影が覆いかぶさった。スパードが腕を組みながら仁王立ちをして、倒した相手を見下ろしているのである。

「それでは、何故彼等を襲おうとしたのか、話して頂きましようか」

言葉遣いは相変わらず丁寧だが、その表情や声色は決して穏やかなものではない。メガヤンマも思わず身震いをする。

「戦いに負けた今、貴方に抵抗する事は不可能です。さあ、貴方の目的は何ですか？」

「なんの……まだ特性は続いている。ここで、余たちの目的を知られる訳にはいかんのだ！」

詰め寄って問い質そうとするスパードが一步後ろに身を引く程の迫力のある怒号を放つと、メガヤンマは羽根を震わせて砂埃を立て始めた。この視界では目も開けていられない為、スパードは腕で目を庇う事にする。しばらく堪えている内に、砂埃は徐々に晴れていったが、既に眼下にメガヤンマの姿は無かった。

「逃げられましたか。爪が甘かったようですね……。しかし、一体目的は何だったんでしょう……」

天を仰ぎながらふと漏らす、不安の籠ったスパードの呟きは、一陣の突風に流されて掻き消えていくのだった――。

第二十五話 襲撃者との激突！素早さ対決の行方は？（後書き）

何やら躍動感も捻りも無い戦闘でしたが、とりあえずがらっと空気を変える事が出来るかと考えた結果がこの話ですね。正真正銘、これでラデューシティ編は完結となります。

一応次ではまたアルム達が別の町に行ってほのぼの……の話になりますかね。ここで断っておきますと、今話の戦いの詳細は、アルム達の与り知らないところで起きているので、いきなりほのぼのになってもご容赦下さいませw

最後に一つ。スパイダの最後のあれですが、いつかのポケモン映画にあった心を研ぎ澄まして“かげぶんしん”を見分ける――という下りを引用した訳では決してありませんので、その辺もご了承下さいw

それでは、また次回お会いしましょう。

第二十六話 初めて訪れる大都市へ広くて盛大なステノポロスへ

スパードに“テレポルト”で次の町に移動するのを手伝ってもらい、ラデューシティを出たアルム達一行。綿雲が多数浮かぶ青空の下で、暖かい風が足元を撫でるのを心地よく感じながら一休みしていた。その目前には、ラデューシティよりもさらに広い都市と、それを囲む城壁。そして、その中央には壮麗な城郭が構えているのが見える。

「わー。アルム、あの雲美味しそうだね！ ね？」

「えっ？ うん、そうだね」

休憩している間も、テイルはひたすら飛び上がっては手を伸ばし、雲を掴もうと躍起になっていた。その傍らにいるアルムは、無邪気なテイルの問い掛けにも、何故か上の空といった感じであった。そんな二人の様子を少し離れた位置で観察しているガーディとポリゴンがいた。

「あの……ヴァロー殿？」

「ヴァローでいい。それで、どうかしたのか？」

ややぎこちないレイルの会話の始まりに、ヴァローは一瞬戸惑ったが、わざわざ自分に話し掛けてくるのは何かあるのだろうと思い、そのまま続けさせる事にする。

「はい。先程から主を見ている限り、溜め息ばかり吐いたり、暗い表情ばかり浮かべています。何処か体調でも悪いのでしょうか……」

？」

「レイルも気づいていたのか……。あいつ、気丈に振る舞ってはい
るが、たぶん一人で悩んでいて、心の中は不安で一杯なんだろうな。
テイルについてあんな事を聞いた後じゃ、仕方ないけどな……」

テイルに話し掛けられる度に明るく笑って見せるが、視線から外
れるとすぐに複雑そうな表情になるアルム。その様子をヴァローは
心配そうに見つめながら、レイルと一緒に近づいていく。

「では、その不安の種を解消すれば良いだけの話ではありませんか
？ 別に、一緒にいなければならぬ義理はありませんし」

「お前らしい合理的な考えだな。でも、アルムにはそう簡単には行
かないんだ。もう少し、様子を見てやろう。俺も不安な訳じゃない
が、簡単に割り切るのも何だから、な。……そういえばお前、アル
ムの事を心配してるのか？」

「いいえ。ただ、何か問題があってはいけないと思っただけです」

「そっか……。別にどっちでも良いけどな——」

それを境に、会話はぱったりと途絶えた。二人が近づいてくるの
に気づいたアルムが、テイルと一緒に笑顔を見せながら駆け寄って
きたからである。そこでちょうど休憩も終え、堀が穿^うたれて設けら
れた跳ね橋を通り、城郭都市の中に入っていくのであった。



町に入った四人を待ち受けていたのは、大勢のポケモンの姿だった。広さが広さだけに、ブルーメビレッジとは比較にならない程の数である。

入り口にあった看板には“ステノポロス”と書かれており、それがこの都市の名前らしい。都市と言う事もあってか、優雅な窓の多い建物ばかりである。遠目に見える城は、古代的で厳かな雰囲気を残しながらも、豪華絢爛な様子が見られる。

一方で、通りの脇には木々もたくさん生えており、ところどころに草原や花畑もある所から、この都市は自然の物と手を加えられた物が入り混じっているようである。

「すごい賑やかで楽しいねっ！　ボク、こういうところ大好きっ！」

雑踏で埋め尽くされた通りを何とか移動しながら、城へと向かうとするアルム達。そんな中で一人、テイルはご自慢の羽衣を用いてのんびりと飛び回っている。笑顔は絶やしておらず、よっぽどの盛り上がり様を楽しんでいるように見える。

「それにしても、この尋常じゃないポケモンの多さは一体何だろう……」

「さあ……。俺達が今まで巡ってきた場所とは規模が違うからな。これが普通なのかもしれないぞ？」

周りから聞こえるたくさんの声に掻き消されないように、二人は必死に声を上げながら先を進んでいく。ティルを見失わないように、そして、全員が逸れ^{はぐ}ないようにしながら順調に前へ前へと歩いていくが、一向にポケモンの数は減らない。それどころか、数は城に近づくにつれて増えているようである。

「よし、一旦こっちに入るぞ！」

あまりに先が見えないので、アルム達はヴァローの掛け声で、避難するように路地裏に飛び込んだ。

「はぁ……いくら何でも多過ぎだよ」

「そう？　ボクはこんなの良いけどな」

すっかり疲れきった様子のアルムに対し、ティルは至って元気そのものである。アルムにはそれが羨ましくさえ思った。

「さて、どうする？　ここまで来た以上は城まで行ってみるか？」

「うん、せっかくだからね。ティルも行きたいでしょ？」

「行きたい！　お城に行きたいっ！」

アルムもティルも、未知の“城”というものに憧れている為、行く事に賛成する。ヴァローも異論は無いようで、早速四人は通りへと戻っていく。

今度はティルも高く飛ぶのを止め、低い位置に留まってアルムとヴァローの体を軽く掴んで逸れないようにする。レイルはレイルで

しっかりと後ろからピツタリとくつついていく。しかし、激しく揉みくちやにされていく中で纏まって動けるはずもなく、おまけに先にもなかなか進めずじまいだった。そうして人混みならぬポケモン混みにうんざりし始めた頃、一つの問題が起きた――

「あれっ……みんな、どこに行ったの？」

――雑踏の波に流されるがままに歩みを進めさせられ、気がつけばアルムは独りぼっちになっていたのである。ティルが迷子にならないように気をつけないと――そう思っていたのだが、まさか自分がそうなるとは思っていたらしく、表情には焦りの色が窺える。

「えっと……ティルー！　ヴァロー！　レイルー！」

とりあえず名前を呼んでみるものの、ざわめきに掻き消されてしまい、一切声は遠くまで届かないようである。

耳で駄目なら目を使って探せば――そう考えて辺りをひたすら見渡すが、見知らぬポケモンの姿しか見えない。これだけいればヴァロー達と同じ種族のポケモンも居そうだが、それすらも見つからなかった時点で半ば諦め始める。それでも、今度はやり方を変えて捜し続けるのであった。



アルムがヴァロー達から離れてしまったのに気づいたのとはぼ同時に、ヴァロー達もアルムがいなくなったのに気づいて捜し始めた。

「アルムー！ どこにいるのーっ！」

ティルは空から大声で叫んで捜している。なるべく高いところまで飛んで、目でも捜しながら声を上げるが、あまりにもポケモンの数が多くて意味が無いようである。一方地上では、ヴァローとレイルが見逃す事がないように気を張って雑踏を掻き分けて捜していたが、こちらもさっぱりであった。

「ティル、どうする？ 一応城に行く事は決めてあったし、アルムも城に向かうはずだ。だから、先に行って待っていないか？」

闇雲に捜したところで、皆目見つかる見込みは無いと判断するヴァロー。幸いにも行き先を決めておいた為、とりあえず一番可能性のある方法を取るように提案するが、問い掛けられた方は、全力で首を左右に振っている。

「嫌だよ！ ボクは、アルムと一緒にお城に行きたいっ！ アルムがいないと、寂しいもん。アルムと一緒にじゃなきゃ、嫌だもんっ……」

すっかり悄気返ってしまい、ゆっくりと地上に降下してくるティル。その小さな瞳を潤ませ、寂しそうな表情を見せている。いつもの元気な様子は、既にそこには無かった。

「でもな、城に行った方が確実に会えるんだぞ？」

「ダメっ！ みんなで一緒に行くんだもん！」

負けじと、テイルは声を張り上げて、駄々を捏ねるように主張する。我が儘に見えるかもしれないが、少なくともテイルはテイルなりに考えを持っていた。新しい町に来たら、全部みんな一緒に回ろう——と。

「はぁ……分かった。とりあえず、捜すだけ捜そう」

「ほんとに？ それじゃ、もっと捜そう！」

根負けしたヴァローは、溜め息混じりに決断する。それを聞いたテイルは、一気にやる気が戻ったのか、再び高くまで飛び上がって搜索を開始する。



「ここでも……無いのかなぁ……」

とりあえずうろうろと歩き回って、ヴァロー達を捜し続けるアルム。いつも気分を表している耳も、元氣なく垂れ下がっている。

なるべく広範囲を捜せるように、路地裏を通り抜けては別の区画へと移動を繰り返してはいたが、やはり成果は上がらなかった。

「み、見つからなかったらどうしよう……」

とぼとぼと歩くその後ろ姿には、全く元気が感じられない。視線もあちこちに動かし、明らかに挙動不審になっている。通りから聞こえる他のポケモン達の賑やかな声も耳に入らず、どんどん表情が暗くなっていく。

「ううつ、迷子は……一人は嫌だよ……。みんな、どこに行ったの……？」

再び路地裏に入ったアルム。暗くて狭い道を歩いているせいか、不安で押し潰されそうになり、いつもティルの前で見せる態度とはまるで変わってしまう。ティルの前ではお兄ちゃんぶって気丈でいられるものの、今はそうもいかなかった。

我慢していた体の方にも、少しずつ変化が現れ始めた。目に溜まっていたもののせいで視界もぼんやりと揺らぎ始め、顔も徐々に下に向いていく。

「こんな大きなところで一人ぼっち……。置き去りにされたんじゃないよね……？」

独り言を呟く声も次第に小さくなり、前へと進め続けていた足もふと止まってしまった。もちろんこの呟きも、本心から思った事ではない。しかし、どこかでそうかもしれないと疑い出したのである。

外から見ただけでも広大なこのステノポロス。その中で一人逸れてしまった事で、ヴァロー達の輪からだけでなく、周りからも疎外されたような錯覚に陥っているのも原因であった。

「お願い……一人ぼっちは嫌だっ。迷子なんて……」

たかが迷子ではあるが、一人でいるのが苦手なアルムにとって、感じている寂しさは相当に強いものであった。ティルがここにいないくても、迷子くらいで泣くもんか——改めて強く決心をして、口の端を噛み締めて気持ちを紛らわそうとするが、全く効果は無い。

どこを見渡しても、知らない物・ポケモンばかり。自分だけが見知らぬ世界に放り込まれた感覚に苛まれ、どんどん孤独感が増していく。いつも明るいティルも、頼りになるヴァローも、自分を慕ってくれるレイルも、ここにはいない。この都市の中にいるのは分かっていてるものの、それだけではアルムの寂しさを軽減させてはくれなかった。

「ぐすっ……みんな、置いてかないでよ……」

遂には、小さな雫が一粒、また一粒と零れていく。いつも誰かに囲まれていて、故郷でも一人になった事の無いアルムは、この孤独に耐えられなくなったのである。完全に視線は真下へと向いてしまい、頬を伝わって落ちる涙によって地面が濡らされていく。そうして、自分では悲しみの感情をコントロール出来なくなり始めた時だった。

「あら……？ そのイーブイくん、どうかしたの？」

久しく聞かなかったような気がする、他人^{ひと}の声。アルムには特別暖かくて優しいそれは、突如として耳に入ってきた。それが聞こえてきた後ろに振り返ると、そこにいた声の主は、丸い耳と尻尾を持ち、全体的に青い体色をしたマリルという種族であった。

第二十六話 初めて訪れる大都市へ広くて盛大なステノポロスへ（後書き）

相変わらず必要の無いぐだんぐだんな話が続いていますが、一応必要な要素は盛り込むつもりですので悪しからず。とりあえず、このステノポロス編で定めたテーマに沿って書いていければいいなあと思っています。

さて、今回は久々にアルムに涙を流してもらう形になりました。僕としてはこの小説で、（日常的・非日常的のどちらも含めて）このアルムという主人公を通じて、喜怒哀楽と一緒に感じて頂ければーと思います。それ故、今回は“哀”という訳です。迷子になった時に、ティルがいないというのも大事なポイントですね。

ティルファン（？）の方からは、何故ティルを迷子にさせなかったんだと言われそうですが、あの子は迷子を迷子だと思わないと思うんだ、たぶん↑↑

それは冗談としまして、要はアルムにちょっとぼっかし焦点を当てたかったんです。成功かどうかはまた別ですが……。

長々と申し訳ありませんでした。それでは、また次回お会いしましょう。

第二十七話 祭典中の町巡り／袖振り合うも多生（たしょう）の縁／

暗くて冷たい隙間風が吹き抜ける、建物と建物の細い通路。気に留めようとしなければ、誰かの存在を確認出来ないような陰湿な場所――そこで突然知らないポケモンに話し掛けられ、泣くのを止めて呆氣に取られるアルム。

迷子になっている自分の助け舟になってくれるのか、はたまた声を掛けてくれただけなのか。一人ぼっちの現状ではまだ手放しでは喜べず、何をしていいのか戸惑ってしまう。

「迷子になっちゃったの？ 君、名前は……？」

すっかりおとなしくなってしまったアルムの様子を見て、マリルは優しく微笑みかけながら歩み寄っていく。怖がらせないようにとの心配りなのか、その一步一步は非常にゆっくりである。

「僕は……アルム。別に迷子になった訳じゃないもん……」

泣いていると気づかれずに強がりたいのか、アルムは前足で潤んでいる目や頬を拭う。いや、拭うというよりかは、擦ると言った方が正しい。

「くすっ、強がらなくても良いのよ。私はシオン。あなたのお友達を捜しながら、この町を案内してあげる」

「えっ、本当に……？」

近くに頼れる者がいない時に、一筋の希望が差し込んだからか、

今までずっと暗かったアルムの表情に、ふっと明るい色が戻った。そんなアルムの問い掛けに、助け舟として現れたマリルー——シオンはもちろん頷いて受け入れる。

「さあ、行きましようか。もっと明るく楽しい顔をして、ね？」

「う、うん……」

いつも一緒にいる友達と付き合うのとは違う感覚をどこかで覚えながら、アルムはシオンに引き連れられるがままに暗い路地裏を出て、明るい通りへと一步を踏み出していく。



シオンがアルムを連れていったのは、様々な出店で賑わう商店街だった。花屋や木の実屋と言った店から、趣向の凝らされた工芸品を売っている店、さらには道具屋なる店もたくさんある。

散策をしていく中で、一人でいるのと誰かがいるのでは全く心持ちが違うのか、アルムには自然と笑顔が戻っていた。なるべくアルムが楽しめるようにと、シオンは適宜話し掛けたりもしてくれていた。

いつの間にか時間が経つのも忘れて駆け回る二人。ほとんどの店

を見て回ったところで、シオンはアルムを一軒の道具屋へと誘った。そこは装備品を専門的に売っているらしく、ショーウィンドーにはポケモンのマネキンまである本格的な店である。そんな店に入り込んで、一体何をしているのかと言うと、スカーフやバンダナなどをいろいろと試着していた。

「ほら、こんなのはどう？　すごく似合ってるわよ？」

「ねえ、シオン。僕は女の子じゃないんだけど……」

試着していたのは、何故かアルムの方。しかも、リボンばかり着けさせられていた。そこで、まさか自分の性別を間違えているのではないかと思い、恥ずかしそうにしながら聞いてみる。

「うん、最初から分かってるわよ。だからこそ、こうやって可愛くしようとしてるんじゃない」

勘違いしているという予想は大はずれだった上、あまりにもあつさりと返され、アルムはぽかんと立ち尽くすしか無かった。しかし、すぐに正気に戻って今の自分の格好を思い出し、シオンから急いで離れる。

「ちよっ……分かってるなら、なおさら止めてよっ！　は、恥ずかしいよ……」

後退りして距離を取りながら、見る見る内に顔を赤らめていくアルム。近くにあった鏡に映る、リボンを着けた自分の姿を見ると、すぐに目を背けてしまった。

「ふふっ、恥ずかしがる事無いのに。十分可愛いわよっ」

「もう、からかうのは止してよく！ シオンが着ければ良いじゃないかあ……」

「え……私？ 私はいつも着飾るのを手伝ってもらう側だから、たまには誰かをコーディネートしてみたかったのよね」

戸惑い半分、恥ずかしさ半分でシオンに怒ったように返してみるものの、まるで効果無し。寧ろ火を付けてしまったみたいで、シオンは意地悪そうに笑うと、次から次へとリボンを持ってきては試着させ始める。

最初こそ嫌がっていたものの、シオンが楽しそうにしているのを見てみると、満更でも無くなったアルム。シオンの着せ替え人形にされたみたいには振る舞って楽しむ事にする。その様子は、さつき出逢ったばかりとは思えない程に仲が良さそうに見える。

「シオン。僕達って、もう——友達かなあ？」

「友達、ね……。それも良いわね。……あらっ？ そのリボン、今までの中で一番似合うわよ？」

「そう……かな？ でも、やっぱり恥ずかしいよっ……」

ヴァロー達の前で見せるよりも一段と明るい笑顔を浮かべながら放ったアルムの言葉に、照れ笑いを見せるシオン。そんな彼女が最終的に選んだのは、淡い橙色のリボンだった。それをアルムの右耳に結び付けると、シオンは嬉しそうに笑って見せる。

（あれ？ でも、試着するだけして、この後どうするんだろう？）

楽しむだけ楽しんだ後で、改めて疑問を抱いていたアルム。自分では外せない以上、シオンに外してもらえないのだが、そのシオンはその素振りは一切見えない。やや心配になり始めた時、それはすぐ解消される事となった――

「それじゃ、このリボンを買いたしうか」

――アルムを引き連れ、シオンはいそいそと店員のいるカウンターの方へと向かおうとする。

「シオン、ちょっと待って！ 僕、お金持っていないし、そもそもリボンは――」

「いいのいいの。私が代金を払うから」

まさかの行動に驚愕しながら、アルムはその場に踏み止まってリボンを返そうとするが、シオンは全く気に留める様子もなく、やや引きずる形で強引に連れていく。しかし、意地でも抵抗しようとするアルムは、踏ん張ってシオンの手を引き離す。

「だ、駄目だよっ！ すごく楽しかったし、気持ちは嬉しいけど、買ってもらうのはやっぱりいけないよ……」

「嬉しいって思ってもらえるなら、気持ちだけじゃなくて、これ（リボン）も受け取って。私のちょっとした我が儘に付き合ってもらって、楽しませてもらったお礼だから……」

「我が儘なんて事無いよ！ 寧ろ、助けてもらったのは僕の方だから、お礼なら僕が言うべきだもん。シオン、ありがとっ」

「いいえ。これでおあいこって事ね。だから、“友達”として……受け取ってくれない？」

シオンが複雑そうな表情で申し入れてくるので、アルムは頷く事も拒否する事も出来ずに困ってしまう。無論いらないという訳では無かったのだが、助けてもらった相手に物を貰うというのは、気が引けてしまっていた。

曖昧な態度のアルムを見つめながら出方を伺うシオンだったが、遂には業を煮やしたらしく、一旦アルムのリボンを外す。その行動にアルムがきょとんとしている間に素早く会計を済ませると、再びリボンを耳にそっと着けてくれた。

「本当に……良いの？」

「ええ、もちろんよ。私達が出逢った記念という事で、大事に着けてくれると嬉しいな……」

「もちろんだよ。大事にするね。ありがとう、シオン！」

念のため、恐る恐る再確認するアルム。改めて貰える事が分かったと、リボンを前足で確認するように撫でながら、ふっと顔を綻ばせる。そんな愛嬌のある様子を端から見ていたシオンは、嬉しそうな、でもどこか寂しそうな顔もある面持ちをほんの一瞬だけ見せると、再びアルムを連れて店の外へと出ていく。

町の通りは相変わらず混雑してはいるものの、先程までよりは少なくなっただようである。そして、来た当初には横目でしか見えなかった、道の脇に並べられている紋章のような刺繍が施された旗。それが城に近づくにつれて増えていくのが分かった。

「そういえば、これって一体どうなってるの？ 広い町って、いつもこんなに賑やかなの？」

「あははっ。そんなはずある訳ないじゃないの。今はちょうど、戴冠式が行われてるのよ」

「えっと……戴冠式って何？」

ふとアルムは疑問符を浮かべ、その場に立ち止まる。小さな村の出身であるので知らないのは仕方ないのだが、とりあえず気まずそうに苦笑を浮かべている。

「戴冠式って、簡単に言うと、今の国の王様が新しい王様になる事を国民に知らせる儀式なの。そしてこれは、国全体でそれを祝ってるってわけ」

流石はこの国の住民という事もあるうか。シオンは分かりやすく簡潔に纏めて説明する。

「へー、そうなんだ。僕は国の事は良く分からないから……。でも、新しい王様ってどんなポケモン（ひと）なんだろう。やっぱり皆に慕われてるのかな？ 会ってみたいなあ……」

「さあ……慕われてるかは分からないけど、期待だけはされてるみたいね」

何故か国王の話になると、シオンは些か素っ気ない態度を見せる。何があるのかは分からないが、部外者が詮索するのはどうかと思い、アルムはそのまま黙って付いていく事にする。

その後も城の方に向かいながらヴァロー達を捜し続けるが、やはり見つからないでいた。尤も、シオンと一緒に行動を始めてからは、寄り道をしながら散策するのが主となっていたが。

移動に時間は掛かったが、粗方町の中を巡ったところでようやく城が間近に見えてきた。遠くからでは分からなかったが、近くに来るとその壮大さを一層強く感じる。

防衛機能よりも豪華さを重視している為か、城と王宮とが融合しているもののようである。青を基調とした装飾も多く見られ、全体的に落ち着いた雰囲気漂っている。

入り口の重厚な扉の前やその周りには、見張りのポケモンの姿も見受けられ、高貴な者の住む場所である事が簡単に見て取れた。

「ねえ、アルム。たぶんこの辺にはいないだろうから、引き返して捜し直してみない？」

城の外観に見惚れているアルムの傍らで、シオンは城に背を向けた状態で突如切り出した。その顔は何か焦っているようにも見える。

「えっ……？　でも、まだこの辺は捜してないけど……」

「ここに来るまでにいなかったんだから、城の近くには余計にいないはずよ。とにかく、急ぎましょう」

シオンがやや理屈の通らない考えをこじつけようとする事に、アルムは一瞬戸惑いを見せる。しかし、直後に強く引っ張られて迷っているところでは無くなり、まさしく強引に連れられてその場を離れていく。

シオンがようやく立ち止まったのは、城から一番近いところにある路地裏だった。ほぼ全力疾走だったので、二人ともすっかり息を切らしている。

「はあ、はあっ……。シオン、そんなに急いで、どうしたのさっ……」

しばらく経った後で、アルムはやっと呼吸を整えて喋れるまでになる。そして今度は大きく一回深呼吸をして、訝しげな視線をシオンに向ける。

「いいえ、別に。ちょっと、あの場にはいたくなかっただけ」

対するシオンはと言うと、何食わぬ顔で隙間の出口に立って、通りの方を頻りに覗いている。

「別にとって事は無いでしょ？ 何かあったのなら、話して欲しいな——」

「あなたには関係ないからいいの。それじゃ、戻りましょうか」

アルムは心配そうにしている中、一瞬だけ無表情になるシオン。

それはすぐに元の優しい表情に戻ったが、アルムはその変化を見逃さなかった。

「もう“友達”なら……関係ないって事は無いでしょ？ 悩みがあるんなら、教えてくれない？」

アルムが向ける、純粹無垢な眼差し。それは、瞳自体も、込められた想いも、濁る事なく澄んでいる。背を向けていたシオンも、さすがに無視する事は出来ずに、溜め息を吐きつつ向き直る。

「そんな……ずるいじゃない。そんな事言われたら、そんな目で見られたら……無視出来ないじゃないの」

どうやら観念したらしく、シオンは悔しそうに笑っている。でも、その表情はどこか嬉しそうにも、安心して見えるようにも見える。再度覚悟を決めたように口から一息吹き出すと、優しく微笑みながら口を開いた。

「それじゃさ、アルム。もし、私が王女だったらどうする――？」

第二十七話 祭典中の町巡り／袖振り合うも多生（たしょう）の縁（後書き）

まず最初に。「アルムのキャラ、違うくね？」とか、「今話のアルムに誰が得するの？」とか思われた読者の方。ごもつともです↑

まあ、冗談はさておき（↑）。今まではどこか背伸びしたような姿を見せてきたアルムですが、ステノポロス編では出逢うポケモンによって、また違う顔を見せられたらなあと思ってこうなった次第です。一応、彼もまだ甘えたい盛りの末っ子という事でw

因みに、今の彼に可愛いとか言ってあげると、全力で照れる事間違いないです（、・ω・、）

今までの話がほのぼの9割、シリアス1割だとするなら、これからの展開は徐々にその比率が変わってきます。それがどちらに、またはコメディーなのかはお楽しみという事で↑↑

まだまだ言いたい大事な事があった気がしましたが、忘れたので良いでしょう（↑）。では、また次回お会いしましょう。

第二十八話 シオンと身分と友達とく王家だからこそ抱える悩みく

シオンの言い放った“王女”という言葉に、アルムは思わず耳を疑った。口が開いたままで表情が凍り付いており、言葉も出ないようである。その様子を受けて、返事を待っているシオンは、さらに距離を縮めて口を開く。

「それで、どうなの……？」

「あ……えっ？ シオンって……王女様、なの？」

驚愕のあまりになかなか声が出ず、やや遅れて反応するアルム。

“もし”という言葉が含まれていた事など、もはや完全に忘れている。

「だから、そうだったらどうするの？」

仮定と思わせて言った割には、接近してくるシオンの面持ちは固いものである。少なくとも、冗談を言っているような類の表情で無い事は、アルムにも容易に分かった。ここは一拍置いて、慎重に考えを纏めて想いを伝えようとする。

「そりゃあ、何でこんなところにいるのか。そして、何で僕と一緒にいるのか。この二つを聞いてみたい……かな？」

「そう……。それはどうして？」

「だって、王女様ってすごい人なんでしょ？ わざわざそれを隠して、しかも戴冠式をやっている今、ここに居るのは変だなんて思う

から」

口を動かすにつれ、徐々に表情も解れつつあるアルムに対し、シオンはその正反対となっていた。優しい笑顔はいつの間にか消え失せ、その面影はどこにも感じられない。

「そんな事を聞いて、一体どうしたの……？」

さらには、自分が普段するからこそ分かる、気分が落ち込んだ時の合図――耳や尻尾を下に向けるという行為がシオンにも見受けられる。そんなシオンの微妙な変化を注視していたアルムは、気まずそうに声を掛けた。

「やっぱりあなたも、私が王女だと知ったら、そうやって遠ざかろうとするのね」

「だ、だって、王女様なら僕が気安く声を掛けて良いのかわからないし……。それより、どうしてここに？」

「戴冠式が嫌になったからよ。もう、王家という身分に縛られるのはうんざりなの。私は……普通の女の子になりたい」

目に見えて現れていた訳ではないが、シオンは心の中で泣いているようだった。暫しの沈黙が流れる中、二人の間を湿っぽくて生暖かい隙間風が吹き抜ける。ふと空を見上げると、いつの間にか陽光ひかりが分厚い雲に遮られていた。

「……我が儘だったのは分かってる。何不自由なく暮らせているし、別段困った事などないの。国民達から見れば、何を贅沢言ってるんだって思うかもしれない。でもね、その窮屈さが嫌なの」

塞き止める物が無くなったかのように、シオンは今まで貯め込めていたものを吐き出していく。アルムも聞いてみたい事があったが、ここで話を切るのは野暮だと思い、おとなしく聞き入る事にする。

「王家のしきたりも、この国の歴史も、国を治める事についても、必死に勉強もしてきたから、不安な事がある訳でもないわ。でも…：国民の皆に期待されるのが辛い。私も、普通の女の子みたいに自由に動き回ってみたい。今日みたいに、友達と一緒に遊んでみたいの。私の周りにはいつもお付きのポケモン（ひと）しかいないから……」

シオンの心の底からの告白は、一旦そこで終わりを告げた。全てを言い切ったその表情は、今の空のようにどんよりと暗いものとなっている。

「あの……王女様？ 僕には少しだけ気持ちが分かるけど、でもどうして今のタイミングでなのかは分かりません。どうして……？」

時機を見計らって、慎重に声を掛けるアルム。さすがに相手が王女という事もあってか、言葉遣いも自然と丁寧に変わっていた。しかし、シオンは黙り込んだままで、それに対する答えは一向に返ってこない。

「ねえ、王女様——」

「王女様って呼ばないで！」

突然発せられた怒号は、狭い空間に反射して響き渡った。一瞬にして湿り気を含んでいた空気が張り詰め、不快感どころか緊張感を

漂わせるまでに凍り付く。怒鳴られたアルムは、小さく飛び上がって身を竦ませてしまう。

「あ、ご、ごめんなさい……」

アルムが必死に絞り出した言葉は、謝罪の言葉だった。いきなり怒られた事で頭が真っ白になり、それしか出て来なかったのである。何故こうなったのかは訳が分からなかったが、アルムの中では悠久にも感じられる時が流れるように感じられ、身動きもせずただ黙ってしまう。

「あ、ごめんなさい。そういうつもりじゃないの。許して……」

自分のやった事を振り返って後悔したのか、シオンは慌てて怯えた様子のアルムに歩み寄る。罪悪感に苛まれているアルムは、シオンが近づいても顔を俯けたままで動かない。

「お願い、こっちを見て……」

最初は躊躇うものの、さっきとは違う優しい声に、恐る恐るアルムは顔を上げる。足、腹部と徐々に視線を上げていき、顔の部分に来て目が合った瞬間に、不安そうな顔が綻んだ。シオンはもう怒っている様子もなく、穏やかな目をしていた。柔和な笑みを浮かべると、その小さな手を伸ばして、アルムの頭を優しく撫でる。

「私ね、こんな身分だから、友達らしい友達がいなかったわ。だからこそ、あなたが“友達”って言うてくれた時は本当に嬉しかったの。だから……お願い。アルムだけは王女様って呼ばないで。せっかく友達になれたのに、また身分で壁を作られるのは嫌なの……」

今まで見た中で、シオンは一番寂しそうな顔を見せた。今にも泣き出しそうではあるが、必死に堪えているようである。それは、その身分の者にしか分からない辛さを内に秘めているようにも窺える。

「あの、ごめんね、シオン。でもね、友達じゃなくなるってつもりで言ったんじゃないんだ。だから、その……これからも、友達でいてくれるかな……？」

ぽつりぽつりと、新たに吹き始めた暖かいそよ風に言の葉を乗せるアルム。恥ずかしさから来る照れ隠しの為か、視線を逸らしながら頻りにリボンを触っている。返答を待ってそわそわして、どうにも落ち着かないようである。

そんなアルムにもう一步近寄り、シオンはその手でぎゅっと強く抱きしめた。

「ありがとう、アルム。こちらこそ、“友達”としてよろしくね」

王女という身分に縛られた者としてではなく、純粹に一人のポケモンとして出た本音。それは、アルムの他の誰にも聞こえる事なく、静かに二人だけの空間に溶け込んでいくのであった。



路地裏を出た二人は、真っ直ぐ城へと向かっていた。シオンも城

に戻る覚悟が出来ており、その上でヴァロー達をもう一度捜すという事を二人で決めたからである。

四足歩行のアルムには、手を繋ぐなんて芸当は出来なかったが、その代わりに二人はびったりと寄り添って歩いていた。

「そういえば、アルムの友達って確か、ガーディにポリゴン、そしてジラーチっていう種族の子だったっけ？」

「うん、そうだよ。僕が言うのも何だけど、今考えるとすごいメンバーだね」

他愛ない会話の中で、アルムはヴァロー達の事を思い、くすりと小さく笑って見せた。しかし、それはすぐに不安そうな表情に逆戻りする。

「やっぱり……寂しい？」

「ううん。シオンがいてくれるから寂しくはないんだけど、ティルが寂しがってないかなあと思って……」

心配して声を掛けてくれるシオンに、アルムは軽く首を振って返した。実を言うと、本心でもあり、嘘でもあった。ティルが心配なのに変わりは無いが、再会が出来ない事に対する不安が強いのも事実。それを悟られたくないアルムは、自然と差し障りの無い事で繕ったのである。

「アルム、ごまかしたって駄目よ。それでも私、一族の中でも特に耳は良い方で、微妙な感情の変化も読み取れるの。あなたが不安がってるのも分かるわ。だから、あなたも私に不安とかを打ち明けて欲しいなっと思うの」

「あ、えっ……!？」

シオンには全て悟られていた事にアルムは驚くと同時に、心の底では安心していた。本心を隠す必要が無い、気が置けない友達が出来た――と。

「うん、ありがとう。このまま会えなかったらどうしようかな……って思ったら、ちょっと怖くなっちゃったんだ」

「大丈夫、絶対に見つかるって! その友達も、城を目指してたんでしょ? だったら、後はあなたがここにいて事を知らせられればいいだけじゃない?」

「でも、それがそう簡単に――」

そこで突然アルムは言葉を切って考え始める。そして、シオンが不思議そうに首を傾げる中、何かを閃いたように一瞬目を見開くと、首から提げているオカリナをそっと口にくわえた。

「そっか、そのオカリナがあったんだ。最初から気づけば良かったのにね」

ここまで来ればシオンにも分かったようで、納得したように話し掛ける。アルムはシオンに対する同意と気まずさから苦笑を浮かべると、大きく息を吸い込んでオカリナに空気を送り込んでいく。

そこから流れるのは、決して目立つような大きいものではなく、静かで優しい音色。その旋律はと言うと、とても軽やかで速く、ブルーメビレジが奏でていたのと非常に似ている。耳に残っていた

のを直感的に思い出して即興で弾いているのであろう。傍らにいるシオンを含め、道を歩くポケモン達もふと足を止めてその不可思議な様子を見守っている。

「ふう、終わり——って、あれ？」

今まで目を瞑ったままで奏でていた為、演奏を止めた瞬間に目の前に何人かのポケモンが自分を見つめている事に驚くアルム。あまりに突然の事で慌ててきよろきよろしていると、そのポケモンだかりの中にガーディ、ジラーチ、ポリゴンという見覚えのある三人の姿が目に入った。

「あーっ。やっぱりアルムだー！」

いち早くアルムの姿を見つけたティルは、素早く飛んできて力強く抱き着いた。その表情には満面の笑顔が湛えられている。

「アルムー、会いたかったー！」

「あはは……僕も会いたかったよ」

「これで一件落着だな。ところで、そのリボンはどうしたんだ？」

ティルに覆いかぶされる形で床に伏しているアルムの耳に次に聞こえてきたのは、ヴァローの声だった。ティル程ではないが、その表情には安堵の色が見られる。

「あっ、これは……その……」

アルムは再び恥ずかしそうに顔を赤らめていき、視線を徐々に逸

らしていく。ヴァローに気づかれた事で、改めて自分の今の格好を思い出したからであろう。それ以降、アルムは全く声を出さなくなってしまった。

「おい、アルム——」

「私が代わりに話すわね。初めまして、私はシオン。あなた達がアルムの友達ね？」

いつまでも答えが返ってこない事に待ち兼ねていると、シオンがずいとい歩近づいて、ヴァロー達に切り出した。

「ああ、初めまして。俺はヴァロー。こっちのジラーチはテイルという名前で——」

「ええ、話は全部アルムから聞いてるわ。さあ、立ち話も何だから、ここを一旦離れましょうか」

「うん。でも、どこに行くの……?」

林檎のように赤かった顔も元に戻り、ようやく立ち直ったアルムに微笑んで見せるシオン。質問に対して答えは返さずに、アルムを起こして寄り添いながら城に向かって真っ直ぐ——何の迷いも見せる事なく歩いていく。その一歩一歩は弾むような感じで、全てを吹っ切ったように軽快で楽しそうである——。

第二十八話 シオンと身分と友達とく王家だからこそ抱える悩みく（後書き）

再度やって来ました、“だから何だ”という話が終わりました。後半の方が雑になっているのは、どうか気にしないで下さいまし。尤も、この小説をここまで読んで下さった方なら、気にしないで下さると信じてますがw

ここで明かしてしまうと、このステノポロス編のテーマは“素顔”でした。アルムとシオンの二人の、という意味です。僕の目からは分かりませんが、その辺を上手く書いていけば満足ですねw

さて、今までのパターンなら、そろそろステノポロス編完結——とか言いそうなところですが、今までの三話はあくまで前座のようなものです。もちろん、今までの三話がいらない話という訳ではありませんけどね。

「次回をお楽しみに！」とか「次回以降は注目です！」とでも言うっておけば読者の方も興味をそえられるかもしれませんが、そこまで断言出来る程自信はないので、その手の発言は控えさせて頂きます。ですので、敢えて言わせて頂くならば、「過度な期待はせずに次回以降をお待ち下さい」ですねw

それでは、また次回お会いしましょう。

第二十九話 国王との謁見―違う世界の邸宅の中へ―

アルム達がシオンに連れられるがままに訪れる事になったのは、この町のシンボルと言っても過言ではない居城。建物としては、アルム達が見てきた中でも最大級である。荘厳さと優美さを兼ね備えている城壁や装飾の数々も、見ていて圧巻な光景であった。

「あつ、シオン王女！ どこへ行ってらっしゃったのですか！？ 国王が心配してらっしゃいましたよ！」

「うん、まあ……ちよつとね」

額には赤い宝石のようなもの、手足には水掻きがある、水色の体色をしている門番らしきポケモン――ゴルダックは、シオンの姿を見るなり驚嘆の声を上げた。そんな状況でもしっかりと敬礼をしており、忠誠心が見受けられる。一方のシオンはと言うと、些かその堅苦しさ zu うんざりしているようにも見える。

「ともあれ、お帰りなさいませ。ところで、そちらの方々はお客ですかな？」

頭を上げてアルム達の方を一瞥すると、ゴルダックは手の平を上に向けた状態――あくまでも失礼の無い形で、見慣れぬ訪問者を指す。アルムは一瞬、何か問題があるのかと心配になるが、シオンが耳打ちで説明してくれた事でゴルダックも承知したらしく、ほつと胸を撫で下ろす。その耳打ちしている時のシオンの表情は、どこか誇らしげにも見えた。

「失礼しました。朋友とは知らずに……。では、只今門を開けます

ので、少々お待ち下さい」

今の発言で、シオンがどのように説明したのか大体分かり、アルムも思わず嬉しくなって微笑む。気のせいかな、ゴルダックにも同じく嬉しそうな色が窺えた。そんなゴルダックは門番をしているらしく、アルム達に背を向けると、両手を扉の方に突き出した。

この城の事については何も知らない一行が見守る中で、突如軋むような音が前方から聞こえてくる。発生源の方に目を遣ると、門が青白い光を纏っており、徐々に開いていくのが見えた。ゴルダックの顔を覗き込んでみると、額の赤い部分が強い光を放っているのが見え、超能力の類いを使っているのが理解出来た。

そこから扉が開ききるのにそう時間は掛からず、城内の全貌が見えた瞬間、アルム達は言葉を失った。外から見ると中は広く、床には黄色い糸で縁取りされた深紅の絨毯が敷き詰められている。天井には豪華な照明具が数多く見られ、この城を支えている巨大な支柱には紋章の刺繍が入った旗が掛けられている。

「さあ、そんなに驚いてないで、上に行きましょうか」

王女と言う事で慣れた様子のシオンは、中央に構えている二階へと続く階段へと誘導する。アルムとヴァローが恐る恐る段を上っている傍らで、テイルは相変わらず、忙しなくはしゃぎ回っていた。今度ばかりは、アルムとヴァローも胸が高鳴っているようではあるが。

少しばかり長い階段を上った先では、大勢のポケモンの姿が目に入った。腕や足に紋章の入った布を巻いており、城に仕えているポケモンである事は一目瞭然である。

「この階には、お客様を接待する為の部屋や、王や王妃、私の個室があるの。脇にある階段を上ってもう一つ上に行けば、玉座とかちよつとした庭園なんかもあるわ。でも、それはまた後にして、とりあえずは私の部屋に行きましょう」

足を止めて再び辺りを見回しながら、どうして良いか分からないでいるアルム達に、シオンは簡潔な説明だけしてさらに奥へと誘う。暖かい太陽の光も差し込む大きな窓がある、簡素な白黒の模様の廊下を通り、突き当たりにある一段と華麗な飾りの付いた部屋へと入っていった。

部屋の中には水色を中心とする調度品が多く並べられており、風景画の綴れ織り（タペストリー）や工芸品が特に煌びやかである。興味津々な様子のアルム達は、隅に置かれている木製のベッドや窓の脇に付いているカーテンにすっかり見入っているようである。

「ここは私の部屋だから、ゆっくりくつろいでね」

アルム達が部屋を眺め終わった頃を見計らって、シオンはどこからともなく飲み物を持って来て落ち着くように勧めた。アルム達も最初はそわそわしていたが、とりあえず言われるがままに絨毯の上に座り込み、渡された容器に入った飲み物を口にする。

「あっ……この水、美味しいっ」

容器に付けていた口をそっと離し、最初に感想を述べたのはアルムだった。その発した言葉の通り、シオンが渡してくれた飲み物は水であった。しかし、それは一点の濁りも無く透き通っており、飲んだ瞬間に心まで洗われて落ち着くような、そんな感じさえアルム

は抱いた。

「なるほど。この水は多くの無機塩類ミネラルを含有しているようですね」

「ええ、その通りよ。この国の湧水には多くの成分が含まれていて、体に良い水として有名なの。因みに、“ステノポロス”って名前も、どこかの言葉で水と関係のある名前みたいなの」

水を凝視して分析をしているレイルに、シオンはさりげなく補足を加えた。何故見ただけで成分が分かったのかはともかく、少なくとも今のアルムには気になる事が二つ出来た。一つはシオンの持っている、大変美しい透明の水差し。そしてもう一つは、水と関係があるというステノポロスの事についてだった。

「あ、そうそう。この国は水晶細工でも有名なの。この水差しも一応、町で造られてる名産品なのよ」

どう聞いてみようか——そんな事を考えてる最中にシオンの説明を聞いて、アルムははっとする。気がつけば、その水差しをじっと見つめており、シオンがそれとなく悟ってくれたらしい。これには、アルムも堪らず苦笑を浮かべてごまかそうとする。

「あはは……ありがとう、シオン。ついでもう一つ聞きたいんだけど、国王——シオンのお父さんも、水タイプのポケモンなの？」

アルムがどうしても気になっていたもう一つの事——それは、シオンの父親にも当たる国王の事だった。さりげなくとまでは行かないものの、万が一を考えてなるべく直接的には聞かないように上手く流れに乗せて切り出せた事に、アルムは心の中でほっと安心していった。

「ええ、そうよ。せっかくだから、今から会いに行きましょうか。
一応、帰った事も報告しなくちゃいけないし、ね」

王女という身分でこの時期に小さな家出をしておきながら、その大事な報告を“一応”と片付けてしまうシオン。その態度に一種の憧れさえ抱きながら、アルムは後を追ってさらに上へと続く階段を駆け上がっていく。

階段を上がった先は、高度ならでの爽やかな風が吹き抜ける、屋上のような造りになっていた。高い位置から町の景色が一望でき、眼下に広がる建物や店、大勢のポケモン達は、一目でその盛大さが見て取れる。そんな屋上の中央はちよつとした花園ガーデンとなっており、色とりどりの花が咲き誇っている。言うなれば、窮屈な感じのする城における憩いの場のようなのである。

ガーデンを挟んで階段と対極の位置には、石造りの小さな塔のような建物が構えていた。その見た感じでは小さな家が建っているようでもあるが、左右にある物見やぐらでは宮仕えのポケモンが見張っており、城の一部である事は確かなようである。

「さあ、この先に国王がいるのよ。みんな、心の準備は良い？」

急ぎ足で扉の前まで来たシオンは、取っ手に手を掛けた状態でアルム達の方に振り返った。緊張で強張っている顔が今の言葉でさらに引き攣るが、恐る恐る首を縦に振る。その了承の合図を受けて、シオンは大きくて重そうな扉をゆっくりと開いていく。

最初にアルム達の目に入ったのは、入り口から続く深紅の絨毯に、柱に掛けられた紋章の入った旗と言った感じで、下の階とほとんど

同じ光景だった。

しかし、明らかに今までと違い、奥の方に目を遣ると、装飾が多くてきらびやかな玉座が見える。そしてその席には、一人の威風堂々とした空気を放つポケモンの姿があった。王冠のような三つ又の角があり、紺色の体色をしたペンギンのようである――その種族名はエンペルトである。

「ただいま帰りました、お父様。大変、ご迷惑をおかけしました」

シオンはつかつかと歩を踏み出していき、エンペルトの前で立ち止まって軽く頭を下げる。一方で、一国の主が目前にいるこの状況では下手に動き出す訳にも行かず、アルム達は黙って佇んでいる。

「シオン……お前は、自分の立場を分かっていて出ていったのか！

それも、この戴冠式という大事な時期に！」

今まで微動だになかったエンペルトが突如として発した空気を震わせる程の怒声に、アルムは一瞬にして身が竦んだ。自分が怒られている訳でも無いのに、心臓が高鳴り始める。そんな中で視界の端でシオンを捉えようと、今の怒鳴り声に怯む様子も無く、徐々に顔を上げる。

「――とまあ、ここまでは“国王”としての言葉だ。それで、“父親”としてはだが……何か良い事があったようだな」

さっきまで怒りの感情が込められていた声が一転、穏やかなトーンになり、アルム達は今度は呆然として立ち尽くす形になる。

「えっ……もう許してくれるのですか？」

「ああ。私も昔はこっさり家出をしては、先代の王に叱られてたものだからな。お前の気持ちも良く分かる。それに、もう敬語じゃなくても良いぞ」

今度はトーンだけでなく、表情までも綻んで優しく微笑みかけるエンペルト。それはまさしく、我が子を見守る父親のような顔を見せている。

「それで、だ。家出をしたと思ったら、嬉しそうな顔をして随分と早く帰ってきて……何か収穫があったのか？」

「ええ、私にとっては初めての――そして大事なものに出逢いました」

強く、はっきりと聞こえるように答えを告げ、後ろを振り向くシオン。その視線の先には、きよとした様子のアルムの姿があった。まだ良く分かっていないアルムは、シオンが微笑みかけると、同じく微笑み返しをするだけであった。

「なるほど、彼が……。お前にとっては初めての存在のようだな。私にも紹介してくれないか？」

「ええ、もちろんよ。アルム！ みんな！ こっちに来て！」

いきなり呼ばれた事にびっくりしながら、アルム達は一步步慎重に踏み出しながら近寄っていく。決して緊張した空気が漂っている訳ではないのだが、遠くから見ているだけでも恐れ多い国王に近づくというのが憚られたのである。いつも歩いているよりも倍以上の時間を掛けて、ようやく国王の御前に辿り着いたアルムは、深呼吸を繰り返した後で口を開く。

「あ、あのっ……ば、僕は、アルムと言いますっ」

「ははっ、そんなに緊張しなくても良い。私は国王のセトだ。ほら、もっと落ち着いて」

「は、はいっ……」

緊張で口が思うように動かせず、アルムはしどろもどろになる。落ち着かせようと思ってセトが放った言葉も逆効果となり、恥ずかしそうに俯いてしまった。

「んっ……まあいいか。それでそちらの三人は？」

「ボクはティルって言うんだ！　よろしくねー！」

まず三人の中で先陣を切るように言葉を発するのはティル。アルムとは正反対で、国王が相手だからと言って全く臆している様子は無い。それどころか、玉座の周りを楽しそうに飛び回っている。

「俺はレインボービレッジ出身のヴァローと言います」

「私はレイルです。どうかお見知り置きを」

残りの二人も、失礼の無いように丁寧な、そして緊張してる様子も無く自己紹介をする。尤も、ヴァローは上手く繕って緊張していないかのように見せているだけであり、実際は心臓が早く鼓動している。

「うむ、娘が世話になったようだな。改めて礼を言わせてもらおう」

「あつ、いえいえ！ 僕の方こそ本当にお世話になりましたし、王様が頭を下げなくても……」

軽いとは言え、国王が頭を下げてくるのに対し、アルムはおどおどしながら深々と頭を下げる。少しは落ち着いてきたものの、やはりまだ声^{うわず}が上擦^{うわず}っているようである。

「いや、礼を言うのに国王も何も無いのだよ。私も、身分の違いはどうも苦手だな」

セトの方と言うと、腰掛けている玉座からゆっくりと立ち上がり、しゃがみ込んでアルムの頭をそつと撫でる。

「とにかく、明日はちょっとした儀式があつて慌ただしいが、今日はゆっくりしていつてくれて構わないよ。シオン、空いている部屋に案内してあげなさい」

「はい。それじゃ、行きましょうか」

セトの指示を受け、シオンはアルム達を手招きして誘い、玉座の間を後にする。振り返り様に目に映ったセトの表情には、シオン達の後ろ姿を見て和んでいるような印象を抱かせる微笑が湛えられていた。



その後、アルム達はシオンの隣にある部屋に案内された。空き部屋と言う割に、中には豪華な家財が綺麗に並べられており、普通の部屋と比べると、客室としても十分過ぎる程である。

慣れない環境にそわそわしながらも、各々が自由に時間を過ごす事にする。シオンも自分の部屋には戻らずに、アルム達と共に楽しんでいた。時々部屋に尋ねてくる城のポケモン達が、その光景を見て思わず笑みを零す程に。

「ねえ、アルム。お願いがあるの」

そんな中でシオンが突然暗いトーンで切り出したのは、日も傾き始め、活気のある広い町にも徐々に夜の足音が忍び寄り始めた時の事だった。

第二十九話 国王との謁見〜違う世界の邸宅の中へ〜（後書き）

今回は一呼吸を置く為の話だったので、それ程展開は進めませんでした。要は長く城の描写をしていたのも、意図的だと思って頂きたいです。代わりと言っては何ですが、終わりをそれっぽく気になるように終わらせてみたという↑

では、久しぶりに名前の由来を紹介したいと思います。

まずはステノポロスについてですが、これはギリシャ語で【海峡・瀬戸】という意味です。別に海が近い訳ではありませんが、水タイプのポケモンが国王という事で。

国王関連で行きますと、セトはエジプト神話の砂漠・嵐の神“セト”と、ステノポロスの和訳である“瀬戸”をかけてみました。この方が短いですし、何となく覚えやすいかとw 因みにシオンについてですが、こちらは響きでつけました。何となく好きな名前なので。

次回からはまた違った展開になるかと思うので、どうかお待ち下さい。それでは、また次回お会いしましょう。

第三十話 王位継承の試練（洞窟に眠る宝（もの））

「どうしたの……？ そんな暗い顔をして突然“お願い”なんて……」

開口一番にアルムは疑問の声を上げる。まだ何も聞いてはいないが、シオンを見るその目は、どこか彼女を心配をしているような――優しく、暖かい光を宿していた。

「あのね、明日儀式があるってお父様も言ってたでしょ？ あれね、私が王位を継承するのに受ける必要がある試練の事なの」

表情が少し暗くなっているとは言え、笑顔が消えた訳ではないらしい。アルムが集中して聞いているのに気づいて軽く笑ってみせると、シオンはさらに続ける。

「別にそんなに深刻な事じゃないの。その試練って言うのは、この近くにある【アクティウムの洞窟】に行って、王家の証を取ってくるっていうものの。誰かを同伴させるのも認められている。でもね、その同伴者は信頼出来る者って決められてるの」

そこでシオンは一旦喋るのを止め、窓から外を見遣る。太陽は徐々にその姿を暗まし始め、その代わりに月が神秘的な光を放ちながら存在感を示していた。先程まで見えていた雲も姿を消し、無数の星も負けじと自らをアピールする準備をしている。

「私ね、王家と国民の関係って、この空と同じだと思うの。王家の者はみんなを明るく照らす太陽。みんなはこの太陽が良いと言うけど、太陽は空の中ではいつも独りぼっちよね。だから、いつもたく

さんの仲間に囲まれてる月や星がすごく羨ましかったの」

羨望の眼差しをぼんやりと光る月に向けた後、シオンは一拍を置いて再びアルムの方に向き直る。その顔には、嬉しさと戸惑いが混在した複雑な色が窺える。

「話が逸れちゃってごめんね。それでね、私を王女としてではなく、一人の普通のマリルとして接してくれた時も、友達と言ってくれた時も嬉しかった。あなたと一緒にいると、私は自然体でいられるの。だから、何を言いたいかと言うと、その……あなたは私にとって家族以外に信頼出来るポケモン（ひと）なの。それで――」

「試練を受ける時に同伴して欲しいって事かな……？ もしシオンが本当にそう思ってくれてるんなら……僕はもちろん良いよっ」

ここまで来れば、シオンが最後に言い切るまでも無かった。アルムは優しく笑いかけながら、自分の思いを先に告げる。

「まあ……こんな事を言っておいて、外れてたら恥ずかしいけどね」

「ううん。そう言いたかったの。だから、アルムが受け入れてくれてとても嬉しいし、ほっとしてる。本当にありがとう……。何か長々と話してごめんね。さあ、夕食の用意が出来ている頃だから、そろそろ行きましょうか」

シオンに明るい笑顔が戻っていき、アルムも心底ほっとする。そうして、彼女に誘われるがままに部屋を後にする。

微かに光を放ちながら瞬く星空の下、夜独特の静寂が町全体を支配していた。風の子も悪戯を止めたのか、外は無風状態となっており、より一層静けさを引き立てている。しかし、その町を代表する城の中はと言うと、その逆となっていた。城内のポケモン達が慌ただしくあちこちに駆け回っているのである。

そんな一段と賑やかな空間の中、アルム達はもてなしを受け、今までに無いくらい楽しい時間を過ごした。それはもう、時が経つのを忘れるくらいに。気がつけばいつの間にかすっかり夜も更けており、アルム達は用意してもらった部屋で、シオンと一緒に眠りに就くのであった。



「さて、覚悟は良い？」

翌朝になり、場所は町から少し離れたところ。全てを飲み込むか、はたまたそこから何か風を吹き出すのか、そんな印象さえ抱かせるような、巨大な怪物の口のように開かれた穴の手前に来ている。山肌にぽっかりと空いているその穴の手前には、目印とばかりに【アクティウムの洞窟】という看板が立て掛けられている。

中はまるで夜のように薄暗く、空から降り注ぐ太陽の光では、内部の様子がほとんど確認出来ない程である。まさしく洞窟と言うに相応しく、足元には苔が生えていて湿っぽい空気が漂っている。

まだ入る決心がついていないのか、アルムは入り口の手前で立ち止まっていた。隣にはシオンが寄り添って不安そうに見つめている。

「ねえ、本当に大丈夫？」

「う、うん。平気だよ。ちょっと、暗いのが怖いだけで……」

必死に笑ってみせるものの、作り笑顔にしかない。ここに来るまでは自信满满でいたものの、やはりその責任の重大さのようなものを感じて物怖じしてしまったのである。

「やっぱり、付いてきてもらって良かったわね……」

苦笑いを浮かべながら振り返るシオンの視線の先には、溜め息を吐いているガーディー——ヴァローの姿があった。互いに目を合わせ、気まずそうにする。

「そういう訳だ。アルム、俺も一緒に付いていくからな」

「うん。お願いね、ヴァロー。それと……ごめんね、シオン。本当に頼りなくて……」

「別に良いのよ。私が一緒に来て欲しかったのは、あくまで信頼の置けるポケモン（ひと）なんだから。アルムが適任だと思ったのに変わりはないわ。さあ、それじゃ早速中に入りましょうか！」

意気揚々と先頭を切るシオンの後に付いていくように、アルムとヴァローも続けてひんやりとした風が流れる洞窟の中に足を踏み入れる。

ぺたぺたと足音を立てながら、アルム達は岩で出来た洞窟の中をひたすら手探り状態で突き進んでいく。壁にはところどころ間隔を置くようにして松明のような物が掛けられており、ヴァローの炎技で明かりを燈していた。このような物がある辺りからも、他者^{ひと}の手で作られた洞窟である事は間違いないようである。

最初こそ長く続く一本道だったものの、途中からは分かれ道が現れ始めた。分岐点には簡単な暗号文や文献のような物が書かれた看板もあり、シオンが随時読み解きながら順調に先へと進んでいく。

そうして行き詰まる事なく四つ目の分かれ道を右に進んだ頃から、道は途中から開けていき、松明によるものではない光が奥から差し込んでくる。空気も涼しくて心地好いものになっていき、何やら凄まじい音も聞こえてきた。戸惑う事なく真っ直ぐ進んでいった広い場所に出ると、それまでとは景色が全く変わっていた。

ごつごつとした岩の天井からは、ところどころ陽光が差し込んでおり、空間全体をぼんやりと照らしている。空間の両脇に目を遣ると、その源泉がどうなっているのかは分からないが、轟々と音を立てて流れ落ちる滝が見えた。流れている水は透明度が高く、城で飲んだ物と同じくらい透き通っている。滝壺に落ちて叩き付けられて弾ける水しぶきも、光に照らされて一粒一粒が美しく、幻想的な物となっている。

その中央を走る一本道の先は、広い正方形の岩の床となって行き止まりとなっており、中央には下に通じる横幅の広い階段が見えた。その階段を囲むようにして、対角線上には四本の荘厳な柱が立って

いる。もちろん、その柱にはステノポロスの旗が付いている。

「あの階段の下に王家の証があるのかな？」

「ええ、たぶんね。私も来た事が無いから、全く分からないけど……とにかく、先に進みましょう」

興味深そうに一通りこの神殿のような間を見渡した後、シオンが再び先頭になり、一行は階段を一步步降りていく。

長く続く石の階段も足元はほとんど見えず、再び壁の松明に頼らなければならぬ程に暗くなっていた。上から流れてくる冷たい風が足元を吹き抜け、気温が徐々に下がっていくのを感じたアルムは、体が小刻みに震え始める。

「あれ……何か寒くない？」

「そうか？ 一応松明も点いてるから、そこまで寒くないはずなんだけどな……。とは言っても、俺は炎タイプだから、その辺は分からないけどな」

一応ヴァローにも声を掛けてみるものの、思った通りの答えは返ってこずに首を傾げる。続いてシオンにも眼差しを向けて同意を求めるが、こちらにも分からないとばかりに不思議そうな顔をする。

「まあ、元々洞窟の中だし、下に向かってるからね。それに、さっきの滝が流れてるのも、空気を冷たくしてる原因なのかも。何にせよ、早く取りに行きましょうか」

あっさりとシオンが結論を出したところで、アルムも一応納得し、

寒さを紛らわす為に階段をなつて駆け降りていく。それでも何となく釈然とはしないのか、訝しげな表情のままであった。



急いでいた訳ではないものの、息を切らしていたアルム達。ようやく落ち着けたのは、階段を降り始めて十数分後だった。——つまりは、階段を降り切ったという事である。

その降りたすぐ先は、再び狭い道となっており、突き当たりには木製の古びた扉があった。シオンは下げている小さなポーチから一つの鍵を取り出すと、扉に駆け寄っていつて鍵穴に差し込んで開錠をする。鍵が開く音がすると同時に扉を開いた奥には、また先程の空間とは違うものとなっていた。

地面には多数の宝箱が置かれており、いかにも宝物庫という感じである。中身が何かまでは分からないものの、その豪華な装飾の付いている宝箱からも、王家に相応しい宝が入っている事が感じられる。しかし、その内のいくつかは錆びていたりただの木の箱だったりするなど、例外の物もあるようである。そんな中で全てに共通して言えるのは、箱には嚴重に鍵が掛けられているという事である。

「へえー、こんな風になってるなんてね……。もっと早くに来てみたかったわ……」

いの一番に感嘆の声を上げるのはシオンだった。宝箱を頻りに触りながら、あちこち歩き回っている。

「ねえ、シオン？　僕がついて来る必要はあったのかな……？」

ここまでも不安で一杯だったが、目的地に着いて余計に膨らんでふとアルムが漏らした不安――それは、この場における自分の存在価値であった。ついて来るだけでも十分楽しい気分ではあったのだが、いざ思い返してみると、自分は何も役に立ってなどいない。それがアルムの気持ちを複雑にしていたのである。

「うーん、これと言っては無いかもしれないわね」

繕う事のない正直なシオンの答えに、その事を心のどこかではわかっていながらも肩をがっくりと落とす。しかし、直後に「でも――」とシオンは続ける。

「私一人じゃ、ここまで来れなかったかもしれない。それは決して体力や装備が足りないとか、そういう意味じゃないの。何か、先代の国王達の重圧に押し潰されそうになると言うか……。今まではそれでここまで来れなかったんだけど、今回は違った。一緒にいて欲しい友達ひとがいたから。だから、私がそう思ったからって理由だけじゃ駄目かしら？　絶対に自分を役立たずだなんて思わないでね」

「うんっ、それだけで十分嬉しいよ」

心底ほっとしたのか、アルムの表情には安堵の色が滲み出ていた。隠そうとしても隠しきれない程に自然と零れ出る笑みを見て、シオンもどこか嬉しそうにする。

「おーい、アルム。何を顔を赤くしてるんだ？」

「べ、別にそういう訳じゃ……。そ、それより、王家の証ってどこにあるの？」

ヴァローがからかうのにますます困惑しながら、アルムは強引に話を切り換えた。ふっとヴァローが鼻で笑っているのを尻目に、シオンに付いてアルムは先へと進んでいく。

この空間の突き当たりまで来たところに、高貴な赤い布であしらわれた高い台座があった。その上にはこの宝物庫にある物よりも小さな箱が二つ置かれており、片方は鍵の掛かっていない宝箱らしい近づいていってそと箱を開けて中を覗くと、ステノポロスの紋章が刻み込まれている円形に形作られた水晶が入っていた。ネックレスのように首から下げる事が出来るようになっていた。

「これが王家の証？　すごく綺麗だねっ」

「ええ、私もどんな物か知らなかったからびっくりしてるわ。でも、こっちの箱は何かしら……？」

“王家の証”を掲げてまじまじと見つめながら、シオンはふともう一つの箱へと視線を移す。何かを入れる為の物ではなく、透明の箱の中に密着するように複雑に、そして折り重なるようにして金属の棒が入っていた。

「これは何だろう？　これも王家の宝なのかな？」

「いえ、まさか……。こんなの、文献でも見た事ないわよ……」

アルムもシオンも、この未知の物体にはただ首を傾げるしか無かった。ヴァローも横から中まで覗いてはみるが、結局何なのか分からなかった。

「とにかく、“王家の証”は手に入ったんだし、さっさと城に戻りましょう」

得体の知れない物には下手に手を触れないでおこうと思い、三人は来た道に戻るべく振り向いたその時だった――。

一気に空気が冷たくなったかと思えば、三人の僅か数歩先の地面に青白い細い光線が当たり、一瞬にして足元の岩が凍り付いた。その光線が飛んできた方向に恐る恐る目を遣っていくと、そこには水色の体毛を持っており、耳や体の模様には菱形が見られる四足歩行のポケモン――グレイシアの姿があった。冷気が漏れているその口が、ゆっくりと動く。

「さあ、それを渡してくれないかな――」

第三十一話 氷を操る訪問者―謎の箱を巡る戦い―

水色の体毛をしたグレイシアの姿と高貴な台座の上にある箱――この二つからパントが描いた絵が瞬時に浮かんだアルムは、背筋が凍り付いて瞬間的に思考が止まってしまふ。足を動かそうとしても、体が緊張に支配されて上手く動かせずじまい。

「あれって、もしかして……凶鑑の一ページを盗んだ……」

「ああ、パントさんの絵が正しければな」

隣にいるヴァローはと言うと、屈み込んで威嚇の姿勢を取っていた。アルムとは態度こそ違えど、同じく見知らぬ遭遇者を警戒している。

「あなたは……誰？ 何故これを……？」

三人の中で最初に相手に向かって話し掛けたのは、シオンである。表情は強張っており、声にも緊張感が窺える。しかし、絶対に渡すまいと、“王家の証”を強く握り締めている。

「これはこれは王女様。お初にお目にかかります。僕はクリアと申します。以後お見知りおきを」

至って丁寧な物腰で深々と頭を下げるグレイシアークリア。その様子からは一切敵意の欠片も感じられず、数秒の後に頭を上げた際も微笑みかけてきた。だが、その笑みは逆に全員の背筋を凍らせる。

「しかし、お言葉ですが――僕が望むのは、そちらの箱の方です」

一呼吸を置いて、クリアの表情は一転して真剣なものに変わった。ゆっくりと上げた前足で指し示すのは、台座の上に置かれている謎の箱だった。これにはアルム達も啞然とする。

「という訳で、ブレット。後は任せたよ」

「はいはい。ようやくオレの出番が来たって訳ね」

気を張っていた中で聞こえてきた、クリアとは違う声を聞いて、アルム達も一斉に身構える。固唾を吞んで待ち構える中、三人の間を何かが疾風の如く通り抜けていった。その一瞬の出来事の後には、細い水の跡が残っているだけである。

「えっ……?」

呆氣に取られたような声を漏らしながら後ろを振り向くと、さっきまでいなかったはずのポケモンの姿があった。首には黄色い浮袋、両腕には半円状の青い鰭があり、尻尾が二股に分かれているブイゼルという種族である。そのブレットと呼ばれたブイゼルは、悠々とした表情で箱に手を掛けている。

「さ、させないっ!」

いち早く反応したシオンは、息を大きく吸い込んでから口を窄め、^{すぼ}のけ反りながら勢いのある水流を吹き出す。迷う事なく放たれたスピードの速い水流――“みずてっぼう”は、一直線にブレットに向かって飛んでいく。

「へー、王女様にしては中々強気じゃんか」

随分と軽い発言をすると、ブレットは箱を取って掴んだ状態で、僅かに身を翻して易々と水流をかわした。片手で箱を持ち上げて、さらに余裕の態度を見せている。

「さあ、目的の物は手に入れたんだ。さっさと――」

クリアから言葉がそれ以上告げられる事は無かった。アルム達など眼中に無いかのように背を向ける途中で、赤々と燃え盛る炎が伸びてきたからである。対するクリアは、一瞬でそれを察知して、ぎりぎりのところで跳躍して避けた。鋭い眼光を向けた先にいたのはもちろん、ヴァローである。

「へえ……邪魔するつもりなんだ」

攻撃の矛先を向けられた事に苛立ちを感じているのか、クリアは口元を綻ばせているヴァローを睨みつける。体の方にも変化が現れ始め、全身の毛を凍らせて逆立てていき、先程までの穏やかな雰囲気とはまるで一変する。それと同時に、空気が徐々に冷気を帯び始め、身震いするまでの寒さになった。

「これ、さっき階段を降りる前に感じたのと同じ寒さだ……」

アルムが身に覚えのある嫌な感覚を再度感じている最中、クリアの体の周りに細かな氷の結晶が浮遊し始める。

「来るぞ……気をつけろ！」

注意を促すようにヴァローが叫ぶのと同時に、クリアは体を震わ

せると、突風が吹き始める。その風には、目に見えるまでに大きくなった美しい氷の結晶が入り混じっている。

「アルム、シオン、下がれっ！」

さらに一步前に踏み出し、ヴァローは足に力を込めて大口を開ける。そこから鞭のように撓^{しな}る赤い炎柱――“かえんほうしゃ”を繰り出し、冷気の籠った風に真正面からぶつけた。炎は易々と氷の結晶群を突き破り、クリアへと迫っていく。

「それを破ったくらいで、いい気にならないですよ？」

威力とスピードは若干落ちているものの、それでもまだ勢いのある火炎を、クリアは冷静に見切って跳躍して避けた。そして、体勢を崩さぬまま、空中で先程と同じ青白い光線を放つ。

「こっちこそ、当たるかつ！」

“かえんほうしゃ”よりも速度の速い光線を、前方に跳ぶ事によって回避するヴァロー。今度はその身に真っ赤な炎の衣を纏い、回転しながらクリアに向かって突進していく。

「そんな直線的な“かえんぐるま”が当たるわけ――」

余裕を持って跳び上がるクリアだったが、一瞬にして顔から余裕の色は消えた。足元を通り抜けていくはずのヴァローが、予想に反して跳び上がり、追いついてきたからである。空中ではかわす術もなく、クリアは直撃を喰らう形となった。弱点のタイプである為に、小さく呻き声を上げながらも、何とか無事に着地を決める。

「なるほど、さすがに盾突くだけあるって訳だ。これで楽しくなりそうだ……」

クリアは微笑を浮かべると、全身の毛をさらに逆立てて、臨戦体勢に入る。一方で、空気がより一層冷たくなつたのを感じつつ、ヴァローは気持ちの高ぶりを覚えながら駆け出していく。



「さて、オレはこっち二人の相手って事だな……？」

ヴァローとクリアが戦っているのを尻目に、ブレットと対峙するアルムとシオン。二人とも一応身構えてはいるが、アルムはどこか及び腰にも見える。

「ぼ、僕が相手になるよ！」

それでも、威勢だけは張ろうと一歩近づいて宣言してみせるが、声は突然の出来事に対する恐怖で震えていた。戦いが避けられないのであれば、シオンを戦わせたくない——その思いで、何とか一歩を踏み出したのだが、体の方は正直だったのである。

「いいえ、アルムは下がって。ここは私が相手になるから」

アルムよりさらに前に出たシオンは、手を伸ばして落ち着いた声で制止する。しっかりと視線を敵へと向けており、意気込みも充分のようである。

「で、でもシオンは――」

「大丈夫よ。王女も、ただ城で勉強をしてるだけじゃないもの。それに、戦うのが怖いんなら、強がらなくてもいいのよ」

心を見透かすような優しい微笑みを見せられ、アルムは思わず口を噤んでしまう。恐怖を乗り越えて、もう一步先に踏み出したい――その気持ちはあったものの、その勇気が今は持てなかった。

「それじゃ、少し下がってね」

勇んでブレットに近づいていくシオンを見て、今度は悔しそうに口元を噛み締める。それは、勇気を振り絞りたいと思う自分がいる中で、言葉に甘えてしまう自分が見えて情けなく思ってしまったからである。そんなアルムを背に、シオンは鋭い目つきでブレットと向かい合う。

「さあ、私達も始めましょうか」

「はっつ。王女様が相手なら、オレも丁重にもてなさないとな」

箱を元の位置に戻しつつ、ニヤニヤと意地悪そうな笑みを見せているブレット。そんな彼に反感を覚えたのか、シオンはむっとした面持ちになりながら小さな口から先制の水流を放つ。

「だから、当たらねえって――」

余裕を持って回転をして身を翻して水を避けるブレットの眼前に、いつの間にかシオンが迫っていた。その尻尾の先は、透明な水で包まれている。

「これならどうかしら？」

尻尾の細い部分を掴み、シオンは自らの腕力で振り回す。纏った水は尻尾から離れる事なく付いていき、ブレットの体を狙い打たんとしている。

「おおっと。随分とやんちゃな王女様だな」

確実に捉えたかに見えた一撃だが、ぎりぎりのところで後ろに身を引いてかわされる。一方のシオンは、攻撃を空振った事で着地の姿勢が不安定になるかに思われたが、難無く着地を決める。

「——こっちが本命よ」

一瞬綻んだ表情を見せると、もう一度口を窄めて攻撃の体勢に入る。しかし、そこから放たれたのは“みずてっぼう”ではなく、大量の光り輝く泡——“バブルこうせん”だった。近距離で放たれ、しかも一直線ではなく放射状に広がる無数の泡をかわしきる事は難しく、体に当たって弾ける度にブレットは顔を顰^{しか}めながら後ろに飛ばされていく。

「はっ、ただのおとなしい王女ではないようだな」

腹部を押さえながらも、ブレットは高揚してきたようで、その気持を表情に滲ませる。出方を窺うシオンも、ここからが本気なの

だという事を直感的に感じ、表情を険しくする。

互いに見つめ合って膠着状態が続く中、先に動き出したのはブルットだった。片足を半歩前に出して構えるような姿勢を取ると、続いて尻尾を大きく振って二日月の形の衝撃波を生み出した。

「“ソニックブーム”くらい……！」

素早い攻撃に焦りを見せるものの、それはほんの一瞬。すぐさま迎撃すべく、水を纏った尻尾——“アクアテール”で弾き返す。弾いた際の反動で強制的に後ろに下がらされるも、ダメージは受けないようである。そのまま衝撃を堪え、再度ブレットを視界に捉えようとするが、視線の先にその姿は無かった。

「君が使ったのと、同じ手だぜ？」

「えっ——」

不意に背後から聞こえてきた声に身構えるものの、完全には間に合わなかった。振り向く動作の最中に水流に押し流され、壁際まで追いやられる。

「ま、まさか逆にやり返されるなんて……」

同じタイプの技という事で、さほど効果は薄いものではあるが、一撃を受けた事でシオンは動揺していた。三段階目（さんだんがい）でようやく攻撃を当てた自分に対し、相手は一段階（いちだんがい）少なく熟（こな）したからである。

「どうした？ もう降参するかい？」

「……誰も降参するなんて言っていないわ」

シオンは挑発的な申し出を跳ね退け、体に付いた水滴を振り払った。続いてすっと立ち上がると、小さく深呼吸をして、ブレットの足元を見澄ます。その両足は水で包まれており、次の行動が読み取れた。

「素直に降参した方が良いと思うぜ？」

つまらなそうに言葉を述べると同時に、ブレットの姿が目の前から消えた。それを見て次にシオンが取った行動はと言うと、体をなるべく小さくして“まるくなる”事だった。

「さあ、喰らいな！」

声が聞こえた直後に、右側から衝撃を受けて突き飛ばされる。体は大きく放物線を描くようにして飛んで地面に叩き付けられるも、先刻程の痛手は受けなかった。作戦は功を奏したらしい。

「あなた、一呼吸を置いてから攻撃しようとするから、次の行動が読みやすいわよ？」

一転して、今度はシオンが挑発するように語りかける。最初は動揺こそしたものの、一回攻撃を受けた事で、落ち着いて戦う為の切り替えが出来たからであろう。

「な、何を……！ 黙ってれば調子に乗って……」

ブレットの方はその逆で、手玉に取られたようなシオンの言葉に、すっかり苛立っていた。今のブレットに、冷静さは失われている。

尤も、元からそれ程冷静さがあつた訳でもないのも事実ではあつた。

「これならどうだっ！」

声の調子にも、明らかに変化が現れていた。そんなブレットは、動揺を払拭するかのように尻尾を大きく振り回す。その軌跡から飛び出してきたのは、“ソニックブーム”ではなく、あまた数多の檸檬色の星型の光線だった。

「がむしやらの攻撃をしても当たらないのにね」

くすりと小さく笑うと、シオンは大きく息を吸い込んで、勢いをつけて大量の泡を放つ。一つ一つの泡はシオンを守る壁のように浮遊し、星型の光線——“スピードスター”とぶつかって、弾けながら相殺していく。

「くっ……これなら、これなら……！」

ブレットの焦り様は、はっきりと見て取れた。再び足元に水を湛え、駆け出す準備をする。指摘通りの、一呼吸置いたわかりやすい攻撃の準備である。対するシオンは、ブレットの様子をさらに凝視し始めた。

その後、宣告通りにブレットが攻撃に移る。全身に水を纏うと、ブレットは左足に力を込めて走り出した。

足に纏った水を勢いよく噴出する事によって、推進力を得て素早く突撃する——“アクアジェット”。これで三度目となる技だが、先程までのように行けば上手く決まる——“はずだった”。

右側に回り込んだ時には、既にシオンはブレットの方をしつかり

と見据えており、次の瞬間には水に包まれた尻尾がブレットの腹部に直撃していたのである。

「ぐはっ……！」

重い衝撃に踏ん張る事も出来ず、ブレットの体は宙を舞って壁に叩き付けられた。攻撃を受けた部分を押さえながら立ち上がろうと試みるも、その前にシオンが立ち塞がり、とうとう抵抗するのを止める。

「あなたって、頭に血が上ると同じ攻撃パターンになってしまっているね。“アクアジェット”の軌道もスピードも全く一緒だったわ。……さあ、アルム。聞きたい事があるんでしょ？」

さらりと対処した理由を述べると、今度は笑顔を見せながらアルムの方を振り向く。突然指名された事に驚きつつも、アルムは“例の絵”の事を思い出して恐る恐る近づく。

「あ、あの……もしかして、あなたがリーブタウンの図書館にある図鑑の一ページを盗んだんですか？」

「はっ……知らねえよ。そもそも、オレ達は何で盗まなきゃならないんだ？」

「えっ、それは……」

必死に声を振り絞って聞いたのに、簡単に否定され、アルムは言葉に詰まってしまう。仮にパントの絵が間違っていたなら、とんでもなく失礼な事を言っていると思ったからである。そんなまごまごし始めたアルムを見兼ねたのか、シオンが一步詰め寄る。

「何でも何も、この財物庫に忍び込んでステノポロスの所有物を盗もうとしたあなたが、偉そうに言える立場かしら？」

「だから、元はあの箱はオレ達の所有物なんだっつーの。それに、誰も凶鑑のジラーチのページなんか興味ねえよ！」

不当な問い詰めだとばかりに、ブレットは声を荒げて立ち上がる。一瞬痛みに顔を歪めるが、それでもさっきまでのダメージはさほど残っていないように見受けられる。

「違ったんだ……。それは――」

「待って、アルム」

ステノポロスの財物庫から盗もうとした事はさておき、少なくともあらぬ疑いを掛けてしまった事を謝ろうとアルムが頭を下げようとした時。シオンがふとそれを制止する。

「シオン、どうしたの？」

「気づかなかった？ アルムは“凶鑑のページ”ってしか言っていないのに、このブイゼルは“凶鑑のジラーチのページ”ってはっきり断定して言ったわよね？」

「あっ……!!」

“はい”か“いいえ”の返答しか考えてなかったアルムには、そこまで頭が回らなかった。シオンに改めて教えてもらってようやく気づき、一瞬ぽかんとする。一方で、ブレットもそこでやっと自分

の失態に気づき、焦りの色を強くする。

「さて、おとなしく捕まってもらおうかしら？　泥棒イタチさん？」

体格差などひっくり返すかのように、シオンはじりじりと近づいていく。顔は一応笑顔ではあるが、その裏には何か怖いものを感じる。そんなシオンに気押されているのか、ブレットも後退りするものの、すぐに背中が壁にぶつかって立ち止まった。

「お、オレ達は泥棒なんかじゃ——」

「シオン！　横に跳べっ！」

うろたえるようなブレットの言葉の次に聞こえてきたのは、背後からのヴァローの叫び声だった。咄嗟の事ではあったが、シオンは反射的に指示通り横に跳ぶ。そのコマ数秒後、シオンが立っていた場所が一瞬にして凍りついた。

「ブレット、何やってるんだい？　遊びはここまでにして、早く帰るよ」

アルムとシオンが同時に振り返ると、クリアの前に張られた瑠璃色の壁がヴァローの火炎攻撃を弾き返しているのが目に入った。

「はいはい。こっちは遊んでた訳じゃないんだけどな……」

二人とも目を離したのは失敗だった——ブレットの声が聞こえた時に思ったが、時既に遅し。振り向いた時には、ブレットの姿は忽然と消えていた。

「今度こそ帰ろうか。用は済んだしね」

もう一度クリアの方に向き直ると、その隣には箱を脇に抱えているブレットが立っていた。してやったりと言わんばかりにニヤついている。

「くっ、逃がすか！」

アルム達より幾分か近い位置にいるヴァローは、体を小さく丸めながら炎を纏い、回転を加えて体当たりをしようとする。

「もう、戦う必要は無いよ——」

目の端でヴァローの姿を捉えていたクリアの表情が、急に綻んだ。その変化に異変を感じたヴァローは攻撃を中断し、すぐさまアルム達の元に駆け寄っていく。

ヴァローが二人の前まで迫り着くのとクリアが行動を起こすのは、ほぼ同時だった。クリアが全身を震わせると、その背後から強風が吹き始めた。しかし、今度は小さい氷の結晶ではなく、大量の白い雪を含んでおり、先程の“こごえるかぜ”とは桁違いの凍てつく冷気が空間を覆い尽くしていく。

吹きすさぶ“ふぶき”にあつという間に辺りが白く染められる中で、アルム達は何とか堪えていた。寒さから身を守るべく炎の鎧を纏ったヴァローが、二人を庇うようにして立っていたからである。

「くっ……前が見えない……！」

強固な鎧は破られはしないものの、視界は完全に雪で覆われて見

えない状態。どれだけ火力を上げようとも、吹き付ける雪は止むところを知らず、ただ攻撃が終わるのを待つしか無かった。

そして、財物庫全体が白一色に塗り潰されてしまった頃、徐々に雪の量も減っていき、“ふぶき”の勢力が弱まり始める。しかし、視界がようやく開けてきて安心したのもつかの間、既に二人の姿は消えていたのだった――。

第三十二話 試練の終了と旅立ち―行方を追う道のり―

抵抗も虚しく、最後の最後で謎の箱を奪われてしまったアルム達。一応“王家の証”を手に入れたので、試練は成功したものの、晴れやかな気持ちとはいかず、三人ともすっきりしよげ返っていた。だからと言って、留まっていたところでどうしようも無いので、とぼとぼと洞窟を後にして、ステノポロスの城へと戻っていくのだった―。



「ふむ、ちゃんと王家の証は持ち帰ってきたようだな。これで、晴れて合格と言ったところだ。だが……三人して何故そんなに暗いのか、教えてはくれないか？」

大きく煌びやかな玉座に座り込んで、やや高い位置から三人を見下ろしているのは、エンペルトのセト。帰ってくるなり見受けられた三人のあまりの沈み様に、不可思議そうな表情をして問い掛ける。

その質問に対して、シオンが細かく経緯^{いきわづらひ}を話し始める。財物庫に侵入してきたグレイシアとブイゼルの二人組の事、そして、その二人組が財物庫の箱を盗んでいった事を。説明の途中も、正直怒られるのではないかと思い、時折顔色を窺^{うかが}っていた。一方で、聴き入る

セトの方と言うと、聞いている最中も、必死に説明するシオンの顔を、同じく真剣な面持ちで見つめていた。

「——という訳なの。お父様、逃がしてしまつてごめんなさい」

「謝る必要は無いぞ。そうか、今になってあの箱を持っていたのか……」

頭を下げて説明を終えたシオンの頭を撫でながら、セトは柔和な笑みを浮かべている。しかし、そんなセトがふと漏らした一言に、シオンはもちろん、アルムとヴァローも耳を疑った。三人が一樣に驚きの表情を見せて顔を見合わせる中で、シオンがもう一度セトの方に向き直る。

「えっ。お父様、何を言ってるの？ ステノポロスの財宝が盗まれたのに、『今になって持っていた』ってどういう意味？」

「ああ。あれはステノポロスの財宝ではなく、一応“私の”所有物だからだ。それに、その二人なら知ってるからな」

『え——はいっ!?!』

置いた間隔までも同じで、三人の声は見事にシンクロして玉座の間に響き渡った。特にシオンの声が一番大きく、その大きさに一緒に驚いていたアルムが驚くほど。返答は聞いたものの、それだけでは状況が全く掴めず、反射的に叫んでしまったのである。叫び声が三重唱のようにしばらく木霊した^{こだま}後で、ふっとセトが笑って見せる。

「ははっ、悪かったな。まあ、知ってるとは言っても、どこで何をしている連中かって事くらいだし、突然持っていかれたのも事実だ

けどな」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ それじゃ、お父様はいつかは持っていかれるって分かってたって事？ それ以前に、お父様はどうして彼らと接点があるの？ それに、“私の”所有物ってどういう事なの？」

セトの話聞いてようやく把握出来てきたシオンが、今度は矢継ぎ早に質問をぶつける。深刻な事件だと思って心配していたのに、セトだけは承知の事のように、ただの杞憂に終わった事に些か怒っているようである。その証拠に、全てを吐き出した後で、大きく頬を膨らませている。

「まあまあ、そんなに一度にたくさん質問するな。今から説明するから。全ての答えになる事一つを言うと、私は昔、海賊をやっていたのだよ」

「へえー、海賊を——って……待って、お父様。そんな話、一度も聞いた事が無いわよ！？」

「まあ、慌てるな。海賊と言っても、陸の善良なポケモン達に対しても悪行ばかりを行ってた海賊から物を奪ったり、時には奪われたものを取り返す——義賊みたいな、取り返し屋みたいな事をしてたんだよ」

淡々と語るセトに対して、娘であるシオンは衝撃の事実だったのか、ひたすら瞬きをして話を聞き続けていた。そんなシオンの驚嘆の声も軽く静めるセトは、何故かその反応を楽しんでいるようにも見える。

「あの財物庫には、豪華な宝箱の他に、ちょっと古びた感じの箱があっただろう？ あのとんどが、盗まれた物を取り返した際にもらった報酬や、仕事の際に拾った物なんだ。アジトが小さくて置き場所が無いという事で、一部を譲り受けたってのもあるが……。もちろん、盗まれた箱もその一つだ」

セトの説明を受けて、財物庫にあった錆びた箱や木製の箱を思い出し、アルムとヴァローも合点が行ったようである。互いに見交わして頷いた後で、続きを話そうとするセトの方を関心を持った目で見つめる。

「それでだが、海賊を止めた後も、海賊の団員とは付き合いを続けてたんだ。そして、たまに様子も見に行った中に、その二人組もいたってただけだな。しかし、さすがに急にあの箱を持って行かれるとは思わなかったがな……」

話も一区切り着いてあらかた状況が把握出来たところで、アルムとヴァローには今一度疑問が浮かんた。互いの考えをひそひそ声で確認し合った上で、アルムが思い切って前に一歩踏み出す。

「あの、セトさん？ それじゃ、あのグレイシアとブイゼルも、義賊って事ですね？ でも実は、あの二人はリーブフタウンの凶鑑の一部を盗んだ犯人なんですけど、これは一体どういう事でしょいか……」

「まさか、そんなはずは……。我々の義賊は“トリトン”と言うのだが、その方針は『一般のポケモンからは、物をむやみに盗むべからず』と言ったものなのだよ」

セトはアルムの質問に対して大きく動揺していた。大きな腕――

正確には翼だが――を前で組んで、唸り声を上げて考え始めた。大きな体の移動に、玉座がぎしぎしと小さい悲鳴を上げる。

「うーむ、考えられるとすれば、その図鑑が現在の持ち主でない事だが……そもそも一体どういう事か、詳しく説明してくれないかな？」

「はい。実は――」

ここでアルム達は、財物庫でのやり取りも含め、自分達の旅の軌跡を語り始める。極力余分なところは省きつつ、それであって図鑑の事については詳しく。普通なら話しはしないのだが、セトにどこか安心感を抱いていたアルムは、テイルについても交えながら話した。

ところどころ言葉に詰まりながら喋り続け、全てを言い切った頃には、シオンとセトの親子は複雑そうな面持ちであった。興味を持ったような、はたまた未知の事に恐れを抱いているような感じである。

「なるほど、そんな事情があったとは……。つまり、ジラーチ（あの子）の正体を知る為の大事な物を、二人が持ち去った……。そして、それは本人も認めていたのだな？」

「はい、間違いないはずです。パントさんの絵も、これで確証が持てましたし……」

話を整理して理解したセトは、返答を聞くなり、今度は吐息を漏らして悩ましげな表情を見せる。威厳もあって堂々としていた頃からは想像もつかない程に、“普通の”動揺した態度である。

「しかし、やはり納得が行かない。海上で盗みを働く場合は別として、陸で取り返す仕事をする際は、間違まちがいなど起こるはずないのだが……。そもそも、凶鑑の一ページだけを盗むという依頼自体がおかしい。もしや、トリトンで何か良からぬ事が起きているのかもしれないな……」

セトも出来る限り思案してはみるものの、盗みの手掛かりとなる事はそれ以上浮かばなかった。それでも少なくとも、二人組の正体や大方の事情がわかっただけでも収穫がある為、アルムとヴァローはセトに向かって小さく会釈する。

「さて、戴冠の儀式が一通り終わったとは言え、私としてはいつまで居てくれない構わないのだが……君達はそうも行かないだろう？」

「はい。手掛かりに近づけた以上、早く会って真実を確かめたいですから」

一応好意で持ち掛けてはみるが、セトにも既に分かっていた。アルム達はまたすぐに出発する——それはすなわち、別れを意味する——と。だからこそ、セトは敢えてシオンの方を向こうとはせず、それ以上は話そうとしなかった。

「ねえ、お父様。トリトンのアジトに行けば、詳しい事が分かるわよね。だから、アジトの場所を教えてくれない？ 私がアルム達を

案内するから」

しばらく黙りこくっていたシオンが突如、意を決したように言葉を発した。思いも寄らぬその内容に、アルムやヴァローだけでなく、セトまでが瞬間的に固まった。何か言葉を発する間もなく、顔も、そして体も。

「そ、それは駄目だよ。シオンは王女なんだから、この国から出ちゃいけないんだし……」

誰よりも声に出して先に反応したのはアルムだった。何かを振り払うように首を横に振るその表情には、嬉しさと悲しさの両方が滲み出ている。この二つの想いは、さっきのセトとヴァローのやり取りを受けた時に芽生えたもの。特に後者は、今までも体験した別れの時に感じたのとは少し違う、どこか淡い悲しみだった。

「そうだよな。シオンは仮にも、将来この国を背負って立つ王女様なんかもんな」

同意をするヴァローの言葉も、アルムにとっては嬉しくないものであった。それが正しい事であるのは分かっているのに、何故かもやもやした矛盾した思いが渦巻いていく。そのせいか、この少し乾いた空気を吸う度に、空虚感が支配し始めた胸が苦しくなる。

「そんな……王女様って理由で突き放さないでよっ！　ねえ、お父様。良いでしょ？　私、アルム達を助けたいの……」

そんな中で、当の本人は必死に父親に訴えかけていた。このまま一緒にいたい。離れたくない——そんな思いの籠った強く真っ直ぐな眼差しに、セトは暫し無表情のまま黙り込む。それを境に誰もが

動こうとはせず、一時的に沈黙が空間を包み込んだ。

「二人の言う通り、王女ともあろう者が、勝手に国を出ていく事は許されない。お前も分かっているだろうがな」

暫し経った後で紡ぎ出されたのは、国王らしい、正当な答えだった。誰もそれを否定する事など出来ない。それは国王だからという理由ではなく、純粹に理に適っていたから。

だからこそ、アルムは余計に小さくなっていった。これ以上、空虚感を取り払える言葉が思い浮かばなかったからである。もっと楽しい時間を引き止める為の——シオンと一緒にいる為の確かな理由が。

「それじゃ、やっぱりシオンとはここでお別れだな」

「うん、そう……だね……」

いつの間にか、心の中が暗い青色に染まっているような気がした。悲しみの青でもあり、しかしシオンの体の色とは違う濃い青に。一緒にいる時間こそ短かったが、アルムにとってとはとても長く感じられていたからである。そんな楽しかった記憶を心の中で振り返りながら、ちゃんと別れの挨拶をしようと顔を上げたちょうどその時、セトが深呼吸のように長い溜め息を吐いた。

「まだ話は終わっていないぞ。——シオン、お前はその場にいながら、この国の財物庫から物を盗まれた。それは紛れも無く、お前の責任だ。だから、責任を持って取り返してくるのだ。元取り返し屋として、そして、国王としての命令だ」

至って真面目な——しかし、その奥には優しさを覗かせるような

顔つきのまま、シオンの方をじっと見据える。そのセトの命令を聞いて意味を理解し、喜びの感情を顔いっぱいに滲ませたのは、シオンだけではなかった。

「えっ、それって……」

乾いた空気を吸い込んでも、不思議と心に潤いが戻ってきており、息苦しさは少しも感じなかった。気がつけば、強張ってた口元が緩んでいる。自然と口から零れたシャボン玉のような言の葉がふわふわと浮かんで弾けると、アルムの笑顔は一層明るさを増していった。

「後の事は私に任せなさい。お前はまだ若いんだから、もっと外に出て世間を知ってきなさい。そして、大事な仲間ともと一緒に、大事な物を見つけてくるのだ」

「……はいっ！」

最後の父親としての励ましに、シオンは全ての思いを込めた声で返した。その凜とした力強い声は、空気さえも澄み渡らせる程に部屋中に反響していった。

「うむ、良い返事だ。これがトリトンまでの道のりを描いた地図だ。……シオン、気をつけて行くのだぞ。必要な時は、いつでも頼ってくれて構わないからな」

一瞬だけ視線を下げて淋しそうにしつつ、セトは一枚の折り畳まれた紙を渡す。シオンはセトと同じ気持ちを示すようにそっと受け取りながら、すぐに表情を戻してアルム達の方に向き直る。

「さて、居場所も分かった事ですし、早速行きましょうか！」

「そうだな。ほら、アルム。いつまでも嬉しそうににやけてないで、早く行くぞ」

それが合図とばかりにセトに背を向けると、シオンとヴァローは堂々とした行進で外へと歩き出す。アルムの方に振り返る二人は、外から差し込む陽光も相まって、どこか眩しく輝いているように見える。

（あれ、何か――すごく懐かしくて暖かいような……。まるで、リ阿斯姉さんとルーン兄さんがいるみたい……）

アルムはふと自分の兄と姉の姿をシオンとヴァローに重ねながら、軽くなった心と同じように足を弾ませて二人の背中を追いかけるのであった。先程までいたじめじめした洞窟とは違い、明るく光を照らし続ける太陽の下、涼しく心地好い風が吹く外の世界へと先に行った二人の後を。

そんな明るい日差しの下に出て、今まで気にしないようにして、実は心の奥では気づいていた、“もう一つ”の空虚感は満たされていった。それと同時に、一時は曇りかけたアルムの心も、今の空のように雲一つなく、澄み切った明るく鮮やかな青に――晴れやかになるのだった。

第三十二話 試練の終了と旅立ち〜行方を追う道のり〜（後書き）

ここで一つ、補足の方をさせて頂きます。

今話の中にて、クリアとブレットはセトが所属していたのと同じ義賊集団——トリトンににいるという説明をしました。それでももしかして「それなら、結局アルム達とは何の問題も無く、敵じゃないんじゃないか？」とも思われるかもしれませんが、しかし、アルム達の必要な物（図鑑のページ）を、しかも理由もわからないまま盗んでいるので、アルム達にとっては敵なのは間違いないのです。はい、それだけですつ。

それでは、また次回お会いしましょう。

第三十三話 潮風の吹き抜ける砦トトリトンへの潜入

マリルのシオンを旅の仲間に加え、水の都とも言えるステノポロスを後にしていた一行は、セトに貰った地図を頼りにひたすら歩き続けていた。

最初の内は、比較的背丈の高い雑草が広がる、何も無い平坦な道のりだった。後ろを振り返って、ようやくステノポロスやアクティウムの洞窟が目に入るだけ。詰まるところ、進む先にはそれらしい集落も何も無かったのである。

しかし、ステノポロスが小さく見え始めた頃から、雰囲気が変わり出した。全身をそつと撫でていく風には、微かに鼻の奥を刺激する塩辛い香りが混じっており、どこか湿気も多く含まれている。足元には乾燥した砂が多く現れ始め、生えている植物にも変化が見えてきた。草丈が低いわりに花が大きいものが多く、その葉は厚く、多肉質な物や毛で覆われた物が増えてくる。

「あれ……？ 何か、少しずつ景色が変わり始めたみたいだね」

「流れる風には微量ながら塩分が含まれていますし、足元の植物は海岸植物が多く見られるようになっていきます。つまりは、確実に海に近づいてきているのです」

静かに目を閉じて、茶毛の耳と尻尾を風の流れに任せた状態のアルム。今まで受けた事の無い新鮮な風を感じながら、新たな土地への期待感を僅かながらに抱いているようである。その雰囲気浸っているのを邪魔しないようにとの気遣いからか、レイルは風下に回り込んで淡々と説明をする。

「そうなんだ……。じゃあ、トリトンも近いのかもね、シオン？」

地図を持って案内してくれているシオンに尋ねるべく、首だけを後ろに向ける。しかし、シオンは後ろで微笑を湛えているガーディ―ヴァローと会話を交わしており、返答は一向に来なかった。

「ねえ、アルムー！」

気づいてくれない事にちよっぴりがっかりしながら前に向き直るアルムの目前に、突如ジラーチのテイルが飛び込んできた。その頭の上には、大きく分厚い一枚の葉っぱを掲げている。

「びっくりしたあ……。一体どうしたの？」

「あのね、この葉っぱの帽子、似合うかなーって思ったの！　ね、どう？」

潮風に揺れる頭の短冊も気にしない様子で、テイルは口を大きく広げて笑顔を浮かべていた。それと同時に、両手で支えている葉っぱを左右に揺らしながら、必死にアピールしている。よほどその珍しい葉っぱが気に入ったらしい。

「うーん。まあ、良いんじゃない？　面白いと思うよ」

「そう？　やったーっ！　ねえねえ、レイルはどう思う？」

アルムの意見を聞いて喜びつつ、今度はレイルに話題を振った。自分の横幅よりも大きな葉っぱを持っているのに、そして風の煽りも受けると言うのに、重さなど全く感じていないようにレイルの前

に移動をして、ティルは返答を待つ。

「大きい葉っぱですね」

即座に返ってきたあまりにも素っ気ない言葉に、アルムが先に凍りついた。似合うかどうかを聞いているのに、これではティルが怒るのではないかと思ったからである。

「大きい葉っぱでしょう！　これ、あっちで見つけたんだ。ねえ、あっちにもっとたくさんあるから、早く行こうよ！」

アルムの予想は大きく外れ、ティルは未だに明るい表情を崩していない。それどころか、葉っぱを見つけた事をどこか誇らしげにしながら、全員を先導するかの如く飛び始める。アルムもその後ろ姿を見つめて、目元を緩めて優しい表情を浮かべながら、ゆっくりとした歩調で後に付いていった。

三人が前方でやり取りをしてるちょうどその頃、シオンとヴァロ―は三人とはやや距離を置いて並んで歩いていた。少なくとも、それぞれの話し声は聞こえない程ではある。

「ありがとな、シオン」

時々二人の間を吹き抜ける突風が耳に音を残していく中で、唐突に切り出したのはヴァロ―の方。静かでありながら、しっかりと思いの籠ったその声は、そよ吹く風に乗ってシオンの元に届いた。

「えっ？ 何であなたがお礼を言うの？ 寧ろ言うのは私の方よ。洞窟では助けてくれて、ありがとう」

「ん……まあ、あの場面なら誰だって助けるさ。それで、俺がお礼を言いたいのは、アルムの事でだ」

ふと出た“アルム”という名前に、シオンも耳を大きく動かして反応した。表情も疑問でいっぱいといったように小さく口を開いて、きょとんとしている。

「ステノポロスに来るまでは不安そうにしてたアルムが、シオンと出逢ってからはその曇りが消えて、嬉しそうにしてるんだ。だからアルムの不安を取り払ってくれたみたいで、感謝してる」

葉っぱを持ち上げてるテイルと向かい合ってるアルムの後ろ姿を見つめたまま、ヴァローは一言言葉をついで発した。その目はまるで、二人の様子を暖かく見守っているようである。

「えっ……そんな事？ それなら、お礼を言われる程の事をした訳じゃないから、別にいいわよ。それにしても、アルムの事をすごく心配してるのね」

「まあな。この旅に連れ出したのは俺だし、あいつが何でも抱え込まないようにするのが俺の責任だからな」

一切の躊躇いも見せずに返したヴァローの方を向いて、シオンは真っ直ぐな――そして、穏やかな眼差しで一瞥する。それに気づいて照れ臭そうに視線を逸らすと、ヴァローはアルム達に追いつくべく駆け出すのであった。



空気の変化は、先に進むにつれてより一層濃くなっていった。足元もほとんどが白い砂に覆われており、今度は潮の香りだけでなく、心が安らぐような穏やかなリズムの潮騒が遠くから聞こえてくる。

「ねーねー。あれがそうかな？」

空を飛んでいる為、遠くまで見渡せるティルは、顔だけをアルム達の方に向けながら、嬉しそうに上下に動いてある方向を指差している。それを受けて、全員が一斉にその先に視線を送ると、まるでステノポロスの城のように広い砦が目に入った。

「そうね……。義賊とは言え、気を引き締めて行きましょ」

「ああ。アルム、覚悟は良いな？」

「う、うんっ」

シオン、ヴァロー、アルムの順に意気込みと確認の声を上げると、いざ中に入る為に勇み立つ。さっきまで明るく振る舞っていたティルも、三人が集中しているのに気づき、表情は崩さないまでも後ろからレイルと一緒に付いていく事にする。

複数の細い丸太で作られた巻き上げ式の門は開け放されており、難無く中に入る事には成功する。その砦の中の様子はというと、小さな集落のように家のような建物が点在している。そのほとんどがボロボロになってる小屋ではあるが。

「……おかしいわね。賊という割に、ポケモンがいないようだけど……」

一歩ずつ警戒しながら進んでいくが、シオンの言う通り、自分達以外のポケモンの姿が全く見えず、違和感を抱き始める。耳をそばだてても、砂を踏み締める足音と小さな漣なみしか聞こえない。

「みんな、隠れんぼしてるんじゃないのー？」

「まさか……。まあ、テイルのはさすがに無いとしても、建物の中にいるんじゃない？」

「いや、そうだとしても、一人くらいは見張りがいるはずだろ。」

一人警戒する様子も無く、あちこち飛び回るテイル。背後から狙われないかと、頻りに振り返るアルム。そして、常に視界に入る限り前方を見ているヴァロー。三者三様に辺りを見回すものの、やはりそれらしい影すらも見えない。そうして突き進む内に、遂には一番奥にある、砦の中で一番大きなログハウスのような建物の前まで辿り着いた。

「ここが一番怪しいな。よし、中に入るぞ」

細心の注意を払い、ヴァローを先頭にして扉を開けて中に入っていく。何が待ち構えているのか不安に思う中で、一番最初に目に飛

び込んできたのは、十人程のポケモンが地面に俯せに倒れている光景だった。

「これは……どういう事だ……？」

「もしかして、眠ってるのかなー？」

詳細までは分からないまでも、とりあえず異変を感じた三人は、黙って通り抜けて奥へと歩みを進める。その一方で、全くこの緊張した空気に気づかないティルは、起こそうと突いたり体を揺らしたりしてみる。しかし、寝ているにしては、全くと言っていい程反応が無かった。

「ねえ、レイル。レイルなら、このポケモン（ひと）達がどうなってるか分かるかな？」

起こそうと何やら躍起になってるティルはそのままにしておき、アルムは一番頼りになると思ったレイルの元に歩み寄る。

「そうですね。少なくとも死んではいないようです」

「えっ」

レイルの返答にその一言だけ漏らすと、アルムは思わず後退りしてしまった。「死んではいない」という言葉に、久しく感じていなかった冷たさを感じ、背筋が寒くなったからである。

「主、どうしたのですか？　良い知らせなのに、何故一步下がったのですか？」

「そ、それは……」

「君の事が怖くなった」なんて、到底言えるはずもなかった。そんな事を言ってしまうと、どうなるか分からなかったから。かと言って、このまま黙り込んだとしても、逃げられるはずもない。それを感じた上で頭を巡らす、良い言い訳が思い浮かばなかった。

「アルム、レイル。奥から話し声が聞こえてきたわ」

口をぱくぱくさせて挙動不審になり始めた頃、ちょうどシオンが二人の間に割って入った。おかげで話は流れ、アルムもほっと胸を撫で下ろして後を付いていく事にする。

シオンの耳を頼りにしながら、その声の主にはれないように途中からは忍び足で進んでいき、分かれ道まで行き着いた。足元には大量の木屑が散らばっており、ただでさえ岩がごつごつして歩きにくい足場を余計に悪くしている。

「こっちよ。二つの声が聞こえるわ……」

シオンが指し示した方向は、壁に多くの樽が置かれている右の方だった。先程よりもさらに警戒心を強めながら、ヴァローを先頭に歩いていく。同じ岩場でも、アクティウムの洞窟のようなじつとりした嫌な湿気とは違い、涼しい空気が漂っている。しかし、緊張感はある時以上であり、決してその心地好さに浸っている暇は無かった。

「ねえ、やっぱりこの先にいる人達に会ったら、戦いになるのかな？」

ふと独り言のように静かに零れたのは、邪魔する物があればすぐにでも消えてしまいそうなくぐもり声だった。まるで、空から落ちる途中の不安定な雪の結晶のような声——その発声主は、視線をあちこちに泳がせているアルムである。その証拠に、時折顔を上げつつ、顔色を窺うようにヴァローとシオンに交互に視線を送っている。

「まあ、状況によっては、避けられないかもな」

「やっぱり……。だったら、僕は行かない方が良いかなあ……。？」

今度は、下を向いて足を止めてしまった。いつもはふわふわとしている自慢の毛さえ、アルムの心境を反映しているかのように、元気なく垂れているように見える。

「どうしたの？　一緒に行かない方が良いなんて事は無いわよ？」

「でも、僕は弱いし、戦いになっても役に立てるか分からないよ……」

「あなた……。もしかして、洞窟の時の事を気にしてるの？」

徐々に耳が垂れていくアルムの反応から察したシオンは、小さな足で踵を返し、淋しげな顔のまま近づいていく。それはもちろん、アルムの顔だけでなく、声色からも推測した上で心配の色を見せているのである。

「私は別に、アルムに戦って欲しいとか思っていないわよ。無理しなくても良いんだから、ね？」

「ううん、そうじゃないんだ。何か、ね。自分が弱い気がして……」

氣遣うつもりで言ったシオンだったが、アルムはますます声がか細くなってしまった。それに合わせて、視線をシオンから逸らしていつてしまう。

「アルム、お前は本当は――」

「――なーんてね。えへへっ。僕の演技、上手かった？」

負から正への変わり身は一瞬だった。ヴァローが心配そうな表情をして近づいてくるのを途中で遮るように、アルムは軽く舌を出して悪戯っぽく笑みを湛える。先程までとはまるで別人のように。

「さあ、先に進もっ」

シオンとヴァローがアルムの豹変ぶりに驚いて固まっているのを尻目に、アルムはいち早く一步を踏み出した。あの悲しみの余韻など、微塵も残すことなく。不審に思いつつも、残りの全員も後に付き従うように進んでいく。

そこからは、またしても無言の状態が続いた。黙々と進む内に脇の樽は増えていき、長い道の出口が見えてきた。開けた部屋の奥には二つの影も見え、近づくにつれて徐々にその正体も明らかになっていった。水色の体毛と菱形の模様が特徴のポケモンと、橙色の体毛と首の黄色い浮袋が特徴のポケモン――クリアとブレットである。

「君たちは確か、あの洞窟にいた……」

気配で気づいたのか、グレイシアのクリアはアルム達の方に振り向いた。攻撃を仕掛けてくるのかと思い、ヴァローは端から漏れんばかりの炎を口に蓄えるが、クリア達の方は一切その様子を見せない。それどころか、ほぼ無表情のまま見つめているだけである。戦う意志の欠片すらも見受けられない。

「そうだ、箱を盗んだお二人さん。あのポケモン達も、お前達がやったのか？」

まだ警戒しているのか、ヴァローは攻撃を放つ姿勢を維持したままである。それは同時に、他の皆を守る為にと、一歩前に出て屈み込んでいる姿勢でもあった。

「違うさ。僕達が来た時には、既にこの有様だ。疑うんなら好きにすればいいけどね」

一方のクリアは、以前として対抗する素振りも見せない。嘲笑のようなものさえ浮かべながら、アルム達の事を横目で見ている。それは隣にいるブレットも同じだった。

「じゃあ……どういう事ですか？　もし良ければ、詳しく教えて下さいませんか？」

「ああ、良いだろ。ここで話すのも何だから、ついて来いよ」

警戒を解いたアルムが怖ず怖ずとヴァローの陰から顔を出すと同時に、地面に座り込んでいたブレットがのろのろと、気力など無いように立ち上がる。さすがにここまでの態度を見せられると、ヴァローも威嚇するのを止めた。

「一応誤解の無いように言っとくけど、僕達に戦う気は無いから」

続いてクリアも立ち上がると、ブレットと一緒にアルム達が進んで来た道を進んでいく。まだ事情が分からずに半信半疑ながらも、とりあえずアルム達もその背中を追って来た道に戻るのであった。

第三十四話 追求の為の両者の決断―砦に渦巻く心情―

トリトンの砦の中にある建物の中を誘導されて辿り着いたのは、先程よりも一回り大きな広間だった。地面には椅子の代わりとなる岩が置かれているが、それは比較的背丈の高いポケモン専用である為、ブレット以外は地べたにそのまま座り込む。

「それで、一体何があったんだ？」

「まあ、ちょっと待ってくれないか。順を追って話すから」

事情を知りたいが為に急かしているヴァローを軽く一瞥した上で、一旦背中を向けると、クリアは岩の裏から一つの箱を引きずり出てきた。それは、クリアとブレットがステノポロスの財物庫から盗み出したものであった。

「これを持ち出した後、僕達は真っ直ぐトリトンに戻ってきたんだ。元々入口の門は開け放されていないはずだから、不審に思って慌て入ってみたら、既にこの状態。荒らされた後だったよ」

区切りの良いところで小さく溜め息を一つ吐くと、クリアは視線を横の方へと逸らしていく。それは今の表情を見られまいとするものであり、アクティウムの洞窟での横柄な態度とはまるで違っている。

「荒らされたと言っても、ここから盗まれたのは一つだけ。まるで、その為だけにここを襲ったみたいだ」

「それで……その盗まれた物は何なの？」

腕組みをしながらクリアの説明を引き継いだのは、ブイゼルのブレット。クリア程露骨ではないが、その表情には焦りの色が窺える。シオンが向かい合うようにして立っても、視線を合わせようとはしない。

「ああ。お前達にも関わりがあるんだろうが、ちょっと前にリープフタウンで盗んだ図鑑のジラーチのページだよ」

ブレットの口から出た重要な語句に、一同は表情を強張らせる。自分達が今まで探してきた物が、巡り巡ってここまでの出来事を引き起こしている――その事実には驚きを隠せないからである。

「さっき財物庫を確認したけど、盗まれたのは本当にそれだけだった。しかも、他のトリトンの皆はずっと意識を取り戻さないんだ。ちゃんと息はしてるのに、死んだように眠ってて……」

クリアの言葉で空気はさらに重々しいものとなり、誰もが口を閉ざして黙り込んでしまう。予測不能の事態に戸惑っているのと、僅かながらクリア達に同情しているのがあったのがその理由であった。

「あの……何で図鑑のページを盗んだんですか？」

突如としてこの険悪な空気を破ったのは、表情を曇らせているアルムだった。さすがに警戒はしていないものの、どこか自分が切り出した事に躊躇いを見せているようでもある。

「それは、盗み返して欲しいと依頼があったからだよ」

「ちょっと待て。あの図鑑は図書館の所有物のはずだろ？」

あまりにも簡単に答えるクリアに、ヴァローはさらに一步前に出て異論を唱えた。その意見には他の全員も賛成らしく、後ろで一樣に頷いている。

「僕だって知らないさ。その盗み返して欲しいものが本当にその依頼主の物なのかは、全部巫女様に見てもらってるからね」

「巫女……様？」

聞き覚えのある語句が出て来て、アルムは口をぽかんと開けた状態で復唱した。続いてそのまま首を小さく傾げ、何かを思い返すように視線を上に向ける。

「確かラデューシティにて、パントさんの絵の説明をしている最中に、ペインさんが『とある巫女さんのお力のおかげ』とおっしゃってましたね」

アルムが思い出そうとしているのに気づいたのか、レイルが横から顔を出して記憶力を遺憾無く発揮する。それを聞いてアルムも思い出し、嬉しそうに繰り返し頷く。同時に、もう一つ大事な記憶が呼び覚まされた。パントは探し物を見つける絵を描く——と。

「ねえ、ヴァロー。もしその巫女様が、ペインさんの言ってたのと同じのポケモン（ひと）だったら、一回会ってみた方が良いかな？」

「ああ、同感だ。どうしてこうなったのか事情を知りたいし、仮に聞けなかったとしても、今度はその巫女に探してもらえば良いからな。あくまでペインさんの言ってた巫女なら……だけど」

とりあえずクリア達には聞こえないように耳元で話す為か、背の低いアルムが精一杯背伸びをしようとする。それでヴァローも目的に気づき、アルムの為に屈み込んで提案を聞くと、そのままの体勢で今度はアルムに耳打ちした。

「ねー、何をひそひそ話してるの？」

「わわっ！ な、何でも無いよっ」

二人の間に割り込むようにしていきなり現れた興味津々な様子のティルに、アルムは思わず狼狽うろたえながら飛び退いてしまった。その反応に、今度は怪しむような目でティルはじっと見つめてくるが、とりあえず取り繕った上で、気にしないようにしてクリア達の方に向き直る。

「えっと、もし良ければ、その巫女様のところに案内してもらえませんか？」

「そんな義理は僕達には無いけど……？」

「あっ、それは……」

真剣な眼差しを向けながら思い切って切り出した申し入れを即座に断られ、アルムは口ごもってしまう。一方のクリアの方はと言うと、一瞥してすぐに視線を逸らすと、アルム達の視界から逃げるように部屋の中を歩き出す。

「義理なんか無くても、お前達だって気になるのは一緒だろ。少なくとも、お互いにとって真実を知るのは、マイナスじゃないはずだ。もしかしたら、それで仲間を何とか出来るかもしれない。違うか？」

少し威圧的ながらも、アルムと同じような真つすぐな目で見られ、クリアとブレットもたじろぐ。それは、ヴァローの説き伏せるような言葉が強く響いたからであった。決して威嚇しているのではない、自分達の事も思ってくれているような誠実な態度が。

「……少し考える時間をくれないか」

ややあつた後で、ブレットが俯き加減で小声で告げた。それに対してアルム達が承諾の意を示すように頷くと、クリアと一緒にとぼとぼとこの場を離れていく。

「やっぱり、駄目なのかな……？」

「いえ、そんな事はないと思う。たぶん彼らも、突然の出来事に戸惑ってるのよ。ただ、そこまで表に出して無いだけみたいね」

すぐに黙り込んでしまった事に反省しつつ、アルムは二人の背中を心配そうに目で追っていく。そんな彼を気遣うように、シオンはアルムの体毛を優しく撫でて梳かしている。それで気が紛れて落ちていたのか、アルムは固まっていた少し表情を綻ばせてその場に座り込む。

「まあ、後はあいつら次第だから、俺達は静かに待っていよう」

とりあえずは事態が好転し始めた事を信じ、アルム達は口を閉ざして何も喋らずに結果を待つ事にする。ある者は落ち着かない様子で動き回り、またある者は精神統一するかのように目を閉じ。二人がどう出るのかをずっと心配しながら、それぞれが時間を過ごす。



「ねーねー、いつまで待っていれば良いのかな？」

ひたすら待ち続けていくらか時間が経った頃、テイルが手持ち無沙汰といった様子で辺りをうろつき始める。沈黙の空間に耐えられなかったようである。

「えっと……もうちょっとだけ待ってくれない？」

「えーっ。もうつまんないよ。ねえアルム、一緒に遊んでよ！」

「わっ……ちよっと——」

この張り詰めた空気などお構いなしとばかりに、今度はアルムにじゃれるかのように飛び掛かる。楽しい雰囲気好きなテイルにとっては、ある意味至極当然の行動かもしれない。寧ろここまで我慢したのが不思議なくらいである。

「もう、今はそんな場合じゃないんだから、離れてよっ」

とりあえずテイルを離れさせる為に、アルムは自らの雫のような形をしたふさふさの尻尾でくすぐってみる。密着していて身動きしづらい体勢のまま、一番効きそうな場所である腹部を狙って。

「くくっ……あははっ！　くすぐったいよー！」

先っぽを近づけてはすぐに離すという絶妙なくすぐりに堪えきれなくなったのか、テイルは直ぐさま抱き着いていた手を離れた。離れた直後も、くすぐられた部分を押さえながら、顔中に笑みを湛えている。

「もおーっ、お返しだー！」

離れたのもほんの一瞬。すぐにアルムに再接近すると、今度は上から乗っかって身動きを封じた。

「なっ、何をするの！？」

「だから、お返しだよー！」

先程とは別の笑みを浮かべると、テイルは両手でアルムの腹部をくすぐり出した。逃げられないように、羽衣を足にしっかりと巻き付けている。

「あ、止めてっ……きゃははっ！」

先程とは発声主こそ違うが、同じく明るく生き生きとした声が部屋中に反響する。そうして、アルムの口から次から次へと吹き出る声の泡は忙しく壁に当たって弾け、空気を暖かい色に染めていく。

「ははっ……やったなあ！　こっちだって！」

「ボクだって負けないよー！」

交代になって繰り返される、くすぐりとそこからの脱出。次から次へと楽しそうな声が飛び交い、じゃれ合いも一層活発になる。その様子を眺めるヴァローとシオンも、いつの間にか口元を綻ばせていた。二人の微笑ましいやり取りを皮切りに、緊張の糸が完全に切れたらしく、ここが義賊のアジトである事などすっかり忘れている。

「お前ら、一体何をやってるんだ？」

突如として和んだ空気を破り、一同を現実に取り戻すのは、この場にいる者とは別の声だった。声のした方に振り向くと、暗い通路の奥から徐々に近づいてくるクリアとブレットの姿があった。

「それで……どうなんだ」

「ああ。その場所まで案内するよ」

その表情に陰りは見受けられない。虚ろな目などではなく、寧ろしっかりと視線をアルム達の方に向けていた。目の奥には強い光を宿しているようにも見える。

「本当に信用していいのね？　もし嘘だって分かったら――」

「僕達は義賊だ。騙すのが仕事じゃない。そりゃ、信用してくれて言うのに無理はあるかもしれないが、僕達だって真実を知りたいしね」

念の為に疑ってかかるシオンを遮ってでも、クリアは自らの信念を告げる。こちらにも、もう躊躇っている様子は無い。

「ううん、信じますっ。だって、クリアさん達は悪そうなポケモン（ひと）には見えませんもん」

疑う素振りなどこれっぽっちも見せず、アルムは澄んだ優しい声を発する。決して取り繕ったのではない――心からの正直な言葉に、真っ直ぐアルムを見つめていたクリアもやや視線を逸らして泳がせる。

「でも、信じるのは今だけですけど」

さりげなく付け加えた本音に、ヴァローだけでなくクリアやブレットまでも苦笑を浮かべる。一人ティルだけが、「ねー」と訳も分からず同意していた。この複雑な状況に軽く咳ばらいをして、ブレットが口を開く。

「ま、好きにきな。……とりあえずだ。巫女様がいるのは【月影の孤島】という場所なんだが、ここに行くには船を使う必要がある。そして、そこまでの航海には時間を要するんだ。今から行くとなると、もしかしたら夜まで掛かるかもしれない。それでも行くか？」

「俺は早めの方が良いと思うから、是非とも今から行きたい。シオンはどうだ？」

「私もあなたに賛成よ。後はアルム次第ね。ティルはあなたに従うでしょうから」

ヴァローとシオンが順に決断を下していく中で、アルムは決めかねていた。さっきまでは早く行く方が良いとも思っていたが、それが自分にとっては好ましくない事をも齎すのだと気づいたからである。

「どうしたんだ？ どっちかはっきりしろよ」

「うーん……じゃあ、今すぐにも行きたいです」

「よし、決まりだな。準備をするから、しばらく待っていてくれ」

決め倦^{あぐ}ねているのに苛立ちを感じて片足で地団駄をしているブレットの様子を見て、曖昧ながらにアルムも決断する。それを受けてブレットもようやく落ち着き、クリアを残して颯爽とその場を後にする。

「あの……クリアさん？」

和むわけにも行かない、かと言って張り詰めさせるわけにも行かない空気が漂う中で、アルムがクリアに歩み寄る。警戒の為ではないが、下手に刺激したりしないように一歩ずつ慎重に。

「……何？」

「そのステノポロスの所有物である箱は、この後どうするんですか？」

実はこの空間に入って辺りを見渡した際に、アルムは一つの見覚えのある透明な箱を見つけていた。前足でその箱を指し示しながら、クリアの方へと視線を注ぐ。

「もう僕達には必要ない。それを持って来るように言ってたリーダーがやられちゃったからね。だから、王女様に返すよ。ほら」

「ええっ、うん……」

平然と言うと、クリアは足で押して箱をシオンの元に寄せる。突然返してくれるとの事に戸惑いつつも、シオンは両手で拾い上げて受け取った。そのやり取りを見て、アルムは瞬時に表情に暗い色を落とす。

「あら、どうしたの？　とりあえず箱を取り戻せたんだから、そんなに暗い顔をしなくても……」

「別に、暗い顔なんかしてないよ。それより、箱が無事に戻ってきて良かったねっ」

先程と同じように、アルムは暗い表情を払拭するかのように口角を上げて微笑んで見せる。しかし、本心を隠すような仕種が垣間見えた為、シオンは相変わらず怪訝そうな表情を崩さないままであった。

「アルム、私に隠し事をしたって無意味な事は分かってるわよね？」

ややきつい口調ではあるものの、その中には優しさが込められていた。丸い両耳を小さく動かしてそれとなく仄めかしつつ、シオンはアルムに寄り添おうとする。

「おい、出航の準備が出来たぞ。行くならそろそろだけど、心の準備は良いか？」

「え……はい、大丈夫です」

ばつが悪くなっていたところに、アルムにとっては頃合い良く入

ってきたのはブレットだった。半ばシオンを避けるように視線を逸らすと、アルムはブレットの方に近寄っていく。一方のシオンは、はぐらかされた事を不服そうにしながらも、それ以上は追及しないようにして同じくブレットの方に向かう。

「全く……ブレットもせっかちな。とりあえず僕も付いていくから、さっさと行こうか」

建物の外へと続く通路を歩き始めた三人に続き、クリアを足を進めていく。その直後、早く付いてくるよう指示するかのように、顔だけを一瞬ヴァロー達の方に向ける。

「随分と無愛想な奴らな事で。俺達は氷タイプの奴とはつくづく相性が悪いのかもな……」

「炎タイプのガーディであるあなたから見たら、寧ろ相性は良いと思いますけど」

「そうだよそうだよ！ ヴァローは氷に強いんだもんねー！」

クリアの言動に対する眩きに対してやや的外れな反応を見せたレイルとティル。そんな二人に普通ならばつつこみ混じりの訂正を入れたいところではあるが、あいにくヴァローはそんな気分ではなかった。大きな溜め息を一つ吐いて、二人の背中を押すようにしてアルム達の背中を追いかけるのであった。

第三十五話 神秘的な孤島の巫女の正体く多彩な顔を持つ海へく

空から降り注ぐ煌めくような光の雨。耳の奥まで染み渡るような癒しの調べ。定まった形を持たず、ゆらゆらと静かに秩序正しく打ち寄せる白波。それらの全ての要素が上手く調和して、神秘さと雄大さを醸し出している青い海の浜辺に、アルム達は移動していた。

目の前の吸い込まれる程に青い水の中には、差し込む光によっていくつもの煌めくプリズムが映っている。その水上に波に揺れながら浮かぶのは、ブレットが用意した一隻の木製の小さな船。中央の帆柱には白い布が高く張り上げられ、風を受けてはためいている。^{マスト}しかし、小さいとは言え、アルム達が全員乗り込んでも、まだ同じくらいの人数が乗れる程の余裕があった。

「それじゃ、出航するぞ」

ブレットが鉄製の重い碇^{いかり}を砂浜から引き抜いて船尾を押すと、船は波の流れに逆らいながら、穏やかな潮風を受けてゆっくりと進み始める。

「あの、その【月影の孤島】ってのはどの辺にあるんですか？」

トリトンに向かっていた時よりも一段と濃い潮の香りを全身に浴びて改めて海を感じつつ、アルムは梯子を登って海から揚がってきたブレットの方へと視線を遣って問い掛ける。

全身を振るって体に付いた水を滴にして払いながら、ブレットは言葉を発する事なく一点を指し示した。クリア以外の全員がその方角に注視すると、真っ蒼^{さお}な地平線の上に極めて小さな豆粒のような

物が見えた。

「あ、あれ……？」

「これは、確かに夜まで掛かるかもしれないわね……」

改めて目的地までの遠さを思い知らされ、アルムとシオンは並んで目を皿にして豆粒のように小さい島を見つめる。覚悟はしていたものの、やはり驚きは隠せないようである。そうして、あまり距離などを考えないようにふと視線を横の方にずらしてみると、ティルが羽衣で海上を飛んで水の中を覗き込んでいた。

「ねえねえ、アルム！ この中、すごいよ！」

今までとは全く違う船旅という移動の仕方に^{はしゃ}燥いでいる様子のティルは、アルムを船首まで手招きする。呼ばれるがままに近づいていつて覗いた先の光景に、アルムも思わず息を呑んだ。

水面では滑らかな波が船の先に音を立ててぶつかり、きらきらと輝く無数の泡を生み出していた。そのさらに奥——太陽から降り注ぐ光線によって織り成された綾の先には、波のうねりに同調するかのように揺れ動く緑色の海藻が見受けられる。この海の様子も含め、先程から見ている美しい景色の数々に、海が初体験のアルムは大きく感銘を受けていた。

「うん、確かに綺麗だね！」

「だよねー！ ボク、海が好きになったよ」

海面に反射する光も相まって、二人の目は一層輝きを宿し、その

笑顔には眩しさすらも感じられる。まさしく、好奇心に満ちた無邪気な子供らしい姿であった。同じく海面を覗いていたヴァローとシオンも、その様子に顔を見合わせて笑みを浮かべる。一時は元気を無くしたようにも見えたアルムが、くすぐり合いをしていた時のような明るい笑顔を見せていたからである。

「ねー、アルム！ こっちも見えて見てー」

「あ、ちょっと待ってよっ」

照り付ける陽射しさえも気にしない程に楽しむアルムとティルの二人は、その後も目一杯海という物を満喫した。時には水面に触れてその冷たさを実感し、また時にはひたすら様々な表情を見せる海を観察したり。一方で、同乗している為に近くで賑やかな声が聞こえても、クリアとブレットは一切嫌そうな様子は見せなかった。

しかし、二人ともにそんなに元気が長続きするはずも無かった。奥行きのあるように見えていた海岸が遠くなり、線のように見え始めた頃。そして、太陽が先程までとは異なる色の衣装を纏い始めた頃。頬に橙色の暖かい光線が当たっているのにも気づかず、すっかり疲れて眠りこけていた。

空が薄暮になった事で少しずつ遠くが見えづらくなっていたが、それでも橙色に染まっている島が徐々に近づいているのははっきりと確認出来た。風にも僅かながら冷気が帯び始め、夜も更けつつある。二人の寝息と波が立てる静かな音以外は、至って船上に聴覚を刺激する物は無かった。――つまりは、全員が口を閉ざしてひたすら島に到着するのを待っていたのである。

そして、理由はもう一つ。二人を起こさないようにとの気遣いでもあった。それ故に、音だけ聞くと、無人の船が突き進んでいるよ

うでもある。そんな小さな船は静寂と優しさを乗せて、目的の場所に向かって進んでいくのだった。



「ううん……」

それからしばらく。二人が目を覚ました頃には、青かった空も海も、いつの間にか黒く染まっていた。空には孤独に浮かぶ月を掠めて雲が飛んでおり、まるでわざと避けているようである。

「あれ、僕は寝ちゃってたの……？」

「そうだ。ぐっすりとな」

突然の景色の変化に驚きつつ、アルムは目前にあったヴァローの顔を見て、恥ずかしそうに苦笑いを浮かべる。少し視線を逸らせば、こっちを見て優しく微笑みかけてくれるシオンの姿も目に入った。

「何か、恥ずかしいなあ……。あつ、そういえば、【月影の孤島】は……」

今度は船の外側に目を遣った。先程までとは性質の違う潮風により、見渡す限りの海面には小さくギザギザな形の水こしらの山が拵えられ

ている。その波は月から零れてくる青白い光を帯び、静寂な海を演出していた。

少しその視線を遠くに移すと、この海洋にぽつりと寂しく浮かぶ孤島が見えた。目的地が既に眼前に迫っていた事に、アルムははつと息を呑んで驚く。

「この島がそうなんだね……」

「ああ、そうらしい。もう少しで陸地に着くから、いつでも降りる準備をしておこうな」

アルムの囁きが波に揉まれて静かに消えていく中で、船は速度を落としながら少しずつ浅瀬に近づいていった。遂には足が着くまでの位置に達し、ブレットが最初に降りて碇を降ろす。

「よし、いいぞ。全員降りてこい」

しっかりと船を固定して安全を確認したところで、全員がブレットに続いてぞろぞろと船を降りていく。足元に広がる砂は細かくて白く、月光を反射して地上にぼんやりとした明るさを齎していた。まるで、光の絨毯の上に乗っているようである。

「この林を抜けた先に、巫女様がいる。一応僕が先頭でブレットが殿を務めるし、ほぼ一本道だけど、迷わないようにちゃんと付いてきなよ」

この光景には慣れた様子で、クリアは先頭を切って草木が鬱蒼うつそうと生い茂る中へと歩き出した。アルム達は島の様子を細かく観察する暇もなく、後に付いて足を進め始める。

クリアの言う通り、ほとんど周りは茂みではあったが、通り道は舗装されたかのように歩き易くなっていた。目的の場所まで植物達が道を開けてくれているようである。

「あ、見て。あそこに何か見えるわ」

月明かりのおかげで良好だった視界に入ってきたある物に、クリアのすぐ後ろを歩いていたシオンが最初に声を上げた。一斉にそれぞれが顔を左右に動かして確認すると、その先には寂しく佇む石で出来た社やしらのような物が見える。

「あそこに巫女様がいるんですか？」

「ああ。僕達が来る時は決まってあそこにいるんだ。ほら、話をし
てれば――」

歩みを止めてクリアが指す方にもう一度目を向けると、頭部は緑色で丸い形で、下半身はひらひらとした白い布のようになっており、胸と背にはピンク色の逆三角形の突起を持つ背丈の高いポケモンが立っているのが見えた。アルム達が見つめているのに気づくと、そのポケモン――サーナイトも柔和な笑みを浮かべて近づいてくる。

「クリア、ブレット、お久しぶりですね。そしてアルムにヴァロー、ティル、シオン、レイル。遠路遙々、ようこそいらっしゃいました」

クリアとブレットが敬意を表するように軽く頭を下げるのに対し、

アルム達は大きな反応も示さずにただ立ち尽くしか無かった。特にアルムは、耳をぴんと立ててその優しい声を聞きながら、何かを思い返すように虚空を見つめる。

「えっ、待って下さい。何故私達の名前を……?」

「それは、あなた達が光によって導かれし出逢いを果たした者達だからです。そして、ここまで導いたのが他でもない、この私だからです」

真面目な表情に一変したサーナイトの言葉に、再び一行は顔を強張らせる羽目になった。涼しく感じていた風の流れが、今では冷たくさえ感じられた。耳を澄ませば、高鳴っている心臓の鼓動が風に運ばれて聞こえそうである。

「それって、どういう事ですか?」

「簡単な話です。この二人とあなた達を巡り合わせるべく、ステノポロスの財物庫にある箱を盗むように仕向けたのですよ。いえ、仕向けたという言い方はちょっと違うかもしれませんが……」

驚愕の真実を次々に突き付けられ、アルム達は固まったまま動かなくなってしまう。それを見て気まずい空気になった事に気づいたのか、サーナイトは固い表情を崩して再び優しい面持ちになる。

「ちょっと駆け足で話し過ぎましたね。一先ずせっかく訪ねていらっしやったんですから、こちらでゆっくりして行って下さい」

短い石段を宙に浮かんだ状態で上がりつつ、サーナイトはその淡い緑色の細い腕で手招きをする。クリアとブレットの二人が平然と

それに従うのを確認してから、アルム達も少し時間を置いて石段を
一歩ずつ登って祠の方へと向かう。

「さあ、どこにでも好きなところに座って下さい」

若草が絨毯のように生えているところで移動を止めると、サーナイトはその場を軽く指し示した後に奥の方へと姿を消していった。
とりあえず指示された場所に座り込んで幾何か時間いくばくが経って戻ってきた時には、両手に一杯の木の実が抱えられていた。――正確に言うならば、木の実がサーナイトの近くに浮遊していて、両手で抱えているように見えたのではあるが。

「もし良ければ、ご自由に召し上がって下さいね」

静かに木の実をアルム達の近くに降ろすと、サーナイトも地面に座り込む形となる。サーナイトの一連の行動の後に、特に緊張感を抱いていない様子のテイルが一人、モモンの実を抱えて嬉しそうにかじりつき始めた。

「さて、一旦落ち着いたところで、本題に戻りますね。先程も言いました、あなた達がクリア達と出逢い、ここに来るように画策したのは私なのです」

ゆっくりと息を吐き出し、サーナイトは顔を引き締めてアルム達の方を見据える。優しそうなその瞳も、奥にはどこか違う色が見える。

「――と言う事は、トリトンの皆があんな事になるのも、計画の内だったのか？」

体を半分乗り出すようにして、ブレットはアルム達よりも先に反応した。歯を強く食い縛っていきり立っているようで、少しでも刺激すればその怒りが弾けそうである。まだ一步手前だという事にアルム達も薄々気づいており、ここは黙って見守る事にする。

「――いえ、それは違います。あれは私の計算ミスでした。私にも完全には流れを掴めなくて……。ごめんなさい」

少し間を置いた後で、サーナイトは深々と頭を下げた。そつと静かに、心の底からの謝罪の思い伝わるようにと。しばらく時間が経っても、その頭を上げようとはしない。

「ま、まあ、巫女様がそう言うんなら、オレは何も言わない。今までも、そしてこれから、巫女様の事は信じてるから」

「ありがとうございます。それに、彼らは大丈夫です。私からは何とも言えませんが、いずれは目覚めます」

「そうですか……。一応安心ですね」

ブレットが安堵の溜め息を吐いた後で、続いてクリアもほっとしたような表情を覗かせる。理由は何であれ、仲間が無事だと分かっ
て安心したようである。

「ちょっと待った。俺達にはまださっぱり理解出来ない。何故俺達を知ってるのか、明確な証拠は無かったしな。それと、あなたが画策したというのも、信用性に乏しい」

クリア達の方の話も一段落したところで、ようやく話せるとばかりにヴァローはサーナイトに一步近づいた。話し掛ける時も、訝し

げな表情は崩していない。

「そうですね。皆の先頭に立ってオコリザルやクリアとも勇敢に戦う姿勢を見せるあなたなら、そのくらいの警戒心を持って接するのも当然ですよね」

「な、何故オコリザルの事まで……」

「簡単に言うならば、“みらいよち”に依るものなんです。パントに授けた力も、私の力の一部なのですよ。とは言え、結局は確たる証拠は無いですから、信じて頂くしか無いのですけどね」

クリアとの事ならまだしも、それより以前に出逢っていたオコリザルやパントの事まで知っていた。その事実は充分な証拠となりうる物であり、暫し口を開けて呆然とした後に、ヴァローは納得したような面持ちで引き下がる。

「あ、あの……良いですか？」

続いて控えめに声を上げるのは、未だに不思議そうにサーナイトを見つめているアルムである。

「もしかして、どこかでお会いした事はありませんか？ 声を聞いた事があるような気がして……」

最初にサーナイトの声を聞き直感的に感じていた事を、アルムは静かに口に出した。しっかりと視線を上に向けて目を合わせている辺り、何か確信を持っているようである。それを聞いて、サーナイトは微笑みながらアルムの方に顔を向けた。

「ちゃんと覚えていてくれたんですね。その通りです。ブルーメビレッジでああなたの夢に入り込み、声だけ登場させて頂きました」

第三十六話 待ち受ける真実と謎とく零れる光と涙のわけく

夢と言われても訳が分からないヴァロー達を余所よそに、アルムは一人サーナイトに視線を送っていた。その口は僅かに開かれており、驚きと言うよりかは、得心しているのに近い様子である。

「やっぱり、あの夢の声の主はあなただったんですね。でも、何故僕の夢に……？」

「それはですね、あなたの持つ“光”が一番強くて、私とも波長が合ったからなんです」

「僕の持つ……光？ それに、波長って？」

さすがに何の事なのか知る由もなく、これにはアルムも首を傾げる。光などと突然言われても、思い当たる節がこれと言って無かったのである。

「そうですね。それは今は説明する事が出来ません。なので、その代わりと言っては何ですが、私の力について教えましょう。ラデューシテイのヤードの館で見た、あの水晶を覚えていますか？」

その時にはいなかったシオンと地下まで見に行っていないテイルを除き、他の三人はあの神秘的で巨大な青白い水晶がすぐに思い出され、こくりと小さく頷く。自分達が辿ってきた足跡を知っている事に驚く様子はもう見られない。

「あの水晶は俗に“フルスターリ”と呼ばれていて、その秘めている力はラデューシテイでご覧になった通りです。実はそれがこの島

の地面の下に埋まっていて、私に力を与えてくれているのです。そのおかげで、三種類の“みらいよち”が使えます。その三つの中にとある個人に関わる出来事の細部までが分かるもの、物の在り処が分かる特殊なものがあるんです」

「つまりは、その前者の方の力で僕達の行動を見ていて、後者の方のパントさんに与えた力というのも、水晶――“フルスターリ”の力なんですね？」

「ええ、その通り。あなた達をここまで導く為に分け与えた力なんです。そして、そこまでは上手く行っていました。そう、そこまでは……」

アルム達が何とか理解して話を纏める中で、サーナイトはふと視線を逸らして顔を俯けてしまう。

「実は薄々感じてはいたのですが、確信を持てる程に影が差し始めたのは、あなた達がパント達と出会ってからです。私が見える未来にも、徐々に妨害が入ってきて、遂にはトリトンの全員があんな事になってしまつて……」

「パントさんの辺りからと言う事は、図鑑のジラーチのページについて、一体どういう事なのですか？」

重要な事柄ばかりを告げられる余りに忘れてしまっていた事をようやく思い出し、ヴァローが再度サーナイトに近づいて切り出した。話を纏めるのに必死になっていたアルムも、はっとして頷く。

「それが、あの本はあの図書館の物であって、そうではありませんでした。だからこそ、承認したのです。それと、疑わしく思われる

かもしれませんが、依頼主が誰なのか……私にも分からないのです。力を与えられているとは言え、万能な力では無いようです。しかし、少なくともこれだけは言えます。盗まれた物から判断するに、確実にその子が大きく絡んでいます。そして、その子がこの惑星^{ほし}に舞い降りてきてから、“七夜目”の明日に何かが起きます」

「そ、それは一体どういう事ですか!？」

長い説明の後で、最後に意味深な予言めいた物を告げるのに対し、アルムは驚いたように背伸びして声を張り上げた。夜と言う事もあり元から静粛な空間に、アルムのやや高い声が響き渡る。

「……すいません。ここまで言うておいて何ですが、予言者は先の事を詳細までは告げられないのです。大きく未来を変えてしまっただけではありませんから……」

「そう……ですか。分かりました。出来ないのなら、仕方ないですよね」

サーナイトの言葉を受けて、苦笑いを浮かべながらアルムはおとなしく後ろに下がっていく。しかし、その表情はどこか釈然としないう様子で、その苦笑すらも引き攣^{くっ}っている。

「あの、その代わりと言っては何ですが、少しだけならお手伝いが出来ます。さっき言った三種の“みらいよち”の内の一つ、ポケモンの進化の未来が見える力で、あなた達の進化について見て差し上げましょう」

突然の思いがけない申し出に、一同は呆然とした様子でサーナイトの方に一斉に視線を送る。その中でも、特にアルムが一番申し出

に反応を示しており、口をぽかんと開けている。

「さて、まずはアルム。あなたから見ましようか？」

「えっ、僕からですか？　と言うか、本当に良いんですか？」

まさか自分が指名されるとは思っていなかったらしく、アルムは上擦うわすった声の調子で聞き直す。

「ええ、もちろん。どんな結果が出ようと、覚悟は良いですか？」

「はっ、はい。是非とも聞きたいですっ」

嬉しそうに目を輝かせ、アルムは強く頷きながら返事をした。しかし一方では、不安の入り混じっているようにも見える。その証拠に、その目とは対照的に耳は少し垂れ下がっている。

「それでは、こちらへ……」

その返事を聞くと、サーナイトはすっと立ち上がって奥の祭壇の方へと手招きをする。何が起こるのか不安を抱きながらも、アルムはその後を付いて皆から離れていった。

「さて、この辺で良いですかね」

話し声も聞こえないような位置まで来たところで、サーナイトは移動を止めて屈み込んだ。どうして良いのか分からずにアルムがじっと目を見つめる中で、サーナイトは両手をアルムの耳の辺りに持っていて静かに目を閉じる。

「えっと、一体何を――」

固唾を呑んで見守る中、サーナイトの両手が淡い桃色の光を放ち始める。それは少しずつ小さなアルムの体を包み込み、まるで衣を纏っているかのようになる。包まれているアルムはと言うと、至って落ち着いた様子で目を瞑り、全てを委ねていた。

「――これで終わりです」

次にサーナイトの声が聞こえて目を開けた時には、いつの間にか桃色の衣は消えていた。代わりにアルムの目に映ったのは、サーナイトの悲しげな表情だった。

「それで、どうなんですか？」

「……覚悟して聞いて下さいね。あなたには進化する為の条件が揃っています。まず一つに、あなた達の種族が進化するのにさほど身体レベルは関係無いのです。その上、そのリボンは“透明のリボン”と言って、あなたが進化するのにも役に立つ道具なんですよ。気づいてましたか？」

「シオンがくれた、このリボンがですか……？」

“透明のリボン”など初耳な上に、いきなり進化に役に立つと言われ、アルムはそわそわし始めた。表情を綻ばせて笑みを浮かべながらも、あまり落ち着かないようで、耳のリボンに頻りに視線を遣る。

「ええ、あなたのこれからの行動次第では、その可能性も見出させる道具なのです。しかし――」

「しかし……？」

自分にとって良い知らせが聞けた後で出て来た打ち消しの後に、思わずアルムはおうむ返しをしながら目を丸くした。同時に、まるでこれから告げられる事が悪い事だと確信を持っているかのように、表情を再度強張らせる。

「あなたには進化する資格……と言うか、価値が無いのです」

「えっ——」

思考が一瞬にして真っ白になり、口を突いて出て来たのは、声なのかも判別出来ない程に微かな音だった。それは儚く夜の空気に溶けて消えてしまうが、サーナイトにはしっかりと聞こえたようで、一層悲しみの色を濃くしながらアルムを見つめる。

「ですから、あなたには進化する価値が無いのですよ」

再度畳み掛けるように聞こえてきたサーナイトの“価値が無い”という小石のような言葉は、アルムの心の水面に投げ込まれると同時に、小さな波紋を生み出した。それはやがて大きくなっていき、理解力が一時的に衰えているアルムの心を激しく揺らしていく。

「それって……それってどういうこと！？」

不安とも恐怖とも言える大きな波紋が心の湖の畔から溢れ出した。それに呼応するかのように、アルムは動揺を隠しきれずに、速いペースでの呼吸を繰り返しながら叫ぶ。対するサーナイトはと言うと、ただ首を横に振るだけだった。

「そんな、どういう事かちゃんと――」

「アルム、どうしたのー？」

不意に聞こえたのんびりとした声色に、アルムも次の言葉を紡ぎ出すのを止めて振り返る。そこには、不思議そうに首を傾げながら宙に浮いているテイルの姿があった。どうやら、アルムが大声を出した事に心配して近づいてきたらしい。

「う、ん。何でもないよ」

喉まで出かかった言いたい事を無理矢理押し殺し、口角を吊り上げて笑顔を見せた。しかし、その笑顔には僅かにぎこちなさが見受けられる。

「ほんとに？ 何だか、いつものアルムと違うよ？」

「……大丈夫だよ。テイルは皆のところに戻ってて。僕はちょっと散歩してくるから……」

さすがのテイルでも異変に気づいたのか、心配したように声を掛けるが、アルムは一切テイルに先程までの焦った様子を見せようとはしない。むしろ笑顔を崩さずにくるりと回って背を向けると、ヴァロー達が待っている方とは逆方向の林に向かって歩き出すのであった。



ふらふらと彷徨った末にアルムが辿り着いたのは、来た時とはほぼ反対に位置する海岸だった。相変わらず月は淡く朧おぼろげに輝いており、深い蒼色に染まった海とのコントラストが趣深さを一層引き立てている。

波が押し寄せてこない場所で立ち止まると、アルムは元氣なく砂の上に座り込んだ。小さく溜め息を吐くと、次々と生み出されるさざ波をぼんやりと虚ろな目をして眺め始める。それ以外に何をするでもなく、ひたすら物思いに耽ふけっているようである。

そんな哀愁漂う背中に近づいていく一つの影がふと現れた。砂の粒子が細かくて足音が聞こえないのと、波が打ち寄せる音が大きく聞こえるのと、この二つの理由で、アルムはその接近に全く気づいていないようである。

月光により作り出される影も後ろに伸びているせいか、目視によって気づく様子も無く、その一人の影はアルムの真後ろまで迫った。

「なあ、アルム」

予期せず聞こえてきた一つの低い声に、アルムは体を一瞬びくつかせながら、恐る恐る声のした方を振り返る。声で既に誰かは分かっていたが、一応目でも確認したいと思って後ろを向いていくその視界に入ってきたのは、紛れも無くガーディのヴァローだった。

「な、なに、どうしたの？」

一呼吸置いてから尋ねるその声は、波が絶え間無く生まれる海に映る月のように、か細く不規則に震えていた。

「“どうしたの” じゃないだろ。お前が急に姿を消すもんだから、どうしたのかと心配したんだぞ？」

「うん、心配かけてごめんねっ」

ヴァローが真剣な表情で見つめてくるのに対し、アルムは軽く舌を出して戯けたように一瞬笑みを浮かべると、そのまま視線を海の方へと戻した。その途中で、浮かべていた微笑みはヴァローに気づかれないように少しずつ消えていっていた。

「――もしかして、進化出来ないって言われたのか？」

アルムの顔が全て海の方に向ききったとほぼ同時に、ヴァローは静かに呟いた。決して大きい訳でも、冷たい訳でも無かったのだが、その声にアルムは一瞬だけ体が震えた。

「……凶星だな。お前、今まで俺達には隠していたらしいが、自分が進化していない事に悩んでたんだろ？ お前がシュエットさんの家に行ってる間に、お前を捜しながらルーンさんに聞いたんだよ」

今度はヴァローの方からアルムの視界に入っていく、強引に目を合わせようとする。最初はアルムも視線を逸らそうと努力はしてい

たが、あまりにもじつと見られるのに堪えられず、遂には目を合わせてごく僅かに頷いた。

「やっぱりか……。アルム、それじゃ——」

「ううん、違うの。本当の事言うと、確かにステノポロスで戦いになった時は、進化してたらどんなに良かっただろうって思ったよ。だけど——」

そこで一旦切ると、一度自分を落ち着かせるように大きく息を吸い込んで吐き出し、続けて小さく口を開いていく。

「クインさんやレイル、シャトンにガートさんにラックさん。他にもヤードさんやスパードさん、パントさんやペインさん、シオンやセトさん。行く先々でいろんなポケモン（ひと）に会って、皆がそれぞれ異なっていて大変な過去や現実を抱えている事を知ったら、僕の進化の悩みなんて大したことないって思えるようになったんだ」

先程までの虚ろなものとは違い、真っ直ぐな眼差しをヴァローに向ける。それは、本心からの言葉である事を目を通して伝えていた。

「じゃあ、一体何があったんだ？」

「そ、それは……」

もう一度問い詰められると、アルムは視線を泳がせて答えるのを拒もうとする。それに続いて、開きかけた心を閉ざすかのように顔を俯けて、完全に視界からヴァローを消してしまう。

「……アルム。別に言いたくないなら、無理に言えとは言わない。

でも、言った方が楽になる事もある。それだけは分かってくれ」

「あっ、うん。いや、でも……」

アルムが見ていない事は承知の上で、ヴァローは柔和で暖かな――優しく包み込んで受け入れるような微笑を湛え、アルムの頭の上にそっと片足を乗せる。対するアルムはと言うと、喉に何かが痞^{つか}えたかのように短い言葉を発するだけで、直後には黙りこくってしまった。

途端に気まずい沈黙が場を支配する。アルムは相変わらず下を向いたままで、ヴァローはそれをただ見つめるのみ。耳に入ってくるのは、海が奏でる穏やかな旋律以外には無かった。

「あのね……僕、怖いんだ」

海の心地好い演奏を聞きながら黙り続けてしばらく経った頃、アルムは顔を上げてヴァローの方を見据えて想いを紡ぎ出した。その目の奥にはどこか悲しげな光が映っている。

「パントさんとサーナイトさんが言ったよね。テイルが何か大きな事に関わってるって。それが怖くて……。何かあった時に、僕なんかはテイルを支えられるのか、守れるのかなって考えると、どうしようもなく不安なんだっ……」

いつもと違い、瞳が震えていた。声も裏返り気味で、明らかに動揺している兆候を見せている。そして、パントの話聞いた時よりも大きな迷いの様子も同時に。

「そっか、やっぱり黙って一人で悩んでたんだな……。でも、一応

俺達もついてるんだ。それに、まだ確実じゃないかもしれない。それだけじゃ、まだ不安は拭えないか？」

「だって、それじゃヴァロー達に頼り切る事になっちゃって、僕は役立たずになるかもしれないっ……。だから、僕は進化する価値が無いって言われたのかもしれないんだ……」

見る見る内に目に溜まっていく大粒の涙を堪える事は出来なかった。ようやく出せた想いに同調するかのように、次々と零れ落ちていく。――悲しみと、不安を込めて。

「お前……もしかして、ステノポロスからずっと悩んでたのか？ 自分にはその――存在価値が無いんじゃないかと」

大体の想いを察したヴァローの言葉に、アルムは顔をぐしゃぐしゃにしながら力無く頷く。つまりは、元から揺れていた心が、先程のサーナイトの言葉で崩されたのである。

「ずっと、その事は考えないようにしてた。テイルに不安な思いをさせちゃいけないと……思ったから。でも、本当はすごく不安だった。怖かった。いざという時、自分が何も出来ないかもしれないって思ってた……。いや、それ以前に、そもそも僕という存在が必要なのか急に分からなくなってる……。もう、どうしたら良いのか分からないよお……。うっ、ううっ……」

自分の存在価値が自分でも危ぶまれ、恐怖は募るばかり。それでも、事情を良く知らないテイルには余計な心配を掛けたくない。その一心から、さっきもテイルの前では笑顔で振る舞っていたという事になる。

全てを言い切ると、アルムはどうとう声を上げて泣き始めた。必死に我慢しようとはしているが、その抵抗は本心には抗えなかった。

「我慢……しなくて良いんだぞ。そりゃ、テイルを不安がらせないようにしていたのは悪い事とは言わないが、不安を一人で抱え込む事はないんだ。その為に俺がいる。ルーンさんのように、とまでは行かないが、それでもお前の手助けにはなりたいんだ」

アルムの想いを全て受け止めた後で、今度はヴァローが話し出した。少しでも慰めになるようにと、片足で優しくアルムの頬を撫でていく。

「頼むから、感情を押し殺さないでくれ。泣きたい時は泣けば良いし、笑いたい時は笑えば良い。……俺はお前が一人で苦しむ姿を見たくないんだ。だから、俺には悩みでも何でも打ち明けてくれ。お前がテイルを支えるなら、俺はそんなお前を支えたいんだ。それじゃ、駄目か？」

「駄目じゃない、よ……。すごく、嬉しい。ありがとう、ヴァロー」

「お礼を言われる程の事じゃ無いさ。それと、だ。他人が存在価値を決めるんじゃない。自分自身が見出だすものだ——と俺は思う。だから、お前はお前の好きなようにやれば良いんだ。これは一種の約束だからな。いいな？」

「うん、ありがとう。それと、ごめん。もう少しだけ泣かせて。すぐに……止めるから……」

心の奥につっかえてた物が取れたようで、閉じかけていたアルムの心は再び開かれ、穏やかになって解れていった。しかし、それで

もまだ残っていた不安を出しきっていないのか、アルムはヴァローに寄り掛かって再び涙を流し始める。そうして寄り掛かる事で、自然と心も身体も暖かくなっていった。

一方のヴァローは、涙で体毛が濡れていくのを全く気にする様子もなく、優しくアルムの背中を摩さすり続ける。良く知っている仲だからこそ、アルムも安心して身も心も全て預けているのであり、ヴァローもそれに応えたのである。

そんな二人の微笑ましい光景に嫉妬するかのように、月はさらにその輝きを増して光を放ち出す。その光に照らされる二つの影は、しばらく離れる事は無かった。

第三十七話 夜明けとともに旅立つ時、初めて抱く想い

アルムがヴァローから離れたのは、それからしばらく経ってからのこと。まだその瞳は潤んでおり、嗚咽も完全には止まっていなものの、少なくとも先程までは落ち着いたように見える。

一步、二歩と遠慮がちに下がり、アルムは自分から向かってちょうど海の方に立っているヴァローに視線を戻す。未だに涙のせいでぼやける視界の中でその目に映ったのは、自らの体毛以上に顔を赤らめているヴァローの姿だった。

「ぐすっ……あれ、ヴァロー、どうしたの？」

さっぱり理由の分からないアルムは、泣き疲れた為に少し枯れかけている声音でヴァローに話し掛けてみる。対して、ヴァローは何かを言い掛けるように口を開けてはすぐに閉じるという素振りを繰り返す。その一連の動作が数回行われたところで、ヴァローは小さな一つ溜め息の後、ようやく声を出すために口を開いた。

「あのな、さっき自分が言った事や、今やってた事を改めて思い返すと、何か恋人同士みたいな事をやってて恥ずかしくなったんだよ」

「うん、そうだね。恥ずかしかった」

その言葉通り、恥ずかしそうに視線を上方へと逃がしているヴァローに対し、先程までの泣いている顔から一変、けろりとした様子でアルムは言い放った。

「ちよっ、お前——」

「えへへっ、冗談だよ冗談。……ヴァローが言ってくれた事は、すごく嬉しかったよ。これからまた頼っちゃう事もあると思うけど、よろしくねっ」

予想外の豹変ぶりと返答に慌て出すヴァローを見て、アルムは悪戯っぽく舌を出しておどけたように笑って見せる。しかし、柔らかな表情を見せたのもつかの間。すぐに真面目な顔つきに戻ると、視線をしっかりとヴァローに向けて素直な気持ちをぶつける。

「一瞬お前に見放されたのかと思ってびっくりしたぞ……。まあ、それは良いとして。こっちこそ、よろしくな」

再び冷静に戻って微笑を浮かべると、ヴァローは目を閉じてやや顔を斜め下に向ける。それに呼応するかのようにアルムはヴァローの眼前まで歩み寄ると、同じく目を閉じておでこを押し当てる。そこから二人は微動だにせず、まるで言葉を交わさずして意思疎通をしているかのように額をくっつけて、ただ黙っていた。

「ねえ、こうやるのって久しぶりだよね？」

「ああ、そうだな。たぶん、お前と仲良くなるきっかけになったあの時以来だろうな」

「そっかぁ……何だか懐かしく感じちゃうよねっ」

既にアルムの表情には、悲しさなどは残っていなかった。くっつけていたおでこを離すその顔には、自然と笑みが零れている。

「まあな。それより、お前がいいなら、そろそろ戻るぞ。皆も心配

してるだろうからな」

「うん、分かったよ」

ヴァローが促すように背中を軽く叩くと、アルムもゆっくりと首を縦に振って、その歩みを進める。そうして、夜空で優しく瞬いている無数の星の下を、林に向かって二人で歩き始めた。



アルム達が祠に戻ってきた時には、皆が落ち着いた様子で座り込んでいた。しかし、二人が姿を見せるなり、シオンは心配そうな面持ちで近寄ってきた。「何でも無いよ」と笑顔でアルムが言ってみせると、シオンもほっと胸を撫で下ろす。

ちよつと視線を他に向けると、さっきまではまだ元気に見えたテイルがすっかり眠りこけていた。楽しい夢でも見ているのか、口元を緩ませて幸せそうな表情で静かな寝息を立てている。

その中で、それほど大きな反応を見せなかったのはレイル、クリア、ブレットの三人だった。戻ってきたのを確認する為に一瞥だけすると、すぐにそっぽを向いてしまう。それでも、ブレットにだけはほんの僅かだけ安堵の表情が窺えた。もちろん心が読める訳ではないが、顔を背ける際にブレットが軽く自分に微笑みかけてくれた

のに気づいて嬉しくなり、アルムは下を向いてはにかむ。

「それで、お前達はこの後どうするんだ？」

ふと静かな雰囲気の中で、グレイシアのクリアが言葉を発した。対して、これから先の事を考えていなかったアルム達は、互いに顔を見合わせて一斉に反応を示す。

「そうだな……アルム、どうする？」

「僕はとりあえず、元いた大陸に戻りたいかな？　そう言うヴァロ―はどう思うの？」

「まあ、俺も同じ考えだ。ここにいたって仕方ないしな。とりあえず先へ進もう」

「うん、でも――」

二人の考えは同じだったため、ほとんど即決だった。しかし、今はすっかり夜も更けてしまっており、戻るのは明けてからでない事も分かっていた。そうなると、一つ迷ってしまう事柄が浮上してくるのに気づき、表情を曇らせる。

「このまま夜が明けるまで待ってから出発しては、時間が無駄になってしまいますね」

どちらかが先に口にする前に、まるで心の中を透視したかのよう
に語りかけたのは、二人をすっぽり覆ってしまう程の大きな影の持ち主。天から伸びてくる淡い月明かりに照らされて、より一層神秘さが醸しだされている巫女――サーナイトだった。

「ここまで来るのにも時間が掛かったのは分かってます。だから、私がここから船を操って、確実にトリトンの近くまで航行させます。そしてその間に、あなた達は船の上でゆっくり休む事が出来ます。それでいかがでしょうか？」

耳にも心地好い程の優しい声調で、サーナイトは一つの提案を持ち掛けてきた。もちろん、アルム達の考えていた事も全て承知の上であり、協力したいとの思いに偽りなどない様子である。さすがにアルムもきよんとしてサーナイトを見つめるばかりであった。

「あの、せっかくなら私達と一緒に来て頂くという事は出来ないのでしょうか？」

今までは特に会話には割り込んでこなかったシオンが突如横から顔を覗かせた。その眼差しには、一種の期待のような物が込められている。それに対し、サーナイトは瞳に悲しげな色を浮かべつつ、静かに首を左右に振った。

「ごめんなさい。私はここから離れると、水晶から力を得られないのです。私はこの島に縛られし巫女。この場からしかあなた達を手助け出来ないのです」

その表情を崩さないまま徐々に体を屈めていくと、サーナイトは頭を深々と下げた。誠心誠意謝罪をしようとしており、見ているアルム達の方が逆に申し訳なくなるくらいの姿勢である。

「そんな……あなたが謝る事なんて無いですっ！　むしろここまで協力して下さいって感謝しているんですから。改めて、ありがとうございます」

俯いているサーナイトの視界に入るように、アルムは僅かに屈み込んだ状態で慌てて近づいていく。そんなアルムが放ったいつもより堅くて丁寧な言葉に、サーナイトは再度首を――しかし、先程とは違って優しい表情で左右に振った。

「いえ、これが私の“役目”ですから、当然の事をしたまでです。……さあ、導かれし出逢いを果たした坊や達。次なる出逢いを見つける為に、旅立つのです。乗り込んだのを見計らって、船を動かします。……こんな感じでよろしいでしょうか？」

最後の方で何故か悪戯っぽく笑いかけてきたサーナイトの方に向き直ると、アルム達は決心したように一様に頷いた。そしてそれを出発の合図とするかのように、一行は来た道に戻るようにして海岸の方へ向かった。

一度通った道だったので、行きほど時間は掛からずに船まで到着した。他の全員が乗り込んだのを確認すると、ブレットが碇を上げてすかさず飛び乗った。その後、時間の経過とともに船は徐々に海に向かって動き出す。

「なあ、今さらだけど、本当にあの巫女の言う事を信じていいのか？」

とりあえず岸から離れているのを確認しながらも、ヴァローは不安そうに海の方を眺めていた。それと言うのも、これと言って船には何も変化は無く、このまま寝ていてちゃんとトリトンまで着くのか怪しんでいるからである。

「まあ、いざとなったらオレが起きててしっかり見張っててやるよ

——つと!？」

ブレットが軽く鼻を鳴らして嫌そうな素振りを見せつつ、その一方では少し誇らしげに腕組みをしようとした時、いきなり船が大きく左右に揺れた。それほど大きな波が寄せてきたわけではないのに——である。

「な、何が起こきたの？」

「さ、さあ……。でも、これを見て!」

衝撃で倒れ込んでからようやく起き上がり、アルムとシオンは船の外郭へと視線を移す。すると、船全体がラデュシティで見た水晶——“フルスターリ”と同じような神秘的な青白い光に包まれているのが見えた。続いて水面の方を見ると、船の先端部に波がぶつかっても、揺られる事なく悠然と突き進んでいっていた。

「これが、巫女様の力か……」

「方向も——確実にトリトンの方に戻っているようですね」

クリアは体を大きく乗り出して、興味津々といった様子で現状を見守り始める。一方で、その対極の位置にいるレイルは、船の向かう先を真っ直ぐ見つめながらアルムに話し掛ける。

「そう、それなら安心だね。これで、ゆっくり……眠れ、る……」

首をこっくりこっくりと動かして眠そうにしているながらも、アルムは何とか堪えようとしていた。しかし、いろいろあって疲れたのか、遂には耐え切れなくなって重い^{まぶた}瞼を下ろすと、そのままやす

やと寝息を立てて眠りに落ちてしまった。

その後アルムが目覚めた時には、まだいくつかの星がほのめいている中で、太陽が僅かに顔を覗かせて、徐々に空も明るみつつあった。その色も日中に見られるような鮮やかな薄い青色ではなく、青碧色であり、いつも見ない風景に新鮮な感じを覚える。

時間の経過を視界で以って確認し終えたところで改めて辺りを見回すと、他の全員も横になって眠っていた。

波を掻き分けて進んでいると言うのに、船の進行は至って穏やかであり、アルム以外の全員の眠りを妨げる程の揺れは起こらないでいる。

「ふわあ……今ほどの辺なんだろう……」

まだ半分は寝ぼけた状態で欠伸をしつつ船の外を眺めてみると、目前には既に広い砂浜と見覚えのある砦が視界に飛び込んできた。もちろんその砦と言うのは、トリトンである。

「もう着いたんだ——うわっ！」

舳先^{へきめ}に立って船が動くのをぼうっと見ていると、今までは起きなかった大きな揺れが生じ、アルムの小さな体は船の方に放り出された。

「いたた。まさか突然揺れるなんて……」

「ぐうつ。おい、アルム。まずはそこをどいてくれないか」

アルムが倒れてたたき付けられた先は、堅い木の板ではなく、静かに眠っていたヴァローの上だった。下から聞こえてきた潰れたような声に慌ててその場を離れると、苦悶の表情を浮かべながら起き上がる。

「それで、どうしたんだ？」

「うん。どうやら船が止まったみたいだよ」

もう一度揺れやしないかと警戒しつつ船から身を乗り出すと、いつの間にか全体を覆っていた光が止んでいるのが分かった。船自体は砂浜に乗り上げており、沖の方に引き寄せられる事はないようである。

「今の揺れたのはなーに？」

「ほんとに、すごい揺れだったわね。おかげで目が覚めたけど」

無事海岸に到着したのを境にして、ティルとシオンが体を起こし始めた。ティルは大きな欠伸をして伸びをすると、羽衣をゆっくりと伸ばして空を飛び、水面に手を付けて水しぶきを飛ばして元気に動き回る。そのはしゃぎ声を聞いて、残りの全員も次々と目を覚まして船から降りていく。

「さてと。僕達はもう砦に戻るよ。それじゃ、せいぜい元気で」

「えっ、お別れ……ですか？」

着いてほっとしたのもつかの間、クリアはそっけなくアルム達に背を向けると、その場を去ろうと歩き出す。アルムがその背中に向かって声を掛けても振り返る事なく、砂浜に足跡を残しながら速足で行ってしまう。

「まあ、あいつはあんな奴なんだ。許してくれな」

クリアとは対照的に、ブレットはすぐに去るような素振りは見せなかった。相棒パートナーの無愛想な行動に苦笑を浮かべつつ、ばつが悪そうに頭を掻いている。

「別にブレットさんが謝る必要は無いですよ。それと、クリアさんには言いそびれたのですが……僕たちに協力して下さってありがとうございます」

最初は敵だとはばかり思ってた相手が示した誠意ある行動に、アルムは改めて安堵を覚えつつ、にっこりと笑って頭を下げる。そうして一時的に視線を下に向けていると、突然頭に何かが触れるのを感じた。確認の為にふと頭を上げてみると、そこには笑みを湛えているブレットが立っていた。

「そこまで大した事はしてないからさ、そんな堅苦しいのは良いぜ。それに、オレ達は敵同士じゃないから、いつでも気軽に立ち寄ってくれて構わないからな。じゃ、元気だな」

くしゃくしゃとアルムの頭を撫でると、ブレットはクリアの後を追うようにしてトリトンの方に駆け出していく。その途中で一度だけ振り向くと、別れの挨拶として左右に手を振って見せて再び背を向けて去っていった。

「あいつらも結局は悪い奴らじゃなかったんだな。それじゃ、俺達もそろそろ出発するか。目的も果たした事だし」

ヴァローが話し掛けてくるのに反応して振り返るそのアルムの表情は、先程まで見せていた微笑から一変していた。俯き加減で暗そうな面持ちのまま、口を一文字に閉ざしたり小さく開いたりを繰り返している。

「んっ？ アルム、何か言いたい事があるのか？」

「……えっ？」

そこは付き合いが長いだけあるのか、ヴァローはアルムが何かを言いたげなのを見抜いていた。それに対して、凶星といったように、アルムは啞然とした様子で微かな声を漏らす。

「言いたい事があるなら、はっきり言えよ」

「でも……うん、分かった」

さすがにここでごまかすのは止めようと思い、アルムは小さく一回呼吸をして足を前に進めていく。そして、ゆっくりと時間を掛けて移動し、足を止めた先は——不思議がっているマリル、シオンの前だった。

「アルム、どうしたの？」

シオンは優しく問い掛けながら、少し離れた位置で止まったアルムの方に一歩ずつ近づいていく。一方で、やっこの思いでシオンの前まで来たアルムだったが、またしても戸惑っているようであった。

「あのね、シオン——」

一拍置いた後で、ようやく決心が着いたようにシオンの方にしっかりとした視線を送ると、アルムはシオンに向かって抱きついた。

「ちょっ……一体どうしたの!？」

突然の事に驚いて少しのけ反るものの、何とか体勢を立て直したシオン。ぴったりとくっついて離れないアルムをそっと両手で引き離して、視線を合わせてみる。見えたアルムの目の中は、僅かに涙が溜まって潤んでいた。

「僕、シオンと一緒にまだ旅を続けたい。だから、ステノポロスに戻らないでっ!」

「えっ、アルムが言いたかった事って……」

「箱も取り戻したし、何よりシオンは王女だから、国に戻らなきゃいけないのは僕だって分かってる。それでも……僕は、シオンと一緒にいたい! シオンと一緒にだと、すごく安心出来るんだ。だから——」

目を強く瞑^{つむ}って必死に思いの丈を吐き出している最中、ふと頬に何か暖かい物が触れたのを感じ、アルムは声を出すのを止めて目を開いた。その視界に入ってきたのは、シオンが口を自分の頬に押し当てている光景だった。見た瞬間は、今体験している事が自分の事じゃないような錯覚に陥る。

「わ……わわわっ! し、シオン! な、な、何をしてるのっ」

突然の事に頭がこんがらかり、言葉もしどろもどろになりつつ、アルムはシオンから飛び上がるようにして離れた。一旦間を置いて状況を把握すると、その顔は見る見る内にりんごのように真っ赤になっていく。

「ふふっ、ちょっとしたお礼よ。初めてあなたの方から“一緒にいたい”って言うてくれたから、嬉しかったの」

「あ、うっ……。で、でも、やっぱり——」

まだその顔から動揺は拭えておらず、アルムは口を頻^{しき}りにもごもごさせながら、顔を俯かせてしまう。それに気づいたシオンは、もう一度自分から歩み寄って覗き込むような姿勢になる。

「——お父様は、たぶん私がそのまま戻るとは思っていないと思う。だからね、私はこれからあなた達に付いていく。あなたが私と本当に一緒にいたいと思ってくれるなら、ね」

「本当に……本当に良いの？」

「ええ、もちろんよ」

シオンの返答を聞いて、寂しい思いで濁っていたアルムの目には、光が再び宿って輝きを増した。恥ずかしさと不安が混在していた表情にも、嬉しさでいっぱいの明るい笑顔が戻っていく。

「あははっ！ アルムの顔、真っ赤だ〜！ それに、シオンに抱き着くなんて、甘えん坊みたいだねー」

横から割り込むように顔を覗かせると、ティルは茶化すように笑いかけた。一時は落ち着いていたアルムだったが、そのティルのからかいによってまたしても狼狽^{うろた}え始める。

「い、いや、そんなんじゃないよっ！　ただ、えっと……」

「顔がどんどん赤くなってるよ。真っ赤なアルムも面白いねっ！」

「ちょっ——ティル、からかわないでよっ！」

「まあまあ、良いじゃないの。とりあえずは次にどの町に行くか考えましょうよ」

恥ずかしさが最高潮に達してやや涙声になっているアルムを宥^{なだ}めるように、シオンは片手で頬を軽く撫でた。しかし、それはむしろ逆効果で、アルムはますますおどおどし始めてしまう。

「あれ？　アルム、何かいつもと違うねー」

「もうっ、後で覚えておいてよね……」

相変わらず陽気な笑顔を振り撒いているティルを叱り付ける事など出来るはずもなく、アルムは諦めた様子で溜め息を吐いて、シオンに寄り添って歩き出した。構ってもらえない事を不満に思ったのか、頬を膨らませてティルもその後を飛んで付いていく。

「何か知らないけど、アルムも悩みが解消されたみたいだし、俺達もぼちぼち後を追うか」

「了解しました。余談ですが、私が共に時間を過ごした中で、主は

一番落ち着いた表情をしているように見えます。……関係ない話を失礼しました。参りましょう」

三人の後ろ姿を見つめながら歩みを進めようとした時、レイルが発した言葉にヴァローはたと足を止めた。それに合わせて、レイルも機械的にぴたりと移動を一時停止する。

「そうか、分かった。レイル、お前も……。ま、今はとにかくアルム達に追いつく事を考えるか」

一人で納得するように呟くと、ヴァローは先を進む三つの影を指して駆けていく。そして、レイルも一回首をかくかくと“それらしく”――不思議そうに傾げると、ゆっくりと移動を再開するのであった。

第三十八話 訪れるはリプカタウン―静かな静かな町の語りべ―

徐々に頭上まで昇り始めた白く輝く光球――太陽を時折見上げながら、アルム達は青く美しい海を横目にして海岸沿いを道なりに進んでいた。潮気を含んだ風の恩恵をその身にいっぱい受けていたため、暑さは幾分か和らいでいて、移動にも都合が良いようである。

抱えていた不安が和らいだ事もあってか、アルムはてくてくと心持ち軽い歩調で先頭を歩いていった。その隣に寄り添って歩くシオンは、地図を広げて次の目的地をあれこれと話し合っている。時々その表情には朗らかな笑みが覗いており、アルムと一緒に歩いているのが嬉しいようにも見える。

その上空をゆったりと気の向くままに、しかしどこかつまらなさそうに星の君――ジラーチのテイルが浮遊していた。手をばたばたと動かして宙を泳いでいるかのように振る舞い、アルムの興味を引こうと努力してはみるものの、全て失策に終わっていた。そんなわけで、今は諦めたように飛んでいるだけである。

その後方では、ヴァローとレイルが肩を並べて黙々と歩いている。こちらは共に流れていく景色を楽しんでいる様子もなく、ただぼんやりと海上を飛ぶ鳥ポケモンを眺めているだけであった。たまに道端の植物にも目は遣りはするが、特にこれと言って理由は無かった。

「ねーねー。ボク達はどこに向かっているの？」

トリトンの髯がほとんど見えなくなるところまで進んだところで、テイルがアルムの前まで降りてきて首を傾げて聞いてきた。ぶすつとした様子は完全には消えていないものの、それでもテイルは笑い

かけてくる。

「えっと……シオン、何て言う町に向かってるんだっけ？」

「ここからもう少し歩いた先にあるリプカタウンって町よ。確か炎を聖なるものとして崇めているはずだけど、詳しくは行ってみないと分からないわね」

シオンは地図を小さく折り畳み、苦笑を浮かべながら助けを求めような視線を向けてくるアルムの方に一部分を指し示す。シオンに示された部分を見ると、アルムは納得したように軽く口を開いたまま数回頷いた。

「でもさ、炎を聖なるものとして崇めているところなら、ヴァローが行ったら何か良い事があるんじゃない？　ね、ヴァロー？」

「ああ、そうだな」

軽くからかうつもりで後ろを振り向いたアルムに向かって、ヴァローは冗談として受け止めてはいないような真剣な表情で返答する。この反応に違和感を覚えたアルムは、変に刺激するのは止めようと考え、表立った表情の変化を見せる事なく前に向き直る。そして今度はシオンの方に顔を向けた。

「何かヴァローの様子が違うと思うのは、僕だけかな？」

「さあ……でも、ヴァローもあの巫女様に何か言われてたみたいだからね。ちよっと考え事でもしてるんじゃないの？」

ヴァローには聞こえないようにひそひそ声で話し掛けてみると、

シオンは少し困惑したような顔つきながらも、昨夜についての説明を簡単に返した。それを聞いて、今まで吹いた中で一番強い突風に思わず目を閉じた後で、アルムは何とは無しに「ふーん」と声を出して聞き流す。

その後はと言うと、全員が特に会話を交わす事もなく歩いていた。ゆっくりとした速度ではあるが、徐々に海から離れていつているのを実感していた。

砂浜にも広がっていたようなさらさらした白っぽい砂とは違う、堅い土と茶色っぽい砂へと足元が移り変わっていく。涼しく強い風はいつの間にか穏やかなものとなっており、辺りの空気も熱気を帯びたものに変化しつつあった。それは一息吸い込むだけで、僅かに息苦しさを感じられるほど。

「けほっ……何だか妙に砂が舞ってるような気がしない？」

「確かに言われてみるとそうだな。この辺の砂は、海岸近くの砂よりも風に飛ばされやすいみたいだ。風土が変わって行って、町に近づいてる証拠だな」

アルムが咽^むせるのも無理は無かった。何しろ、無数の細かい砂が風に流されて空気中を漂っており、砂嵐とまでは行かないまでも、決して見晴らしが良いとは言えない程に視界を埋め尽くしていたからである。

「ぺっ、ぺっ。うーっ、この砂、美味しくないよーっ」

「さすがに美味しくは無いと思うけど……。とにかくもうちょっとの辛抱だから、なるべく砂を吸い込まないように頑張って」

さすがのテイルもこの状況では楽しいとは思えないのか、必死に飛んでくる砂を防ぐようにして付いてきていた。アルムも一応励ましの言葉を掛けてはみるが、彼自身もそんなに余裕は無い様子である。目を細めていて狭くなっている視野に入る砂にいい加減飽き飽きしており、口を突いて出るのは疲れから来る溜め息だけであった。

「はあ、もうこの鬱陶しい砂はたくさん——って、あれっ？」

そうしてそろそろ休憩を取りたいと思いつつ愚痴を零した時、いきなりぴたりと風が止んで、移動の際の障害となっていた砂も舞う事は無くなった。同時に、砂で視界を塞がれていて確認出来なかった目的地の全貌が、突如として目に飛び込んできた。

地面は相変わらずの焦げ茶色の土であり、その上に点在する家には木で作られている物と土で作られている物の二種類がある。“タウン”という名称ではあるが、ラデューシティやステノポスのような広い町と言った感じはなく、どちらかと言えばブルーメビレッジのような村に近かった。それだけ眼中に映る集落は小さいのである。

その点在する家の脇には、ほぼ一軒に一つくらいの割合で、脚の部分が長くて高い灯明台のような物が立っている。火こそ点いていないものの、その地面には灰が広がっており、夜には明かりの役目を果たしているのだと見て取れた。

「何か……殺風景な町ね」

「うん、失礼だけど、何も無いというか」

植物もところどころにしか生えておらず、荒野に近い大地を見渡

しながらシオンとアルムが交互に呟いた。その景色はまさに二人の言う通りであり、ポケモンの姿すらも疎^{まば}らにしか見当たらない。

「ま、とりあえずは住民に話でも聞いてみようか。――すいませーん」

立ち止まっている二人の脇を通り過ぎていき、ヴァローは住民に話し掛けていく。一方で、話し掛けられた相手――綿毛のような翼を持つ青い体色をしたチルットは、決して暖かいとは言えない眼差しを一行に向けると、逃げるようにして家の中に入ってしまった。

「あれっ、一体どうしたんだろう？」

「さ、さあな。俺の方が聞きたいよ」

いきなり避けられるような行動を取られた事には、さすがのヴァローも戸惑っているようだった。別に鬼気迫るような表情をしていたわけでも、脅すような話し方や声でも無かったからである。

「とりあえず、今度は他のポケモンに話し掛けてみようよ。今の反応も気になるしね」

「私も賛成よ。手分けして聞き込みをしてみましょ」

一時は呆気にとられたものの、初めて訪れた町なのだから、何が起きても不思議ではない。それを覚悟した上で意見も一致したところで、アルム達は散り散りになって家を一軒ずつ回り始めた。

しかしその後も、成果はさっぱり上がらなかった。話し掛けよう

と思って近づくと、姿を見られただけで家の中に逃げ込まれる——この繰り返しだった。ここまで徹底的に避けられると、アルム達も一層動揺を隠せなくなる。

「この町はやっぱり何か変だよね？ 完全に僕たちを避けてるって言うか……」

「そう、それよ。至って平然としたポケモン達も、私達が近づいた途端に血相を変えて踵^{きびす}を返して姿を暗ましてしまふんだもの」

「しかし、どうしたものかな……」

三人は口々に溜め息を吐きながら、もう一度方々に建っている家に視線を遣ってみる。来た時はちらほらと見えていたポケモン達も既に姿を消しており、この部分だけ切り取って見るとゴーストタウンのようである。

ここで一行が何を悩んでいたかと言うと、今後の予定についてであつた。これまでの旅路では幸運に恵まれた事もあつてか、苦労せずして住民に町を案内してもらつたり、宿泊場所を提供してもらつたりしていた。しかし、この町ばかりはそう上手くは行かないと言う事で、この町に留まる事さえ考えているのである。

「これじゃ、あわよくば——とか言う以前の問題よ。このまま駄目だったら、もしかしたらこの町を通り過ぎる事も考えないといけないかもしれないわね」

「うーん、それは残念だね。でも、このままじゃ確かにいけないから、やっぱり仕方ないのかなあ。ねえ、ヴァローはどう思う？」

その場で一周しながら今はすっかり人気の無くなってしまった集落を見渡した後で、アルムは改めてヴァローの方に視線を送ってみる。しかし、ヴァローは上の空と言った感じで物思いに耽っているようで、全く気づいていない。

「ヴァロー、どうかしたの？」

「ん？ ああ。離れるんなら、なるべく早く決めないとな」

もう一度歩み寄りながらアルムが話し掛けてみると、今度は一瞬呆気を取られたような表情を見せた後で反応を示した。視線はアルムの方に向けてはいるものの、あくまで視界に入るような程度の方であり、むしろ遠くをぼうつと見つめているようである。

そんな彼を見て、異変と言うか違和感と言うか、とにかく何かを直感的に感じたアルムは、眉をひそめながらそっと近づく。

「あのさ、ヴァロー。僕が言うのも何だけど、何かあったの？」

「いいや、別に何も無いさ」

「えっ、でも――」

「無いっただけ無いって」

心配して掛けた言葉も軽く跳ね返されてしまい、アルムは押し黙ってしまふ。決して冷たい態度を取られたという訳ではないのだが、「話し掛けるな」と暗に示すかのようにヴァローに突き放されたような気がして、気後れを感じていたのである。

「あの……もしや、旅のお方ですか？」

風の吹く音しか耳に入るものがない程の沈黙が続く中で、ふと聞き慣れない別の声が割って入ってきた。全員がそちらに目を向けてみると、そこにいたのは先程ヴァローが話し掛けて無視された種族のポケモン、チルットであった。

「あら、あなたはさっきの？」

「いえ、“彼女”は僕の友人です。彼女の――引いては住民達の大変無礼な態度を、僕が代表して謝ります。すいません」

姿を確認して声を掛けるや否や、矢継ぎ早に喋りだしたかと思えば、チルットは急に頭を下げた。まだ状況が上手く飲み込めないままで、アルム達も釣られてお辞儀をして、一旦顔を上げる。一呼吸置いたところで目の前にいるチルットの容姿を改めて確認すると、その円まるらな目の色は黒ではなく茶色で、先程のチルットとは違っているのに気づいた。

「違いがわかって頂けましたか？ もし良ければですが、事情を説明させて頂きたいので、一度僕の家にとにかくのはいかががでしょう？ 少々差し出がましいようで申し訳ありませんが……」

「あ、えと……いいえ。そんな、差し出がましいなんて事ないですよ。むしろ教えてもらえるなら、教えて欲しいくらいでしたし。でもその前に、名前を聞いても良いですか？」

思いがけない申し出がチルットの口から発せられた事に、驚きのあまりアルムは縛^{もつ}れた様子で応じた。それでも、すぐにその顔に笑みを浮かべると、チルットも安心したように溜め息を吐いてみせる。直後、今度はそれとは別に小さく笑って見せると、チルットは口を開いた。

「ふふっ、すいません。自己紹介がまだでしたね。僕はウォルク。この町に語りべとして存在する者です——」

第三十九話 ウォルクの語りと町の事情、炎と町の関係

通常のチルット族とは違う目の色を持つウォルクと出会ったアルム達は、寂しく風だけが通り抜ける荒野を誘われるがままに歩いていた。一応通りがけに家の周りに視線を送ってはみるが、誰も表に出てくる者はいなかった。

「狭くてすいませんが、どうぞお入り下さい」

飛ぶのを止めてウォルクが指し示した先にあった建物は、他の家よりは一回り小さい土製のものだった。その綿雲のような翼で扉を開けると、ウォルクは中に入るように促す。

ちょっと狭いせいか、余計な家財は置かれておらず、質素と言えば質素である。しかし、住居としては十分な役割を果たすものであり、家の地面には干し草の絨毯が敷かれていて、比較的熱い砂の上に立っていなければならなかった外よりは快適である。

「どうぞくつろいで下さい。とは言っても、狭いですから伸び伸びとはいきませんが……」

家の隅に置いてある籠の中からいくつか小振りの木の実を器用に運んでくると、ウォルクは苦笑を浮かべながら小声で呟いた。イーブイ、ガーディ、ジラーチ、マリル、ポリゴンという比較的小柄なポケモンが揃っているとは言え、窮屈さは否めなかったため、アルム達も思わずごまかしの愛想笑いをする。

「それで、この町の事について話してもらっても良いですか？」

「ええ、ちょっと待って下さいね」

一瞬気まずい空気が漂ったところでシオンが切り出すと、ウォルクはこの家の中では一番大きな家具となっている本棚のところまで行って、一冊の分厚い本を引きずってきた。

「これは我が家に代々伝わっている史書です。範囲こそこの町に限定されていますが、過去に起こった大きな出来事が全て事細かに記されています。それでまずお聞きしますが、この町の家^の脇に、一軒に一つの割合で灯明台があるのは気づいてらっしゃいますか？」

最初にこの町に入った時に見た物、ウォルクの家に来る途中に見た物を思い出し、アルム達はそれぞれに頷いた。

「そうですか。実は、それがこの町の伝統と関係して……今からそれについて説明させて頂きますね——」

それから、ウォルクは身振りを交えつつ、懇切丁寧に説明を始めた。その話の内容はと言うと、この町で行われてきたという祭典に關してだった。

祭典が催される日には灯明台に火が灯され、町中が幻想的な空間になるのだとか。町の長の邸宅の前では巨大な焚き火が煌々と炎が燃え盛り、それを住民達が囲んで“炎の精霊”を祀^{まつ}る為の儀式を始める。そしてそれが終わると、全員が家から出て、外で会食をするという。その盛り上がりは炎に負けず劣らず熱いものであるらしい。

「——と、概要はわかって頂けましたか？」

「はい。わかったよっ！」

全員を代表するかのよう、ティルが元氣良く声を張り上げる。それが本当にわかつているのかどうかはともかく、少なくともティルを除く全員はその行事について理解したようであった。

「良かったです。それでですね、その儀式を終えると、いつもは炎の精霊が姿を現すのです。しかし、過去に一度ある事が起こってから、精霊が姿を見せなくなってしまいました」

「そうなんですか……。それで、その過去に起こった事とは一体何ですか？」

やや重々しい空気が漂い始める中で、恐る恐るアルムが首を傾げながら問い掛ける。すると、ウォルクは一度深く溜め息を吐いて本のページを次々と捲っていく。

「実は、今の住民が生まれるずっと前の時代の事なのですが、ある年にいつもと同じように祭典の準備をしていたのです。そして、その時にふらりと訪問者が現れました。それが、こちらの絵のポケモンなのですが……」

躊躇いがちにアルム達の方を見つめながら、ウォルクは開ききったある一ページを翼で指し示す。そこには一体のポケモンの姿が描かれていた。赤とベージュのふさふさな毛並みの特徴の、犬のようなポケモン――それに全員が見覚えがあった。いや、むしろ知らないはずがなかった。

「これって――ヴァローと同じガーディじゃないの？」

呆然とした様子のアルムが震えるような声の言葉を零した。ティ

ルとウォルク以外の全員の表情が凍りついており、ヴァローは特に口を開けたまま声も出せずにいた。

「ええ、その通り。訪問者というのは、そのあなたと同じガーディなのです。そのガーディはオスだったのですが、彼は旅をしている途中でこの町に立ち寄ったようなのです。その当時、住民は彼を暖かく迎え入れ、祭典に参加するように促してもてなしました。そう、そこまでは良かったのですが――」

一旦ウォルクが話すのを切ったのを受けて、アルム達は続きが語られるのを固唾を吞んで見守る。一方で、真剣な眼差しで見つめられているのに気づいたウォルクは、深い溜め息の後に、再度口を開いた。

「問題は、祭典が終盤に入った頃――炎の精霊への祈りを捧げる為の儀式を行う際に起こりました。突如として町が何者かに襲われたのです。住民も必死で抵抗はしましたが、何より奇襲であったので、歯が立ちませんでした。炎の精霊も住民の方に加勢をしてくれてはいたのですが、とても敵う相手ではなく、町はほぼ壊滅状態にまで追い込まれました。この町が荒野のようになっていいるのも、そのせいなのです」

そこまで聞いて、ようやくアルム達もこの町の荒廃した状態の真相を把握したのか、居た堪れない気持ちになって顔を俯けた。直接的には関係が無いとは言え、平穏な暮らしをしてきたアルムには、過去の事であっても衝撃的であったのである。

「それで、そのガーディと事件とが何か関係があるの？」

シオンが一人はつきりと声を上げて切り出すのに対し、アルム達

は驚いて顔を上げた。それと同時に、一斉に答えを求めるような視線をウォルクに投げ掛ける。

「そう、それなのです。町を襲った連中の正体については詳しくは書かれていないのですが、その連中がガーディを狙っていたとは記されています。恐らくはそれ以来、住民は旅人を警戒するようになってしまったのでしょう。特にあなたがいれば、ね……」

優しく静かに本を閉じると、ウォルクはヴァローを一瞥してそれを棚へと戻した。その振り返り際にほんの僅かに浮かべた複雑そうな表情を、アルムは見逃さなかった。

「それじゃ、ウォルクさんは何故僕たちを家に入れて下さったんですか？」

アルムも自分が言った内容自体は決して良いものだとは思っていなかった。だけど、自分達がいる事で迷惑を掛けているのだとしたら、何だか申し訳がない――幼心にそう感じた故の決断であった。それに対して、思いも寄らない突然の問い掛けに、ウォルクは目を丸くする。

「僕はそんな過去に縛られるのは嫌だからです。あくまで語りべっただけであって、僕自身の意見というのもありますし。それと、たぶん歳はさほど変わらないはずですから、敬語じゃなくても結構ですよ」

先刻に見せた悲しみの色は消えており、そのウォルクの表情には微笑みが湛えられていた。アルムも返答を受けてほっと一安心したらしく、強張っていた顔も少しずつ解ほぐれていった。

「それじゃあ、ウォルクさん——じゃなくて、ウォルクの方も気軽に話してよ」

「そう……だね。アルム、よろしく。ここには好きなだけ居てくれて構わないよ。町のポケモン達の態度は冷たいかもしれないけど、気にしないでくれるとありがたいな」

「はい、わかりました——って、あれ？」

言った側から思わず敬語を使ってしまった事に素っ頓狂な声を上げると、その張本人であるアルムとウォルクは顔を見合わせて吹き出した。これで完全にさっきまでの暗い空気や戸惑いのようなものは吹っ切れたようで、家の中には僅かに和やかさが戻り始める。

「やはり僕にはあなた達が悪いポケモンには見えないね。いつまでも過去のしがらみに捕われててもしょうがないから、町の皆も早くそれに気づいてくれると良いんだけど……」

ばつが悪そうに苦笑いをして見せると、ウォルクはアルム達に背を向けて扉の方に向かって飛んでいく。どうかしたのだろうか——と少し不安になりながらアルムがその後ろ姿を見つめていると、ウォルクは扉に翼を触れかけたところで止まって振り返った。

「あ、そうそう。もし町に居づらくなったら、ここから一つ丘を越えたところにある森にでも行ってみると良いよ。あそこは静かで落ち着けるし、何より誰もいない。この町で残ってる宝の一つと言っても過言じゃないくらいに良いところだから」

思い出したようにそれだけ言い残すと、ウォルクは扉を開けて、かんかん陽射しが照り付けている屋外へと飛び出していった。残

されたアルム達の方は、何をして良いか分からずに立ち尽くす。

「慎重そうに見えて、結構うっかり屋さんなのかしら？ 家を空けて出て行っちゃったけど」

「だよね。ここに居ても良いって事なのかもしれないけど、外に出たい時はどうすれば良いんだろう、ね……」

アルムは語尾を引っ張るようにしながら、名前を呼ぶ事なくヴァローの方を一瞥するが、相変わらず心ここに在らずと言った様子であった。だからと言って、不安そうな顔をしている訳でもなく、むしろ何か決心をしたような精悍な顔つきとなっている。

「なあ、とりあえずここにいたって仕方ないから、外に出てみないか？ ウォルクも俺達が出る事を見越して何も言わなかったんだろうし」

今まで何の反応も示さなかった中で、ヴァローはふと提案を出してきた。その声はいつもよりも一段と低く、真剣さを表しているようでもある。

「うん、いいよ。ただここで待っていても何だかつまらないからね」

「えっ、お外に出ていいの？ だったら、森に行きたいっ！ すごく楽しそうだもん！」

外に出れると聞いて、テイルの声が一段と明るくなった。その顔には満面の笑みを浮かべており、今にも扉を勢いよく開けて飛び出さんとしている。気のせいかな、その楽しい気分に合わせて短冊が左

右に揺れているようにも見える。

「そうだね。この暑い町の中を歩くよりは、そっちの方が涼しいかも……」

「決まりだねっ。それじゃ、早速行こっ行こっ！」

「ちょっ——引っ張らないでっば！」

同意を得た事でテイルの気分はより高まり、アルムの体を強く引っ張るようにして外へと繰り出していく。少し痛がる様子を見せるアルムも、最近遊ぶという事をしていないせいか、胸を踊らせているかのように笑顔で駆け出した。

「もう、相変わらず早いわね」

「まあ、それがテイルだからな。レイル、お前は一応ここに残っててくれないか？」

「はい、了解しました。行ってらっしゃいませ」

とりあえず留守番としては適任であるレイルを残し、シオンとヴァローは先を行く二人の後を追いかけ始めた。片や前方を走る楽しそうな二人組を見て笑みを零しつつ、片や真一文字に口を結んだ状態のまま、熱気の帯びている外界の地を一步ずつ踏み締めながら――。



ウォルクの言う通りに、一番近くにあった丘を登りきると、その眼下には広大な緑が一面に広がっていた。背後の荒れた砂地からは考えられない程に青々とした植物が育っており、広さにおいてはアルム達の故郷であるレインボービレッジの森と良い勝負と言ったところである。

今まで見てきた森との決定的な、唯一の違いと言えば、上方から見たその外観であった。縁に生えている木々により、のこぎりのようにギザギザしたような地形が生み出されており、まるで揺らめく炎を象^{かたど}っているようにも見える。

「わぁ……すごい森だね！　広くて何だか楽しそう！　誰か遊び相手がいると良いなあ……」

丘を降りて森の入口付近まで辿り着いたところで、テイルは一段と声を大きく弾けさせる。森は上から見えていたよりも奥行きがあるように感じられ、かけっこでもしようものならすぐに迷子になってしまうそうである。

「おっ、確かにこれは広いな……。さて、ここに来て何をして遊ぶんだ？」

「うーん、それはテイル次第かな？」

予想以上の広大さに圧倒されつつ、ヴァローはアルムに尋ねた。

一瞬考えるように見上げた後、森に向けた視線をそのままテイルの方に向け、アルムは軽く笑みを零す。

「ボクはとにかくこの先に進みたーい！」

「――だ、そうだけど？」

「良いんじゃないか？　ちょっとした探険気分ってやつで」

テイルが早く付いてきてと言うかの如く手を激しく上下に振っているのを見て、アルムとヴァローも思わず見合わせてくすりと小さく笑って見せる。何故笑ってるのか理解出来ないテイルを先頭にして、神秘さと不気味さの混在する奥の方へと歩みを進める。

森の中は、天空から降り注ぐ熱を伴った光を遮ってくれる程の背の高い木が多く、おまけに風通しも良くて快適だったので、一行は休憩の為に立ち止まる事なく移動を続ける事が出来た。

「ねーねー、りんご食べるー？」

「あ、うん。ありがとう」

時には途中で見つけた木の実などを頬張って自然の恵みを堪能しつつ、突き進んでいた。高い位置にあるりんごなんかは、テイルが自慢の羽衣で飛んで取りに行っており、余分に取ったのはアルムに渡していた。

「む、私だって……。はい、アルム。召し上がれ」

「えっと……。うん、ありがとう」

テイルに負けじと、シオンも口から細い“みずてっぽう”を放って、的確に木の実を撃ち落としていた。こちらも多く取った分はアルムに上げており、すぐにアルムの周りは木の実でいっぱいになってしまう。

「二人とも、木の実をくれるのは嬉しいけど、これはいくら何でも多過ぎだよっ」

嬉しい気持ちはもちろん大きいものの、ここは叱っておこうと思いい、アルムは膨れっ面になってテイルとシオンの両者をじっと見つめる。さすがにこれはやり過ぎたと反省したのか、二人はしゅんとして静かになる。

「……ねえ、本当に誰もいないのかな？」

「いや、いるさ。さっきから誰かに見られている気がする」

気まづくなつた雰囲気を開き、話題を変えてアルムが話し掛けてみると、ヴァローは目を細めて鋭い視線を左右に動かす。アルムには感じられない気配を感じているようで、警戒しているようである。

「それって……。誰かなあ」

「さあな。とりあえずあっちから姿を現すのを待つしかないな――」

警戒している割には、至って落ち着き払っているヴァローの様子に些か疑問を感じるものの、アルムは気にしないようにする。

「——つまらないなあ。そっちから正体を暴こうって気は無いの？」

そうしてヴァローの方から前に視線を戻し、アルムが一步踏み出そうとした時だった。やや高音の悪戯っぽい声が背後から聞こえてきた。前にいるティルの声で無い事は明白であったため、三人はすぐさま振り返る。

そこに立っている一本の木の影から、一人の小さなポケモンが顔を覗かせた。橙色のV字の大きな耳や背中に生えている小さな羽、澄んだ青色の目が特徴の黄色い体色のポケモンであった。

「君は……誰なの？」

ティルの時と同じく、今まで見た事も無いポケモンに遭遇してアルムは動揺していた。それでも、危険を感じなかったので、ゆっくりと歩み寄っていく。すると、そのポケモンはにっこりと笑顔を浮かべ、アルムの方に近づきながらも一度口を開いた。

「うん、ぼく？　ぼくはビクティニって種族のフリートって言うんだ」

第四十話 新たな遭遇と炎の精霊と二人の正体と関係

見慣れない姿と聞き慣れない名前に困惑しつつも、アルム達はフリートと名乗ったビクティニを険しい表情のままで視界の中に捉えていた。しかし、それはテイルにおいては例外で、新しい出逢いに喜んでいるかのように笑顔で見つめている。

「ビクティニなんてポケモン、僕は知らないよ」

「俺だって知らないさ。こいつもテイルと同じ、珍しいポケモンって事か……？」

アルムとヴァローの二人が訝^{いぶか}しそうに口を揃えて凝視する一方で、シオンは一人考え込むように黙りこくっていた。

「ん……シオン、何か知ってるの？」

「え……ええ。王宮にあった本で見た気がするんだけど、確か体内で無限にエネルギーを生成する能力を持つとか」

「……この小さい奴がか？」

一拍置いてシオンが思い出したように呟くと、ヴァローは未だに疑うようにフリートを見つめながら疑問の声を上げる。それに反応するかのようには、フリートは不満げに頬を膨らませた。

「小さい奴とは失礼な。そのマリルの言う通りさ。ぼくはこれでも、“炎の精霊”としてここにいるんだからね」

フリートが自慢げにその小さな腕を組んで見せると同時に、アルム達の表情は一瞬にして警戒から驚愕のものへと変化していった。フリートの口から思わぬ単語が飛び出したからである。

「あ、もしかして、炎の精霊ってあの――」

「そうだよ。リップカタウンの祭典の時には、ぼくが町に行って儀式をするんだよ」

「そ、そうなんだ……」

精霊という事でもっとすごいものを期待していたアルムにとって、目の前にいる自分と同じくらいの背丈のポケモンがその正体なのだとはいわが俄には信じがたかった。その証拠に、一応軽く頷いてはいるものの、疑念が残っているかのように、まだ複雑そうな面持ちである。

「その顔は信じてないって顔だなー？ 確かに精霊ってのは霊的存在の事を言うし、もっとすごいものを想像してもおかしくないかもね。だけど、ここで君達を騙したって何の得も無いことも事実でしょ。それにそもそも“炎の精霊”の力を身に宿してるってだけなんだよ」

柔らかい微笑みも不満げな色もそこには既に無く、いつの間にかフリートは真剣な表情に変わっていた。これにはアルム達も、目の前にいるポケモン――炎の精霊と自称するビクティニに対する印象を変えざるを得なくなる。

「なるほどね。それじゃ、あなたが本当に炎の精霊だと言うなら、突然姿を消してしまったあなたが何故今になって私達の目の前に現れたの？」

本物なら確実に答えてくれるだろう——そう考えたシオンは、フリートが炎の精霊だと信用した上で浮かんだ大きな疑問をぶつけてみた。それを聞いたフリートは、その表情をやや曇らせてシオンの方を直視する。

「そう、実はぼくは、長い間眠り続けていたんだ。過去に起きたあの事以来、長い長い時間ね。だから、姿を現さなかったんじゃないかって、現せなかったんだ。こんなところで良いかな？」

「……フリートって言ったか？　もし良ければ、詳細を教えてくださいませんか？」

あっさりと説明し終えたフリートの目の前に、ちょうどシオンへの視線を遮るようにしてヴァローが姿を現した。フリートは突然目前に現れた事に一瞬目を丸くするが、すぐに冷静さを取り戻したように、ヴァローの方をじっと見据える。

「あのさ、君はもしかして……“バロウ”かな？」

「なっ……。いや、俺は“ヴァロー”だけど。一体俺と何の関係があるんだ？」

似ているようで微妙に発音の違う名前がフリートの口から飛び出し、ヴァローは動揺しながらも、平静を装って返した。しかし、偶然にしてはあまりにも出来過ぎている。それをわかっているヴァローは、結果として歯を食いしばらせるという行動で困惑している心の様子を示した。

「やっぱり年月が経ってるから、そんなはずはないよね……。とに

かくね、それも詳細に関わってくるんだ。君が別人なら良いんだけど、実は過去に町が襲われた時に滞在していたガーディの名前が“バロウ”って言うんだ」

構わず先を続けるフリートにも、ほんの一瞬苦しさのようなものが過ぎ^よった。おとなしく話を聴き入っているアルム達にもはつきりとわかるくらいに。

「たぶん町の住民からは、そのガーディ——バロウが狙われていたせいで、町も巻き添えを喰らう形で襲撃に遭った。そのように聞いたんじゃないかな？」

語りべであるチルット——ウォルクの話を思い出して、アルム達は肯定の意を示すように黙って頷いた。すると、フリートはおもむろに両の手の平に小さな炎を発生させ、手慰みのように、もしくは気を紛らすかのようにじっと見つめ始める。

「でもね、それは真実じゃない。本当に狙われてたのは、ぼくなんだ。そしてバロウは、ぼくを守る為に必死で戦ってくれたんだ。だけど、敵側としては後々にも町の住民を敵に回すのを良くは思わなかったんだろうね。町を壊滅^{たね}させた後で、襲撃の訳を改めて言い残して、町から反逆の因子^{たね}が現れないようにしたんだと思う」

アルムにはもう頷く事も、言の葉を発する事も出来なかった。話を聞いているだけで精一杯であり、反応する程の余裕が無かったのである。それだけ内容が衝撃的で、自分達とは別世界の話のようにさえ感じていた。

「で、でも、どうしてヴァローをそのガーディ——バロウだと思ったの？ それに、その襲撃の時にフリートは一体何をしていたの？」

受けた衝撃よりも好奇心の方が勝ったせいか、アルムは振り絞るようにして言葉を口に出した。声はやはり震えており、気分が下がっている時の合図のように耳も垂れ気味ではあるが、その無垢な眼差しは真っ直ぐフリートに向けられている。

「ぼくも全力で応戦したよ。でも、相手の力は強大で、ぼくとバロウだけでは力が及ばなかったんだ。だからぼくは精霊の力の一部をバロウに託して、しばらくの間休眠状態に入ってたわけ。まあ、それは置いといて、その授けた力の片鱗をそのヴァローってガーディから感じたの」

そう言っただけで背中がふわふわと浮遊しながらヴァローに近づくと、フリートは念じるように目を閉じた。その刹那、フリートの体を包むようにして淡い橙色の炎が現れる。しかし、揺らめきは炎のようでこそあれ、どちらかと言えば気の放出のようにも見える。

「おい、一体何を――」

事態が飲み込めずにフリートから離れようとした次の瞬間、フリートを包んでいた炎の一部がヴァローに移った。それと同時に、ヴァローも同じ炎に包まれる。

「ふう、やっぱり君はバロウと何か関係があるみたいだね。それは追いついて分かると思うけど、今はまだ分からないかもね」

フリートが目を開けて意識の集中を止めると、二人の周りの炎は霧散していった。そうして一息吐いたところで、フリートはヴァローから離れて元の位置に戻る。

一方で、身に覚えが無い事が勝手に運ぶのに対し、ヴァローは果然と立ち尽くしていた。もちろんもっと深くその事情に踏み込みたいとも思っていたのだが、今は静かに悠然と構える事にする。

「あの、質問ばかりで悪いんだけど、つい先日目覚めたのは何かきっかけがあつての事なの？」

「……ちよつと話してばかりで疲れちゃったからさ、別の場所に移動してからにしない？」

続いてシオンが矢継ぎ早に話し掛けると、フリートは思い切り伸びをして微笑を浮かべると、そのまま背を向けるようにして森のさらに奥へと飛んでいってしまった。それを追いかけるようにしてテイルも飛んでいった上、まだ全ての真相を聞いていないので、アルム達も仕方なく後を追う事にする。



フリートが移動するのを止めてアルム達も追いつくのに、動き始めてから幾何いくばくも無かった。辿り着いたのは、見渡す限り太い幹の木が生えているだけで、周りと同じく何の変哲もない地点である。

「アルム、感じるか？」

「うん、あれだけ何度も見たり感じたりしてれば、あまり敏感じゃない僕でも分かるよ」

目に見える以外に存在する何かを、視覚ではなく肌で感じていた。それはアルムやヴァローだけではないようで、シオンも神経を尖らせていた。

「へえ……鋭いんだね。たぶん君達の勘は正しいよ。ほら、あそこにある大きな岩を見てみて」

集中するのを一時中断してフリートの指差す方向に視線を向けると、その言う通りに楕円形の巨大な岩が“立っている”のが見えた。その地面に接している部分は大量の草花に覆われており、まるで植物たちがその岩を目指して根を伸ばしているようである。

「あの岩の中には、神聖な力を宿す水晶——フルスターリが隠れているんだよ」

「やっぱり、この心が安らぐような感じはそうだったんだ。そして、それがここにも……」

実物こそ見えないものの、岩の中を見透かすようなぼんやりとした目でアルムが眺めている一方で、フリートは岩の方へとゆっくり近づいていく。徐々にその距離が縮まるにつれて、接近に呼応するかのように岩が青白い光を放ち始め、光度が強くなっていく。そしてフリートが岩に辿り着いて手を触れる頃には、光源が岩だとは思えない程に輝いていた。

「あの戦いで力をほとんど失ったぼくは、ぼく自身が創りだしたこの“水晶の中”で長い間休んでいたんだ。たぶん、今日という日の

為にね」

相変わらず淡々とフリートは話していくが、次々と明かされていく真実と目まぐるしい展開に付いていけず、アルム達の頭はすっかり混乱していた。一応理解したように頷いてはいるものの、どこか自信なげである。

「とりあえず過去話はここまでっ。話を現在に戻そうか」

まだ眩い光を纏まばゆっている岩から手を離すと、フリートは自分の前で一回手拍子をしてアルム達の近くまで戻ってくる。今度はその手拍子を合図するように、岩から放たれていた光も、弾けて粒子のようになって静かに消えていった。

「さて、ぼくがさっき言った“今日の為”って言葉が気になるよね？」

フリートは不意ににっこりと笑って見せた。その笑顔は決してぎこちないものではない。それにも係わらず、アルムにはそれが逆に怖かった。これから話す内容について、少しでも気持ちを和らげる為にしているかのように。

「実はぼくが目覚めたのは、ちょうど七日前。そのジラーチくんが君達のところに現れたのと重なるんじゃないかな？」

悪戯な風がざわざわと木々を揺らして森を駆け抜けていく音が、嫌に大きく耳に反響してくる。一字一句聞き漏らさないように耳をそばだてていたという事もあったが、大きな理由はそれ以外にもあった。

「は、はい。確かにそうですけど、何故……それを？」

“好奇心”と“不安”。その両方がアルムの心の中でせめぎ合い始める。そのせいか、紡ぎだす言葉にもその色が濃く表れていた。

「そっか。まだ君達は知らないんだったね。そのジラーチくんの正体について」

緊張感が高まってきて全てが敏感になっているためか、アルムには自分がぐくりと唾を飲み込む音がはっきりと聞こえた。一方で、話題に上がっている当人のテイルはと言うと、我関せずとばかりに笑顔で木の実を取りに行ってはかじりついている。

そんなテイルを横目で一瞥だけしてすぐに視線をアルム達の方に戻すと、やや時間を置いて、フリートは深呼吸をして口を開いた。

「君達も疑問に思ってたそのジラーチくんの正体、それは実のところね――」

そうして、フリートが次の言葉を口にしようと思った瞬間だった。突如として、風の音を除いては静寂だった森に轟音が鳴り響いた。これにはフリートもさすがに話すのを中断して高く飛び上がり、状況把握の為に辺りを見渡し始める。

「あ、あれは……リプカタウンの方角だ！」

フリートが声を荒げて指差す方向に全員が一斉に顔を向けると、その町の様子こそ見えないものの、町の方から煙が立ち上っているのがアルム達にも見えた。それが先程の轟音の音源と同じ方向であるため、詳細が見えずとも、少なくとも灯明台に火を付けて燃やしているのではない事は火を見るよりも明らかである。

「まるであの時と同じ……でも、今回は過去と同じ失敗はしないよ！
ごめん。悪いけど、話はまた後でね！」

上空で拳を作って強く握り締めると、気合いを入れ直すように叫んだフリートは町の方に向かって飛んでいった。取り残された形になったアルム達は、しばらく呆然と立ち尽くすものの、決心したように互いに見合う。

「やっぱり僕達も町に行った方が良い……よね？」

「ああ。話を聞けなくなった以上は、町で起こっている異常な事態を調べに行く方が良いだろうからな」

「私も賛成。ここでじっとしてゐるくらいなら、状況把握に努めた方が利口なものね」

テイルについての真実よりも、今は町で起きたらしい出来事の方が心に懸かっていた。だからこそ、一番重要な部分を聞けなかった事に対するもどかしさを振り払うようにして、アルム達はフリートの後を追うべく、町の方へと全力で駆け出していった。

第四十一話 招かれざる客との対面―待ち受けるものたち―

不吉な煙が立ち上っている町を目指して、アルム達は森をひた走っていた。来た時のように通りやすい道を通っているのではなく、鬱蒼と茂っている中を掻き分けるようにして直線的に進んでいた。故に、いくら全力で走っても、フリートに追いつく気配はなかった。

「はあっ、フリート、もう、付いたかな？」

「さあな。とにかく急ぐしかないだろ」

息を切らしながら話し掛ける最中にも、風に乗って焦げたような臭いが流れてくる。鼻に付いて離れないその強い臭いが、余計にアルムの不安感を煽っていた。“あの時と同じ”というフリートの言葉が頭から離れなかったからである。

「それにしても、何で、突然町が……？」

「それは行ってみればわかるだろうな。あんまり喋っていると舌を噛むから、黙って走るぞ」

「う、うんっ」

苦しげなアルムとは正反対に、ヴァローは呼吸を乱す事なく至って落ち着いて走っていた。そんな彼に諭されるように軽く注意を促され、アルムは口を一文字に閉じて走る事に集中した。

ふと後ろを振り返ると、自分達の通った道をシオンとテイルが並んで付いてきているのが見えた。空を飛ぶテイルは何の苦もないよ

うなのに対し、シオンは些か走りづらそうにしている。いくら二人が踏み倒した後の道とは言え、やはり二足歩行では辛いものがあるようである。

「シオン、大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。もう丘は目の前だしね」

アルムが心配して声を掛けると、シオンは軽く笑みを浮かべてまだ余裕を見せる。それに安心して前に向き直ると、いつの間にか眼前は開けており、もうすぐで森を抜け出すところまで来ていた。

休憩する間もなく緑の迷路から抜け、一気に急斜面の丘を上りきる。そのてっぺんから見下ろす町の中心である広場からは、一筋の灰色の煙が空に向かって伸びていた。しかし、それ以外は町に変化は無かった。その一例として、あれだけの音が鳴ったにも関わらず、町のポケモン達の姿が見えない。

「よし、まずはあの煙の出ているところだな」

「お祭りでもやってるのかな？ とにかく、れつつごー！」

先頭に立って元気に声を張り上げるのは、事の深刻さなどまるでわかっていないテイルだった。あまりにも飄々とした態度に最初は呆然とするものの、アルム達は互いに顔を見合わせて思わず笑みを零してしまう。それによって緊張の糸が良い意味で切れたらしく、アルム達は先程よりは穏やかな気持ちで坂を降りていく。



相変わらず荒野のようで寂しい風が吹く町――リプカタウンにやつの事で戻ってきたが、やはり他のポケモンの気配は無い。町を出た時と同じ様に、ただ土や木で出来た家が点在しているのが見えるのみである。

「ねえ、本当にこの町で何かが起こってるのかな？」

あれだけの事が発生しているのにも関わらず、町全体は不気味なまでに静まり返っている。そんな光景を眺めて、アルムは不信感を抱かずにはいられなかった。眉を顰めてヴァローとシオンを交互に見つめると、二人も同じく現状に戸惑っているようであった。

「この町は本当にどうなってるんだ……。良くわからないな」

「町のポケモン達は気にせず、私達はするべき事をしましょ――」

とりあえず中心地に行けばわかるだろうと踏んで、疑念を抱きつつ殺風景な中を歩き出そうとした次の瞬間。唐突に耳を劈くような一つの金切り声が聞こえてきた。

「さあ、そなた。素直に白状するが良い！」

耳を澄まそうとせずとも、不快な程の甲高い声はアルム達の元にしつかりと届いていた。終始警戒しつつ発声主の方に近づいていっ

てみると、そこには地面に座り込んでいるウォルクと、マントを頭からすっぽり被っている何やら見慣れない姿があった。どこからどこまでが頭部なのかはわからないが、少なくともマントを被っている方がウォルクを見下ろす形となっている。

「ウォルク、一体どうしたんだ？ それと、フリート――ビクティニを知らないか？ それと、俺達の仲間のポリゴンも……」

「そ、それが、突然家が破壊されて……。フリート様は別の方に飛んでいったのがちらっとだけ見えたよ。君達の仲間のポリゴンは、悪いけど見てないね。僕が家に戻った時にはもういなかったから」

言われて見回してみると、確かにウォルクの背後には、元は家だったらしい大量の瓦礫が積み重なっていた。見るも無惨な有様に、アルム達も言葉を失っている。その出来事自体と、それに対して駆け付けるなどといった対応を一切示そうとしていない町のポケモンの態度に。

「ちょっと待った！ 我は親衛隊なるぞ。無視をするな！」

まるで眼中に無いかのような反応に耐え切れなくなったのか、マント姿の方が再度耳障りな声を上げて騒ぎ出した。関心を向けて欲しいとばかりに、同時にばたばたとマントの下で何かを激しく動かしている。

「そういえば、こいつは何者だ？ さっきから喚いてるみたいだが」

「こいつが攻撃を仕掛けてきて、僕の家を破壊したんだよ」

目の前のいかにも怪しい存在に対して邪険な態度を示していたヴ

アローも、ウォルクの言葉に耳を疑わざるを得なかった。フリートが追いかけていった奴ではなく、目の前のマント姿の奴が襲ったのか——と。

「えっ、この正体もわからない“もの”が？」

「こら、そのちっこい坊や。我をもの扱いするんじゃない！」

ぼつりとアルムが零した言葉に、マント姿の“もの”は過剰に反応して怒りをあらわにした。この怒鳴り声には、アルムも一瞬びくついて身を引いてしまう。そんなアルムを庇うようにしてシオンは一步前に踏み出し、怒ったような表情をマントの方に向ける。

「それじゃ、そんなマントなんか被ってないで、堂々と素顔を見せたらどうなのよ」

「いや、それはだな、このマントを脱ぐ訳には——って、何をするっ！」

中断して声を荒げた訳は、テイルが力づくでマントを引き剥がそうとしていたからである。それも、眩しいまでの笑顔を絶やさない状態で。

「顔を隠さないでーっ！　ねー、早く脱いでよ」

「や、止めろっ。我は素顔を見せるのが嫌なのだ。止めろと言うてるに！」

必死に抵抗を試みるも、強い好奇心を持った無邪気なテイルには敵わず、遂にはマントが体から離れていった。

そのマントの下に隠れていた正体は、胸の部分に付いている赤く光り輝く宝石やダイヤモンドのような目、尖った耳などが特徴的な紫色の細身のポケモン——ヤミラミであった。

「きいーっ！ 眩しい太陽の元は苦手だと言うのに！」

マントを脱がされて直射日光に曝されるようになってから、ヤミラミは急にあたふたし出して声をさらに張り上げる。暗いところからいきなり明るいところに出たせいもあるのか、頻りに手^{しき}で陽光から目を覆うようにしている。

「なあ、本当にあいつがこの家を壊したのか、疑問に思えてきたんだが……」

「僕も、この姿を見る限りでは同意見。だけど、一撃で僕の家をバラバラにしたのも事実だよ」

警戒は怠らないようにはしているものの、ヴァローには目前のポケモンが危険な存在だとは到底思えなかった。ウォルクが改めて事実を付け足してもそれは変わらず、半ば冷めたような目でヤミラミの事を見始める。

「ほう、我を馬鹿にするものがあるようだな。しかし、余裕でいられるのもそこまでだ。まずは小手調べとでも行こうか——」

先程まであんなに逆上しかけていたヤミラミが、ふと落ち着いた態度を見せた。いきなりの変化に背筋が凍るような感覚を覚えると同時に、直感的に何かを感じたヴァローは、四本の足全てに力を込めて身構える。

全員が固唾を飲んでヤミラミの動向を見守る中、事態はにわかになって起こった。ヤミラミは大きく両手を広げると、一番近くにいるウォルクに詰め寄った。やや遅れてウォルクも反応しようとするが、その間もなく眼前で両手を打たれ、思わず飛びのいてしまう。

「アルム！ ティルを連れて下がれっ！」

ヤミラミの先制攻撃——“ねこだまし”でウォルクが怯んでいるのを見て、危険を感じたヴァローがアルムに向かって大声を上げた。一瞬躊躇いを見せるものの、アルムはティルを誘導しながら、少し遠く離れた場所に移動する。

「別にお相手は君一人でも構わないけど？」

特に不測の事態という訳でもないようで、むしろヤミラミは不敵な笑みさえ浮かべている。怯んだ状態から立ち直ったウォルクがその場から離れても、気にしないようである。

「一人じゃないわよ。私がいる事も忘れないで」

直線距離ではヴァローよりも離れたところにいて、シオンは攻撃に移る為の姿勢は崩さないでいた。しかし、些かヤミラミの見せる余裕に不安を覚えて表情を曇らせる。

「はいはい、お嬢さんもまとめてお相手してあげるよ」

「いや、お前は俺一人で充分だ」

威嚇するようにして表情を強張らせると、ヴァローは一歩ずつ踏

み締めて近づいていく。その内心は、未知の相手に対する不安が渦巻いていた。対するヤミラミは、その威嚇に臆する事もなく、両手を胸の前で突き合わせる。その中心では黒い粒子が集合していき、徐々に一つの球体を形成していく。

「こんなのはいかがかな？」

不気味な声を上げると同時に、ヤミラミは両手を前に突き出して、大きくなった漆黒のエネルギー球——“シャドーボール”を放った。それは真っ直ぐヴァローへと向かって飛んでいく。

待ち受ける側のヴァローはと言うと、たじろぐ事なく深く息を吸い込むと、大口を開けて灼熱の火炎を吐き出した。赤々と燃え上がる炎と黒い球体とが真っ向からぶつかり合い、爆風と衝撃波が同時に発生して放射状に飛散する。

「くっ、ようやく相殺か……」

悔しそうに歯を食いしばりながら、ヴァローは技の衝突の様子を見つめていた。基本的な威力だけで言えば上回っているはずの“かえんほうしゃ”が純粹に力負けしたからである。

「突っ立ってる暇はあるのかい？」

爆煙のせいで相手が目視できずに待ち構える中、突如ヤミラミが煙を突っ切って姿を現した。一応覚悟は決めていたが、それでも多少なりとも動揺しており、ヴァローは一步後ろに退いてしまう。

それを見逃すはずもなく、ヤミラミは片手を振り上げ、攻撃の構えで急接近してきた。ヴァローは咄嗟の反応で身を翻し、ヤミラミ

が引つ掻こうとするのをかわす。

「こんなんでも終わりだとも思った？」

ヤミラミにとって一撃目を空振ったのは想定内らしく、体勢を立て直してもう一方の手を振り上げた。今度はその先に濃い紫色の光を纏っており、先程よりも素早く振り下ろす。思わぬ強襲を避けるのは難しく、脇に強い衝撃を喰らい、ヴァローは吹っ飛ばされてしまう。

走った痛み顔に顔を歪めつつ、ヴァローは何とか体勢を崩さずに耐え切って前を向いた。しかし、その時にはヤミラミは既に一度開いた距離をほとんど詰めていた。同時に、再度紫色の光を伴った鋭い爪――“シャドークロー”で攻撃を仕掛けようとしている。

それに応じる形として、ヴァローは一呼吸置かずして、口から煌々と燃え盛る炎を放った。だが、ヤミラミはその直線的な赤い放射物を跳躍でかわすと、そのまま爪を突き立てて突っ込んでいく。

「かかったな？」

続いてヴァローが見せた行動と言えば、にやりとほくそ笑んだ事だった。そして、空中で姿勢を変えられないヤミラミがその怪しい態度に疑問を感じたのは、ほんの一瞬だけ。気づいた時には、赤々と燃える炎を纏わせた鋭い牙が手に深々と食い込んでいた。ヴァローは攻撃を貰うピンチから、カウンターの要領で“ほのおのキバ”を使い、反撃に転じたのである。

「い、いた――熱いっ！ 離せえ！」

熱さと痛みが同時に襲い掛かり、ヤミラミは悶えるように叫んだ。それに正直に応えるかのように、ヴァローは一度振りかぶってヤミラミを空中に放り投げた。

「まとめて相手してくれるのよね——」

小声で呟いた後に、凝視しながら勢いのある細い水流を放ったのは、他でもないシオンだった。投げ飛ばされて空中を移動している標的目掛け、正確に“みずてっぽう”を狙い撃った。

「ふん、冷静さは失っていないぞ！」

ヤミラミは上手く体を捻らせつつ、両手の間に力を溜め始める。そして、自分に向かってくる攻撃の方に向き切った時、ある程度の大きさまで膨らんだ黒い塊を撃った。そのエネルギーの球体は、水流を押し退けつつシオンに迫っていく。

「シオン、気をつけろっ！」

ヴァローが叫ぶと同時に、自分が攻撃を受ける側が変わってしまった事をシオンは瞬時に悟った。だからこそ、無駄な攻撃は解除し、着弾寸前に後ろに向かって跳び、“シャドーボール”の直撃を逃れた。爆風に少し押し流されるものの、受けたダメージは無い。

「ふう、随分と手荒い真似をしてくれる。さすがに一瞬慌ててしまったではないか」

不安定な体勢から余裕を持って軽やかに着地を決めると、ヤミラミは噛み付かれた方の手を軽く数回振った。その上で、睨みつけるでもなく、ヴァロー達の方に向き直る。

「ほのおのキバ」があまり効いてない、のか？」

片手に攻撃しただけとは言え、それでも技は完全に決まっていた。それなのに、ヤミラミはそれ程ダメージを負ったようには見えず、ヴァローはその事に対して不満な様子を覗かせている。

「ま、痛いのに変わりはないが、支障を来すまでではないというわけだぞ。それに、戦う必要はもう無くなった訳だから」

「戦う必要は無くなった？　まだ俺達を目の前にして、何を言ってるんだ？」

明らかに攻撃を仕掛けてくる素振りもなく、ヤミラミは警戒の姿勢を解いてその場に突っ立っている。それとは正反対に目を離さないようにしながら、ヴァローは思うままを言葉にして投げ掛けた。すると、ヤミラミは突然鼻で笑うと、食い込んだ牙の跡が残る方の手で、離れた場所でおとなしくしているテイルを指差した。

「そいつの現在地さえ確認出来れば、ここに来た我々の仕事はほぼ終わったも同然だから――」

第四十二話 白熱する戦闘く想いと力と“壁”とく

ヤミラミがティルをじつと鋭い眼差しで見つめているのに対し、アルム達は押し黙っているしかなかった。ヤミラミが言い放った言葉を上手く受け止める事が出来ないでいたからである。

「は？ ティルの現在地を確認するって、それは一体どういう見で——」

「おや、君達はそのジラーチがどんな存在なのか知らないのですか？」

ヴァローの言葉を途中で遮るようにして、ヤミラミは意地悪そうに薄笑いを浮かべた。戦いとは直接的に関係無いとは言え、立場上不利に立たされたくないとは思っていた。しかし、知らないのは事実であり、ぐうの音も出ないまま小さく頷いた。

「まっ、これは我々の事だから、君達には関係無い事だがね。それじゃ、我もこの辺で——」

「いいや、このまま行かせはしない。どういう事か、きちんと教えてもらおうぞっ！」

真実を知る存在を見す見す逃すつもりは無いらしく、ヴァローは猛々しい声を上げる。そうして交戦の意志を示すと同時に、口から真っ赤な炎を吹き出した。

「全く、喧嘩っ早い方だこと……。嫌いじゃないがね」

繰り出される速攻に対し、慌てる事なく泰然として構えているヤミラミは、迎撃の為に掌を合わせた。間で再び小さな黒い球が集合していき、ヤミラミの胴と同じくらいの体積の塊が形成される。エネルギーが安定して形を保ったところで、一気に球体を撃ちだした。

ヤミラミの狙い通り、伸びてきた燃え盛る炎と黒い球体は激突し、相殺して砂煙を撒き散らす。互いの姿を隠すようにして煙の壁が現れると同時に、ヤミラミはその中に飛び込んでいった。先程と同じ戦法で攻めるつもりである。

「今度こそもらった——」

分厚い煙の層を突き破って姿を現した時、ヤミラミは途中で絶句しながら、振り上げていた手をその状態で止めた。何故なら、目の前にいるはずの敵の姿が忽然と消えていたからであった。

「二度も同じ手を食うかつ！」

不意に声が聞こえてきたのは、ヤミラミの背後——煙の中からだった。ヤミラミも急いで振り返ろうとするが、一歩間に合わなかった。煙の中から飛び出てきた、炎を全身に纏まとった“もの”を回避出来ず、横っ腹に直撃を喰らって突き飛ばされる。

「ぐっ……今のは効いたぞ」

受けた衝撃によって後退させられつつ、ヤミラミは両足を地面を擦るようにして倒れないように踏み止まった。それでも、小声で呟いたようにダメージはあるらしく、脇腹を押さえながら膝を着く。

「今のは急所にでも入ったか？」

「ふん、不意打ちの“かえんぐるま”を喰らわせたくらいで、良い気になるなよ」

めらめらと燃え上がる炎を纏いながら、ヴァローは得意げに笑ってみせる。それに対し、ヤミラミは忌ま忌ましそうにヴァローを見据えつつ、ゆっくりと立ち上がる。

体を完全に起こし終えると、ヤミラミは両手を胸に押し当て、何かを解放するかのように一気に手を左右に広げた。その手の軌跡からは次々と光り輝く小さな石が出現し、空中に浮かんだ状態で留まる。

「私の好きな宝石による攻撃、とくと味わいたまえ」

ヤミラミが広げた腕を交差させると、浮かぶ宝石達は弾丸のように高速で撃ちだされた。全てがヴァロー目掛けてではなく、浮いていた時の位置そのままに、放射状に飛んでいく。

「それなら、こっちの炎も味わえ！」

ヤミラミの攻撃に応じるようにして、ヴァローもすかさず“かえんほうしゃ”による反撃に転じた。一直線に飛んでいく凄まじい炎は、宝石の弾丸——“パワージェム”と衝突するかに見えた。しかし、互いが接した刹那、宝石達は炎を貫くようにして突き進んでいく。

「ははっ、そんなもので止められるとでも——」

極太の炎の柱をいとも簡単に突き破った事をヤミラミが鼻に掛け

ようとした時、勢いが衰える事なく向かってくる炎が視界に飛び込んできた。緊急回避の為に左に走り出すが、全てをかわしきれずに炎の一部が腕を掠め、うめき声を上げて地面に座り込む。

一方で、依然として三つの宝石に狙われているにも関わらず、ヴァローは危機など感じてないように悠然と構えていた。そして“パワージェム”が眼前まで迫った瞬間、大きく口を開け、宝石を食べるかのように待ち構える。口の中に入ると同時に、今度は牙を立てて口を素早く閉じた。

「ぺっ、さすがに“かみくだく”事は出来なかったか」

残念そうにぼやきながら、ヴァローは口の中から何かを勢いよく吐き出した。地面に落ちた際に確認すると、それはヴァローを狙い撃たんとしていた“パワージェム”の宝石の一部だった。

「まさか、炎で相殺するのが目的ではなく、最初から打ち破られるのを想定していたのか？　そしてそのまま“かえんほうしゃ”で我を攻撃しようとしつつ、自らは直接真っ向からぶつかり合うとは……」

「ま、上手く行く保証は無かったけどな。おかげでちよっと牙が欠けたが、それでも上出来だ」

炎が掠めた腕を押さえつつ立ち上がるヤミラミに対し、ヴァローは軽く笑って見せる。作戦が上手く行った事に対する安堵の表情でもあった。それを受けて、ヤミラミも悔しがるのかと思いきや、むしろ満悦といった面持ちであった。

「おい、何がおかしいんだ」

「いやな、君一人を狙う為だけにあの技を放ったとも思うのか？」

ニヤニヤと不気味に笑い続けているのを不審に思いつつ、ヴァロ―は慌てて後ろを振り返った。そこに見えたのは、尻尾の細い部分を掴みながら呼吸を荒くしているシオンの姿と、その前方の地面にいくつかの輝く宝石が埋まっている光景だった。

「シオン！ 大丈夫かっ！」

「え、ええ。何とか“アクアテール”で防いだから――」

「――ヴァロー、前を見てっ！」

遠くから聞こえてきたアルムの叫び声に反応して急いで向き直ると、ヤミラミが走って向かってきていた。しかし、既にある程度のダメージを与えているせい、その動きもどこか遅い。

「ちっ、あそここのちっこい坊やまでは届かなかったみたい……」

軽く舌打ちをしながら、ヤミラミは両手に力を集中し始める。黒い粒子の集合体が手の平サイズの大きさまで膨張したところで、今度はそれを地面に向けて放った。爆発音と地面が抉られる音がすると、間もなく視界を遮るかの如く大量の砂が突風とともに吹き付けてくる。

「くっ、目暗ましか……」

これには目を閉じるしかなく、何も対応出来ない事に対する悔しさに歯を食いしばりながら、ヴァローは土煙が晴れるのを待つ。否、

正確には攻撃が来るのを待ち構えていた。

「攻撃が来ない？ 何故——」

しかし、いつまで経ってもそれらしい物は来なかった。怪しく感じて思い切って煙を突っ切って晴れたところに出ると、そこにヤミラミの姿は無い。辺りを見渡すと、遠くにいるイーブイ——アルムの方に急速に接近している影が見える。

「くそっ、最初からアルムを狙うつもりだったのか……！」

ようやく目的に気づいたヴァローも全力で駆け出すが、とてもではないが追いつけなかった。そうして走っている間にも、ヤミラミは徐々にアルムに近づいていく。

一方で、怪しい影が迫ってくるにも関わらず、アルムは足が^{すく}竦んでその場を動けずにいた。幸いと言えるかはわからないが、少なくともそれより前にテイルは別の場所に避難させていたため、アルム一人であった。

「ここまでやられて、おめおめと帰るのも何だからな。のうのうとしてるお前にも、恐怖を味わわせてやろう」

「あ、えっ……」

自分が狙われているという恐怖から、アルムはただ呆然と立ち尽くすしか出来ないでいた。安全なところから戦いの行く末を見守っていたのから一転、いきなり標的にされ、その表情は不安から強張っていた。どちらかと言えば、今にも迫りくる恐怖から泣き出してしまいそうである。

「さあ、お仕置きを喰らうが良い――」

アルムの目の前に辿り着いたヤミラミが手を振り上げるのと同様に、ヴァローが二人の元まで追いついてきた。全力疾走のため、息を整えるのに苦労していたが、それでも口の中に高熱の炎を蓄え始める。

「――なんてな。引っ掛かったな」

ふとヤミラミがその顔に笑みを零したのが見えた。しかし、表情の変化を捉えたのもつかの間、速やかに体を捻らせてヴァローの方に振り向き、ヤミラミはアルムから視線を逸らす。そこから振り上げた紫色の光を纏った手を勢いよく下ろした先は、自分の背後にいた――今は目の前にいるヴァローだった。

「ぐあっ……」

急襲に上手く対応出来ず、ヴァローはヤミラミの鋭い爪による攻撃によって大きく突き飛ばされた。地面に擦られるようにして飛ばされながらも、止まったところで何とか足に力を込めて立ち上がる。

「アルムも、囷だったのか。本当の目的は、“だましうち”を決める事か」

「ご名答。仲間想いの君なら、最初に戦線から離脱させたあの坊やを絶対に助けに行くだろうと思ったからね。まさか、ここまで上手く行くとは思わなかったが」

現状に満足しているらしく、ヤミラミは口元を緩ませている。そんな態度のヤミラミをヴァローは眼光鋭く睨みつけるものの、肩で

息をしており、その威勢は少し衰えているようにも見える。

その少し離れたところでは、アルムが悔しさと哀しさが入り混じった面持ちで見つめていた。助けになれないまでも、邪魔にはならないでいよう——そう思って離れた位置にいたのに、結局は自分が不甲斐ないせいで迷惑を掛けたからであつた。

もっと助けになりたいと思う一方で、なるべく迷惑にならないようにおとなしくしていようとも思っており、アルムはアルムなりに葛藤していた。それに伴い、リーブタウンでレイルに庇ってもらった事を思い出し、同じ失敗を犯していたという事実にも苛まれる。その上で口元を強く結びながら、アルムは混在する想いと戦っていた。

「さてと、長かったお遊びもここまでだ。少しの間、眠ってもらおうか」

すかさず手を突き合わせ、ヤミラムは“シャドーボール”を組成する構えに入った。見る見る内に球は大きくなり、今まで撃ちだしていたのと同じ大きさにまでなる。

既に体力が大幅に減っていたヴァローには、相殺の為の技を繰り出す事も、ぎりぎりまで引き付けてかわす事も出来そうに無かつた。未だに呼吸が整っていないのも、その証拠だつた。

この危機的状況下に直面し、アルムの心臓の鼓動が一層強くなった。責任感から来る焦りと、ヴァローの身を案じる不安からであつた。目には大粒の光り輝く涙が溜まっており、焦れたい気持ちを顔いっぱいに表示している。

——誰かとともに戦えなくてもいい。自分の身を自分でちゃん

と護れる力が――そして、大事なひとを護れる力が僕にあれば!――

溢れ出しそうになる涙を必死に堪えながら目を閉じて、アルムは心の中で強く願った。これ以上は無いというくらい^{まぶた}瞼をきつく閉じ、まるで念じるようにして。

すると、その強い想いに応じるかのように、首から下げているオカリナが眩い光^{まばゆ}を放ち始めた。それは今まで発していたように蒼いものでありながら、その光度はまるで別物である。

「何だか知らないが……さっさと片付けさせてもらうぞ!」

背後にて起きている異変に気づいたヤミラミは、半ば焦るようにして黒いエネルギー球を放った。確実にヴァローを仕留めるべく真っ直ぐ進んでいき、速いスピードで迫っていく。

「僕は――ヴァローを護りたいっ!」

アルムが抱く想いを言の葉に変えて口に出した瞬間、オカリナが放つ光が弱まると同時に、ヴァローの周りを優しい蒼い光の薄い層が包んだ。それは球状に広がっており、一つの壁^{バリアー}がヴァローを囲んでいるようである。

「な、何だ、あれは!」

目を見開いてヤミラミが驚きの声を上げる中、そのヤミラミが放った“シャドーボール”が蒼い光の層へと突っ込んでいった。その衝突の反動で衝撃が周囲に走ると、押す力と受け止める力が均衡し、漆黒の球体は層に接した状態で宙で静止する。

「これは、一体？」

自分を護るようにして突然発現した謎の壁に、中にいるヴァローも不思議そうに首を傾げる。その目の前では、徐々に変動が起こり始めた。蒼い球状のバリアーに接触して拮抗していた“シャドーボール”が、保っていた球体の形を崩していき、遂には霧散して消滅してしまう。それに続いて、役目を終えたように光のバリアーは薄れていき、ヴァローの周囲から消失する。

「何だ、その“まもる”とは違う壁は！？」

自分の技が防がれた事に啞然としながら、ヤミラミは張り裂けそうな声を上げた。動揺の色を隠しきれないようである。しかし、それは他の全員も同じようで、特にアルムはぼうっとして呆氣に取られていた。

「これは思わぬ誤算だな……。とりあえず、目的は果たした以上、足止めを食う訳にはいかない」

一時は声を荒げながらも、冷静さを取り戻して意を決したヤミラミは、アルム達に背を向けて逃走を図った。休んでいる間に体力を回復させていたヴァローが追撃の火炎を真つすぐ放出するが、距離が離れていたヤミラミには遠く及ばなかった。

「くそっ、逃げられたか」

「あっ。ヴァロー、大丈夫？」

ヤミラミが姿を消して、アルムはようやく我に返った。気を引き締めるかのように数回瞬きを繰り返すと、苦虫を噛みつぶしたよう

な表情を浮かべるヴァローに気づいて心配そうに駆け寄っていく。

「ああ、俺は大丈夫だ。それより、お前は一体どうしたんだ？」

「えっ、僕？　それが、自分でも良くわからないんだ。……そんな事より、ヴァロー、ごめんなさい。僕が臆病で何も出来なかったせいで、受けるはずの無かった攻撃を受ける事になって——」

「——そっか。細かい事はまた後で考えてみよう。それとな、お前が謝る事ないさ。だから、そんな哀しそうな顔はするなよな」

先程の自分の意気地の無さを思い出し、アルムはすっかり元気を無くして俯いていた。またしても悔しさから涙を堪えており、必死に口を閉じて泣くまいとしている。そんな悲しみの色を浮かべているアルムの頭を、ヴァローは柔和な笑みを見せてそっと片足で撫でた。

「で、でもさ、僕のせいで——」

「自分を責めなくて良いんだっての。俺はやりたい事をやっただけだから。それに、何が起こったかはわからないけど、あの時“シャドーボール”から俺を守ってくれたのは間違いなくお前が関係してるんだ。感謝してるよ」

“感謝してる”——この暖かい言葉が心地よく耳に入っていく、意味を理解すると同時にうなだれていた顔を上げると、ヴァローの顔を視界に捉える。アルムは安堵のあまり、自然と顔が綻んでいくのを感じた。

「さ、悲しげな顔はそこまでだな。今はとにかくヤミラミを追いか

けよう。フリートを捜さないといけないしな」

「うんっ！ それじゃ、早く行こうっ！」

アルムから既に暗い表情は取り払われていた。状況は好転したとは言いが、それでも褒められて純粹に嬉しかったからである。それが例え自分の功績じゃなくても、自分ではわからない事でも、今は悔恨が消えて心が落ち着いていた。

そうして晴れ晴れとした表情のままヴァローの言葉に強く頷くと、アルムは離れた場所にいたシオンやテイルと合流し、四人揃ってヤマミラの走り去った方向へ駆け出すのであった。

第四十三話 対峙する不気味な者ゝ炎を司る者の激闘ゝ

アルム達とヤミラミが対峙していた時点から、少し時間は遡る。単身でリプカタウンへと引き返していたビクティニー―フリートは、その小さい体で風を切るように速い飛行速度を保って向かっていたため、アルム達との距離をどんどん離れていた。

眼下に見える青々と茂っている緑の絨毯を軽く飛び越えると、今度は淡い黄緑色の若草の敷かれた丘をも越え、遂には焦げ茶色の大地まで辿り着いた。町まで戻ってきたところで、フリートは速度を緩めながら下降していき、低空飛行へと移る。

異変を感じたきっかけである、盛んに立ち上っている灰色の煙が間近に見えたところで、フリートは空中で停止した。警戒するよう^{しき}に頻りに周囲を見渡して確認した後で、静かに目を閉じてゆっくりと息を吸い込む。

「うん、あそこよりも、こっちの方がもっと大きな力を感じる」

精神統一を終えて小声で呟くと、フリートは煙の上がっている方から左の方へ視線を移した。円らで愛らしい瞳も細くなり、顔つきも全体的に険しいものとなっている。

それに続いて覚悟を決めたように深呼吸をすると、背中の小さな白い羽を目一杯広げ、目的地に向かって再び飛び始めた。

なるべく気配を消す為に、そろそろと移動を続けていたフリート

だったが、町の中心まで近づいてきたところでふと動きを止めた。今度は真っ直ぐ地上に降り立ち、家の影に隠れるようにして歩みを進めていく。

より強く感じられるようになる力に緊張しつつ、息を殺しながらその発信源に徐々に近づいていた。時々その大きな耳を立てて音にも注意しつつ、ひんやりと冷たい土の壁に手を押し当てて歩き続け、家の壁に張り付きながら町の広場の方を覗き込む。

「あつ、あれは――」

ある一つの姿を遠くに捉え、フリートは息を呑んだ。その目に映っていたのは、濃い紫色の丸に近い――例えるなら寸胴な体をしており、怪しく赤く光る鋭い目と剥き出しになつてゐる歯が目立つ、ゲンガーという種族であつた。気味の悪い笑みを浮かべながら――とは言え、元から不気味な外見ではあるが――広場を徘徊している。

「あんなポケモン、この町にはいなかったはず。という事は、あいつが襲撃者かな」

目を凝らしてゲンガーを見据えつつ、フリートはさらに接近するべく、小さい歩幅で家の影から身を出していく。うろついているゲンガーにはまだ気づかれていないらしく、油断はしないようにしながらも、監視を続ける。

じつと見続けている中で、ゲンガーは一軒の家の壁に手を添えた。すると、ゲンガーの体は壁を摺り抜け、家の中へと入っていつてしまふ。その直後、一瞬だけ静かな空気を破るような絶叫が聞こえると、再び何事も無かつたかのように、ゲンガーは壁を通り抜けて外に姿を現した。

「い、一体何をして――！」

少なくとも、家の中のポケモンに何か良からぬ事態が起きているのは間違いないかった。その安否を確認しようとフリートが身を乗り出そうとした時、不運にもフリートが隠れている家に目を付けたゲンガーが歩み寄ってきた。下手に動いてはまずいと思い、ゲンガーが家の中に侵入するまで息を殺して壁に張り付き続ける。

そして、自分が何もしないせいで中のポケモンが何かしらの被害に遭っている事に自責の念を感じつつ、そろそろと動いて移動を試みる。仲間がいる事も想定し、家から視線を少しずらして他の方を見遣った時だった。

「おや、君が有名な精霊くんかい？」

周りには他に連れがいない事を確認してほっとしたのもつかの間。不意に背後から聞こえてきたねっとりとした粘りのある低い声に、フリートは背筋が凍りついた。衝撃のあまり、振り返る事も出来ず、表情も身体も固まってしまう。

「油断はいけないねえ」

不快な声が耳に届くと同時にひんやりと冷たい物が体に触れた瞬間、フリートは反射的に振り向きつつその場を離れた。そこにいたのは、さっき家に入っただけのゲンガー。つまりは、一瞬だけ目を離れた隙に近づいてきたという事になる。

「い、一体あなたは何者なの？」

「おれっちかい？ おれっちはただ、この辺に来たらしいジラーチの行方を追ってきただけだ。後は、ちよっくらご挨拶をな」

伸ばしていた手を引っ込めると、ゲンガーは忍び笑いをした。剥き出しになっている歯が、浮かべている笑みのおぞましさをますます増幅させている。それ故に、口調はへらへらしているにも関わらず、言いようない不吉な感じを漂わせていた。

「ジラーチ？ そんなポケモン、ぼくは知らないよ。それより、とっとこの町から出ていけっ！」

未だに得体が知れない相手に戸惑うものの、フリートは強気な姿勢を崩さなかった。その上で、ジラーチ（テイル）の事を知っていても、怪しい相手に突き出す訳には行かないと思い、今は隠そうと努める。

「おやあ、せっかくこの町を平穏な状態に保てるように取引を持ち掛けてるのに。この付近にジラーチが来ている事は知ってるのだよ。さあ、おとなしく引き渡すんだ」

「例え何があろうと、あなたと取引なんかするつもりは無いし、この町は絶対に守るからね！」

脅しには屈しないとばかりに、フリートは一層声を張り上げた。すると、今までニヤニヤと不気味な笑みを浮かべていたゲンガーの表情が引き變った形になる。

「そうかい。人が下手に出てると言うのに……。交渉は決裂だ。力づくで居場所を吐かせる事にしよう」

口元の変化に伴い、怪しさを醸し出していた眼光が急に鋭くなった。それに対し、雰囲気さがらりと変わった事で、フリートも気を引き締めて身構える。不意打ちにも気をつけつつ、さらに後ろに下がって距離を取る。

相手の行動に注意を払うために互いに見つめ合う中で、先に動き出したのはゲンガーの方だった。全く構えていない状態はそのままに、その特徴的な赤い目から黒い光線を放ってきた。その二筋の怪光線は小刻みにジグザグな軌道を取り、フリートに目掛けて迫っていく。

それに対し、フリートは冷静に両手を前に突き出した。閉じた状態の手を軽く開くと、指先まで青白い光を纏うと共に、その光が正面から向かってくる黒色の光線を包み込んだ。次の瞬間、二つの光束はフリートに直撃する事なく、それぞれ軌道を変えてフリートの脇を通り過ぎる。

「小手調べの“ナイトヘッド”とは言え、それなりに自信があったんだけどねえ。“ねんりき”で軌道を逸らすとは」

その発言とは裏腹に、ゲンガーは両手を縦に軽く振っており、悔しさなど微塵も感じさせない素振りを見せている。

「恐ろしい幻を見せる技——“ナイトヘッド”でしょ。そのくらいで倒せるとでも思うの？」

相変わらず読めない相手の出方を伺う為に、フリートはあえて威圧的に出た。その態度をさらに明確なものにするかのように、次はフリートから攻撃を仕掛ける。両手に揺らめく炎を宿らせると、手を合わせて一つに合体させ、ゲンガーに向けて解き放った。その手

よりも一回り大きいサイズの凝縮された橙色の炎は、細かい火の粉^{ほとばし}を迸らせながら一直線に飛んでいく。

その攻撃対象となっているゲンガーは、表情を崩さずに炎を見据えつつ、両手を胸部の辺りで合わせ、炎に向けて突き出すように構える。照準を合わせるようにして向けられた手の平の中では、突如生まれた小さな黒球が密集していき、大きな高密度のエネルギー球が作り出された。完成の後に、砲弾のように一気に球を撃ち出す。

技を相殺する為に後攻で出された“シャドーボール”は、高速で炎に向かってまっしぐらに進んでいく。しかし、正面から技が衝突しようとした瞬間だった。

「今だ。炎よ、弾けてっ！」

羽を使って空中に飛び上がりつつ、フリートが結んでいた手を開いた。それに同調するかのごとく、大きな一つの炎の塊がばらばらに弾け、それぞれが黒いエネルギー球を避けてゲンガーに迫っていく。

フリートのいた場所を“シャドーボール”が通り抜けるとほぼ同時に、分裂した火の球がゲンガーの元に着弾して爆発が起こる。煙のせいでゲンガーの姿が目視出来なくなるものの、警戒の体勢は解かないまま注視し続ける。

「さあ、どうだろ——」

煙が徐々に広がっていき、爆発音の余韻が残る空間に漂っていたフリートは、もう一度手に炎を宿らせて待機する。その際に出た言葉^葉を切ったのは、即座に感じ取った些細な変化だった。ほんの一瞬、

煙の一部が揺らぎ、地面に映る自分の影が膨らんだという変化を。

「おっと、またしても油断はいけないなあ」

真下から届いた全身を突き刺すような声色に、フリートは身の毛がよだった。神経を一層尖らせ、構えたまま俯くと、夜の闇を封じ込めたような漆黒の球体が急速に接近するのが見えた。羽を素早く羽ばたかせて何とか身を翻すが、攻撃は体を掠めて飛んでいく。直撃は避けたものの、急な回避でバランスを崩してゲンガーを視界から外してしまう。

「まだまだ行くぞお」

すかさず二撃目を放つべく、ゲンガーは再度手を突き合わせてフリートに向ける。そこからは“シャドーボール”とは違う渦巻く黒いエネルギーの塊が生まれる。

直後、突き合わせていた手を伸ばし、押し出すようにして塊を突いた。ゲンガーの手が触れた瞬間に塊は弾けるように分裂し、放射状になって宙を走っていく。

「このっ、負けないよっ！」

濃い紫色の薄い衣を纏って広がりつつ、迫りくる黒いエネルギー波——“あくのはどう”に向け、フリートは手に溜め込んだ炎塊を放った。燃え立つその炎は、先程と同じように散り散りになると、襲い掛かってくる複数の黒い弾を迎撃していく。その際に発生した爆発により吹き飛ばされるものの、ダメージは受けた様子もなく、フリートは空中で体勢を立て直す。

「ふむ、まさしく“はじけるほのお”だねえ。使い方が上手いのは、

やはり精霊だからこそ、と言ったところか」

技を見て冷静に分析しているゲンガーは、まるで戦いを楽しんでいるようである。フリートが上空で両手を突き出して身構えていても、手を下ろして構えを解いている。

「一つ聞かせて。ジラーチがここにいるとして、どうしてそれがわかったの？」

攻撃が来る事を危惧しつつ、フリートは抱いていた素朴な疑問を投げ掛けた。対して、ゲンガーはその質問が来る事がわかっていたらしく、悠々と腕組みをして語り始める。

「それは簡単な話。あんなに巨大な彗星から流れ星が落ちるのに気づけば、誰も気にしない奴なんていない。まあ、おれっち達の仲間の中で、力を感じ取るのが得意な奴がいたからこそわかったって話だ」

「それで、その仲間と言うのは？」

聞ける事は聞いておこうと思い、フリートは突き出していた両手を引っ込めて続けざまに問い掛ける。しかし、その思惑通りには行かなかった。ゲンガーは微笑を浮かべながら、やれやれと呟いてフリートを見据える。

「誘導尋問みたいな事をしておれっち達の事を聞き出そうとしたって、そうはいかないなあ。話はここまで。早速続けようか」

ゲンガーは下ろしていた手を胴の辺りまで挙げて、戦闘体勢を取った。緊張感が一瞬にして二人の間を駆け抜け、フリートも気を引

き締め直す。それと同時に、主導権を握られまいと、全身に炎の衣を纏って威嚇する。

「はいはい、それでどうするつもりかな？」

火だるま状態となっているフリートを見つめながら、挑発的に拳を作ってゲンガーは構えた。その身振りからは、心なしか余裕すらも感じられる。

「どうするって——こうするんだ！」

フリートが自らに気合いを入れるかの如く大きな声を上げると、それに呼応して全身を包んでいる真っ赤な火の勢いは更に増した。先程よりも一回り火力が強くなったのを確認すると、ゲンガーに向かって急降下していく。

「ふん、無駄な攻撃を」

フリートが一直線に降下してくるのを受けて、ゲンガーは握り締めていた片方の拳を力強く突き出した。すると、拳圧が生じるとともに、その拳を止めた先から同じ“もの”が飛び出す。

ゲンガーの握り拳から生まれた影による拳——“シャドーパンチ”は、向かってくるフリートを殴りつけるべく突き進んでいく。

「こんな、ものっ……！」

自分に向かって飛んでくる拳に対し、フリートは怯む事なく迎え撃たんとする。真正面からの物体に備えようとして、腕を前に出して顔を庇うようにした次の瞬間、全身を炎の鎧——“ニトロチャージ”で固めたフリートと影の拳がぶつかり合う。

技の衝突はすぐに決着が着いた。短くて乾いたような軽い衝撃音が響くのと時を同じくして、拳は易々と弾かれる。そのままフリートは勢いを殺す事なく、標的に向けて降下を続ける。

「ふふっ、こんなの避けてしまえば――」

白い歯を見せて不敵な笑みを浮かべつつ、ゲンガーは余裕を持って後退する。しかし、その表情は一瞬にして驚愕の色に移り変わった。真下に向かっていたフリートが直角に方向転換して、不意を突くようにしてゲンガーに体当たりを噛ました。もろに攻撃を受けたゲンガーは、呻き声を上げながら後ろに飛ばされる。

「さあ、今度こそ効いたでしょう」

フリートは攻撃を終えて一息吐くと、何かを振り解くような仕種をして、纏わせていた炎の衣を解き放つ。その視線の先にはゲンガーが倒れており、攻撃をまともに喰らったのは間違いないかった。フリートの声にも少し自信が窺える。

「これは中々効いたなあ。だが、おれっちを倒すには、ちょーっとばかり威力が足りないな」

ほっと出来たのは、ほんの僅かな間だった。睨むような目をする一方で薄笑いを浮かべつつ、ゲンガーはゆらりとその場に立ち上がる。

「それでも、熱いのに変わりはない。ほんの挨拶のつもりだったが――それなりの代償を払ってもらおうか」

瞬間的にゲンガーは憤怒の形相に変わった。その一方では、もう一度追い撃ちを掛ける為に、フリートは両手に渦巻く赤々とした烈火を備える。

雰囲気の一変したゲンガーがその足を一步踏み出した時、フリートが反応して動いた。両手に発生させた炎の塊を前に撃ちだす。今度は一つに纏めずに、二つに分離させた状態で。

「さあ、さつきよりも数は多いよ。これをどう捌くつもり？」

心にある一抹の不安に悟られぬように、フリートは威勢よく振る舞う事にした。強い思いを込めるようにして閉じていた両手を目一杯開くと、弾けて先程よりも倍の数になった火球がゲンガーに襲い掛かっていく。

落ち着いて待ち受けていたゲンガーも、炎が二人の中間辺りまで来たところで、両手を前に出す。先刻と同じ黒いエネルギーの球体——“シャドーボール”が形作られていく。しかし、それは通常の規模よりも何倍も大きな物へと肥大し、ゲンガーの身長よりも巨大な物になる。

「それは盾のつもり？ そんな事したって、ぼくには関係ないよっ」

手先に力を込めると、フリートの両手からは青白い光が放出される。それが同じく宙を飛び交う炎の弾を包み込むと、まるで意志を持ったかのように、炎は不規則な軌道を描いて飛び始める。全ては“ねんりき”の効果であった。

宙を自由自在に舞う小さな烈火は、漆黒の球を避けるようにして飛ぶと、一斉にゲンガーに向かっていく。状況を把握しても、ゲン

ガーは全く動じる様子は見られない。

「その程度で、対策を施したつもりかね？」

今度はその表情に笑みさえも零さなかった。冷たく言い放つと同時に、ゲンガーは自らが作った攻撃用のエネルギー球により接近していく。すると、ゲンガーの体は何事も無いかのように球体をすり抜け、そのまま中に収まる形となった。

「そんな、ありえない……！」

目の前の光景に困惑しつつも、フリートは攻撃の手を緩めようとはしなかった。不思議な光を纏いし真っ赤な炎を意のままに操り、全方向から一斉に攻撃を仕掛ける。あらゆる方向から一度に畳み掛けられ、撃ち破れるのではないか——そう考えたからこそその決断であった。

しかし、その期待は脆くも崩れ去る事となる。通常以上に膨張した黒のエネルギーの球は、炎の連撃を受けても、破裂したり弾けたりする事もなく、びくともしなかった。せいぜい体積が小さくなっただけである。

「次は、君がおれっちの攻撃を喰らう番だ」

滞在していた“シャドーボール”の中という異空間から問題なく抜け出ると、ゲンガーは両手で思い切り球体を突き飛ばした。未だに巨大な黒いエネルギー球は、茫然自失して空中に浮かんでいるフリートに向かって高速で迫っていく——

第四十四話 フリートの戦いの終息、町に再び訪れる静寂

正面から向かってくる高密度の黒いエネルギー球が視界いっぱいに入ったところで、フリートはようやく自らの置かれている状況を冷静に把握出来た。身のこなしが速くなっているとは言え、完全に避けきれるとは限らない。そして、迎撃した方がリスクが少ない――と。小さく息を吸って気合いを入れ直すと、徐々に迫る攻撃に対応するべく、即座に行動に移る。

目を閉じて神経を集中し始めると、両腕を左右に広げて手の先に真っ赤に燃える灼熱の炎を蓄える。それが肥大すると、炎はフリートの体を包み込んで、フリート自体が大きな火の玉となった。

「かえんだん」よ、全てを焼き尽くせ――！」

咆哮のように大きな叫び声を上げるのに呼応して、フリートを包む高温の烈火が無数の炎の塊となって弾け飛んだ。四方八方に飛び散っていくそれらは、目前まで迫っていた“シャドーボール”に対抗すべく、半分以上が火花を散らして衝突していく。

至近距離で二つの高密度の技がぶつかり、全方向に凄まじいエネルギーが放出される中で、フリートは目を閉じずにぐっと堪える。さらに、負けじと両手を前に突き出し、火の勢いを強くするかのようになにを送り込む。

「いっけええ!!」

一段と声を張り上げると、フリートの気合いに応えるように火炎の球が赤々と燃え上がった。それに伴い、両方のエネルギーが収縮

していく。そして、“シャドーボール”の大きさが通常サイズにまで縮んだところで、一気に爆発を起こした。その小さな体では踏ん張る事は難しく、フリートはたやすく吹き飛ばされてしまう。

「このままでは——はあっ！」

勢いよく地面に叩きつけられそうになった時、その寸前で精神を集中して手先から力を放出し、“ねんりき”によって空中で静止する。ふわりと軽やかに一度舞い上がると、そのまま無事に地面に降り立った。

「ふう、相殺出来て良かった。でも、“かえんだん”が力比べをして互角なんて……」

小さく一息を吐いて一安心するものの、その言葉通りに内心は非常に焦っていた。それが表に出ないように、表情を陰しくしてゲンガーの方を見据える。すると、あれだけの大きな技を繰り出したにも係わらず、相変わらず平然と佇んでいた。

「ふむ、あの技を正面から打ち消すとは、なかなかやるもんだねえ。だけど、相当疲れているように見えるぞお」

「えっ、誰が疲れてるって？　あまりぼくを甘く見ない方が良いと思うよ？」

フリートは再び手を上げて慎重に構えるものの、何とか虚勢を張っているだけだった。それをちゃんと見抜いているのか、ゲンガーは両手を後ろに回して楽な姿勢を取っている。

舐められた態度をされている事に悔しそうに顔を歪めると、フリ

ートは再度羽を使って飛び上がった。一定の高さまで来たところを上空に留まると、両手を大きく横に広げる。

「そんなに高く飛び上がって、逃げるつもりかい？」

「いや、その逆だよ。あなたを倒したかったけど、“完全に”力の戻っていない今では、逃がさないようにするのが精一杯。だから、こうするんだよ」

嘲笑を浮かべていたゲンガーも、意味深なフリートの発言に表情を凍らせる。思いがけずゲンガーを動揺させた事に心の中で得意げに思いつつも、大きく息を吐き出して落ち着き、フリートはそっと目を閉じた。

広げた両手の先から、今度は真っ赤な光が放たれると、突如として五本の火柱が地上に現れた。その燃え上がる紅蓮の炎の柱からそれぞれ火柱を結ぶように炎が走っていき、五角形の方陣を描いていく。

「さあ、こんなのは初めてだろうね」

フリートが伸ばしていた手を素早く空に向かって突き上げると、その動きに連動するかのように、地面に低く揺らめいている炎が高く燃え上がった。その炎は一瞬にしてゲンガーを囲む壁となり、やがて空に向かって伸びた壁同士がくっつくと、五角形の炎の“部屋”を作り上げた。

「ぼくはこれを【ペンタグラム・シャンブル】って呼んでるんだけどね。この中でおとなしくしてもらおうよっ」

自らの得意とする空間に封じ込めた事で、フリートは満足げにピースサインを作った。しかし、直後に全身の毛が逆立つような感じを覚え、緊張感を取り戻してその場から緊急に離脱する。その回避行動の振り向き様に、先まで自分がいた場所を黒い球体が通り抜けていったのが目に入った。

狙ったように放たれた攻撃が斜め下方から飛んできたのを確認し、睨みつけるように地上を凝視するフリート。その視線の先には、赤い光を宿す宝石の目を持つヤミラミがいた。

「きいーっ！ お前がタスマ様をこんな狭い空間に閉じ込めた犯人だなああ！」

ヒステリックを起こしたような甲高い声が鳴り響き、思わずフリートは両耳を塞いだ。ヤミラミが一通り叫び終えたところで視線を戻すと、その姿は五角形に燃え立つ炎の前にあった。炎を睨むようにして立ち尽くしている。

「タスマ様、大丈夫ですか!？」

「お前の耳障りな声は、炎の壁で姿が見えずとも、一発でわかるようなものだねえ。まあ、とりあえずは閉じ込められているだけだから大丈夫だ」

炎越しに二人が会話を交わしているのをフリートは黙って傍観していた。これからどうするつもりなのかもわからなかったし、何より壁の中に封じ込めておく自信があったからである。

「さあて、こんな暑い空間にいるのもうんざりだから、そろそろ脱出しようかね。さすがにおれっち一人じゃこの防壁は破れないから、

内と外の両方から攻めるのだ」

「はい、タスマ様」

ゲンガーの説明を心得たように頷くと、ヤミラミは掌中に黒い粒子を溜め込み、“シャドーボール”の構えを取る。さっきまでただ見守っていたフリートも、その成り行きに不安を覚えて表情を強張らせて待ち構える。

「タスマ様、参ります！」

中にいるゲンガーに良く聞こえるように声を張り上げて呼び掛け、ヤミラミは溜めていたエネルギーを解き放った。それが炎に当たったと同時に、接触部分の炎が一瞬にして弾け飛び、ぽっかりと環状の穴が空いた。

「良くやったぞ、ヤミラミ」

“シャドーボール”で穿^{うが}たれた穴の中から、ゲンガーが悠々と飛び出してきた。その無事を確認すると、ヤミラミは嬉しそうに飛び上がる。

「嘘だ……。ぼくの炎の防壁が破られるなんて……」

自信のあった事もあって、フリートは愕然としているようだった。失意と共に水平に構えていた手も垂れ下がり、炎も静かに消えていってしまう。

「ひゃーはっはっ、これがタスマ様の力だよ！ 思い知ったか！」

「うるさいねえ、お前は」

「す、すいません」

騒音の如く大声で称賛するヤミラミを咎めるゲンガーは、脱出も早々にフリートの方を見据えていた。先程まで以上に涼しい顔をしており、またしても不敵な笑みを覗かせている。

「さて、どうしてくれようかね。これで二対一だが、尻尾を巻いて逃げるか？」

「だ、誰がっ！ まだ諦めてないよ！」

威勢を張る為に声を荒らげるが、声が震えていてむしろ逆効果。ゲンガーはしてやったりとばかりにほくそ笑んでいた。劣勢の状況に追い込まれたのをフリートが悔しそうに拳を強く握り締めるのをよそに、ゲンガーのタスマとヤミラミの二人は両手を突き出して攻撃の体勢に入る。

「炎の精霊くん、そろそろおとなしくやられてもらおうか——」

「——フリート、大丈夫かっ！」

絶体絶命の状況下に於いて、不意に響いた別の猛々しい声。その発生源に三人が一斉に振り向くと、そこにはイーブイ、ガーディ、マリル、ジラーチャーアルム達の姿があった。テイルを除く三人は侵入者達の方をじっと見つめる。

「またお前達かぁっ！ 性懲りもなく追ってきおって〜！」

撒いたと思っていた相手が目の前に再び現れ、ヤミラミは動揺して喚き始めた。それを鎮めるように片手でヤミラミの肩を触って押し退けると、ゲンガーはさらに一步前に出た。

「おやあ、おれっちの部下が世話になったようだねえ。本来ならここで挨拶とでも行きたいところだけど、今日のところはそろそろ失礼させてもらおうか。目的は果たせたようだから」

何故か恭しく頭を下げると、ゲンガーはすぐに後退りを始める。いくら敵陣の数が増えたとは言え、まだ優勢であるにも係わらず。そして、それは隣でおとなしくなっていたヤミラミでもであった。

「それってどういう事だ？ 逃げるつもりか？」

「まさか、逃げる訳ではない。情報を持ち帰るのが元々の目的だから、あくまで撤退するだけだ」

「……良いように言ってるが、結局はおめおめと逃げるんじゃないか」

威嚇の姿勢を崩さずにヴァローとタスマは睨み合った。どちらもすぐにでも攻撃を放つ用意はしており、またしても緊迫した空気が漂う。

「ほう、ずいぶんと口が達者な奴だ。一度手合わせしてみたいものだが、今はその時間も無いからな。そろそろ失礼させてもらおう」

攻撃に移るのかと思えば、突然ゲンガーは前に突き出していた手を下ろし、目を大きく見開いた。その行動に異変を感じたヴァローが仕掛けようとするも、口の中に赤い炎を蓄えた時には既に遅かつ

た。ゲンガーの口からは煙のような微細な黒い水滴——“くろいきり”が溢れ出し、二人を隠すように辺りに立ち込める。

「この、逃がすかつ！」

冷気を持った“くろいきり”で完全に姿を暗まされ、急いでヴァローは高熱の火炎を吐き出す。目で捕捉出来ずに闇雲に放たれた炎は霧を貫き、その余韻である熱風で微粒子の水を吹き飛ばしていく。しかし、もうそこに二人の姿は無かった。遠くの方まで眺めても、後ろ姿さえも見つけられない。

「逃がしちゃった、か。でも、みんなも無事なようで一安心だね」

ゆっくりと地上に降りていき、フリートは安堵の溜め息を吐いた。その一言を皮切りに、アルム達もその場に座り込んで落ち着く。しかし、その中で一人ヴァローだけが佇んでいた。

「なあ、フリート。途中だった話の続き、聞かせてくれよ。俺と似た名前のバロウについてと、仲間のジラーチー—テイルについてだ」

真剣な眼差しでフリートの方に向き直り、ヴァローは唐突に切り出した。戦いの時とは違う張り詰めた空気になり、普通に話をしようとしていたアルムも口を噤む。

「あー、その事ね……。だから、もう言ったでしょー。君とバロウの事に関しては、旅を続ける中で追い追いかけていくって。ぼくの口からわざわざ語る事じゃないよ」

すっと立ち上がると、フリートはいつの間にか傾き始めていた橙色の発光体に背を向けた。穏やかで暖かい光を投げ掛けている夕

日を見ない状態で、フリートはヴァローの問い掛けに答える。しかし、腑に落ちない様子のヴァローは引き下がるつもりもなく、回り込んでフリートに詰め寄っていく。

「うーん、困ったなあ……。それじゃさ、もうちょつと経ったら手がかりを教えてあげる。だけど、この陽が沈むまで待ってくれないかな。そうすれば、ジラーチのティルくんについてもわかると思うから」

執念深さに観念したらしく、フリートは妥協案を持ち掛けた。それでヴァローも納得したらしく、おとなしく後退する。一方で、普段は見せないヴァローの珍しい態度に、離れた場所から見守るアルムも目を丸くしてしまっていた。

「フリート、ティルについて陽が沈んだら——つまりは夜になったらわかるって事だろうけど、一体どうして知ってるの？ それに、どういう意味なの？」

親友の必死さに対する驚きから立ち直ると、アルムは怖ず怖ずと身を乗り出す。この場に来てからしばらく喋っていないせいか、緊張のせいか。どちらにせよ、やや高く上擦ったアルムの声が耳に届き、フリートも振り返った。その表情は既に穏やかな物になっており、アルムの方を無垢な眼差しで見つめると、躊躇う事なく口を開いた。

「そりゃあ、ティルくんはぼくの仲間だからね。夜にわかるのがどいう意味かって言うのも、彗星から訪れたティルくんについての大切な事は、“星”が教えてくれるって事だよ——」

第四十五話 運命の七夜目く星の君に起こる異変く

白く燦々（さんさん）と輝いていた太陽が、緋色と橙色の衣を纏った夕陽と呼ばれる物に移り変わっていったから後は、天空の変化は著しかった。すぐさま青く澄んだ空全体に真っ黒の布が掛けられ、先まで大地を照らして暖めていた光の一切を遮断してしまう。

そして陽光の代わりとばかりに、入れ替わりで月と星が静かに潜めていたその姿を現し、光を放って照らし始めた。その中でも特に目立つのは、ティルが来た日以来忽然と姿を消していたはずの彗星だった。核となる先っぽの部分は大空に浮かぶどの星よりも輝いており、そこから真っ直ぐに伸びる青っぽい尾と緩やかな弧を描くようにして伸びる白っぽい尾により、暗いはずの夜に一層強い明かりをもたらしている。

「うわあ、またあの彗星を見れるなんて……。すごく綺麗だなあ……」

幻想的な夜空を眺めて感慨に浸っているのは、夜風に自慢のふわふわな茶色の毛を靡なびかせているイーブイのアルム。遙か上空で最も輝きを放っている天体が今まで空から消えていた事に疑念など抱く様子もなく、純真な気持ちで佇んでいた。

「アルム、ここにいたのね」

アルムの背後からゆっくりと近づいてくる一つの小さな影があった。彗星の光度のおかげでその姿ははっきりと見え、アルムは振り返りながら表情を綻はなばせる。

「あれっ？ シオン、どうしたの？」

「それはこっちの台詞よ。フリートに誘われて一緒に森に行ったのに、突然いなくなっちゃって……。森に戻りたくないの？」

優しく微笑みかけているマリル——シオンの方に自ら歩み寄り、アルムは小さく首を横に振った。強い否定を示すものではなく、どっちつかずな感じの動かし方である。

「ううん、戻るには戻るけどね、ちょっと外に出たくなったんだ。すぐく胸騒ぎがして……。そしたら、この空が見えて、もっと広い場所で見たいと思ったの」

「そう、確かに綺麗な星空だものね」

アルムに寄り添うようにして、シオンも眩い光を放つ星々の方に視線を遣った。感嘆の声を漏らしつつ、全体的に観察してもう一度アルムの方に視線を戻すと、彗星の浮かぶ空を食い入るように見つめているのを捉えた。一方で、シオンに至近距離で見られているのに気づくと、アルムは恥ずかしそうにはにかんで見せる。

「あ、あのね、今までは消えていた彗星がまた現れて、まるでティルが僕たちの村にやって来た時みたいなんだ。それで、やっぱり今から何か起こるのかなあって思ってた」

その瞳には空に浮かぶ美しい星と一緒に愁いの色が映っており、僅かに揺らいでいる。アルムは態度に出ないように必死に隠そうとしているものの、瞳だけではなく声色にも心情が表れているのがシオンにも容易にわかった。

「やっぱり少し不安なのね？ テイルがやって来てから七夜目の今夜に何か起こるって言ってたから……」

「え、ううん。別に不安なんかじゃないよっ」

アルムはごまかすようにして目を逸らそうとするが、シオンにそっと頭を撫でられて動きを中断する。それで心が落ち着いたのか、その場にそっと座り込む。泳がせていた目をシオンの方に戻すと、静かに首を横に振っているのが見えた。

「別に強がらなくたって、アルムは正直にいてくれれば良いのよ。それに、フリートもいてくれるんだから、テイルの事はきつと大丈夫」

「うんっ。シオン、ありがとう。そして、ごめん。少し嘘をついた。不安な気持ちが全く無い訳じゃ無かったから……。みんながいてくれるって事を思い出した今なら、もう不安な気持ちはないけどね」

シオンに暖かい言葉を掛けられ、アルムは垂らしていた耳を元氣よく持ち上げる。しかし、未だに全てを拭いきれない様子であり、誰かが心の蛇口を捻ったかのように不安な想いが口を衝いて出る。

「――でも、テイルはともかく、レイルはどこに行っちゃったんだろう。僕があまり接しなかったから、僕の事を嫌いになったのかなあ……」

「私にもわからない。でも、主であるあなたから離れるはずなんて無いから、またひょこっと帰ってくるわよ。そんなに心配する必要は無いと思うわ。だって、あなたはレイルと良い関係を保っていると

思うもの」

「えっ、本当に？」

シオンに優しく語りかけられると、アルムは幾分か心が穏やかになったのを実感した。第三者から見たその意見は、アルムにとって気休めなんかではなく、心を安らげてくれる光が一筋差し込んだような感じがしたからである。

「ええ、本当よ。私達の中の誰よりもレイルの事を思いやってるのは、あなただと思うもの。――さあ、今はとりあえずそのあなたが帰る番よ。テイル達も待ってるから」

誰かが待つててくれる――そう思うだけで、暗い感情で一杯だったアルムの表情には、いつの間にか柔らかい笑みが零れていた。互いに見つめ合って双方が明るい笑顔を見せながら、アルムはシオンに引っ張られるようにして歩き出した。ヴァロー達が待っている、例の場所へと。



月明かりと彗星の光輝に照らされて歩き続けて二人が到着した先は、フリートの住み処でもある町外れの森だった。背丈の高い樹木たちによって彗星の眩い光はほとんど遮断されているものの、その

代わりに枝や葉の隙間から一筋ずつ差し込んでおり、昼間に訪れた時よりも神秘的な雰囲気醸し出している。

「あつ、アルムが帰ってきたー！　どこに行ってたの？」

真っ先に飛び付いたのは、これから何か起こると言われた張本人――ジラーチのテイルだった。アルムの不在が寂しかったのか、両手で強く抱き締めている。

「俺だって心配したんだぞ。一緒にここまで来たと思ったら、忽然と姿を消してるんだもんな」

「あ、うん、ごめんなさい。ちよつと気分転換をしたくなって」

呆れたように溜め息を吐きながらも、ヴァローは自身のベージュ色の尻尾を立て、帰りを待ち侘びていたような素振りを見せる。過度に心配していた事を悟られたくないらしく、微笑だけ浮かべてすぐにそっぽを向いた。

「おかえり。これで時間と役者は揃ったようだね――なんて、こんな事を一回言ってみたかったんだー」

町で闘志を剥き出しにしていた時とはまるで違う陽気な声色で姿を現したのは、炎の精霊であるビクティニのフリートだった。彼なにおちちゃらけたようで、その顔に笑みを湛えて右手でピースを作り、アルム達の輪の中に加わる。

「時間は夜になったから良いとしても、役者が揃ったってどういう事だ？」

「まあまあ、焦らないの。もうすぐそれはわかると思うからね」

フリートの振る舞いを気にする様子もなく、ヴァローは核心に迫るべく早速本題へと移した。しかし、一方のフリートはさほど切迫しているでもなく、軽く受け流した。

「ねえ、あんまり焦^じらさないでよっ。僕たちだってすごく気になってるんだから」

刻々と時が流れるにつれ、差し迫ってくる緊張感に押し潰されそうになっていた。今度はもはやを解消したい気持ちでいっぱいアルムがフリートに詰め寄ってみる。

「焦らすも何も、ぼくが何かする訳じゃないからねー。ここはおとなしくしてるのが一番だよ」

真正面からアルムに真剣な目で見つめられても、フリートは一向に答えを明かそうとはしない。だが、口調こそ淡々としているものの、フリートの面持ちは決してふざけているものではないという事にアルムは気づいた。

「そう、わかった。じゃあ、おとなしくしてるね」

それ以上は何も言わずにおとなしく引き下がるアルムを見て、ヴァロー達も成り行きに身を任せる事を決め込んだ。それから、別段何をするでもなく、だからと言ってフリートと絡もうとしなくなる訳でもなく、思い思いに過ごし始める。

アルムはテイルやフリートと会話を交わし、傍らではヴァローが座り込んでひたすら黙っていた。片やシオンは木の実を集めているかと思えば、それをアルム達のところに持っていったりと、いつも

と変わらないような時間を送っていた。

それでも、各々が心の内に異なった想いを抱き、運命の時が訪れるのを待ち望んだ。正の想いであれ、負の想いであれ、それらは全てこれから起こるであろう出来事に向けて抱いたものであった。そして、その運命の時は、唐突に訪れる。

「さあみんな、覚悟して。もうすぐ“来る”よ。まずはあれが強い光を発するから」

まず予兆を感じたように第一声を発したのは、他でもないフリートだった。神経を研ぎ澄ましたように耳を大きく立てながら、首をもたげて夜空を見上げる。その動きに釣られてアルム達も一斉に上空に注意を向けるのとほぼ同時に、夜空にて光彩を放っている彗星が輝きを増した。まるで何かに反応するかのよう。そして、これから何かが起こる前触れのように。

「やっぱり、あの彗星が何か関係してるの？」

「そりゃあそうだよ。ティルくんが来たのもあの彗星なんだからね。さて、次はその光がたぶん伸びてくると思うよ」

フリートの予言通りに変化を遂げた夜空の星を凝視しながら、アルムは素朴な疑問を投げ掛けた。フリートはアルムの方に振り向くでもなく、右手で彗星を指差す。その示す先では、激しく放っていた光明が瞬く間に収束していった。

一同が固唾を吞んで見守る中で、元の輝度まで戻った彗星の先っぽでは、光が球の形を作り始め、ある程度の大きさになったところで留まった。続いて、そこからは一筋の太い光線が真っ直ぐに地上

に向かって放たれた。ものすごい速度で降り注いでくるそれは、的確にテイルを捉えて包み込む形となる。あまりの眩しさに目を閉じざるを得なくなり、その間にも完全にテイルの姿が光線によって隠されてしまう。

「テイル！ 大丈夫っ!？」

アルムは何とか薄目を開けて安否を確認しようとするが、光の中の様子はまるで窺う事が出来なかった。思い切って声を掛けて返事が返ってくるのを待つものの、良い結果は望めなかった。滝のように降り注いでいるとは言え、所詮は光であるにも係わらず、空気を震わせて轟々と音を発していたからである。

「声を掛けたところで、中にいるテイルくんには聞こえないよ。今はとりあえず待つんだ」

隣にいるフリートに言われ、テイルの無事を祈りつつ、アルムは不安げな表情で光が止むのをおとなしく待つ事にする。

そして、彗星から光線がテイルに向かって狙い撃たれてから寸刻が経った時、不意に光の照射が止まった。同時に、ようやくそこで見えなかったテイルの姿があらわになる。光を浴びる前と同じく、羽衣で宙に浮いている状態で。

「テイル……大丈夫だった？」

アルムが恐る恐る近づきながら話し掛けてみるものの、テイルからの応答は無かった。今度は遮るものも存在せず、間違いなく届いてるはずなのである。

「たぶん睡眠状態にあるんだよ。ほら、あれを見てごらん」

心配そうにテイルを見つめていると、フリートが後ろから近づいてきてテイルの顔の辺りを指し示した。まだ離れた位置にいる為に目を凝らして観察してみると、確かにテイルは目を閉じていた。

「あれ、テイルの体がぼんやりと光に包まれているような……。それに、お腹の部分が何か違う」

接近するにつれ、アルムはさらなる異変を感じとっていた。一つ一言葉を紡ぎ出すその表情にも、緊張の糸が張り詰められているのは一目瞭然であった。嫌な予感がして、でも知らないといけないような気がして、負の想いを払拭するように歩を進めていく。

「テイルのお腹の“目”が、開いてる……?」

特異点を再確認すると、明らかにさっきまでのテイルとは違っていた。ジラーチであるテイルが本来顔に持つ二つの円つぶらな瞳とは別に、お腹にある光の宿っていない不気味な目が開眼していたのである。それに呼応してか否か、テイルの体を淡い光の膜が包んでいる。

「ど、どうしたら良いんだろう……。ねえ、フリートはわかる?」

「さあ、ぼくは何とも言えない。後は君が自分でどうにかするしかないよ。大丈夫、ぼくがちゃんと見守ってるから」

不安を取り除くかのように、フリートは両手でそっとアルムの背中を押す。暖かい手が触れたのを感じると、アルムは緊張していたのが緩んで幾分か落ち着けた。深呼吸をして決意を固めると、ゆったりとした歩調でテイルの側に向かう。

一歩ずつ近づいていく中で、ティルの方からは光と共に異様な力を発していた。普段は陽気に振る舞っている様子からは想像出来ない程に、神秘的で近寄り難いものにさえ感じられる。

「ねえティル、僕がわかる？」

前足を伸ばせば届くまでの距離まで接近したところで、もう一度アルムは呼び掛ける。例え眠っているとわかっていても、声が届くものと信じて。

「ボクは――」

今まで固く閉ざされていたティルの口元がふと緩んだ。まだ顔の方の目は開いていないものの、少なくともアルムの声に反応しているようだった。次の言葉が来ないのを焦れつつく思っていると、ティルは空中に浮いていた状態から地面すれすれまで降下してくる。

「――ボクは、エステレラ・グランツの一員。守護を定めに来たんだ」

口を開いたまでは良かったが、そこからは抑揚がまるで感じられなかった。いつもは楽しそうであどけない仕種を見せるティルの変貌ぶりに、アルムは思わず絶句してしまう。

「星を巡る運命は交錯し始めた。これからはもっと動乱が起こる。それで――うゝっ……」

途中まで言ったところで、ティルは突然両手で頭を抱えて呻きだした。未だに意識が戻っているのかは把握出来ないが、少なくとも最後の呻き声だけは普段のティルの声音に近いのをアルムは感じ取

った。

「ティル——そこに“いる”の！？ 僕の声、聞こえる？」

「ううっ、アルム……。ボクは——」

ティルが異常を来たし始めた事は目に見えて明らかだった。苦しそうに頭を左右に振っているのを受けて、アルムは必死に訴えかけるように声を張り上げる。すると、先程までは無かった、名前を呼ぶという反応をティルは示した。

「どうしたの、大丈夫？」

「あの、ボクは、ボクは——」

正氣に戻ったかと思えば、目はまだ開いておらず、完全に覚醒している訳ではないようである。それでも、言葉が通じている事にアルムは一安心し、抱き留められる位置まで近づいていた。何とか宥めようとアルムは足を伸ばす。

「ティル、落ち着いて。僕はここにいるから——」

「あうっ……。ごめんなさいっ！」

落ち着き始めてほっとしたのも束の間だった。ティルが体に纏っていた淡い光が急遽眩いものへと変わり、今度はティル自体が発光体となって輝きを放ち始める。光は一瞬にして辺りに広がり、その場にいる全員を飲み込んだ。そうして、アルムの視界は、目も眩む程の光によって真っ白に塗り潰されていくのだった——。

第四十六話 見えたる未来図と運命く覚醒と睡眠とく

強烈な光という刺激を受けて反射的に閉じていた目を開いたのは、時間にして僅か一秒足らず。開けた視界に映るのは、光が収まって宙に浮かんでいるテイルであった。相変わらず両目は閉じており、代わりにお腹の大きな一つ目は大きく見開かれた状態である。

「今のは何だったんだろう……」

閃光で眩んだ視覚がより鮮明になったところで、アルムは辺りをぐるりと見渡した。足元に鬱蒼と茂っている草花も、太い幹と青々とした木の葉を所有する樹木もあり、全く変わった様子は無い。――ある一つの事を除いては。

「あれ――ヴァローやシオンがいない？」

背後にいたはずのヴァロー、シオン、フリートの三人の姿が見当たらなかったのである。焦ったようにアルムは頻りに顔を動かして、本当にいないのか確認しようとする。しかし、何度繰り返してもいないものはいなかった。

「みんな、どこに行っちゃったの……」

自分を置いてどこかに行ってしまったのだと思い、アルムはがっくりとうなだれる。せっかく勇氣も出た上で落ち着いていたと言うのに、それは消え失せてしまっていた。失意のあまり、ぼんやりと足元の若草を見つめるばかりであった。

「アルム、顔を上げて」

初めて聞こえてきた自分以外の声に反応し、アルムは耳を立てて顔を上げる。その声の主は、眠っていたと思っていたティルであった。心の中では本当にティルかどうかとも疑っている。

「心配しないで。ボクは“一応”ティルだから」

訝しげに眉を寄せているアルムの心情を察したのか、ティルは視線を合わせて説明を付け加えた。一応という言葉に引っ掛かるものの、少なくとも声の高さだけは同一のものだと判断し、アルムは表情を緩ませる。

「ティル、君は一体どうしたの？ あんなに強い光を浴びたと思ったら、急に様子まで変わっちゃって」

「それは七夜目である今夜に覚醒して、“真実の瞳”を開眼させる必要があったんだ。今後に重要になってくるからね」

まだ警戒心を解いていないアルムを余所^{よそ}に、ティルは淡々と語り始めた。いつものティルとは似ても似つかない振る舞いに、アルムも戸惑いを隠しきれなかった。その証拠に、答えを聞いても訝えない顔をしている。

「あとね、ヴァロー達はすぐ近くにいますよ。ただ、“ここ”では見えないだけ。だから、アルムは安心して」

「う、うん。でも、ここでは見えないってどういう事？ それに、本当に君はティルなの？ あまりにも僕の知ってるティルと違い過ぎて、混乱しちゃって……」

声の調子は確かにテイルの物である事は断定出来た。しかしながら、口調や素振りが明らかに違っている。その事がどうしても気掛かりでならなかったのである。あまり聞きたくは無かったが、想いが言葉となって飛び出す。

「何言ってるの、アルム。正真正銘ボクはテイルだよ。ただ、“いつもの”ボクは抑えさせてもらってるけどね。あれは今は支障となるから」

「抑えてる……？　ちょっと意味が良くわからないんだけど……。それと、見えないって事もまだ良く――」

「ごめん、今は詳しく話してる時間が無いんだ。説明はまだ必要ないから、とりあえず現状だけをわかって欲しいの。だから、何も言わずにボクに付いてきてくれない？」

すっかり話に付いていけずに、アルムはおどおどして表情を曇らせていた。既知の相手と向かい合っているのに、完全に心を許せてはおらず、未知の感覚にさえ思えた。そんなアルムを下手に刺激しないようにゆっくり近づく、テイルは両手をいっばいに広げて抱き着いた。

「ごめんなさい、今はこれくらいしかアルムに安心してもらう方法が思い浮かばないの……」

「あ、うん、疑ってごめん……。テイル、僕は君を信じるよ。そりゃあ、僕の知ってるテイルとは全然違うけど――でも、テイルである事には変わりはない。だから、安心して身を委ねられるんだ。さあ、どこへ連れていってくれるの？」

寄せてくれる無垢な想いに対しては信頼を以って応じようと思い、アルムはとびきりの笑顔を振り撒いた。いつもテイルに見せるくらいのもしくはそれに負けないくらいのもを。

「そう、信じてくれるんだね。ボク、すっごい嬉しいよ!」

アルムが信じてくれた事を悟ると、テイルも口角を上げて微笑んで見せた。目は開いていないものの、顔には喜びが満ちているのがアルムにもわかった。そして一瞬だけ、言葉の方にも本来のテイルらしさが現れる。

「それじゃね、早速こっちに来て。顔の目は開いてないけど、真実の瞳でちゃんと見えてるから、案内も任せて」

「うん、わかった」

やはり微妙にやり取りに違和感を感じるものの、今ではさほど気にならなくなっていた。いつもは皆の後に付いていくか、または自由奔放に動き回っているテイルに誘われ、アルムは真っ直ぐ森の中を突き抜けるように走り出した。



ゲンガーのタスマとヤミラミの襲撃に遭った時のように、二人は

一気に森を突破し、丘を駆け上がる。あの時と違うのは、空が未だに闇の相を呈していた事である。それでも徐々に白み始め、空にところどころ浮かぶ雲もはつきりと見えるまでになる。

真夜中だからだろうか、足元を吹き抜ける風がやけに冷たく感じられ、たくさんの体毛を持つアルムでも身震いする程だった。そんな上り道の途中で視界に入る植物達は、冷風に一旦はそいでも、何故かすぐに萎れてしまう。色こそ若々しい緑色を誇っているのに、生気を失っているようである。

「さあ、アルム。心して見てね」

丘の頂上付近まで来た時、テイルがぽつりと警告らしき言葉を漏らした。その真意はわからないまでも、緊迫感は伝わってくる。アルムも思わず唾を飲み込み、恐る恐る歩を進めて町の方を見下ろした。

「えっ。なに、これ……」

自らの眼下に広がる景色に、言葉が上手く出て来なかった。夜が更ける前まで滞在したはずの町の姿は、既に跡形も無くなっていたから。点在していた家を見るも無惨に破壊し尽くされ、瓦礫の山となっている。廃墟という言葉がぴったりの惨劇を目の当たりにして、アルムは口を開けたまま力無く座り込んでしまう。

「先に言っておくとね、“これ”はボクの力で未来を見せてるんだ。そして、これがこの町の辿る運命。未来に起こるであろう悲劇の序章なんだよ」

こちらは全く動じている様子は無い。ただ宙に浮かんで、真実の

瞳で荒野と化した風景を俯瞰ふかんしているだけである。廃墟独特の埃っぽい空気を運んでくる風を身に受けながら、ティルの方を横目で見たアルムは、急に遠い存在になってしまったような気がした。知らず知らずの内に明後日の方を見てしまう。

「ねえ、アルム」

静寂な空気が場を支配する中で、思いがけずティルから呼び掛けられた。いつもなら明るい笑顔を浮かべて振り向くのに、今度ばかりはびくついてしまう。

「アルム、もしかして、ボクが怖い？」

「そ、そんな事は……ないよ」

ほんの短い言葉なのに、自信を持って言えなかった。半分は事実であり、動揺を上手く隠せる程負の感情を押し殺すのが得意では無かったからである。アルムの曖昧な反応を境に互いに口を噤つぶんでしまったかと思うと、二人の間に見えない壁を作るように、一陣の冷たい疾風が吹き込んだ。

「そう、やっぱり怖いんだよね。そうだよね？」

先に口を開いたのはティルだった。俯き加減になって虚ろな目をしているアルムの方に向き直って、同じく元氣なく頭を垂らして続ける。

「ボクだってわかってたよ。リップカタウンがこうなってるのを見ても、平然としてるんだからね」

「ち、違ふのっ！ 僕はただ――」

「ただ、何？」

「えっと、それは……」

立て続けに問い掛けられ、アルムは完全に追い込まれてしまった。補う言葉が頭に浮かんでくる事もなく、お茶を濁そうとする事も無理と判断出来た。何より、ここでごまかせるはずも無い事は重々承知だったが。

「僕はテイルが怖いんじゃないんだ。でも、僕にはまだわからない事が多過ぎて、それで――」

アルムはそこで声を発するのを止めた。次の言葉を必死に絞り出そうとした途端に、テイルが再度抱き着いてきたのがその理由である。しかも、その力は先程よりも強いものであった。

「アルム、お願い！ ボクの事を嫌いにならないでっ！ アルムに見放されたら、ボクは、ボクは――」

不意に体に一粒の雫が落ち、毛を伝わって濡れていくのを感じた。その正体は予想出来たが、一応確認の為に叫んでいるテイルの顔を見ると、閉じている二つの目から大粒の涙が零れているのが映った。ぐしゃぐしゃになった顔から、悲しみの想いが詰まった雫が流れていくのが。

「見放したりしないから、ね？ 大丈夫、僕だってテイルから離れるのは嫌だから」

「ううつ、本当に……?」

「うん、本当だよ。誓っても良いもん。だからね、泣くのはもう止めて」

慰めるようなアルムの返答を聞くと、ティルは泣くのをぴたりと止めた。崩れていた口元も緩んでいき、落ち着きを取り戻す。

「――ありがとう、アルム。ボク、アルムがいてくれると思うと、これからも安心出来るよ。でもね、ボクだけが安心しちゃいけないんだよね。……ごめんなさい、これはボクが招いた結果なんだ」

「ティル、それはどういう――」

表情の変化が激しく、神妙な面持ちで切り出したティルに対し、アルムは抱いた疑問をそのまま口にしようとした。しかし、その次の瞬間には、話し掛けるべき相手の体が薄れ始めているのが目に入った。

「ど、どうしたの!?!」

「ごめんなさい、もう時間みたいなんだ。だから、これだけは言っておくね。未来の事はまだはつきりしないけど、安心して。十二の力と占星術によって選ばれた守護者が助けてくれるはずだから」

さっきまでは明瞭だった声も、その身の消失に比例して徐々にぼんやりとしたものになっていく。それを心配そうに見つめるアルムとは対照的に、滞空しているティルは笑顔を浮かべていた。

「それじゃ、“ボク”をよろしくね――」

最後の最後になって、ティルは顔に位置する両目を開けた。その瞳が黒ではなく蒼い光を宿している事に気づくと同時に、ティルの体は完全に消え失せていってしまう。

「あっ……ティル、待ってっ！」

現状に付いていけずに呆気にとられて一瞬言葉を失うものの、アルムはすぐに我に返って呼び止めるかのように声を張り上げる。しかし、消えてしまった者に届くはずもなく、声は虚しく辺りに響き渡るだけであった。虚空に一人ぼっちにされ、表情にも陰りが見える。

「見放されたのは、僕の方かな。安心してって言われても――」

一瞬にして孤独感に苛まれ、激しい喪失感にも襲われる。しかしながら、悲しみに暮れるのも束の間だった。“この世界”に來た時と同様に、視界全体が閃光で覆い尽くされ、遂には何も見えなくなっていくのであった。複雑な想いと共に、全ては光の渦の中に飲み込まれるようにして――。

第四十七話 それぞれが醒めた後の事ゝ二つの夜更けの会話ゝ

眩しいながらも暖かさを含んだ光がふと和らいだのを感じた時には、気が付けばいつの間にかまた目を閉じていた。閉じる前に心の中で渦巻いていた想いが一気に溢れ出し、視界を取り戻すのを妨げる。目を開けば、また怖いものが待ち構えてるんじゃないか――その恐怖も相まって。

それでも、このまま閉じっぱなしではいけないのもわかっていたので、覚悟を決めてゆっくりと瞼を上げていく。まず最初にその黒い瞳に映ったのは、ティルから発せられた光に反応して瞼を閉じる前と同じ光景だった。そしてやや下方に視線を遣ると、ティルが若草の上に横たわっているのが見えた。

「ティル、もしかして寝てるの……？」

すやすやと羽衣に包まる^{くも}ようにして横になって寝息を立てており、眠っているのは明らかである。何事も無いようではっと一安心するが、そこで大きな疑問が浮かんた。先程見たのは何だったんだろう――と。

「アルム、起きたのか？」

ずっと長い間聞いていなかったような、待ち侘びていた声を耳に感じ、アルムは飛び上がるように振り返った。そこには、期待していた者達――“夢”の中ではいなかったヴァロー、シオン、フリートの三人の姿があった。一人ずつじっと見つめて確認すると、アルムは瞳を潤ませて走り寄っていく。

「よかったっ！ みんな、どこにも行っていないんだね！」

「当たり前だ。どこにも行くはずが無いだろ？ まあ、いつの間にか意識が無くなって、ちょっと変わった夢を見てたけどな……」

「えっ、変わった夢？」

自分にも思い当たる節がある単語がヴァローの口から飛び出し、おうむ返し of 要領でアルムも聞き返す。不思議そうに小さく首を傾げているアルムを見てふと笑みを零しつつ、口を開こうとしたヴァローが、不意に表情を強張らせた。

「そうだ、確か夢の中にはティルが出て来たんだ。本当にティルかどうかは怪しかったが、とにかくリプカタウンの未来がどうか聞いたな……。聞く限りでは、どうやらシオンも同じ物を見たらしい」

「えっ、それ、僕も見たいよ！」

ヴァローの隣で頷いているシオンにも気づき、アルムは一層声を張り上げる。それぞれ同じ物を見たという事で疎通すると、驚きを隠せない表情で三人が一斉に顔を見合わせる。

「やっぱりか。それで、肝心のティルは――」

ヴァローとシオンが自分の後ろの方を見つめているのがわかって、アルムも振り返る。その視線の先には、未だに気持ち良さそうに寝返りを打っているティルの姿があった。体を左右に動かしながら、口元をもごもごさせて笑っている。

「まさかあいつが、なあ？」

「うん、試しに起こしてみる？」

確認するように互いに見つめ合うと、既に表情には緊張の色など無かった。目の前で熟睡している存在からは、神秘的な雰囲気や微塵も感じなかったからである。こくりと頷いた後にそっと忍び足で歩み寄っていくと、アルムは前足で優しくテイルの頬を撫でる。

「くふふっ、くすぐつたいよ」

アルムの接触に反応して、笑いながら片手で撫でられた箇所を摩るものの、目を覚ますまでには至らなかった。そんなテイルの仕草にアルムは柔らかい笑みを湛えつつ、今度は大きく揺り動かしてみる。

「うーん……あれ？ アルム、おはよーっ」

すると、自らを包んでいた羽衣を解き放ちながら、テイルはゆっくりと体を起こした。両手で眠い目を擦っていてまだ寝ぼけた状態ではあるが、アルムの姿を確認するや否や、いつもの明るい笑顔を振り撒く。今までも見てきたあどけない笑みを見るだけで、アルムは自然と心が安らいだ。

「おはよう、テイル。君は夢か何かを見てない？ もしくは何か“見せて”ない？」

「ううん、ボクはなーんにも見てないよ？ どうかしたの？」

「やっぱりそうなんだ……。ううん、別に何でもないよ」

ティルには特に嘘をついてる様子も無いので、探ろうとしていた事を下手に悟られないようにアルムはごまかした。一方で、きょとんとした表情を浮かべたティルはアルムに急接近する。

「ねー、アルムー。何かボクに隠し事してるでしょ？」

「そ、そんな事してないよっ」

いつになくティルは勘が良く、凶星を指される形となった。アルムは視線を泳がせて質問から逃れようとするが、幼さを残す高い声に乱れが生じ、平静を失っている。

「ボクに隠し事は無しだよー？　ね、教えて？」

「な、何も無いってば。本当だよ？」

そうは言いつつも、知らず知らずの内に、つい癖でリボンの付いた方の耳を前足で撫でていた。それはすなわち、アルムの中では一種の逃げの行動だった。上手く隠す事が苦手なのが祟っている。

「怪しいなー。アルム、何だか困ったような顔してる。そういう時のアルムって、いつも何か大事な事を言わないで黙ってるんだよね」

「そんな事無いったら！　ねっ、今日は疲れたから、ティルの質問はここまで」

気が引ける思いから曇らせていた表情を見抜かれ、苦し紛れにアルムは提案した。ティルも頬を膨らませて納得が行かない様子ではあったが、渋々了承したように頷くと、その場に再び横になる。

「教えてくれないなら、もういいもーんだ。それじゃ、アルム、おやすみーっ」

「ちょっと待って！　まだ僕の方が聞きたい事が――」

話が終わったものと判断したのか、テイルはそのまま目を閉じて眠りに就いてしまった。あまりにも迅速な変わり身に対応が間に合わず、アルムは慌てて起こそうとする。しかし、それを阻むように目前に小さな手が現れ、足を出すのを止めてそちらの方に振り返った。アルムを制止した正体は、V字型の大きな耳と羽が特徴的であるビクティニのフリートであった。

「今はまだわからないんだと思うよ。だから、問い詰めなかったのは正解だね」

「うん。でもさ、本当にテイルは知らないのかなあ？　それに、知らないんだとしたら、あれは一体……」

フリートに諭されるように言われると、アルムも納得したように、しかしどこか元氣なく返答する。“こちら”でのテイルが変わり無い事には安心をしているが、それでも真相がわからず仕舞いになる事にもどかしさを覚えたからである。

「大丈夫、焦らなくても、いずれはわかるようになるから。今はいろんな事がいっぺんに起こり過ぎて頭が混乱してるだろうし、落ちて着いてからでも良いと思うよ？」

「でも、もし悪い事だとしたら、早く知りたいんだ。その方が対処しやすくなるし……」

アルムも今回ばかりは食い下がろうとはしない。声音には戸惑いと不安も窺えるが、それでも勇気を持って受け入れる覚悟があった。だからこそフリートの提案を押し退けてまで切り出したのである。しかし、対するフリートは静かに首を左右に振る。

「アルム、炎の精霊は心に宿る炎や暖かさまで感じる事が出来るんだよ。だから、君の心の炎が激しく揺れているのもわかるし、これ以上突風が吹けば消えてしまいそうなのもわかるんだ。……さあ、今日はもう疲れたでしょ？ ゆっくり眠ると良いよ」

「——うん、わかった。ありがとう、フリート。それじゃ、お言葉に甘えて寝させてもらうね……」

精神的に疲れるような体験ばかりしていたため、急に眠気が襲ってきたアルムは、フリートに促されるがままに意識を沈めるのであった。

「さて、フリート。今度こそ知ってる事を詳しく話してもらおうか？」

愛らしい寝顔をしているアルム達を見守るフリートの背後からは、寝ている二人を起こさないようにヴァローが静かに近づいてきた。こちららも疲労を感じている事が読み取れるが、覇気はまだ消えていない。

「うん？ 何の事かな？ 君も早く寝た方が——」

「とぼけるな。バロウについての事、夜になったら話すって言っただろ」

はぐらかそうとするフリートを鋭い眼差しで見つめるヴァロー。その威圧的な言葉を受けると、フリートは小さく笑って言葉を続ける。

「——だったよね。わかってたよ。でもね、もう一晚だけ待ってくれないかな。ちょっと大事な用事が出来たから」

「……わかった。どうせいずれはわかるようになるんだからな」

フリートが先程言った事を復唱すると、それ以上は追及するつもりもなく、ヴァローは背を向けてその場に寝転んだ。一言も発さずに。ふて腐れているような印象を抱いたフリートは、ヴァローの背中を見て微笑みつつ、遥か上空へと飛び上がった。

「確か光が飛んでいったのはあっちだったかな——」

月と彗星の光を同時に背中に浴びつつ、フリートは森の木々よりも高く上昇する。ある位置で止まると、地上で眠っているアルム達を一瞥した後に、思い出すようにある方向に振り向いた。そして、小さく一息吐いて羽を広げると、その高度を保ったまま滑空を始めた。一度は去った町の方角へと。



昼間とは違い、暗い中を冷たい風を受け続けてフリートは飛んでいた。無言で飛行を続けて着いた先は、本日二度目になるリプカタウンだった。静けさはより一層深まるばかりで、ポケモンの気配こそ僅かに感じられるものの、黒一色に染まっている空間の中に埋もれてしまっている。

暗闇に包まれた町の外れ辺りの上空に一旦留まると、自らの掌に明かりとして橙色の炎を燈しながら、フリートは地上近くに降下する。しかし、降り立つ訳でもなく、周囲を照らして浮遊しつつ移動を開始する。何かを搜索するように頻りに目を動かし、耳をそばだてて、そろそろと進んでいく。

「ポリゴンのレイル——だったかな？ 君がいるのはわかってる。おとなしく姿を現して」

不意に何も見えない闇に向かってフリートは呼び掛けた。すると、それに応じるように暗がりから徐々に影が進んできく。フリートの掌に宿る炎により照明されている範囲に完全に入って来たのは、多角形の輪郭が特徴的なポケモン——フリートの宣言した通りにポリゴンのレイルだった。

「さて、どうしてこんな所にいるのかな？ アルム達が心配してるよ」

「ええ、ちょっと用事の方を済ませていました」

「そう。差し支え無ければ、その用事とやらを教えてくださいませんか」

レイルが淡々と回答を返してくるのに対し、フリートは問い詰め

るように近づいていく。炎の明かりで照らし出されているフリートの表情は、決して穏やかな様子ではなかった。

「実は、自分の“目的”をつい先程思い出したのです。私の今まで記憶の底に眠っていたものが、突如発現してきたようで」

「目的？ それは一体――もしかして、君のところにも“光”が届いた事に関係があるのかな……」

相変わらず単調で冷たい印象を抱かせる口調で躊躇う事なく語る中で、フリートは腕を組むようにして考え始めた。目まぐるしく事態が動き出した中で、頭の中で何とか整理する。そうした上でフリートは先のテイルの放った光が怪しいと踏んでいるらしく、思わず口に出した。

「私にも詳しくはわかりません。しかし、少なくとも私の中で何かが変わり始めたようです。今までは無かったような使命感のような物が、急にプログラムされていたかのように現れました。それと関係あるかはわかりませんが、唐突に光に包まれた時に、何か別の生命反応をキャッチしました」

「使命感？ それに、光の中で生命反応……？」

フリートが反復して唱えると、レイルは小さく頷いた。それは無機的でありながら、確信のあるようなしっかりとしたものである。

「なるほど、ぼくには何となくわかったかもしれない。とりあえずアルム達の所に戻りながら詳しく話を聞かせてよ。たぶんぼくが教えてあげられる事があると思うから」

「……わかりました。しかし、主達には他言無用です。お願い出来ますか？」

「了解したけど……それは何故なのかな？　もしかして、それはアルムに対する思いやり？」

要求を呑んだ上で、思いもしないレイルの受け答えに、フリートは目を丸くする。驚きが明白に現れており、その証拠に両手の炎が大きく揺らいでいた。それに対して、レイルは特に関心も無いように素早く首を横に振ると、説明を続ける。

「いいえ、単にこれから先に支障を来す可能性を排除しておきたいだけです。さあ、参りましょう」

「レイル、君は一体……？　——まあ、良くわからないけど、まずは森に戻ろうか。せめて夜が明けるまでには戻って寝たいからね」

一瞬表情を強張らせるものの、すぐに緩ませて何事も無かったかのようにフリートは森のある方角に振り向いた。とりあえずまだ移動はせず、目の端で背後にいるレイルを何度も見るが、特に変わった様子もない。変わらずに無表情で視線を真っ直ぐ向けるだけ。フリートには逆にそれが不気味にさえ感じられた。

「これも何かの予兆なのかな……。とにかく、白羽の矢も立てられなみたいだし、上手くぼくが導いてあげないと、ね——」

レイルには聞こえないようにぽつりと呟くと、その微かな声は瞬く間に寂寥とした空間に同化していった。その声の行く末を見守るまでもなく、自らの灯火を絶やさないようにしながら、フリートは気持ちを押し殺してレイルに寄り添うようにして飛び始めるのである。

つ
た。

第四十八話 手がかりと譲り受ける力ゝ流れる一筋の星の光ゝ

先まで身を任せてどっぷり浸かり込んでいた眠気が徐々に引いていき、アルムは視界を全て奪っていた重かった瞼を静かに上げていく。既に周りの世界は光に包まれており、眠りに落ちる前とは異なり、空間には鮮やかな彩色が施されている。

遙か上空からは、全体を暖めんと朝日が差し込んでいた。木々が蓄えている葉っぱ達によって木漏れ日となった光は、醒めたばかりの目を氣遣ってくれるかの如く、柔らかくほのかなものとなっている。生命力を与えるような優しく包み込んでくれる光にその身を委ねると、体の芯から力が湧いてくるような気がした。

葉末に朝露を湛えた植物達はいち早く活動を開始しており、空から降り注いでいる、命を与える光の恩恵に授かろうと必死にその身を上にも伸ばしている。そのせいか、辺りは涼しく新鮮な空気で満ちていた。

目覚めたばかりのぼやけた意識のままで周りの自然の様子を確認すると、アルムは視線を横へと移した。そこには自身の羽衣で俵形に体を包みこんで横たわっているジラーチー——テイルの姿がある。

「テイル、良く眠ってるね」

寝ている様子を見て微笑むと、アルムは髪を撫でるかのように前足でテイルの短冊に触れる。碧色のそれが揺れると、テイルは微かに閉じている瞼を動かして反応を示した。ほんの些細な事ながらも、あどけない仕種が見られ、さらにアルムの表情は柔和なものになる。

「良く眠ってたのはお前もだぞ」

アルムは反射的に耳をぴんと立て、背後から投げ掛けられた声に對して動きを見せる。誰なのか正体はわかっていたが、不意に声を掛けられた事に驚いたようである。その後で一拍を置いてから振り向こうとすると、その途中で頭を押さえられて身動きが出来なくなった。

「ヴァロー、それは本当？」

「何を嘘をつく事があるんだ。ぐっすり眠ってたさ。大きないびきを立てながらな」

「えっ、うそっ——」

「——ああ、嘘だ」

機転の利いたヴァローの咄嗟の返しに對して、アルムは上手く付いていけず、呆然として暫し沈黙を続けてしまう。一方で、嘘を言ったまでは良かったが、予想外の反応を気まずく感じたヴァローは、ごまかすかのようにアルムの頭を激しく撫でて会話を続ける。

「ははっ、今のはちょっとからかっただけで、本当はおとなしく寝てたよ」

「何でそんな意地悪な事言ったのさ。すごく焦ったじゃないかあ……」

「悪い悪い。寝起きで驚かせてやろうと思ってな。さあ、そんな事より朗報があるぞ」

未だに目まぐるしく変わる流れに戸惑うアルムを見て笑みを零しつつ、ヴァローは自分に背を向けたままのアルムの頭を器用に掴んで振り向かせる。やや強引に方向転換させられて驚きつつ、次の瞬間に目に映ったものに言葉を失った。目の前からしばらく姿を消していたポリゴンの姿がそこにはあったからである。

「あ、レイルっ！」

今まで燻ってた想いが一気に表に弾け出し、それを原動力にするかのようにアルムは一直線に駆け出す。

「ど、どこ行ってたのっ！ 僕といるのが嫌になっちゃったかと思っで、すごく怖かったんだから……」

「何を怖がる事があるのですか？ 私がいなかろうと、主には損は無いではありませんか」

「あの、それは……」

目の前まで近づこうとしたところで、思わずアルムは一步後退りしてしまう。同時に、心の中を満たしていた喜びの気持ちが萎んでいってしまう。

「何はともあれ、ご心配をお掛けしたようですね。申し訳ありませんでした」

「いや、別に戻ってきてくれたんならそれで良いんだけどね」

レイルに突き放されたような素っ気ない態度を取られ、アルムは

すっかり元気を失っていた。先程までは嬉しさのあまり抱き着こうとさえ思っていたのに、今では目を逸らして身を引く形となっている。

「まあ、これでまた全員が揃ったって訳だし、一件落着って事で良いんじゃない？」

気まづくなり始めた空気を察してか、フリートが二人の間に入るようにして姿を現した。にっこりと微笑んでいるフリートの顔が視界に入ると、暗くなっていたアルムの面持ちが自然と綻んでいく。

「もしかして、フリートがレイルを捜してくれたの？」

「うん、まあね。何となく居場所の見当はついてたから」

「そうなんだ。フリート、ありがとっ」

アルムはお礼の気持ちを込めて微笑みを湛えようと、軽く頭を下げた。レイルの反応を気にしないで置こうと決め込んだらしく、僅かに潤んだ瞳で真っ直ぐフリートだけを見つめている。

「お礼を言われる程じゃないよ。それより、君たちはこれから先どうするつもり？」

「えっと、それは――」

まだ先の事は考えておらず、答えに詰まったアルムは、助け船を求めるべくヴァローの方に振り返った。急に無言で振られたにも係わらず、ヴァローは特に取り乱す様子も見られない。

「どうするって、このまま先に進むしかないだろ。ティルについても、バロウとフリートの関係についても、未だにわからないからな」

悠長に構えていながらも、言うべきところは鋭く切り出した。事実を聞いてからヴァローがずっと執心だった事柄を突き付けられ、フリートは降参したかのように深く溜め息を吐く。一方で、そんな事など既に忘却の彼方に去っていたアルムは、聞いてようやく思い出したように頷いている。

「そう、手がかりを話すって約束だったよね。わかったけど、そんなに有益じゃないかもしれないよ？」

「それでもいい。少しでも情報がある方が良いからな」

「そっか。それじゃ言うとな、君が宿しているぼくの――精霊の力は、バロウのそれとはちょっと違うみたいなんだ。詳しくはぼくにも何とも言えないけど……」

お茶を濁しつつも簡潔に説明を終えたところで、フリートは昨日やったのと同様に全身に橙色の揺らめく光を纏わせた。オーラのよくなそれはフリートの体を離れると、そのままヴァローを優しく包み込んでいく。

「こ、今度は何だ？」

「心配しないで。君が自分の中に秘めている物に気づけるように、力をもう少し分けてあげるだけだよ」

自分の中にはフリートの力が眠っている――その事を念頭に置いた上で、ヴァローは集中するように目を閉じて受け入れる。一度燃

え上がる炎の如く揺らめいたかと思うと、次第に光はヴァローの体に溶け込んでいき、遂には同化して消えてしまった。

「体の底から力が湧いて来るような、暖かくなるような――何か不思議な感覚だな」

奇妙な体験をした後のヴァローの第一声がそれだった。発言からややあって目を開けるが、アルム達から見ても、特にいつもと変わらぬ姿であった。何か怪しい物が露出するとかいう訳では無いらしく、不安そうな面持ちで見守っていたアルムも胸を撫で下ろす。

「さてと、これで手がかりはあげたし、ぼくのとりあえずの役目は終わりだね。さあ、後はどうしようかと自由だよ。ここでゆっくりしていても全然構わないしね」

「いや、また変な奴らが襲ってきてても困るし、そろそろこの森も出ないとな。いろいろと助かったよ。ありがとう、フリート」

「そっか。うん、まあ、別にそれ程でもないよ。あっ、ちょっと待ってて」

照れ隠しに右手で後頭部を摩りつつ、フリートは小さな羽を広げて空中に浮かび上がった。どんどん高くまで上昇していき、樹木の枝分かれしているところまで辿り着くと、数回手を伸ばして何かを掴む仕種をした後に舞い降りてくる。

「そうそう、これでも食べてって。神聖な力の働く領域に生えてる木の実だから、体に力が湧くと思うから」

「ありがとう、フリート。それじゃ、遠慮なく貰うねっ」

フリートが両手に五つほど抱えていたのは、クローバー形のへたが付いている橙色の熟した果実だった。手の平サイズのそれをフリートが一人一人に渡していく途中で、アルムは大事な事に気づいてはっとする。

「そうだ。テイルを起こさないって」

真面目な顔をして駆け寄るアルムに対し、ヴァロー達は拍子抜けして微笑を浮かべている。そんな他の皆の反応など露知らず、アルムは前足でテイルの体を揺すって起こそうとしていた。

「テイル、起きて。もうすぐ出発するよー」

「うーん。もう少し寝かせて」

同時に声も掛けて目を覚まさせようと試みるも、テイルは駄々をこねて梃ていでも起きようとはしない。そこで名案が思い浮かんだのか、アルムはおもむろにフリートから受け取った木の実をテイルの前に突き出した。

「ねえ、テイル、朝ごはんだよ。すごく美味しそうだけど、起きないの？」

「うーっ、起きるーっ！」

木の実から漂っている甘い香りに釣られてか、前言撤回とばかりにテイルは飛び起きた。自らを包んでいた羽衣を目一杯広げ、大きく両手を突き上げて伸びをし終えると、差し出された木の実を貰い受けてかじりついた。

「あまーい！ アルム、この木の実美味しいよっ！」

「あ、本当だ。こんな木の実食べた事ないよ」

「ふふっ、これはちょっと特別な木の実だからね。あ、そうだ。アルムにはこれとは別に餞別があるよ」

ティルとアルムがそれぞれ感嘆の声を上げて木の実を食する中で、フリートはアルムの方に寄ってきた。不思議そうにアルムが首を傾げてフリートを見つめる一方で、フリートは耳元に口を近づけて囁き始める。

「君のそれも不思議な力を秘めてるみたいだね。最初はヴァローから感じる力が強くてわからなかったけど、発現してからようやくわかったよ」

「えっ、それってどういう事？」

「残念だけど、それはヴァローと同じで、頑張って自分で見つけてみてね」

曖昧な言葉の意味もわからずにアルムは尋ねるが、フリートは首を左右に振って回答を拒んだ。喜びから一転、身に覚えの無い事を切り出され、アルムはすっかり動揺している。フリートもそれ以上は詳しく語ってくれるつもりも無いらしく、アルムが訴えかけるような不安の色の籠った目で見つめても、その思いに靡く事はなかった。

「大丈夫だって。アルムならきっと自分で見つけ出せるから。何の

根拠もないし、不安にさせたばかりが言うのは間違ってるかもしれないけど、君なら出来るって信じてる」

「うん、でもさ、何をどうすれば良いのかわからないし、そもそも何の事なのか……」

「でも、皆目思い当たる節が無いって訳じゃないでしょ？ 君にも力の種を授けるから、それに時間を掛けても良いから、解明してみてよ。ね？」

安心する為に浮かべたフリートの笑顔を見ると、波紋を生んで揺らいでいた心が落ち着きを取り戻したような気がした。自然と固まっていたアルムの表情も徐々に和らいでいく。そうしてやや押し切られる形ではあるが、アルムは了承の意を示すべく静かに頷いた。

「アルムならきつと応えてくれるだろうと思ってた。それじゃ、目を閉じて――」

フリートに促され、アルムは深呼吸をして気持ちを整理すると、眠り込むかのようにその視界を閉ざした。対するフリートは、アルムが目を閉じたのを確認すると、広げた手の平に緋色の小さな火の球を出現させる。しばらく滞空させ、念を込めた後に押し出すと、炎はアルムの体の中に反発する事なく吸い込まれていった。

「何だか、暖かい感じがする。ヴァローが感じたのと同じなのかな？」

「それとは違うけど、似た物である事には変わらないよ。さあ、これで君に渡すのも終わりだよっ」

アルムが身に起きた違和感を述べるのも早々に、フリートはその

背中を強く押した。あまりに突然だったので転けそうになるも、何とか踏み止まってアルムはフリートの方に振り向いた。にっこり笑顔のまま、右手でピースサインを作っており、不安がってるアルムを再度励まそうとしているのが垣間見える。

「あ、ありがとう、フリート。具体的にすべき事はわからないけど、とにかく頑張ってみるよ。それじゃ、行ってきます！」

「うん、元気になったようで良かった。ぼくの方も安心して行ったらっしゃいって言って送り出す事が出来るよ」

心を支配していた憂慮も、まるでフリートの炎が打ち砕いてくれたかの消え失せていた。意気込みも新たに希望に満ちた明るい声を響かせると、フリートも応じてピースの形を留めていた手を崩し、別れの挨拶として手を振り始める。

「さあ、シオンにテイル、ヴァローにレイル。早く行こうよっ！」

「もう、アルムったら……。健気と言うか、忙しないと言うか」

「まあ、いいんじゃないか？ 表情が明るくなったり暗くなったりしてみたいだが、とりあえずは元気になったみたいだな」

「皆で元気に行くと楽しいよねっ！ アルム、待ってー！」

まだ目的地も定めていないにも係わらず、アルムは森を出るべく先に走り出してしまった。その後ろ姿を追いかけて、シオン、ヴァロー、テイルが順々に零す。レイルを除く彼らの表情にはどこか安堵と喜びで溢れていた。

「無事に行ってくれて良かった。でも、直接の手助けをするな——
なんて、あの人も厳しい事言うなあ……」

アルム達一行の姿が視界から消えるまで見守り終わると、フリートは溜め息混じりに呟いた。しかし、ぼんやりとした態度を見せるのも束の間で、目つきを変えて真剣な表情になると同時に空高く飛び上がった。

「とりあえずはここを離れて、“旧友”に頼みに行かないとね——」

昨晩とは全く異なり、天に輝く生命の源である太陽が放つ光を全身に受けた情報で周囲を見渡すと、フリートは町ではない方角に向かつて飛び去っていった。そんなフリートも気づかない程にさらに高い、明るくなり始めた上空では、青い空間を一筋の光が横切っていた。闇の衣を外した朝の世界でも、一際輝いている彗星から飛び出たそれは、誰にも気づかれる事なく地上へと降下していくのであった。

第四十九話 新たな舞台は広大な森へ出逢いは運命か必然かへ

フリートと別れを告げて、リプカタウンを後にしていたアルム達は、森を抜けて草原地帯を進んでいた。こちら側では町に來た時のように砂を含んだ強風が吹き荒れている事はなく、歩くのに差し障りとなるようなものは無かった。

「ねーねー、今はどこに向かつてるの？」

悠々と黄色い羽衣を広げて風を上手く捕らえているティルの問いに、アルムは思わず首を傾げる。実のところ、先だって飛び出したは良いものの、アルムにも次の行き先などわかっていなかった。それ故に、リプカタウンに向かう時と同じように、アルムはヴァローへと期待を込めた眼差しを向ける。

「とりあえずはまた宛ても無く次の町に向かうってところだな。正確には、そこに何か大事な物が無い訳でも無いが……。その為にはこの先にある森を抜けないといけないんだけどな」

「えっ、また森に入るの？」

決して森が嫌いという訳では無かったが、さっきまでフリートの住む森にいた事もあってか、一度過ぎた地形を再度通る事に対して抵抗があるように洩そうな顔をする。そんなアルムの反応を見て、ヴァローは軽く頷いて続ける。

「ああ。その町に行くには、真っ直ぐ森を突っ切って行く方が最短だからな。もしかして嫌か？」

「ううん、嫌じゃないよ。僕も森は好きだし。ただ、連続で入る事に少しびっくりしてるだけ」

不満げな顔を崩すと、アルムは軽く舌を出して笑って見せた。本心からの言葉らしく、嘘から出るような引き攣った笑顔ではなく、先程の渋そうな様子もまるで見られない。

「ところでヴァロー、その森ってどんな森かわかる？」

「地図には“ミゴン・フォレスト”って名前しか書いてないけど、見る限りでは面積は随分広いようだな」

「へえ、広い事しかわからないんだ。情報がそれだけだと、さすがに何かちよつと怖い気もするけど……」

苦笑を浮かべてアルムが返したのを機に、会話はぱたりと途絶えた。後は他愛のない話をするくらいのもので、時折アルムとテイルがじゃれ合う以外は特に大きな行動も起こす訳でも無かった。ひたすら前に足を進めるだけ。

「わーっ！　もしかしてあれがその森かなあ？」

何気ない退屈な移動が終わりを告げたのは、テイルの上げた陽気な一声だった。ふと俯き加減になっていた他の全員が顔を上げた際に視界に入ったのは、見渡す限りの植物の群れだった。見える空間全てに所狭しと樹木が敷き詰められているような感じを覚える。今まで訪れた木の密集地帯を森と言い表すならば、ここはそれよりも広範囲を示す森林と言うのが相応しい。

「リプカタウンの森も結構広いと思ってたんだけど、これはまた格

が違ふね……」

「アルム、これを見て。“大陸一の面積を誇る森”ですって。そりゃ広い訳よね」

「あ、ほんとだ」

シオンが見つけた看板に視線を遣ると、確かにそこには誇示するかのように大きな文字で案内が書かれていた。それを考慮した上でこの森林の樹木を上から下まで眺めてみると、改めて記憶の中にあるどの木々よりも高い事をアルムは実感した。

「さて、この中を通る覚悟は出来てるか？　ここを住み処にしてるポケモンに襲われるかもしれないぞ」

「ちょ、ちょっと、脅かさないでよっ。例えそうだとしても、ここが近道なら、入る事に抵抗は無いよ」

ヴァローの試すような問い掛けに対して、アルムは自信なさげにはあるが頷いた。少なくとも予想外の森の広さに圧倒されているようであったが、何とか士気を落とさないように平静を保とうとしている。

「まあ、襲われるような事があっても、私達が付いてるから大丈夫よ」

「うん、すごく心強いんだけど、何だか複雑だなあ」

言い換えれば、守ってあげるという事。シオンの後押しするような優しい言葉は純粹に嬉しかったのだが、その反面頼りなく見られ

ているのではないかと思い、内心は悔しい気持ちもある。それが思わず口を衝いて出ていた。

「ま、心配無用って事だ。ここで立ち止まっても仕方ないから、とりあえず進むぞ」

「探検隊しゅっぱーつ！ えいえいおー！」

ヴァローが指揮を取ろうとした瞬間、ティルが先陣を切って声を張り上げた。いきなり出鼻を挫かれた形になるものの、変わらず自由奔放な振る舞いを見せるティルを見て、アルム達は笑みを零していた。それが良い緊張緩和剤になったのか、一行は軽い足取りで森の中に足を踏み入れる。

内部の様子はと言うと、数歩進んだだけで、夜の世界に飛び込んってしまったのではないかと錯覚する程に暗かった。真っ暗とまではいかないが、空で燦々（さんさん）と輝いている太陽から降り注ぐ光線を半分以下しか感じる事が出来ない。如何に木が茂っており、密林と化しているかが窺い知れた。

「うわあ、これは歩くのに気をつけないとね。下手したら迷子になっちゃうそうだし」

「そうね——って、早速ティルの姿が見えなくなってるみたいだけど……」

「えっ、まさか——」

冗談だろうと思って前方を良く見てみれば、いつの間にかティルの姿は消えてしまっていた。開いた口が塞がらない状態がしばらく

続いた後で、ようやく我に返ったアルムは慌て始める。

「どっ、どうしようっ。迷子になっちゃったら大変だし……。僕、ちよっと先を見てくる！」

監督が不行き届きという事もあり、責任を感じたアルムはすぐさま駆け出した。早まった行動をシオンが制止しようとするも、既に間に合わずにアルムの姿も闇へと消えてしまう。

「あれー？ 皆立ち止まってどうしたの？」

背後から間延びした声がして振り返ると、先に進んでいったと思っていたテイルの姿があった。人の気も知らないでこの雰囲気を楽しんで笑っているのを見ると、ヴァロー達も溜め息を吐くしかなかった。

「それに、アルムはどこに行っちゃったの？」

「あ、そうだ……。アルムっ！」

ほんと安心したのも束の間。テイルの言葉を思い返し、一気に不安が押し寄せてきたヴァローは、あらん限りの声を振り絞ってアルムを呼んだ。しかし、声は虚しくも、木々の創り出した、全てを飲み込まんとする果てない闇路へと吸い込まれていくだけであった。

「主は既にこの辺りにはいないようですね。生命反応を感じられませんか」

続けて今まで言葉を発さなかったレイルが抑揚のない無機的な声を出すと、より一層事の深刻さを際立たせた。さっきまでの朗らか

な気持ちが一気に萎んでしまうと、一同は黙り込んだ状態で、今は見えないアルムの姿を暗闇の中に見出だそうとしていく。



「テイルはいない。シオン達も、見つからない」

一方で、テイルを捜している内にいつの間にも彷徨う事となり、ヴァロー達から離れてしまったアルム。整備などされていない獣道に一人取り残され、途方に暮れていた。すっかり動揺しており、独り言にもたどたどしさが混じり始める。

「これじゃ、僕が迷子になっちゃったみたいじゃないかあ……」

周りを何度も見回す中で、ふと不安の籠った言葉が零れる。迷子になった経験は既にあるが、ステノポロスの時とは訳が違った。先例ではポケモンが周りにたくさんいて賑やかであったのだが、現在は完全に孤立した状態。必然的に心細くなっていく。

「そうだ、こんな時はオカリナを吹いてみれば」

前回の経験を生かし、アルムは自分の居場所を知らせようと、首から下げているオカリナの吹き口に静かに息を送り込んだ。大きな音こそ出ないが、楽器としての特徴的な優しい音色が少しでも届け

ば、ヴァロー達も気づいてくれるはず——そう思っ

「——えっ、何で音が出ないの？」

だが、ここで予想だにしない事態が発生した。いつもなら軽く息を吹き込むだけで奏でられた音色が、全く出て来なくなってしまった。吹き方が下手だったのだろうと考えて何度も吹き直すが、ただ空気が抜ける音がするだけである。アルムの願いは一瞬にして叶わないものになってしまう。

「も、もう迷子なんてごめんだよ……。あっ、もしかしたら、声が聞こえるかも——」

今度は自分から発信するのではなく、受信しようと思い、耳をぴんと立てて聴覚を集中し始めた。せめて誰か一人の声さえ聞こえれば良いため、全方向に対して神経を張り巡らす。しかし、どこに注意を払っても、聞こえてくるのは不気味に木の葉がざわめく音ばかりであった。

「はあ、聞こえるはずないかあ……」

普段なら心地よささえ感じる木の葉が揺らめいて奏でる音も、淋しさを助長させるものでしか無かった。そのせいか、周囲に変化が無いとわかっていても、挙動に乱れが見られるようになった。人恋しさのあまり、無意識の内に視線を動かして誰かを捜し求めている。

そして、先程まで淋しさを紛らす為に零していた独り言も無くなっていた。いくら体験済みの事とは言え、慣れているはずもなく、すっかり項垂れてしまっている。それでも、意地でも泣くまいとしながらぼとぼと歩き出す。口を一文字に結んで、そこから淋しい想

いが飛び出さないようにも堪えている。

（もう迷子くらいで弱気になっちゃ駄目だ。これから先に何が待ち受けてるかわからないんだし。駄目だってわかってるけど、でも――）

誰かに対して威勢を張って強がる必要までは無いが、負の感情をおくびにも出さなかった。しかし、表に出さない分だけ、心の中ではその感情が激しく暴れていた。涙を流させようと誘ってくるが、首を横に振って拒む仕種を見せると、屈せずに歩みを進めていく。

「でも、やっぱりこのまま何も見つからなかったら――あれっ、あんな所に小屋がある」

そんな我慢しようとする意思にも綻びが見え始めた頃だった。植物以外は何も見られないと考えていた所に、幸運にも一軒の小屋を見つけた。外装は至ってシンプルで、丸太を積み重ねたログハウスのようになっていた。それぞれの隙間からは苔や蔓が伸びており、自然とも同化しているのが窺い知れる。その周りには森の中に息衝いている植物とは別個に、鮮やかな花畑が^{こしら}えられている。

とりあえずその閑居と外観を一通り確認したところで、まだ見えていない反対側へと回り込んだ。なるべく用心しつつ、小屋の壁に体を張り付けるようにして慎重に覗いていく。最初に見えてきたのは、薄黄色の体と、楕円形の青い耳、そして棒のような青い尻尾をしたポケモンの姿だった。しかし、あくまで後ろ姿でしかなく、正面からの姿は確認出来ないでいる。

「そこにいるのは誰なのですか？」

ふと気が緩んで大きく身を乗り出していると、気配を察知したそのポケモンはアルムの方に振り返った。その際に、先程までは見えなかった正面からの容姿が明らかになる。両頬には青い円形の皮膚に一文字の模様が見られ、アルムにも種族名がようやくわかった。それと同時に、見つかった事に動揺しつつ、反射的に警戒心を抱いて身構える。

「あ、もしかして迷子になったのですか？ そんなに警戒しなくても、襲ったりしないから大丈夫ですよ」

突如現れた迷子のイーブイを怪しむ様子もなく、逆にそのポケモン——マイナンは笑顔を覗かせて落ち着かせようとしている。思わぬ相手方の対応に驚きつつも、アルムは緊張していた表情を綻びばせた。警戒心を解いた事でさらに優しい笑みを浮かべると、マイナンはアルムの方へと歩み寄っていく。

「僕はマイナンのライズと言います。立ち話も何ですから、良かったら家にどうぞ——」



アルムが偶然の出逢いを果たしている一方で、ヴァロー達はそのアルムの搜索に傾注していた。今度は遭難者が出ないように出来るだけ密着して歩き回りながら、ひたすらアルムの名前を叫んでいた。

しかし、この広大な森林の中で成果が上がるはずもなく、それぞれの声が微かに木霊こだまするだけであった。

「また迷子になったのか……。シオン、お前の良い耳でアルムの声とかは聞こえないか？」

「いいえ、木の葉がざわつく音が大き過ぎて、全く聞き取れないの」

期待を込めてヴァローが尋ねてみるが、シオンは残念そうに俯いて呟いた。アルムを欠いた一行は、先程からこの調子で暗いムードであった。

「また不安になって泣いてないかしら。こんな広い森に一人で置き去りにされて……」

「アルムなら大丈夫さ。きっとあいつはあいつで俺達に合流する為に努力してるだろうからな」

突然の喪失感を体験し、シオンは不安に駆られていた。そんな彼女を励ますかのように、ヴァローは軽く背中を叩いて優しく声を掛けた。すると、不安が吹っ切れたようにシオンの表情に明るい色が戻っていった。

「そうね。ここで私達が諦めちゃいけないもの。絶対に見つけ出してあげないと――」

「――ねーねー、アルムが見つかったよ！」

意気込みを新たにしようとした最中、それを遮るようにしてティルが澁刺はっらつとした声色で二人の間に割り込んできた。急な発言に反応

が追いつくはずもなく、シオンもヴァローも啞然としてしまう。

「んっ？ テイル、一体何を言ってるんだ？」

「だから、アルムを見つけたの！ 今連れてくるから、ここで待ってて！」

ようやく思考が追いついたところでヴァローが疑問の声を上げると、テイルは平然として言い切った。それと同時に、屈託のない笑顔を見せながら、テイルは木々の間を縫うようにして飛び去っていった。

「ちょっ——いつの間に見つけたんだ？ それ以前に、このままだとテイルまで迷子になってしまう……」

「それは大丈夫よ。そんなに遠くに行ったんじゃないみたいだし、もうこっちに戻ってきてるみたい」

二人目の迷子が出る事を危惧するヴァローを宥めるように、自慢の耳を小刻みに数回動かしつつ、シオンは耳を澄ましてそう告げる。そして、シオンの言葉が正しい事はすぐに証明された。テイルが飛んでいった方角からがさがさと草を掻き分ける音が聞こえ始め、時間の経過と共に徐々に大きくなっていく。

「えっ、またいきなり何ですか？ そんなに押さなくても、ちゃんと歩きますから……」

掻き分ける音がほんの近くまで接近した時、続いて聞き慣れない声がヴァロー達の耳に入って来た。アルムならいつも聞いているから間違いないため、自然と緩んでいた気持ちも引き締まる。誰かが

自分達を襲うのではないかと警戒しつつ、固唾を呑んで姿を現すのを見守る。

「ほら、ちゃんと連れて来たよ！」

相変わらず明るい喚声を出しながら、全身に数枚の葉っぱを纏わせたテイルが叢から飛び出してきた。その傍らには、見覚えのある種族のポケモンがいた。長い耳と大きな筆先のような尻尾、首の周りを覆う毛が特徴的なイーブイである。

「えっ、本当にアルム？」

「いや、アルムとは違うぞ」

シオンとヴァローは驚きの色を隠せないものの、突如テイルが引き連れてきたイーブイを冷静に凝視する。すると、本来イーブイという種族が持つ黒い瞳とは違い、見ていると吸い込まれそうな程に澄んだ蒼い瞳をしているのがわかった。そして何より大きな違いとしては、アルムならいつも耳に付けていたオレンジ色のリボンがどちらの耳にも見られないのがある。

「えっと、あなた達は人違いをなさっているようですね」

じっと見つめられて戸惑っていた風変わりなイーブイは、一拍置いて口を開いた。

「僕の名前はウィンと言うのですが――」

第四十九話 新たな舞台は広大な森へ 出逢いは運命か必然か (後書き)

この度は久しぶりに後書きを書かせて頂く事になります。ええ、それだけの事由があるという訳でして。

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、この度この作品は、ウィンデルさんの執筆してらっしゃる「時空を乗り越えて」探検の歌」という作品とコラボさせて頂く事になりました。ウィンという名前でわかった方もいらっしゃるかもしれませんが。

ウィンデルさんの作品の世界観はもちろんですが、自分の作品の世界観も崩さないように善処するつもりなので、是非ともよろしくお願いします。

最後にもう一つ。ウィンデルさんの作品の方の【第六十・五話…呼びかけるは彗星の煌めき】にてこちらに来る経緯が書かれています。もちろんそちらを読んで頂くと状況がわかりやすくなるようになってますが、そうじゃなくとも読んで下さった方が流れが掴めるようには努力するつもりです。

第五十話 打ち解けには会話とお茶で―未だに知らぬ者と知る者と―

鮮やかな明るい緑と言うよりも、鬱蒼と茂る植物により深緑色に覆われた空間の奥地に佇むのは、五つの影。その中で一際存在感を放つ、ティルがいきなり連れて来た凜とした輝きを宿すブルーの瞳を持つイーブイ―名をウィンと言う。アルムと違ったとは言え、そんな思わぬポケモンの登場に、シオンとヴァローはどうして良いかわからずに黙りこくっていた。

一方で、ウィンは何かに心当たりがあるように考え込んでいた。何か過ぎ去った事を思い返しているらしく、視線だけをやや上に向けてつつ、遭遇したばかりの相手から先程聞いた事を反芻はんすうしていた。

「あの、そのアルムさんとは、あなた達のお友達なんですか？」

「え、ええ。途中ではぐれちゃったんだけどね」

気まぐれな風が悪戯をして奏する音以外は存在しない状態で、気まずい静寂を破ったのはウィンだった。自らも戸惑っているはずなのに、引き攣くっった表情になっているヴァロー達をこれ以上戸惑わせないようにとの配慮からか、優しく微笑みかけている。対して、未だに不思議そうにしながらシオンがその問いに答えた。

「ここで会ったのも何かの縁です。僕も捜すのをお手伝いしますよ」

「気持ち嬉しいんだが、迷惑を掛けたのはこっちだし――」

「そんなのは気にしなくても良いですよ。アルムさんを必死に捜すが故に間違えたんでしょうし。それに、困った時はお互い様です」

あまりにも親切に申し出てくれるので、シオンとヴァローも驚いたように互いに顔を見合わせる。まだ伝えたい事があるのか、そんな二人の反応を窺いつつ、ウインは注意を向けるべく間に入るように歩み寄っていった。

「そういえばもう一つお聞きしたいのですが、もしかして、あなた達のどなたかはティルさんではありませんか？」

「ああ、それならあのジラーチがそうだけど——って、何でそれを知ってるんだ!？」

アルムはともかく、ティルの名前は出していないにも係わらず、ウインはずばりと言い当てた。さすがにこれには動揺を隠せるはずもなく、ヴァローは思わず大声を上げる。

「それが実は、星が綺麗な夜に突然助けを求める声がして、その声の主を捜す為にギルドの外に出たんです。森を抜けて小さい丘に出たところでまた語りかけられて、その中で“アルム”と“ティル”という名前を聞きました」

ウインが淡々と語る中で、シオンとヴァローは神妙な面持ちで控えていた。それと言うのも、ウインの珍しい蒼い目に魅せられており、吸い込まれるようにして見入っているからであった。

「ねーねー、それでどうしたの？」

「えっ？ はい。それで“救えるのはあなただけ”と言われてまして、僕は承諾したんです。すると、空から流星が僕に向かって落ちてきて、気が付いたらこの森にいました」

ティルの能天気な聞き方に驚きを見せつつも、ウインは構わず説明を続けた。その中で一瞬だけ表情に陰りが見えるものの、ヴァロ―達が気づく事は無かった。目まぐるしい程の体験をしたはずなのに、取り乱す事なく平然と全てを言い終えたと、ウインは微笑んで二人の方に向き直る。

「なるほどな。ところで、名前はウインって言ったっけ。奇妙な体験をした直後に、ティルが引きずり回したりした事は謝るよ。その上で立て続けに振り回すようで悪いが、一つ聞いていいか？」

「いいえ、気になさる必要はありませんよ。それで、その聞きたい事とは一体何でしょう？」

ウインの語った事情の把握に努める中で、自然と浮かび上がった一つの疑問。ウインの了承を得た上で、ヴァローは一息置いてそれを口に出してみる。

「ああ。さっきの話に出て来た“ギルド”ってのは何だ？」

「えっ、ギルドを知らないんですか？」

これまで至って落ち着き払ってウインに、初めて露骨に困惑の気配が窺えた。穏やかだった声まで僅かに震わせ、信じられないと言った様子でヴァローを見つめる。

「まさかギルドを知らない方がいらっしやるとは……。簡単に言うなら同業者組合なのですが、実質はもっと広義なものです。探検隊になりたいポケモン達が集まって修行をしたり、救助や探検の依頼を受ける事が出来る場所――と言ったところでしょいか」

ワインにとっては常識でも、ヴァロー達にとっては未知の事ばかり。故にいつの間にか質問と返答の応酬となっていた。互いにそれに気づくと、はにかんでやり取りを再開する。

「俺は探検隊っていうのも聞いた事が無いんだが……。シオンは知ってるか？」

「いいえ、私も知らない。探検家くらいならいても、探検隊や探検隊が集まるギルドってのは聞いた事もないわ」

一旦確認の為に視線を移すと、シオンも同様に訝しげな色を表情に浮かべた。ヴァローも改めてシオンの言った事には同意を示すように頷き、視線をワインの方へと戻す。こちらは気難しそうな表情で視線を宙に泳がせており、二人に凝視されているのに気づくと、我に返って微笑を湛える。

「ギルドだけではなく、探検隊までも知らないとは思いませんでした。ではその上で伺いたいのですが、ここは一体どこでしょうか？」

「ミゴン・フォレストって言う名前の森よ。私達も入ったばかりで、地理的な事は全くわからないをだけどね」

「“ミゴン・フォレスト”……？ 僕達のいる世界とは既に名前の付け方から異なっているようで――」

そこまで言ったところで、ワインはふと言葉を切って自分の発言を回顧する。怪訝そうにシオン達が見守る中、しばらくの沈黙が続いた後で、ワインは深く息を吸って言葉を紡ぎ始める。

「あくまで予想なのですが、もしかするとここは、僕のいた世界と

は別次元の世界なのかもしれません」

「つまり、流星が時空を越えてウインをここに連れて来たって事になるのか？」

「ええ、あくまで仮説でしかありませんけどね」

文字通り次元を越えた話は理解不能らしく、ヴァローは悩んだように低い唸り声を上げた。細かく詮索するつもりは無いが、猜疑心さいぎしんを抱いているようである。

「――じゃあ、仮にそうだとして、これからどうするつもりだ？」

少し考えた末に、ヴァローは根本的な投げ掛けた。謎ばかりで何を信じて良いかもわからず、口を衝いて出たのがそれだった。信頼半分、疑い半分と言った内心であるが故の選択だった。

その直後、木々の間から吹き込む激しい突風で、不意に間が置かれる。否、正確にはウインが風の到来を読んでいたようであった。

「……一つの可能性に過ぎませんが、真実がわかったところで、僕のやるべき事は変わりません。まずはアルムさんを捜しましょう」

大量の落ち葉が舞って視界を埋め尽くす中で、風などものともせずウインが自身の意思を口にする。ヴァロー達に真っ直ぐ向けられた瞳には、嘘の欠片も見受けられない。瞳を見つめてそれを見抜いたヴァローは、風が穏やかになったのを見計らって静かに頷いた。

「出逢って早速協力してくれる事には感謝するよ、ウイン。事情や経緯はわからないが、よろしく頼むな」

「はい、こちらこそ、よろしく願います」

一丸となってアルムの搜索に専念する事を決心すると、一同は移動を開始した。ウィンという心強い同伴者を連れて、洋々として一歩ずつ足を前に踏み出していく。



深く息を吸い込む度に、思わず頬が緩むような甘い香りと、心を落ち着かせてくれるような穏やかな香りが上手く調和しながら、アルムの嗅覚を刺激していく。もう一度癒されるような心地よさを味わいたくて、目を閉じながら呼吸をすると、二種類の異なった空気の層が交わっていくのが瞼の裏で視覚化された。それ程までに、アルムはこの雰囲気の虜になっていた。

「良い香りでしょう？　実はこれ、僕が庭で栽培している植物から抽出して作ったお茶なのですよ」

声が聞こえて視界を確保すると、前方から琥珀色の液体をなみなみと湛えた皿状の平たい器を運んでくるマイナンの姿が見えた。今アルムがいるのは、そのマイナナー——ライズの所有する何の変哲も無い小屋の中である。内装はと言えば、めばしい物は見当たらず、木製の机や椅子が置かれているだけのシンプルな造りとなっている。

「すごい良い香りです。これ、飲んでも良いんですか？」

「ええ、どうぞ。その為に用意したんですからね。遠慮なく飲んで下さい」

床に座り込んでいるアルムの前に器を置くと、ライズは笑みを絶やさずに踵を返すようにしてその場を離れていった。後ろ姿をしばらく見つめた後で、奥の扉を開けて視界から消えたのを不思議に思いつつ、差し出された飲み物の表面を舌で軽く舐めてみる。

「はわっ、これ、すごいっ」

素早く顔を上げると同時に、感嘆の声が零れた。目の前の飲み物の香りに深く感銘を受けたらしく、アルムはぼうつとしばらく呆けてしまう。純粹に味と香りの良さを感じ取ったようである。

「どうですか。満足して頂けましたか？」

「はい、とっても！」

その瞳を輝かせ、嬉々とした表情でライズの呼び掛けに答えた。感情の高ぶりが抑えられず、語尾の音量が大きくなっていた。先程まで感じていた不安は微塵も残っていない。

「そう、それは良かったです。もし良ければこちらもどうぞ」

「ありがとうございます。えっ、これ――」

ライズが今度は別の皿を両手で運んできた。お茶の器の隣にそっと置き、アルムを見つめてそちらを促す。しかし、目の前に置かれ

た物にアルムは突如として絶句してしまう。

「――何も入ってませんけど」

「あつ、ごめんなさい。うっかりしてて目的の物に乗せるのを忘れてました」

ライズが気恥ずかしそうに苦笑を浮かべるのに対して、アルムも同じく苦笑いするしかなかった。内心ではどれだけ忘れっぽいんだ――と言いたかったが、迎え入れてもらっている手前で言えるはずもなく、結果として引き攣った表情になる。しかし、それが逆にアルムの緊張を解すものとなり、今度は作り笑いじゃない、優しい笑みが零れた。

「あははっ、てっきりライズさんって完璧なタイプだと思ってたのに」

「そうでも無いですよ。ただ、久しぶりのお客さんと言う事で、ちよっと気が動転して舞い上がってるんです」

照れ隠しで軽く頭を下げると、置いた空の皿を拾い上げ、ライズはもう一度奥へと引っ込んでいった。それからすぐにまた姿を現すと、ライズが抱えている皿の上には半月形に切り分けられた物が見えた。赤い果肉とそれを縁取るようにしてある深緑色の縦縞が入った果皮が特徴的なカイスの実である。

「さあ、今度こそちゃんと乗せてきました。どうぞ召し上がれ」

「あ、はいっ。いただきます」

真ん中に小さく一口噛み付いた瞬間に、口の中いっぱい甘い果汁が広がった。至高とも言える程の甘さを舌の上で感じると、目を大きく見開いて驚きを示し、それに続いて顔を綻ばせる。

「ふふっ、君ってすごく素直なんですね。僕もそれくらい感情を全て表に出せば良いんですけど……」

感情を顔つきで豊かに表現しているアルムを見ているライズは、溜め息混じりに小声で漏らした。その笑顔の奥には暗い影さえも窺い知れるが、あくまで表に強く押し出さないように我慢しているようである。

「ライズさん、どうかしましたか？」

いち早く異変に気づいたアルムは、お茶を飲もうとするのを中断して顔を上げた。それに対して、ライズは完全に影を潜ませて静かに首を横に振って見せる。

「いいえ、何でもありません。ご心配には及びませんよ。それより、一つお願いがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「えっ、何ですか？」

意味深な発言をした事から一転。ライズがここに来て急に懇願してきた事に、アルムは首を傾げつつも聞き返す。

「あのですね、もし良ければ、もう少しここにいて話し相手になってもらえませんか？　こうやってまともな会話するのは久しぶりなので……」

「あの、それがお願いなんですか？」

「はい。嫌ならもちろん断って頂いて構いませんよ。こんな事は無理強いするものじゃありませんし――」

「――いいえ、僕なんかで良ければ、いくらでも話し相手になりますよ。ただ、お願いだと言うので、どんなに難しい事なのかあって思っただけですから」

その内容自体に躊躇いこそ見せるものの、アルムは二つ返事です承した。すると、持ち掛けた側であるライズはきょとんとして不思議そうな面持ちになった。そこから少し考え込んだ後で、ようやく思いの丈を口にしようとする。

「もしかして、このお願いって変なのでしょうか？」

「えっと、少し変わってるかもしれませんがね。でも、僕を話し相手として選んで下さった事は、純粹に嬉しいですよ」

満面の笑みを浮かべ、アルムは本心を零した。混じり気の無い心の表れに呼応するかのように、ライズもにっこり微笑んだ。親しみを込めた愛想の笑みではなく、喜びの想いが表に出たものとして。

「それじゃ、僕はもう少しライズさんの事について知りたいです」

「いえ、僕なんか特に話す事はありませんよ。森の小屋に一人で暮らしているただのマイナンですから。それよりも、僕はアルムさんの事を詳しく知りたいです。ここまで旅をしてきているようですかね」

「あ、はい。僕の事で構わないのなら――」

この時、さりげなくライズがアルムの名前を呼んだ事を、当の本人は軽く流していた。――それが“初めて”だったという事を。結局のところ、改めて気に留める様子もなく、やや強引に押し切られる形で、アルムは自分の事について気を許して語り始めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6153n/>

エトワール・フィランテ～星降りの夜の導かれし出逢い～

2011年11月20日05時38分発行